

尊き御記憶に
聖山の高僧パイシイ
言葉

第Ⅲ巻
靈的な戦い

目次:

序文	4
第1部。 思いの戦いについて	6
第1章。 善き思いと悪しき思いについて	6
善き思いの力	6
「左」からの思い——最大の病	8
善い思いは人に靈的な健康をもたらす	10
善意を持つ者は、すべてを善として見る	12
聖化された人の思いと、悪意ある人の思い	13
人の思いは、その人の靈的な状態を示す指標である	14
第2章。 冒流的な思いについて	15
どのような思いが冒流的なものか	15
冒流的な思いはどこから生じるのか	16
冒流的な思いに対する軽蔑	18
どのような場合に、私たち自身が冒流的な思いを抱く罪を犯しているのでしょうか	19
第3章。 思いに信頼を置くことについて	20
思い込みへの信頼——それは惑わしの始まりである	20
思い込みを信じることは、心の病を招く	21
気まぐれは思いから始まる	22
自らの想像に病む人々	25
従順さによって、すべては乗り越えられる	26
第4章。 思いとの戦いについて	29
善き思いの育成	31
心と魂の浄化	32
疑いの思いの後に疑問符を付けなさい	33
思いとの対話	36
思いによる共犯	37
第2部。 正義と不正義について	38
第1章。 不公正を受け入れる方法について	38
不公正に対して正しい心構えを持つ必要がある	38
不義を受け入れることによる喜び	39
不公正を受け入れること——それは有益な行いである	42
天の宝庫への献金	43
聖なる偽り	44
第2章。 自己正当化が が私たちから神の恵みを遠ざけることについて	46
自己正当化は靈的な成長を妨げる	46
人が自分を正当化する原因は、その人の利己心にあるのです	47
自分を正当化する者は、靈的な助けを受けることができない	49
もしあなたが自分を弁解しなければ、神があなたを正当化してくださる	51

正しく自己を省みる者は、自分を正当化しない	52
自己正当化は魂に安らぎをもたらさない	53
[他人の罪]の重荷を背負いましょう	54
第3章。 神の正義と人間の正義について	56
神の正義	57
修道士が「権利」を持つものは、キリストが来世のために取っておいてくださるのです	58
人々は自分たちで別の「福音」を作り上げてしまったのです	60
第3部。 罪と悔い改めについて	64
第1章。 罪が人を苦しめることについて	64
心の清め	64
罪の闇からの解放	65
自発的な罪	66
キリストへの愛から善行を為そう	68
私たちの生活における誘惑	69
罪人たちは、謙遜するための多くの材料を持っている	70
第2章。 良心を大切に必要性について	71
自らの良心を試してみよう	72
押し殺された良心	73
歪められた良心	74
偽りは人に安らぎをもたらさない	76
汚れのない良心は、決して誤らない警告を与えてくれる	78
第3章。 自己観察と自己認識の必要性について	78
自己探求	79
失敗から得た教訓	80
敵を一心に釘付けにして、一撃を加えるべきだ	81
他人を鏡のように見つめる必要があるのです	82
真に自分自身を知る者は、謙遜さを備えているのです	83
私たちは、自分がどのような病にかかっているのかを知る必要があります	83
第4章。 私たちが自らの罪深さを自覚することが 神を感動させることについて	85
自分の過ちを認めること	85
罪深さの自覚と霊的闘争における成功	87
私たちは、自らの改心を願って、謙虚に神の憐れみを求めるべきです。	87
私たちの罪に対する悲しみ	88
私たちに必要なのは、絶望ではなく、自己懺悔です	90
拡大鏡を通した霊的な営み	91
第5章。 悔い改めには偉大な力があるということについて	92
「自ら来て.....」	92
悔い改めの涙	94
悔い改めの果てしない営み	95
人生の変化	96
「...私の罪は、私の前にある」	98
強制された悔い改め	99
悔い改めは人に神の慰めをもたらす	99
第4部。 闇の黒き力	100
第1章。 魔術について	101
魔術師たちは、さまざまな悪魔的な「聖物」も利用しています	102
魔術を弄ぶ者たちは、多くの嘘をでっち上げる	104
悪魔的な魔術行為	105
悪魔は決して善を行うことはできない	106
どのような場合に魔術は効力を発揮するのか	107
呪術はどのようにして破ることができるのか	108
魔術師と悪魔たちの共謀	109
第2章。 不浄な霊に取り憑かれた者について	110
悪魔的な高慢さを持つと、人は憑依された状態になってしまう	112
悪霊に取り憑かれた者は、あらゆる聖なるものに反応する	113
悪霊に取り憑かれた人の言葉に重きを置いてはならない	115

悪霊に取り憑かれた人々への助け	117
「お説教」について	120
悪霊に取り憑かれた人々の苦難に満ちた人生	121
第3章。 恐ろしい惑わし	122
修道生活と惑わし	122
想像力への配慮	124
悪魔は光の天使の姿で現れる	125
夢は欺く	127
幻視に対する注意	128
惑わされた人の特徴	129
錯覚と狂気	130
惑わされた人々には注意が必要だ	131
惑わされた者たちの安っぽい「賜物」	132
惑わされた者の更生	133
第4章。「惑わす者と惑わされる者」	134
ペンテコステ派の惑わしについて	134
火渡りについて	135
輪廻転生	135
ヒンドゥー教における苦行について	137
ヒンドゥー教は多くの悪をもたらした	138
人々はどれほど惑わされていることか	139
正教会への復帰	141
第5部。 懺悔の力について	142
第1章。 霊的指導者の必要性について	142
告白によって人は解放される	142
神は、人が人を通じて改心することを望んでおられます	144
霊的生活には、霊的指導者が不可欠です	146
人々を霊的指導者のところへ送りなさい	146
「治療を行う霊的指導者」	147
家庭における霊的指導者	148
霊的指導者の変更	149
第2章。 正しい懺悔の仕方について	151
自分の傷に新しい包帯を巻かなければならない	151
懺悔の必要性	151
正しい懺悔	152
懺悔の際に自分を正当化しようとすれば、良心を重くしてしまうのです	154
懺悔の後	155
霊的指導者への信頼	156
霊的指導者との正しい関係	157
第3章。 告解司祭は魂の医者であること	158
優れた霊的指導者の必要性	158
霊的指導者の考察と経験	159
信者がどれくらいの頻度で聖体拝領を行うかは、その信者の指導司祭が決めるものです	160
断食について	161
許しの祈り	163
第4章。 人々の魂に対する霊的指導者の働きについて	163
魂を扱う技術——それは繊細な仕事である	163
人が自分の情欲に安住することを許してはなりません	164
絶望に陥った人々への接し方	166
恥知らずな者には厳しく、敬虔な者には寛大に接すべきである	167
善意は悔い改めない者に害を及ぼす	169
他者の自由への敬意	170
告解を受ける者に対する霊的指導者の愛	171

序文

「罪が現代において『流行』となっている」ことを目の当たりにし、故パイスイ長老は、悔い改めと告白の必要性を特に強調していました。長老が悔い改めにどれほど大きな重要性を置いていたかは、彼の『言葉』第2巻の最終章からうかがえます。「悔い改めと告白は、今日、何よりも必要である」と長老は私たちに語った。「それらは、人々が悪魔に与えた権利を剥奪するために必要なのだ。人々は悪魔に権利を与え、その結果、悪魔は世界を苦しめているのだ。」

長老パイシイの導きにより、多くの人々が初めて告解の秘跡に臨み、人生を変えた。今や、これらの人々は敬虔な神の子供として精進し、すでにこの世で天国の喜びを味わっている。「人々は本当に善良なのですよ！」と、パイシイ神父は喜びながら私たちに語ってくれた。「私が人に懺悔するよう勧めて、その人がそれを実行しなかったということは、一度もありませんでした。」もちろん、これには長老の偉大な愛も一役買っていました。その愛は、長老が触れ合った人の魂を変え、不毛な粘土質の土壌を、耕作に適した土地へと変えていったのです。

『長老パイシイの言葉』第3巻は、当教区の新たな管轄主教であるカサンドリアのニコディム大主教閣下の祝福のもと、刊行される。本書には、罪に苛まれる人が善き懸念を抱き、自分を縛る罪の束縛から解放されるための霊的な闘いを始める助けとなる、長老の教えが収められている。悔い改めの生活を送ることで、キリスト教徒は自分の「古い人」、すなわち長老の言葉によれば「私たちの中に住む邪悪な下宿人」を振り払うことができるでしょう。パイシイ神父は、この邪悪な下宿人を追い出すためには、「（その）家を破壊し、新しい建物を建て始めること——すなわち、新しい人を築き上げること」が必要だと語っていました。

聖父たちの教えによれば、罪の始まりは邪悪な思いである。それゆえ、長老の霊的遺産の中から選ばれた「思い」に関する教えを、本書の第一部に収録した。「思いは」と長老は語った。「私たちの霊的な状態を示す指標である。」善き思いは偉大な力を持ち、人を霊的に変える。それとは対照的に、悪しき思いは人を苦しめる。人が悪しき思いを取り除き、善き思いを育むとき、その心と魂は清められ、そこに神の恵みが宿る。

本書の第2部では、不義に耐え、それを霊的な視点から受け止めることで、人は神から大きな祝福を受けると述べられている。しばしば、この真理は霊的な人々でさえも知らないものであり、彼らは自分を正当化しようとして、「自分だけの福音」を作り上げるまで至り、その結果、神から自らを隔絶してしまう。なぜなら、人間の正義は霊的な生活とは何の関係もないからである。もし私たちがキリストと一つになりたいと願うなら、私たちは「愛、高潔さ、犠牲の精神をその中に秘めている」神の真理に与る者となるべきである。

本書の第3部では、罪について論じられている。人間の地上の生活は、罪によって地獄の苦しみへと変貌してしまうが、霊的な闘いを通じて、私たちの生活は楽園となり得る。もし人が「罪の闇から抜け出したい」と願うなら、神から与えられた「最初の神の律法」である良心を注意深く吟味し、自らの過ちや過失を謙虚に認めなければならない。この行いは「果てしない悔い改めの営み」へと導き、魂に神の慰めをもたらす。

第4部において、パイシイ神父は、魔術師、超能力者、透視能力者、その他の惑わされた者たちという従順な道具を通じて、この世で活動するサタンの勢力を糾弾している。長老は、闇の力そのものは無力であるが、人が何らかの重大な罪を犯し、それによっ

てそれらに自分に対する支配権を与えてしまった場合、人間にとって破壊的なものとなり、その結果、悪魔の影響を受けることになる」と強調している。この影響から解放されるためには、人は罪の原因を見出し、すなわちそれを自覚し、悔い改め、懺悔を行い、教会の自覚的な一員となる必要がある。

本書の最後の第5部は、告解の秘跡に捧げられている。長老は、罪の赦しを得るためにはキリスト教徒に告解が必要であり、安全な霊的成長のためには霊的指導者を持つ必要があるという点に、私たちの注意を向けさせている。パイシイ神父は、精神科医の活動と霊的指導者の奉仕との間に明確な一線を引いており（現代ではこれらが混同されることもある）、人々の魂を導いてきた自身の経験を語っている。

これまでの巻と同様、パイシイ神父は投げかけられた質問に簡潔に答えている。長老の回答は、特定のテーマに関する体系的な解説ではなく、網羅的であることを意図したものではありません。教えの目的は別にある——それは、人が救われる手助けをすることです。「人の魂の救い——」と長老は語りました。「それが私の慰めであり、喜びなのです。」

その都度、相手の霊的な闘いに役立つものを洞察し、長老は相手の霊的な必要に応じて語りかけ、必要な「霊的なビタミン」を与えて支えます。しばしば、パイシイ神父は適切な例えを用いて、自身の言葉の意味を明らかにします。長老は、前向きな手本が計り知れない恩恵をもたらすと確信していた。「もし時間があれば、誠実に人生を全うした人々、聖なる生き方をした少女や青年、父や母たちについて書きたいものだ」と、彼は私たちに語った。「そうした善き模範によって、罪を流行させた者たちはその正体を暴かれるのです。悪を糾弾しても、多くの場合何の役にも立ちません。しかし、私たちが善を示すとき、悪はそれ自体で暴かれるのです。」

周知の通り、長老が答えた質問は修道女たちから寄せられたものでした。しかし、それにもかかわらず、パイシイ神父の答えは、「善の業」に励んでいる人、あるいはその業に着手しようとしているあらゆる人に関わるものです。「修道士にも信徒にも——」と長老はある手紙の中で述べている。「与えられている戒めは同じである。そして、楽園もまた一つである[すべての人にとって]。」さらに、パイシイ神父は、高い霊的生活を送り、自らに繊細な霊的修行を課している信徒たちがいることをしばしば指摘していた。

本書の原稿を快く読んでくださり、ご助言をもって出版準備の完了に協力して下さったすべての方々に感謝申し上げます。

「慈愛に満ちた神が私たちを啓発し、真の悔い改めを与えてくださいますように。そうして、私たちを深く愛してくださる父として、神が私たちのために備えてくださった良き楽園に、私たち全員が導かれますように」と、長老は語りました。

その言葉が現実のものとなるよう、心から祈ります。アーメン。

2001年2月11日

放蕩息子の週

聖使徒兼福音記者ヨハネ・神学者の修道院のイグメナ、フィロフェイ修道女と、キリストにある姉妹たちより。

— ゲロンダ、動物たちは、ある人に優しさがあるということを、どのようにして理解するのでしょうか？

— 動物には直感があります。ですから、あなたが彼らを愛し、彼らのことを気遣っていれば、彼らはそれを感じ取ります。楽園では、動物たちは恵みの香りを嗅ぎ取り、アダムに仕えていました。墮落の後、自然は人間と共に嘆き悲しんでいます。ほら、あの哀れなウサギを見てください。その目は常に怯えた様子です。その小さな心臓は、トクトクトクと不安そうに鼓動している。かわいそうな子、まったく眠れていない！ 私たちの罪のせいで、このちっぽけで何の罪もない生き物が、どれほど苦しんでいることか！ しかし、人間が墮落前の状態に戻ると、動物たちは再び恐れることなく人間に近づいてくる。

第1部。 思いの戦いについて

「善き思いを通じて万物を見る時、人は清められ、神の恵みを受け入れる。しかし、邪悪な、『左派的な』思いによって、人は他者を非難し、不当に傷つけ、神の恵みの到来を妨げる。そうして悪魔がやって来て、その人を苦しめるのである」

第1章。 善き思いと悪しき思いについて¹

善き思いの力

— ゲロンダ、旧約聖書の『マカバイ記第四』には、次のように書かれています。「敬虔な思いは、情欲を根絶するものではなく、その敵である。」² これはどういう意味でしょうか？

— こう考えてみてください。情欲は私たちの内面に深く根ざしていますが、敬虔で善なる思いは、私たちが情欲の奴隷にならないよう助けてくれるのです。人が常に善き思いを行いに取り入れ、自らの善き状態を堅固で揺るぎないものにしていくとき、その人の情欲は作用を止め、あたかも存在しないかのようになります。つまり、敬虔な思いは情欲を根絶するわけではありませんが、それと戦い、打ち勝つことができるのです。『マカバイ記第四巻』には、七人の聖なる少年たち、彼らの母である聖ソロモニダ、そして彼らの師である聖エレアザルが、敬虔な思いを抱きながら耐え抜いた[苦難]が記され

¹ 教父たちの禁欲主義用語集において、「思い」という言葉は、心に浮かぶ単なる思考を意味する場合もあれば、善または悪に向かう心の動きを意味する場合もある。さらに、「思い」とは、知性、良心、感情、意志を通じて形成された、善または悪への衝動と理解されることもある。いかなる行いにも「思い」が先行するため、霊的な闘いが正しいものであるためには、まず第一に「思い」を吟味することに注力し、善なる「思い」を育み、悪なる「思い」を追い払わなければならない。すべてのキリスト教徒はこの実践に取り組むべきであるが、特に修道士たちはこれを深く追求している。（以下、ギリシャ語版編集者による注釈は出典を明記せずに掲載される。）

² 『マカバイ記第四』はロシア語に翻訳されていない。——訳者注

ている。私は、[聖書]の著者がこれについて語っているのは、善き思いの力を明確に示すためだと考える。³

たった一つの善き思いは、何時間にもわたる徹夜の祈りに匹敵する力を持っています！ それは偉大な力を秘めています。現在、レーザー光線で敵のミサイルを発射台の上で撃ち落とし、離陸を阻止するような対ミサイルシステムが存在します。善き思いも同様です。それらは、悪しき思いが拠点とする悪魔の「飛行場」からの離陸を未然に防ぎ、空へ舞い上がることを許しません。ですから、できる限り、悪魔があなたの中に悪しき思いを植え付ける隙を与えないように努めてください。自ら悪魔に先んじて、善き思いを心に植え付け、あなたの心が花畑となり、あなたの祈りが、あなたの心から漂う神聖な香りに包まれるように努めてください。

もし人が、たとえほんの少しでも「邪悪な」、つまり悪意のある考えを誰かに対して抱いているなら、たとえ断食や徹夜祈祷など、どんな偉業を成し遂げようとも、すべては水の泡となってしまいます。もし悪意ある思いと戦わず、むしろそれを受け入れてしまうなら、苦行が彼に何の役に立つというのでしょうか。なぜ彼は、まず石鹸にしか使えない汚れた油の滓を器から取り除き、それから初めて清らかな油を注ぎ入れようとしないのでしょうか。なぜ彼は清らかなものと不浄なものを混ぜ合わせ、清らかなものを何の役にも立たないものにしてしまうのでしょうか。

たった一つの清らかで善良な思いは、いかなる禁欲的な行いよりも大きな力を持っている。例えば、悪魔が若者に不浄な思いの攻撃を仕掛けたとする。それらを取り除くために、若者は徹夜の祈りを捧げ、断食し、三日間連続で飲食を絶つ。しかし、彼がその行いに込めたたった一つの清らかな思いは、彼のすべての徹夜祈祷や断食よりも大きな力を持ち、彼により実質的な助けをもたらすのです。

— ゲロンダ、あなたが「清らかな思い」とおっしゃる際、この言葉に狭い〔禁欲的な〕意味を込めているのでしょうか、それともより広い意味で用いているのでしょうか？

— 広い意味でも使います。善き思いを通じて、人は清められ、神からの恵みを受け入れるのです。一方、「邪な」[悪しき]思いを通じて、人は他者を非難し、不当に告発します。そうすることで、人は神の恵みの到来を妨げてしまうのです。そして、悪魔がやって来て、その人を苦しめるのです。

— つまり、ゲロンダ、他人を非難することで、人は悪魔に自分を苦しめる権利を与えてしまうということですか？

— そうです。すべては善き思いに根ざしています。まさにそれこそが人を高め、より良い方向へと変えていくのです。すべてを清らかに見ることができるような境地に達しなければならない。これこそが、キリストが「人を見て裁くな。ただ、正しい裁きをせよ」と語られたことである。⁴そして、人はやがて、人間の視力ではなく、霊的な目ですべてを見るような状態に入る。彼はすべてに正当性を見出す——その言葉の善意的な意味で。

私たちは、悪魔の狡猾なメッセージを受け入れないように注意しなければなりません。それらを受け入れてしまうと、「聖霊の宮」を汚し、⁵ 神の恵みが私たちから遠ざかり、その結果、私たちは〔霊的に〕盲目になってしまいます。私たちの心が汚れなく清い

³ ロシア語訳については、マカバイ記第二6章、7章を参照のこと。

⁴ ヨハネ7章24節。

⁵ 参照：コリントの信徒への手紙一6章19節および3章16節。

と見て、聖霊は来て、その中に住まわれます。何しろ、聖霊は汚れのない清さを愛しておられるからです。それゆえ、聖霊は[ヨルダン川で]鳩の姿で現れたのです。⁶

「左」からの思い——最大の病

— ゲロンダ、何か問題を解決しなければならない時、私はひどく不安になり、眠れなくなってしまいます。

— あなたの主な問題は、雑念が多いことです。もしその雑念がなければ、従順においても、霊的生活においても、あなたははるかに大きな献身をもって取り組むことができるでしょう。しかし、私はあなたに、多くの雑念を避けることができる一つの方法を教えてあげましょう。よく聞いてください。例えば、明日やらなければならないある用事についての考えが頭に浮かんだら、その考えにこう言い聞かせてください。「この用事は今日のことでない。明日、じっくり考えよう。」また、何か決断を下さなければならない時は、どうするのが最善かという考えに悩まされたり、決断を延々と先延ばしにしたりしてはいけません。何かを選び、断固とした一步を踏み出し、その後のことは神に委ねてください。頭を悩ませないよう、細かすぎたり、過度に慎重になりすぎたりしないように心がけてください。愛を込めて⁷自分の力の及ぶ範囲で行動しましょう。その際、素朴に、そして神への完全な信頼を持って振る舞ってください。自分の未来と希望を神に委ねることで、私たちはある意味で、神に私たちを助けてくださるよう義務づけることになります。多くの考えに囚われてしまうと、健康な人でさえ無力になってしまいます。病気で苦しんでいる人が落ち込むなら、それには言い訳があります。しかし、健康な人が「左」からの思いに悩まされ、苦しんでいるなら、その人には拘束衣を着せるべきでしょう！[考えられないことですが]、完璧な健康状態でありながら、自分の思いに苦しむなんて！

現代における最も重い病気とは、世俗の人々の虚しい思いである。彼らには、善意を除いて、望むものは何でも手に入るかもしれない。彼らが苦しむのは、状況を精神的な観点から捉えていないからだ。例えば、ある人が車でどこかへ向かっていると。途中でエンジンが不調になり、少し遅れて目的地に到着する。善意の思いを持つ人は、遅れて到着した際、こう言うだろう。「どうやら、慈愛に満ちた神が、偶然ではなく私を少し待たせてくださったようだ。もしこの遅れがなければ、事故に遭っていたかもしれない！神様、私を危険から守ってくださったことに、どう感謝すればよいのでしょうか！」そして、そのような人は神を賛美します。一方、善意を持たない人は、この出来事を霊的な視点から捉えることができず、神を非難し、冒瀆し始めます。「なんて不運なんだ！もっと早く着くべきだったのに、遅れてしまった！すべてが台無しだ！それもすべてあの神のせいだ……」

「正しい」思いによって自分に起こることを受け入れるとき、人は助けを得ます。しかし、「間違った」思いで行動すると、人は苦しみ、苛立ち、心のバランスを崩してしまいます。何年も前、私たちが聖山からウラヌポリス⁸に到着し、さらに先へ——テッサロニキへ向かおうとしていた時のことを覚えています。私たちには、すでに様々な荷

⁶ マタイ3章16節、マルコ1章10節、ルカ3章22節、ヨハネ1章32節を参照。

⁷ フィロティモ (φιλότιμο)。この言葉は、霊的生活におけるフィロティモの重要性を強調する長老パイシオスの説教の中で繰り返し登場する。現代ロシア語には、φιλότιμοに相当する語はない。比喩的に言えば、「寛大さ」、「犠牲を厭わない心」、「道徳的あるいは霊的な理想のために物質的なものを軽んじる姿勢」と訳すことができる。——訳者注

⁸ ウラヌポリス — 聖山に最も近い世俗の集落で、アフォン半島の南東海岸にある小さな村である。 — 訳者注

物——スーツケース、オレンジ、魚、魚が入っていた空の汚れたかごなど——が積み込まれたトラックが用意された。その荷台に、アフォニアダの子供たち⁹、修道士、信徒たちが次々と乗り込んできた。座れる人は板の上に座り、残りの人たちは立ったままだった。ある太った信徒が、私の隣のベンチに無理やり押し込まれた。窮屈でとても居心地が悪かったのか、彼は大声で不満を漏らし始めた。「一体、これはどういうことなんだ!」。その少し離れたところには、臭い魚のカゴに完全に埋もれて座っている修道士がいた——その可哀想な人は、頭だけしか外に出ていなかった。トラックはボロボロの田舎道を走り出し、でこぼこ道でガタガタと揺れ、左右に揺さぶられた。互いに積み重ねられたかごが修道士の上に倒れかかり、彼は頭を守ろうと、手でそれらを押し返していた。一方、ベンチで隣に座っていた太った男は、少し窮屈な姿勢で座らされていることに不満を大声でぶちまけ続けていた。「おい、なんでそんなに叫んでるんだ?」と私は彼をなだめた。「ほら、君の隣の人、どんな目に遭ってるか見てみろよ!」「お元気ですか、神父様?」と私は修道士に尋ねた。「ここは地獄よりましですよ、ゲロンダ」と、彼は微笑みながら答えた。一人は座りながら苦しんでおり、もう一人は、悪臭を放つ魚の入った籠の山が降り注いでいるにもかかわらず、喜んでいた。そして道のりは遠く、車で約2時間かかった。一般人の心は、バスでの旅がいかに快適かを想像し、すべてを粉々に打ち砕いてしまいたいと思っていた。一方、修道士は、地獄で味わうことになるであろう苦しみについて考えながら、喜びを感じていた。「2時間後には目的地に到着し、この車内から抜け出せる」と、修道士は考えた。「一方、哀れな[罪人]たちは地獄で永遠に苦しんでいる。しかも、そこでの苦しみは地獄そのものであり、このバスや人混みなどとは比べものにならない。神よ、あなたに栄光あれ——ここはあそこほど悪くはない。」

「ゲロンダ、例えば、二人の修道見習いが、それぞれの長老に対して異なる程度の信頼を抱いているのは、なぜでしょうか?」

— 理由は心構えにある。何に対しても、誰に対しても、歪んだ心構えを持つことはあり得る。善き心構えを持たず、自らの行動の一つひとつから「自我」を取り除かない、つまり利己心に基づいて行動するならば、人は聖者からさえ益を得られないだろう。たとえ聖なる長老や長老女がいたとしても、たとえその長老が[まさに]聖アントニオ大聖人その人であったとしても——いや、それどころか——たとえすべての聖人が[その師であったとしても]、彼を助けることはできないだろう。神ご自身でさえ、たとえそれを強く望んでおられるにもかかわらず、そのような人を助けることはできない。もし人が自分自身を愛し、つまり自己満足に囚われているならば、その人はすべてを自分の「自我」の気質や好みに合わせて解釈してしまうのだ。ある者はすべてを罪深いものとして解釈し、ある者は自分の好みに合わせて解釈する。次第に、そのような人にとって、荒唐無稽な解釈が「当然のこと」となっていく。そして、あなたがどんなに振る舞おうとも、そのような人々はやはり誘惑に負けてしまう。一方で、ほんの少しの気遣いを示したり、優しい言葉をかけたりするだけで、まるで翼を得たかのように舞い上がる人々もいます。しかし、注意を向けなければ、彼らはひどく落ち込み、極端な行動に走ります。こうした極端さは敵からのものです。例えば、そのような人々は些細なことに気づき、それを根拠に自分なりの[根拠のない]推測を立てます。そして、やがて「事実は

⁹ アフォニアダ（アフォン教会アカデミー）——聖アフォン山に位置する男子専用の寄宿制教育機関。1753年に設立された。アフォニアダの生徒たちは、中等学校のカリキュラムに含まれる科目に加え、神学および教会実務に関する科目（聖書、聖人伝、典礼学、古代ギリシャ語、ビザンチン教会聖歌、イコン画など）を学ぶ。——訳者注

まさに自分が推測した通りだった」と確信に至るのです。例えば、誰かが物思いにふけているのを見ると、そのような人々は「その人は何かで自分に腹を立てている」と考えますが、その人は単に何かを心配しているために物思いにふけているだけかもしれません。数日前、ある来客が私のところに来て、知人のことについてこう尋ねました。「以前は私と話してくれたのに、今はなぜ話してくれないのでしょうか？ もしかすると、最近私が彼に注意をしたのが原因でしょうか？」——「ねえ」と私は彼に言いました。「彼はあなたを見かけても、単に気づかなかっただけかもしれませんよ。あるいは、身近な人が病気になり、医者を探そうかとそのことで頭がいっぱいだったのかもしれない。あるいは、海外へ行く予定で、両替のことで気を取られていたのかもしれない。他にも何かあったかもしれない。」そして、その話に出てきた人物は、実際に身近な人の病気に関して多くの心配事に心を奪われていたことが判明した。一方、彼の知人は、どうしても彼に立ち止まって話を聞いてほしかったため、結果として自分自身を思い込みで苦しめてしまったのだ。

善い思いは人に霊的な健康をもたらす

— ゲロンダ、弱い思いの顕著な特徴とはどのようなものですか？

— どういう意味ですか？ [弱い思い]なんて、初めて聞きました。

— あなたは、「左」からの思考を受け入れ、誰かの振る舞いに腹を立てると、人は……とおっしゃいましたね。

— それで、私はそのような考えを「弱い」と呼んだのですか？

— 誰かがあなたのところで見習いになりたいと申し出た際、あなたが「君は心の在り方が弱いから、受け入れることはできない」とおっしゃったことを思い出しました。

— いいえ、私は彼に別の言い方をしました。「君を修道見習いとして受け入れないのは、君に『霊的な健全さ』がないからだ」——そう彼に言ったのです。「『霊的な健全さ』とはどういう意味ですか？」と彼は尋ねました。「君には善い思いがないのだ」と私は説明しました。— 人間として私には欠点があるかもしれないが、年配の修道士として何らかの美德も見出されるかもしれない。しかし、もし君に善意がなければ、私の欠点も美德も、君にとって害となるだろう。」これは幼い子供について言えば、まだ未熟なうちは、その思いが弱いと言える。しかし、大人の人間については、そうは言えない。

「ゲロンダ、大人なら誰でも成熟しているのでしょうか？」

— 中には未熟な頭脳の持ち主もいます。ここで言っているのは、単に頭が回らない人たちのことではありません。もし人が素直に振る舞わないなら、その思いは悪へと向かい、すべてを歪めて解釈してしまいます。そのような人には霊的な健全さがなく、善でさえも役に立ちません。善でさえ、そのような人を苦しめるのです。

— ゲロンダ、もし[修道院で]何らかの混乱が起こった場合、責任者を追及することに意味はあるのでしょうか？

— まずは、その原因が自分にあるかどうかを探ってみなさい。そうするほうが、ずっと良いのです！

— ゲロンダ、しかし、もし他の人たちが自ら私に（彼らが悪いと）思わせるきっかけを与えている場合はどうでしょうか？

— あなた自身、彼らに同じようなきっかけを何度与えてきたでしょうか？ それについてよく考えてみれば、物事をそのような見方で捉えることが間違いであることに気づくでしょう。

— 「おそらく、[この混乱は]あの姉妹のせいだろう」と言うとき、私たちは「左」の考えを受け入れているのでしょうか？

— その姉が本当に悪いと確信しているのか？

— いいえ、でも彼女は以前にも同じようなことをしていました。

— 確信がないのなら、それは「左」の思いです。それに、たとえその姉妹が本当に悪いとしても、彼女がなぜ、どのようにしてそうしたのかは誰にも分かりません。

— ゲロンダ、しかし、例えば、あの姉妹に特定の情欲があるのを見たらどうでしょうか？

— あなた、修道院長ですか？ 修道院長こそが[あなた方の]責任を負っており、だからこそあなた方の情欲を見守らなければならないのです。でも、あなた方はなぜ、互いにどのような情欲を抱いているかを見張っているのですか？ あなたはまだ自己修養の仕方を学んでいないのです。もし自己修養を学びたいのなら、他人が何をしているかを詮索するのではなく、その人の中にあなたが見るものに対して、善意の思いを抱くようにしてください。その人がどのような目的を追求していようとも——善意の思いを抱くようにしてください。善意には愛が込められています。それは人の心を和らげ、あなたに対して親切に接するよう促すのです。強盗を長老と間違えた修道女たちのことを覚えていますか？ 彼が正体を明かしたとき、彼女たちは「これはキリストのために聖なる狂人であり、だからこそ強盗のふりをしているのだ」と判断しました。それ以来、彼女たちは彼に対して倍の敬意を払うようになりました。そして結局、これらの修道女たちは、その強盗本人とその共犯者たちをも救ったのです。¹⁰

— ゲロンダ、もし修道女が嘘をついている場合はどうすればよいのでしょうか？

— もし、彼女があなたのせいでその嘘をつかざるを得なかったとしたら？ あるいは、彼女は[単に]何かを忘れていて、あなたに言ったことは嘘ではないのかもしれない？ 例えば、ホテルの客が料理人にサラダを少し頼んだところ、料理人は「ない」と言うが、客は実際にあることを知っている、といった場合だ。もしホテルの従業員に善意がなければ、彼女は「なんて嘘つきなんだ！」と言うだろう。しかし、もし彼女に善意があるなら、彼女は「かわいそうに、仕事に追われて、サラダが残っているのを忘れてしまったのね」と言うだろう。あるいは、次のような思いで妹を擁護するかもしれない。「どうやら、彼女はサラダを別の[もっと重要な]機会のために取っておこうと決めたのだろう。」あなたも同様です。あなたがそのような考え方をしているのは、霊的な健全さを欠いているからです。もしあなたがそれを備えていれば、不浄なものでさえ清いものとして見たでしょう。果樹の実も、肥料も同じように見たはずです。なぜなら、その肥料が（木々が）実を結ぶのを助けたからです。

¹⁰ ある古代の修道院の伝承によると、ある時、盗賊団の首領が、堅固に守られた女子修道院を襲撃しようと企てた。その目的のために、彼は修道服に身を包み、修道院の門を訪れて一夜の宿を請うた。修道院長と修道女たちは、彼を偉大なアッパとして大いなる敬意をもって迎え入れた。修道院の住人全員が、彼から祝福を受けるために集まった。修道女たちは、「アッパ」の足を洗った水を、ある種の聖物として残しておいた。ある病弱な修道女が、信仰をもってその水で身を清めると、病から癒やされた。皆の驚きの中、彼女は寝台から起き上がり、自ら「アッパ」のもとへ祝福を求めに行った。この奇跡は、山賊の首領の内面を根本から変えた。彼は悔い改め、修道服の下に隠していた剣を捨てた。やがて彼も、その共犯者たちも修道士となり、厳格な修行生活を送るようになった。

善い思いを持つ者は、精神的に健全であり、悪を善へと変える。占領時代、体が丈夫な子供たちは、トウモロコシパンの端を両頬いっぱい頬張り、抜群の健康を誇っていたのを覚えている。一方、裕福な親を持つ子供たちはバターを塗った小麦パンを食べていたが、体が弱かったため、病弱なままであった。霊的な生活においても、事態はまったく同じである。例えば、善意を持つ人を考えてみよう。たとえ誰かに不当に殴られたとしても、その人はこう言うだろう。「神は、私が過去の罪を償うためにこれを許されたのだ。神に栄光あれ！」しかし、もしその人に善意がなければ、たとえあなたが優しく撫でてあげようとしても、彼はあなたが殴りかかろうとしているのだと誤解してしまうでしょう。酔っ払いたちを見てください。邪悪な人は酔っ払った勢いで、手当たり次第に物を壊します。しかし、酔っ払いに善良な心があれば、彼は泣きながらすべての人を許します。ある善良な男は、酔っ払うとこうつぶやき始めました。「お前は俺を不親切な目で見ているな……まあいい……お前を金で埋め尽くしてやる。バケツから直接だ！……」

善意を持つ者は、すべてを善として見る

教会で多くの不適切な光景を目にして心が揺らぐと私に言う人たちがいたとき、私はこう答えた。「もしハエに、この辺りに花があるかと尋ねたら、ハエはこう答えるだろう。『花については知らない。でも、あそこの溝には、缶詰の空き缶や糞、汚物が山ほどあるよ』」するとハエは、自分が訪れたことのあるゴミ捨て場を一つずつ列挙し始めるだろう。一方、ミツバチに「この辺りに汚物のようなものは見かけなかったか？」と尋ねれば、彼女はこう答えるだろう。「汚物？ いいえ、どこにも見かけませんでした。ここには香りのよい花がこんなにたくさんあるわ！」と答えるでしょう。そしてミツバチは、庭や野原に咲くさまざまな花の数々をあなたに挙げ始めるのです。お分かりでしょう？ ハエはゴミ捨て場のことしか知らないのに、ミツバチはすぐ近くにユリが咲いていることや、少し離れたところでヒヤシンスが咲き誇っていることまで知っているのです。」

私が理解した限りでは、ある人はミツバチに似ており、またある人はハエに似ている。ハエに似た人は、どんな状況でも悪いところばかりを探し出し、そればかりに目を向ける。彼らは何事にも、ほんの少しの善も見出さない。ミツバチに似た人は、何事にも善を見出す。心が傷ついた人は、思考も歪んでいる。何事に対しても偏見を持ち、すべてを逆さまに見る。一方、善意に満ちた人は、何を見ても、何を言われても、その善意を働かせるのだ。

ある日、ギムナジウムの2年生の少年が私のカリヴァを訪ねてきた。¹¹ 彼は鉄のノック棒で門の扉を叩いた。未読の手紙が袋いっぱい待っていたが、私は外に出て、彼が何を望んでいるのか尋ねることにした。「さて、」と私が言うと、「どうしたんだい、若いの？」と尋ねた。「ここは、」と少年は尋ねた。「パイシイ神父のカリヴァですか？ パイシイ神父に会いたいんです。」「カリヴァは、」と私は答えた。「彼のものだが、パイシイ神父本人はいない。タバコを買いに出かけたんだ。」「なるほど」と少年は善意に満ちた口調で答えた。「神父様は、誰かのために何かをしてあげたかったから、タバコを買いに行ったんですね。」「自分のために買ってるんだよ」と私は言った。「タバコが切れてしまって、神父様は狂ったように店へ駆け込んだんだ。僕をここに一人残していったし、いつ戻ってくるかもわからない。もし彼が長い間戻ってこないような

¹¹ ロシアの中学校の6年生に相当する。――訳者注

ら、僕もここを去るつもりだ。」少年の目に涙が光り、彼は——またしても善意に満ちた思いで——こう言った。「僕たちは長老をどれだけ疲れさせていることか!」「『一体、彼に何の用があるんだ?』と私が尋ねると、『彼から祝福をもらいたいんだ』と彼は答えた。『どんな祝福だよ、バカ! あいつは魔の虜になっているんだぞ! あんなにな放蕩者——俺はあいつのことを手のひらを見るほどよく知っているんだ。だから、無駄に期待するな。だって、彼が戻ってきたら、かなり機嫌が悪くなるだろう。それどころか、酔っ払って現れるかもしれない——何しろ、彼は何よりも酒に溺れているんだから。』しかし、私がこの若者に何を言おうと、彼はすべてを善意で受け止めてくれた。「まあいいさ」と私はその時言った。「パイスイをもう少し待とう。君が何を望んでいるか教えてくれ、彼に伝えておくよ。」「僕には」と彼は答えた。「長老への手紙があるんだけど、彼から祝福をもらうために、彼が戻るのを待つつもりだ。」

ほら、見てください! 私が何を言っても、彼はすべてを善意で受け止めてくれたのです。私が「あのパイスイという子は、まるで気が狂ったようにタバコを買いに駆け出した」と言うと、彼はそれを聞いてため息をつき、目に涙を浮かべました。「一体、なぜ彼はタバコを買いに行ったのだろう?」と彼は考えました。「たぶん、善行をしようとしたんだろう」と。他の人たちはあれほど本を読んでいるのに「善意など持っていない」。それなのに、ここには——ギムナジウムの2年生の生徒が、これほど善意を持っているのだ! あなたは彼の考えを台無しにするが、彼は以前よりも良い新しい考えを編み出し、それに基づいてより良い結論に達する。この子供には感嘆させられた。こんなことは初めて見た。

聖化された人の思いと、悪意ある人の思い

— ゲロンダ、聖性を備えた人は、誰が邪悪で、誰がそうではないかを理解しているのでしょうか?

— はい、その人は邪悪な人間も聖なる人間も見分けることができます。誰かが犯す悪を見つつも、同時に、その悪を行う者の内なる人間も見ています。その悪が誘惑者から来るものであり、外側から人間に侵入してくるものであることを見極めているのです。心の目をもって、彼は自身の過ちを重大なものとして見、他者の過ちを些細なものとして見ます。彼は本当にそれらを些細なものとして見ており、自分を欺いているわけではありません。彼は、誰かが行っていることが犯罪であることを理解しつつも、その言葉の善意的な意味において、悪人の悪意を正当化することさえあります。彼はそのような人々を軽蔑せず、自分より劣っているとも考えない。むしろ、そのような人々を自分より優れているとさえ考え、多くの理由から、彼らが犯す悪を自覚的に容認することさえある。例えば、犯罪者の悪意を目の当たりにしたとき、そのような人は、その犯罪者に誰も手を差し伸べなかったために、彼は悪行を犯すような境地にまで落ちぶれてしまったのだと考えます。さらに、もし神が彼を助けずに見捨てていたら、自分自身がその不幸な人の立場に置かれていたかもしれないことも理解しています。[悪に対して]このように接することで、そのような人は多くの恵みを受け入れる。一方、悪意のある人には逆のことが起こる。義人の聖さを見て、彼はその善意を理解しない——まるで悪魔自身がそれを理解しないのと同じように。

[自分自身に対して]繊細な行いを実践する者は、他者を擁護し、自分自身を擁護しない。そして、霊的な面で前進すればするほど、より大きな自由を獲得し、神と人々をより深く愛するようになる。そうすれば、彼は常に他者に対して善意を抱いているため、

悪意とは何かを理解することができなくなる。その思考は常に清く、あらゆるものを霊的かつ神聖な視点で見る。隣人の転落でさえ、そのような人にとっては益となる。彼はそれを、自分自身に対する確かなブレーキとして活用し、注意を怠らず、破滅を免れるのだ。それとは対照的に、心を清めていない人は、悪巧みを抱き、周囲のすべてを悪意の目で見ると。その狡猾さによって、彼は善や善意さえも汚してしまう。他者の美德でさえ、彼にとって益とはならない。なぜなら、人殺し〔悪魔〕の漆黒の闇に覆われている彼は、美德さえも自身の「狡猾な解釈辞典」を用いて解釈してしまうからだ。彼は常に動揺した状態にあり、その霊的な闇によって周囲の人々を絶えず動揺させている。もしそのような人が解放されたいと願うなら、霊的な悟りと、心と精神の清らかさが訪れるために、自らの魂を清める必要があることを理解しなければならない。

— ゲロンダ、なぜ同じ人が、時には狡猾になり、時には善良になるのでしょうか？

— その場合、その人は相応の影響や変化にさらされているのです。人間は気まぐれなものです。悪意ある考えは悪魔から来ることもあります。その人自身が悪意を持って考えていることもあります。つまり、敵はしばしば、な人々に邪悪な考えを抱かせるために、特定の状況を作り出すのです。ある時、あるアルヒマンドリットが私のカリヴァを訪ねてきましたが、私は彼を迎えることができませんでした。彼が二度目に訪れた時、私は重病で、また彼と話すことができず、もう一度来てくれるよう頼みました。すると、そのアルヒマンドリットは、「私が彼に会いたくないのだ」「彼に対して嫌悪感を抱いているのだ」という考えに苛まれ始めました。彼は私のケリヤが所属する修道院へ行き、私について不満を訴え始めました。これらすべては、悪霊の誘惑によって引き起こされたのです。

人の思いは、その人の霊的な状態を示す指標である

— ゲロンダ、なぜ二人として同じ物事に対して同じように見ないのでしょうか？

— すべての目が同じようにはっきりと見えているというのでしょうか？ はっきりと、純粹に見るためには、魂の目が非常に健全でなければなりません。なぜなら、魂の目が健全であれば、人は内面の清らかさを持っているからです。

— では、ゲロンダ、なぜ同じ出来事でも、ある人はそれを祝福だと考え、別の人は不幸だと考えることがあるのでしょうか？

— 誰もが、自分の思いに従って起こっていることを解釈するのです。どんな出来事や現象でも、良い面からも悪い面からも見ることはできます。ある時、私は次のような出来事を耳にしました。ある地域に修道院がありました。次第に周囲に建物が建てられ始め、やがて修道院は四方を世俗の家々に囲まれてしまいました。そこでは、晩課が真夜中に、早課と合わせて執り行われていました。周辺に住む信徒たちも、礼拝に参列していました。ある時、修道院に入ったばかりの若い修道士が、礼拝に向かう際、自分の独房のドアを閉め忘れたため、ある女性が中に入ってしまった。修道士がそれを知ると、ひどく動揺した。「大変だ！ 独房が穢されてしまった！ もうおしまいだ、終わりだ！」と。彼は一瞬も躊躇することなく、アルコールの入った瓶を掴み、中身を床に撒いて火をつけた！ 「床の消毒だ！」あと少しで、修道院を焼き尽くすところだった。彼は独居室の床を焼き払ったが、自分の思いは焼き払えなかった。しかし、まさにその思いこそを焼き払うべきだったのだ。なぜなら、その思いの中にこそ悪が潜んでいたからである。もし、善意の思いを持って、その修道士が「この女性は敬虔な心から私の独房に入り、恩恵を受け、[修道者の]祝福の恵みを得て、その後自宅で自ら修行を積もうとしてい

るのだ」と自分に言い聞かせていたなら、彼には霊的な変化が起こり、神を賛美していたことでしょう。

人の霊的な状態は、その思いの質から見て取れる。人々は、自分の中に持っているものに応じて、物事や出来事を判断する。自分の中に霊的なものがなければ、誤った結論を下し、他者に不当な態度をとる。例えば、夜間に人知れず施しを行う者は、深夜に路上で出会った通行人に対して、決して悪意を抱くことはない。一方、夜を罪に費やす者は、遅くまで外を歩いている通行人を見かけると、こう言うだろう。「なんて野獣だ、一晩中どこをうろついていたんだ？」——それは、自分の経験に基づいて判断しているからだ。あるいは、例えば、善意のある人は、夜に上の階から物音がすると、「お辞儀をしているんだ！」と喜ぶだろう。一方、善意を持たない者は、悪意を込めて「一晩中踊り明かしていたのか！」とぶつぶつ言うだろう。ある人は、メロディアスな歌声を聞いて「なんて美しい聖歌だろう！」と言うだろうが、別の人は「一体、あそこで何を歌っているんだ！」と腹を立てるだろう。

キリストと共に十字架にかけられた二人の強盗が、キリストに対してどのような態度を示したか、覚えていますか？ 二人とも十字架にかけられたキリストを目にし、二人とも大地が揺れ動くのを感じ、二人とも同じ立場にありました。しかし、一人は何を考え、もう一人は何を考えたのでしょうか？ 一人は、左側に吊るされていた者で、キリストを冒瀆し、こう言いました。「もしあなたがキリストなら、自分と私とを救ってください。」¹² もう一人は——右側にいた者——次のように告白しました。「私たちは、自分の行いに応じて受けるにふさわしい報いを受けている。しかし、この方は、いかなる悪も犯していない。」¹³ 一人は永遠の苦しみへと向かい、もう一人は救われました。

第2章。 冒瀆的な思いについて

どのような思いが冒瀆的なものか

— ゲロンダ、いつその思いが冒瀆的なものになるのか、私には分かりません……

— キリストや聖母マリア、聖人たち、神聖で聖なるもの、あるいは私たちの霊的父などについて、心に不敬なイメージが浮かぶとき、それは冒瀆的な思いです。そのような思いは、誰にも口に出して語るべきではありません。

— 霊的指導者には？

— 霊的指導者には、次のように言えば十分です。「キリストや聖霊、聖母マリア、聖人たち、あるいはあなた——私の霊的父——について、冒瀆的な思いが浮かびます。」こうした冒瀆や罪はすべて私たちのものではありません。それらは悪魔から生じているのです。ですから、悪魔の罪のせいでさらに心を乱す必要はありません。私が修道生活を始めたばかりの頃、悪魔はしばらくの間、教会にさえいる時に、私に冒瀆的な考えを吹き込んでいました。私はとても落ち込んでいました。悪魔は、私が軍隊時代に他の人たちから聞いた悪口や下品な言葉を[素材として]利用し、聖人たちに対する卑劣な考え

¹² ルカ 23:39。

¹³ 参照：ルカによる福音書 23章41節。

を私に植え付けていたのです。「これらの思いは悪魔からのものだ」と、私の霊的指導者は諭してくれました。「聖なるものに対する不敬な思いが浮かんで動揺してしまうということは、それらが自分自身のものionではなく、外から来ている証拠なのだ。」しかし、私は依然として動揺し続けていた。冒瀆的な思いが浮かぶと、私は聖ヨハネ・洗礼者礼拝堂へ祈りを捧げに行き、そのイコンに額をつけると、そこから芳香が漂ってきた。不敬な思いが再び湧き上がると、私はまた急いで洗礼者ヨハネの小礼拝堂へ駆け込み、イコンからは再び芳香が漂ってきた。ある聖体礼儀の最中、私は小礼拝堂で祈っていた。聖歌隊がニレウスの『聖なる神よ』を歌い始めると、¹⁴、私は自分の席から静かに口ずさみ始めた。すると突然、本堂の玄関へと通じる扉から、犬の頭を持つ巨大で恐ろしい獣が小礼拝堂に押し入ってくるのが見えた。その口と目からは炎が噴き出していた。怪物は私の方を向き、私が「聖なる神よ」と歌っていることに苛立ち、二回も悪意に満ちた様子で前足で私を威嚇した。私は隣で祈っていた修道士たちを一瞥した。もしかすると、彼らも[その獣]を見たのだろうか？ いや、誰も何も気づいていなかった。その後、私はこの出来事を霊的指導者に話した。「さて、それが誰だったか分かったか？」と霊的指導者は私に言った。「まさにあいつそのものだ。これで落ち着いただけだろうか？」

— ゲロンダ、人は自分の考えが冒瀆的であることを、常に理解しているものなのでしょうか？

— 神から与えられた頭脳を働かせれば、人はそれを理解する。例えば、ある人たちは私にこう尋ねる。「ゲロンダ、地獄の苦しみなどあり得るのでしょうか？ 刑務所に収監されている人を見るだけで私たちは心を痛めるのに、ましてや地獄で苦しんでいる人々については言うまでもありません！」しかし、そのような理屈は神への冒瀆である。こうした人々は、自分たちを神よりも義人であるかのように見せかけているのです。神はご自身のなさることをご存知です。聖グリゴリオス・デュオロゴスが語ったエピソードを覚えていますか？ ある時、フォルトゥナト司教が、悪霊に取り憑かれた女性から悪霊を追い出しました。追い出された悪霊は乞食の姿をとって街に戻り、司教を非難し始めました。「あの無慈悲な者が私を追い出した！」と彼は叫びました。ある男が、その叫び声を聞いて「不運な者」を憐れみました。「彼を追い出すなんて、なんて酷いことをしたんだ！ どうしてそんなことをできたんだ！ さあ、私の家に入ってみなさい。」悪魔はその家に入り、やがてこう頼んだ。「暖炉に薪をくべてくれ。さもないと寒くてたまらない。」家主は太い薪を火の中に投げ入れ、炎は陽気に轟いた。そして火が十分に燃え上がったとき、悪魔は家主の子供に取り憑いた。悪霊に取り憑かれたその不幸な少年は、火の中に飛び込み、焼死してしまった。その時、家主は、司教が誰を追い出し、誰を自分の家に迎え入れたのかを理解した。司教フォルトゥナートは、悪霊に取り憑かれた少女から不浄な霊を追い出した時、自分が何をしているのかを知っていたのだ。¹⁵

冒瀆的な思いはどこから生じるのか

— ゲロンダ、善き無関心について何かお話しいただけませんか？

¹⁴ ニレヴス・カラマドス——19世紀後半のコンスタンティノーブルで著名な聖歌家であり、数多くの教会聖歌の作曲家、ビザンチン教会聖歌の理論家。

¹⁵ 参照：聖グリゴリオス・ドヴェスロス『イタリアの教父たちの生涯と魂の不死に関する対話』モスクワ、ブラゴヴェスト、1996年、54頁。

— 「善き無関心」は、過度に感受性が強く、タンガラシュカによって様々な思いに苛まれている人にとって必要なものです。¹⁶ そのような人は、少し無感覚になること——この言葉の肯定的な意味において——そして特定の種類の思いに深入りしないことが望ましいでしょう。さらに、「善意の無関心」は、悪魔が人を陥れようと、ある特定の事柄や現象に対して過度に敏感にしてしまった人にも必要です——通常、そのような人は過度の感受性に悩まされていないにもかかわらずです。そのような人にとっても、しばらくの間は「善意の無関心」が助けとなるだろう。しかし、その人は霊的指導者の見守りを受ける必要がある。自分の内面を霊的指導者に打ち明け、その指導の下に置かれるべきである。そうでなければ、知らず知らずのうちにすべてに対して無関心になり、反対の極端に陥り——完全に無関心な人間になってしまう恐れがある。

— ゲロンダ、なぜ私が悲しみに沈むと、不敬な考えが浮かんでくるのでしょうか？

— こうなるのです。あなたが悲しんでいるのを見て、タンガラシュカはそれを利用し、世俗的な餌——つまり罪深い考え——をあなたに差し出すのです。もしあなたが初めて（その考えという餌を）受け入れて転んでしまったら、次回はさらに深くあなたを落ち込ませ、それに抵抗する力も失ってしまうでしょう。ですから、決して悲しみに浸ってはいけません。その代わりに、霊的なことに取り組むほうがよいでしょう。霊的な活動は、あなたがその状態から抜け出す助けとなるでしょう。

— ゲロンダ、私はある種の思いにひどく苦しめられています……

— それらは悪霊からのものです。心を穏やかに保ち、それらの声に耳を傾けないでください。あなたは感受性が豊かで、繊細な人です。悪魔はあなたのその感受性を利用し、特定の考えに過度な注意を向けるという「癖」を植え付けようとしています。悪魔はあなたの心をそれらに「くっつけて」しまい、あなたは無駄に苦しんでいるのです。例えば、悪魔は修道院長様や、あるいは私についてさえ、邪悪な考えをあなたに吹き込むかもしれません。そうした考えは無視しなさい。冒涇的な考えに少しでも注意を向けようと、それはあなたを苦しめ、打ちのめしてしまうかもしれません。あなたには、少しばかりの健全な無関心が求められています。

悪魔は通常、敬虔で非常に感受性の強い人々を、冒涇的な思いで苦しめます。悪魔は、彼らを悲嘆に陥れるために、彼らの墮落を（彼ら自身の目には）過大に誇張するのです。悪魔は彼らを絶望の淵に突き落とし、自殺に追い込もうと画策し、それが叶わない場合は、少なくとも彼らを狂わせ、機能不全に陥らせようとします。もし悪魔にそれさえも叶わないならば、少なくとも彼らに憂鬱や落胆を抱かせることで喜びを感じるのです。

ある時、私は絶えず唾を吐き散らしている男に出会った。「彼は悪魔に取り憑かれている」と、人々は私に言った。「いや、違う」と私は答えた。「悪霊に取り憑かれた者は、そんな振る舞いはしない。」そして実際、後に私が確かな情報として知ったところによると、この哀れな男は、悪霊に取り憑かれるほどの過ちを犯していたわけではなかった。彼は孤児として育ち、感受性が強く、物事に敏感だった。さらに、彼は「左寄りの」考えを持ち、少し病的な想像力を持っていた。悪魔はこれらすべてに火をつけ、彼に冒涇的な考えを吹き込み始めた。そして悪魔がそれらを吹き込むと、その不幸な男は抵抗し、飛び跳ね、冒涇的な考えを振り払おうとして、それらを「吐き出していた」。それを傍らで見ていた人々は、彼が悪魔に取り憑かれているのだと思ったのだ。この

¹⁶ 長老は悪魔をこのように呼んでいた。

ようにして、感受性の強いこの哀れな男が冒瀆的な考えを吐き出すと、周囲からは「お前は悪魔に取り憑かれている！」と言われるのだ。

しばしば、冒瀆的な思いは、悪魔の嫉妬によっても人の心に浮かぶ。特に徹夜祈祷の後にはそうだ。疲れ果てて死人のように倒れ込み、敵に対抗できなくなることもある。まさにその時こそ、悪党である悪魔が、あなたに冒瀆的な思いをもたらすのだ。そして、あなたを混乱させたり絶望に陥れたりしようと、「そんな考えは悪魔自身でさえも持ち込まない！ もうあなたは救われない」と吹き込み始めるのです。悪魔は、聖霊に対する冒瀆的な考えさえも人に持ち込み、その後、「この罪——聖霊への冒瀆——は赦されない」と言うこともあるのです。

— ゲロンダ、冒瀆的な思いは、私たち自身の過ちによって生じることもあるのでしょうか？

— はい。人は自ら、そのような思いが浮かぶきっかけを作ってしまうこともあります。冒瀆的な思いが過度の感受性によって引き起こされたものでないなら、それは高慢や非難などから生じます。ですから、霊的修行に励んでいる最中に、不信仰や冒瀆の思いが浮かぶなら、あなたの修行は高慢を伴って行われているのだと知ってください。高慢は心を曇らせ、不信仰が始まり、人は神の恵みの覆いを失ってしまいます。さらに、相応の素地を持たずに教義上の問題に取り組む人は、冒瀆的な思いに打ち負かされてしまいます。¹⁷

冒瀆的な思いに対する軽蔑

— ゲロンダ、アバ・イサアクは、私たちが情欲に打ち勝つのは「謙遜によってであり、高慢によってではない」と述べています。¹⁸ ある情欲への軽蔑、[それに対する]高慢、そして冒瀆的な思いへの軽蔑——これらは同じことではないのでしょうか？

— いいえ。情欲を軽蔑することには、高慢、自信過剰、そして何よりも悪いことに、自己正当化が含まれています。つまり、あなたは自分自身を正当化し、自分の情欲を「拒絶」しているのです。まるで「この情熱は私のものではなく、私とは何の関係もない」と言っているかのようで、そこから解放されるために努力しようとしません。一方、冒瀆的な思いは軽蔑すべきだ。なぜなら、すでに述べたように、それらは私たちのものではなく、悪魔から来るものだからだ。

— もし人が、他人の前で、ある種の情欲を持っているふりをし、例えば、大食漢であるかのように振る舞うとしたら、それによって悪魔を嘲笑していることになるのでしょうか？

— その場合、彼は「善意の偽善」を行っているに過ぎず、悪魔を嘲笑しているわけではありません。悪魔があなたに冒瀆的な思いを抱かせようとした時、あなたが教会の賛美歌を歌うことこそが、悪魔を嘲笑することなのです。

— ゲロンダ、礼拝中に冒瀆的な考えを追い払うにはどうすればよいのでしょうか？

¹⁷ すなわち、霊的な前提条件——敬虔、謙遜、教会への服従——あるいは外的な前提条件——教育、才能、ギリシャ語の知識など——（訳者注）。

¹⁸ ギリシャ語原文では「διὰ της ταπεινώσεως, καὶ ὄχι διὰ της περιφρονήσεως」。S. I. ソボレフスキーによるロシア語訳では、「高慢ではなく、謙遜によって情欲に打ち勝つとき」。参照：アッバ・イサアク・トゥ・シロス。『アスケティコイ・ロゴイ』。第4書簡。「アステール」刊。アテネ、1961年。329頁、および同書『聖なる父アッバ・イサアク・シリア人の修道者の言葉』モスクワ、1993年。255頁。

— 聖歌を歌うことです。「わが口を開き……」¹⁹ まさか、楽譜通りに歌うことができないのですか？ その考えを掘り下げてはいけません。軽蔑の念を持って接しなさい。祈りに立ちながらそのような考えと対話する人は、指揮官に報告をしながら手榴弾のピンを抜いている兵士のようなものだ。

— もし冒瀆的な考えが消えない場合はどうすればよいのでしょうか？

— もし悪魔が去らないなら、それはあなたの心のどこかに、自分だけの居場所を見つけたのだと知っておきなさい。最も効果的な手段は、悪魔を軽蔑することです。なぜなら、冒瀆的な思いの裏には、悪巧みの師である悪魔が潜んでいるからです。冒瀆的な思いとの戦いにおいては、たとえイエスの祈りであっても、それを使って戦うのは避けたほうがよい。なぜなら、それを唱えることで私たちは不安を露呈してしまい、悪魔は私たちの弱点を狙って、絶え間なく冒瀆的な思いで私たちを攻撃してくるからだ。そのような場合は、教会で歌われる賛美歌を歌うほうがよい。考えてみてほしい。小さな子供たちでさえ、同年代の子供を 軽蔑したいときは、「トゥー・ラ・ラ」といった様々な歌で相手の話を遮るではないか。私たちも悪魔に対して、同じことをすべきである。ただし、世俗的な歌ではなく、聖なる賛美歌をもって、悪魔への軽蔑を示そう。教会の聖歌は、神への祈りであるだけでなく、悪魔への軽蔑でもある。そうすれば、あの悪しき者は両側から攻撃を受け、ついに破裂してしまうだろう。

— ゲロンダ、このような状態では、私は歌うことができません。聖体拝領に近づくことさえ容易ではありません。

— それは非常に危険だ！ タンガラシュカが君を追い詰めているのだ！ 歌っても、聖体拝領してもいい——だって、それらの思いは君自身のものではないのだから。せめてこれだけは私に服従してほしい[思いの戦いの最中に]、「ふさわしい」と一度だけ歌ってくれ。そうすれば、タンガラシュカは当然の報いを受け、逃げ去るだろう。アトス山の修道士の話、したっけ？ 彼は12歳の孤児として聖山にやって来た。肉親である母の愛を失った彼は、その愛のすべてを聖母マリアに捧げた。彼は聖母に対して、実の母と同じような愛情を抱いていた。彼がどれほど敬虔な気持ちでイコンに口づけしていたか、君が見ていたら驚いただろう！ すると、敵はこの愛につけ込み、彼に冒瀆的な思いを抱かせた。その不幸な修道士は、イコンに口づけすることさえやめてしまった。それを知った彼の長老は、彼の手を取り、イコンに描かれた至聖なる神の母と救い主の御顔と御手に口づけさせた。その直後、悪魔は逃げ去った。もちろん、聖母マリアや救い主の御顔に直接口づけをするのは、大胆な行為だ。しかし、長老は、彼を苦しめていた邪念を追い払うために、修道士にそうさせたのである。

どのような場合に、私たち自身が冒瀆的な思いを抱く罪を犯しているのでしょうか

— ゲロンダ、冒瀆的な思いが頭をよぎったとしても、それに同意しない場合、²⁰ 私に罪は生じるのでしょうか？

— もしあなたが心を痛め、その思いを受け入れないのであれば、罪はありません。

¹⁹ 至聖なる神の母の受胎告知のカノン第1歌のイルモスの冒頭部分。

²⁰ 禁欲主義の用語集において、「誘惑」（ギリシャ語：προσβολή）とは、イメージを伴わない心の思いや心の動きを指す。罪深いイメージや空想が現れたり、それが収まらなかったりすることは、その思いに対する「同意」（ギリシャ語：συγκατάθεσις）の表れであり、これは内面的な罪への屈服であり、悔い改めによる癒やしを必要とする。参照：聖マルコ・アスコエトス『霊的法に関する200の章』第139～142章および『慈愛』（ロシア語訳）。第I巻。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1992年。532頁。——訳者注。

— ゲロンダ、では、人が冒瀆的な思いに自ら責任を負うのはどのような場合でしょうか？

— そのような思いが浮かんだことに心を痛めず、ただ[腕を組んで]座り込み、その思いと語り合っているなら、その人は罪を犯しているのです。そして、冒瀆的な考えを受け入れるほど、悪魔による混乱にさらされる度合いも大きくなります。というのも、浮かんだ冒瀆的な考えをじっと見つめ、心の中でそれに対話し続けることは、わずかながらも悪魔に取り憑かれる状態に陥るからです。

— では、そのような考えを追い払うにはどうすればよいのでしょうか？

— もし人が、そのような思いが自分の中に浮かぶことを嘆き、それに対して応答しなければ、養分を得られないため、それらは自然に消え去る。水をやらなければ、木は枯れてしまいます。しかし、たとえほんの少しでもそれらの思いに甘んじ始めると、人はそれらに糧を与え、自分の「古い人間」に「水をやる」ことになります。その場合、思いはそう簡単には「枯れ」ません。

— ゲロンダ、私には時々こんなことが起こります。冒瀆的な考えを抱き、それに同調してしまい、後でそれに気づくのですが、もう追い払うことができないのです。

— 君に何が起きているか分かるか？ある瞬間、君は何か他のことに気を取られ、集中力を失い、口を開けたままカラスの数を数え始める。その時、タンガラシュカが忍び寄り、君の開いた口の中にキャンディーを放り込むのだ。それを口の中で転がし、その味を感じ始めると、もう吐き出すのが難しくなる。その「甘さ」をほんの少し感じた瞬間に、すぐに吐き出さなければならないのだ。

— ゲロンダ、もし現れた冒瀆的な考えをほんの少しの間だけ受け入れて、その後追い払った場合はどうでしょうか？

— その場合、悪魔はあなたに飴を渡し、あなたはそれを吐き出す——しかし、すぐにではなく、しばらくしてからだ。すぐに吐き出さなければならない。そうでなければ、悪魔は最初に飴であなたを騙し、その後、苦い薬を飲ませて、あなたを嘲笑うことになる。

第3章。 思いに信頼を置くことについて

思い込みへの信頼——それは惑わしの始まりである

「ゲロンダ、私は怒ると、荒れ狂う川のように、自分を抑えられなくなってしまう。」

— なぜ自分を抑えられないのですか？

— 自分の思い込みを信じているからです。

— そうか、それなら君には君なりの「信じる」という姿勢、君なりの「信仰告白」があるわけだ！すべては利己心によるものだ。自分の思い込みを正当化してはいけない。その愚かな思い込みを自ら捨て去り、受け入れないようにしなさい。

— では、その考えが「馬鹿げたもの」だと、どうやって見分ければいいんですか？

— えー、もしそれが分からないなら、その思いをお母様である修道院長に打ち明けてください。そして、修道院長が言うことすべてに従うことで、その思いを一気に捨て

去ってください。もし霊的な人が自分の思いに信頼を置くなら、それは惑わしの始まりです。その人の心は高慢によって曇り、惑わしに陥ってしまうかもしれません。それなら、むしろ正気を失ったほうがまだ。そのほうが、罪を軽減する事情があるからだ。

—ゲロンダ、他の人々は、そのような人を助けることができないのでしょうか？

— そのような状態にある人が他者の助けを役立てるためには、彼自身も自らを助けなければならない。自分が誰よりも優れている、自分は聖なる存在であるなどと囁く自分の思い込みを信じることは、惑わしであることを理解しなければならない。そのような思いに、本人がしがみついている限り、大砲で撃っても振り払うことはできません。その思いを取り除くには、謙虚になる必要があります。時々、そのような状態にある人々が、私のために祈ってほしいと頼んでくることがあります。しかし、私の祈りがそのような人に何の助けになるというのでしょうか？もしその人が、悪魔が自分の中に差し込んだピクフォードの導火線をそのまま残しているなら、また空中に吹き飛んでしまうでしょう。それはまるで、人が[火薬樽の上に座り]、手に導火線を持ったまま、爆発を避ける手助けをしてほしいと頼んでいるようなものです！

—ゲロンダ、私はもう正気を失ってしまいました……

— 一体誰がそんなことを言ったのですか？まさか、あなた自身の思い込みではありませんか？[恐れることはありません。]私は聖山からあなたを見守っています。君のことを忘れたことはない。君は正気を失ったわけじゃない、そんなことはない。だが、もし自分の思い込みを信じ始めたら、それは間違いなく君を狂わせてしまうだろう。自分の思い込みを信じてはいけない。それが「君は救いようのない者だ」と言う時も、「君は聖人だ」と称える時も、どちらもだ。

思い込みを信じることは、心の病を招く

— ゲロンダ、もし人が「周りの誰もが自分だけに関心を寄せている」という思いに苦しんでいるなら、どうすればその思いを追い払えるのでしょうか？

— その思いは、人を病ませようとする悪霊からのものです。そのような思いには無関心で接し、気にかけないようにしなければなりません。その言葉を一銭たりとも信じてはいけません。例えば、疑い深い人は、二人の知人がひそひそと話し合っているのを見て、「あいつら、私の悪口を言っているに違いない！まさかあの人たちがそんなことをするとは！」と思う。しかし、実際には二人は全く別の話題について話しているのだ。もしそのような考えに任せてしまうと、次第にその考えは「勢いを増し」、その人は、まるで自分が監視され、追われているかのように思い込むようになってしまう。たとえ誰かが、周囲の人々が自分一人にばかり気を取られているという「反論の余地のない証拠」を持っていたとしても、その「事実」をこれほど狡猾に捏造したのは、他ならぬ敵自身であり、その敵が[植え付けられた考えの真実性を]その人に信じ込ませようとしているのだということを知っておくべきだ。なんと狡猾な捏造者である悪魔のことか！

私はある青年を知っている。彼は非常に頭が良いが、自分が精神的に不安定であるかのように囁くその思い込みを信じてしまっている。タンガラシュカがもたらす思い込みを受け入れてしまったため、この青年は自分自身に山ほどのコンプレックスを抱えてしまった。彼は自殺を図り、両親をひどく苦しめた。神は彼に力と才能を与えられたが、敵はそれらをすべて台無しにしている。こうしてその青年は自ら苦しむだけでなく、他の人々をも苦しめている。私には理解できない。一体なぜ人々は、このタンガラシュカの思いを受け入れ、自ら自分の人生を耐え難いものにしてしまうのだろうか？その後

、彼らは自分たちに起きていることについて、神さえも非難し始める。しかし、神は私たちにこれほど多くの恵みを与え、これほど深く愛してくださっているのではないか！ そのような人々に何を言っても無駄だ。その人が、敵がもたらす考えを信じ続ける限り、彼との会話はただ力を消耗させるだけで、それ以上の何ものにもならない。

— ゲロンダ、感受性が強いということは、心の弱さ、病気なのでしょうか？

— いいえ。愛深さや感受性、繊細さは、生まれつきの賜物ですが、残念ながら、悪魔は[時に]それらを自分の目的のために利用することに成功してしまうのです。悪魔はしばしば、感受性が強く、印象を受けやすい人に、事態を誇張して捉えるよう唆し、ある困難に耐えられなくさせたり、あるいはわずかに耐えただけで、精神的に疲れ果て、失望し、苦しみに苛まれ、ついには傷ついてしまうように仕向けるのです。生まれつきの感受性や繊細さを有益に活用すれば、それは天的なものとなります。しかし、悪魔にそれを利用してしまえば、それはその人にとって災いとなる。なぜなら、人が自分の賜物を有益なことに用いないなら、悪魔がそれを利用するからだ。そうして人は神の賜物を捨ててしまう。神に感謝する代わりに、すべてを逆さまに理解してしまうのだ。感受性の強い人が自分の思い込みを信じてしまうと、それはその人を精神科病院にまで追い込むことさえあり得る。もちろん、「人生の些細なことさ」と常に口にする無関心な人を称賛する理由などない。しかし、少なくともそのような人々は精神科病院には入らない。だからこそ、タンガラシュカは感受性の強い人々を狙うのだ。

また、他の人々は、自分たちが重い遺伝的素因に悩まされているという考えに苦しめられている。正確には、タンガラシュカがそのような考えを植え付け、それが事実であるかのように彼らを説得しようとしているのだ。敵は、そうした人々に恐怖を植え付け、彼らの頭を混乱させ、深刻な理由もなく機能不全に陥らせようとする。たとえその人に本当に何か遺伝的なものがあっても、神の恵みの前では何ものも立ち向かうことはできない。聖キプリアン⁽²¹⁾を覚えていますか？ かつては魔術師でしたが、教会の聖職者となり、キリストの殉教者となった人物です。また、聖モーセ・ムリン⁽²²⁾はどうでしょうか。当初は強盗でしたが、修道生活において、多くの偉大な教父たちをも凌ぐほどに感受性を高めました。彼はなんと高い境地に達したことでしょう！ 聖マカリオスが彼を訪ねたとき、聖モイセイはこう尋ねました。「私はどうすればよいのでしょうか？ 人々に煩わされ、沈黙を守ることができません。」「モイセイよ」とアッバ・マカリオスは答えました。「あなたはとても感受性が豊かです。アラビアの荒野へ行きなさい。あなたは人々を追いつくことはできないのですから。」²³

聖モーセ——かつての強盗であった彼は——その心の繊細さにおいて、名門の家系に生まれ、教養豊かで文化的な人物であった聖アルセニオス・ザ・グレートさえも凌駕していた。ほら、神の恵みがどのような働きをするか、お分かりだろう！ しかし、聖モーセについては、彼が並外れた謙虚さを備えていたことも述べておかなければならない……

気まぐれは思いから始まる

— ゲロンダ、嫌悪感はどこから生じるのでしょうか？

²¹ 聖殉教者キプリアンの記念日は10月2日である。

²² 尊者モーセ・ムリーナの記念日は8月28日である。

²³ 『聖人および至福の父たちの苦行に関する記念すべき伝承』参照。モスクワ、1845年。147頁。

— あなたは何を嫌悪しているのですか？ — 何でもです。

— それなら、君には何でもかんでも目につくようになるよ。リンゴの中の虫も、インゲン豆の中の虫も、パンの中の髪の毛も……

— ゲロンダ、私、まさにそういうものばかり見つかってしまうんです！

— 主よ、栄光あれ。ほら、神様があなたがこの弱さを乗り越えられるよう助けてくださっているのがわかるでしょう？

— ゲロンダ、でも、そういうことはすべて、思いから始まっているんじゃないですか？ 例えば、ある姉妹が皿の中に髪の毛を見つけたとします。それなら、それを捨ててしまえば、それで終わりでしょう。

— いや、とんでもない、決して捨ててはいけません！ だって、その髪の毛は彼女への祝福として与えられたのですから！ 必ず私に渡させてください。私がそれをアトス山へ持っていきます——祝福として！ … ある時、シナイ山で、ある修道士と一緒にどこかへ歩いて行った時のことを覚えている。道中、私は彼に桃を二つあげた。見ると、彼は食べようとしない。彼はまず桃を洗いたがったが、ポケットに入れるのを恐れていた——ポケットの中にいる細菌が、桃に移ってしまうのを防ぐためだ。そうして、道中ずっとその桃を手にしたままだった。彼の兄弟は彼についてこう語っていた。「私には8人の子供と妻がいるが、その全員の洗濯するのに使う石鹼の量より、彼一人だけで手を洗うのに使う石鹼の方が多いんだ！」そして、彼に何が起きたか見てほしい。あのシナイ山では、各修道士にベドウィンが一人ずつ割り当てられ、手伝いや食事の運搬などを担当していた。その潔癖な修道士に割り当てられたベドウィンは、誰よりも汚かった。煙突掃除屋のように真っ黒だった！ 彼の服も、彼自身も、ひどい悪臭を放っていた。あの汚い男をきれいにするには、一週間も桶に浸けておかなければならなかっただろう！ そして、あいつの手なんて……！ 聞かないほうがいい。ヘラで泥を塊ごと削り取れるほどだった。そのだらしない男は、食事の入った器を掴むと、自分の「担当」の修道士のもとへ急いでいった。その際、彼の汚れた両手の親指は、必ずスープや粥の中に突っ込まれていた。「出て行け、出て行け！ …」——僧侶は、彼が戸口に現れるやいなやそう叫んだ。結局、彼はシナイに2週間も留まらずに逃げ出してしまった。

一方、私が以前住んでいた共同生活を行う修道院には、俗世では巡回警察官として働いていた修道士がいた。彼は教養があったため、教会での朗読者という役目を任されていた。彼は修道院でかなりの年月を過ごしたが、それにもかかわらず、周囲のすべてを軽蔑していた。ドアノブには触れることさえせず、足でドアを開けていた。門を上げる必要があるときは、肘でそれを操作し、その後さらに袖をアルコールで拭いていた。教会の扉さえも、足で開けていたのだ。彼が年老いた頃、神の御許しにより、彼の足は腐り始め、蛆が湧き出した——特に、彼が教会の扉を開けるのに使っていた方の足に。私が修道院の病院で奉仕の務め——衛生士の手伝い——をしていた時、彼はちょうど足を包帯で巻いた状態で初めてそこを訪れた。衛生士は私に彼の足の包帯を解くよう命じ、自身は包帯を取りに去った。ああ、包帯を剥がした時、私は何を見たことか！ 足全体が虫でうようよしていたのだ！「海へ行って、足を洗い、虫を洗い流してきなさい。それから戻ってきて、包帯を巻き直してあげるから。」彼は一体どこまで追い詰められてしまったのか！ なんと恐ろしい罰が彼を襲ったことか！ 私はただただ愕然とした。「原因が分かったか？」と衛生士が私に尋ねた。「分からないわけがない！——と私は答えた。「原因は、彼が足で教会の扉を開けているからだ。」

「ゲロンダ、あのような状態にあっても、彼は足で扉を開け続けていたのですか？」

— ええ、足で！ しかも修道生活の中で年をとってしまったのに！

— 彼は結局、何も理解できなかったのですか？

— 分かりません。私はその後、その修道院を離れて、コニツァのストミオン修道院へ移りました。彼がどのような最期を遂げたのか、誰が知るでしょう？ それなのに、同じ修道院の若い修道士たちは、年配の修道士たちの皿に残った食べ物を、まるで祝福であるかのように食べ尽くしていました。彼らは年長者たちの後に残された「余り物」を拾い集めていた。他の修道士たちは〔敬虔さから〕ドアノブに口づけをしていた。なぜなら、そこには長老たちの手が触れていたからだ。ところが、あの男はイコンに額をつける際、口ひげでほんの少し触れるだけで、その後、アルコールを含ませたコットンで丹念に拭き取っていたのだ！

— ゲロンダ、人が聖なるものにそのような態度をとることは、不敬ではないでしょうか？

— 最初は単に嫌悪感から始まるのですが、その後さらにエスカレートしていきます。この修道士のように、以前イコンに口づけした人が何か病気だったのではないかと恐れて、イコンに口づけしなくなってしまうほどにまで至ったのです！

— つまり、嫌悪感を抱かないためには、そういったことに注意を払わないほうがいいということですか？

— 人々は、気づかずにあらゆる病原菌を口にしているものです。しかし、病気や何かを恐れる人が十字を切れば、キリストが助けてくださいます。アトス山にある私のカリヴァには、どれほど多くの病人が訪れているかご存知ですか？ そこで、ある素朴な人々は十字を切ってから、共有のジョッキを手に取り、そこから水を飲みます。一方で、他の人はそれに触れることさえ恐れているのです。数日前、ある機関で非常に高い地位にある男性が私のところへやってきました。その不幸な人は細菌に対してあまりにも強い恐怖を抱いており、絶えずアルコールで手を拭くせいで、その手はチョークのように白くなっていました。彼は自分の車さえもアルコールで拭いているのです。私はその可哀想な人を気の毒に思いました。想像してみてください。あれほど高い地位にありながら、あのような振る舞いをするなんて。私は箱からルクマをひと切れ取り出して彼に差し出したが、私が自分の手でルクマに触れたという理由で断られてしまった。しかし、もし彼に「自分で箱からルクマを取ってください」と提案したとしても、誰かが洗っていない手で箱にルクマを詰めたかもしれないと考え、やはり断っただろう。さて、それなら私がそのルクマを手に取り、身をかがめて彼の靴を拭いてから、それを食べてやる。彼に対してこのようなことを何度も繰り返さなければならなかった——そしてようやく、大変な苦労の末、私は彼をその弱さから少しばかり解放することができた。そう、今日だって、病気への恐怖を抱えている若い女性がここを訪ねてきた。私が入っている部屋に入ってきた彼女は、細菌に感染するのを恐れて、私からの祝福を受け取ろうとしなかった。私は彼女を助けたいと思い、多くの有益な助言をしたのだが、それでも彼女は、帰るときにまた私からの祝福を受け取ろうとしなかった。「あなたの手にはキスしません」と彼女は説明しました。「細菌に感染するのが怖いからです。」これには何と言えばいいのでしょうか？ こうして人々は自ら自分の人生を暗く（耐え難いもの）にしてしまうのです。

自らの想像に病む人々

最も恐ろしい病気とは、自分が何か病気だと考えるその思い込みを、本人が信じてしまった時のことだ。その思い込みは人を不安で締め付け、動揺させ、食欲や睡眠を奪い、薬を飲ませ、ついには健康な人が実際に病気になってしまう。本当に何か病気で治療を受けている人なら、私は理解できる。しかし、最初は健康だったのに、自分を病気だと決めつけて、何の理由もないのに実際に病気になってしまう——そんなことは私には理解できない。例えば、こんなことがある。人は肉体的にも精神的にも力を持っているのに、それにもかかわらず、自分が不健康だという考えを信じてしまったために、何もできなくなってしまうのだ。その結果、その人は肉体的にも精神的にも衰えていく。そして、その人は嘘をついているわけではない[——それは事実なのだ]。何らかの病気にかかっていると思い込むことで、その人はパニックに陥り、精神的に打ちのめされ、やがては何もできなくなってしまう。そうして、何の正当な理由もなく、自らを無力な状態に追い込んでしまうのだ。

時々、私のカリヴァに、精神的に深く打ちひしがれた人々がやってくる。「頭の中で『自分はエイズかもしれない』という声が聞こえる」と彼らは言い、それを信じ込んでいる。「もしかして、君の人生でこんなことやあんなことがあったんじゃない？」と私は尋ねる。「いいえ、そんなことは一度もありません」と彼らは答えます。「それなら」と私は言います。「あなたは無駄に心配しているだけです。その考えを払拭するために、検査を受けてきてください。」「でももし」と彼らは怯えた様子で答えます。「検査の結果、やっぱりエイズだと判明したらどうするんですか？」こうして彼らは私の言うことを聞かず、苦しんでいる。一方、素直に検査を受けに行く人たちは、自分にはエイズなど全くないことを確信する。そして見てほしい。彼らの表情が変わり、生きる喜びが戻ってくるのだ。一方、最初のグループの人たちは、動揺のあまり寝込んでしまい、食事さえ摂らなくなってしまうこともある。まあ、仮にあなたが本当にエイズだったとしても。しかし、神にとって解決できない問題などありません。もしあなたがより霊的な生活を送り、懺悔し、聖体拝領を行い、真のクリスチャンになれば、主があなたを助けてくださいます。

—ゲロンダ、なぜ人は自分が病気だと考え始めるのでしょうか？

—人は自ら、その考えを少しずつ心の中で育てていくのです。こうした疑念には、しばしば実際に些細で取るに足らないきっかけが存在することがあります。そのきっかけを利用して、その考えが人に何か別のことを吹き込み、些細なことを大げさに膨らませてしまうのです。私がストミオン修道院に住んでいた頃、コニンに、自分が結核にかかっていると思い込んでいる既婚の男性がいました。彼は妻さえも近くに寄せようとしませんでした。「近づくな、さもないと感染してしまう」と彼は妻に言っていた。哀れな妻は、長い棒の先に食事の入ったかごを吊るし、遠くから彼に差し出していた。その可哀想な女性はすっかり衰弱し、やつれてしまった。哀れな子供たちは、遠くから「結核」の父親を見つめていたが、実際には彼に結核など微塵もなかった。実は、彼は日光を浴びず、常に鍵のかかった部屋で毛布にくるまって過ごしていたのだ。そのため、彼は顔色が黄色くなり、自分が結核にかかっていると思い込んでしまったのである。さて、[この話をすべて聞いた後]、私は彼の家を訪ねた。私を見ると、「病人」はうめくように言った。「近づかないでくれ、修道士よ。お前まで感染してしまうから……お前の修道院には人が来るだろう……ほら、結核にすっかり蝕まれてしまったんだ……」——「おい、おバカさん、誰が君に結核だなんて言ったんだ？」——と私は尋ねた。すると、

彼の妻が私に御馳走——クルミのジャム——を持ってきてくれた。「さあ、」と私は言った。「口を開けてごらん。これから私の言うことを聞くんだ。」さて、彼は口を開けた。彼は私が何をしようとしているのか知らなかったのだ。そこで私は小皿から甘いクルミを一つ取り、彼の口の中に入れ、何度か転がしてから取り出し、自分の口に入れて食べた。「いや、いや！」と「結核患者」は叫んだ。「そんなことするな！ 感染しちゃうぞ！」——「そこで何に感染するっていうんだ！ 君には何も病気がないじゃないか！ もし君が本当に結核だったとしても、私がそんなことをするなんて、正気じゃないだろう？ さあ、起き上がって、外へ出よう！」——と私は彼に答え、彼の妻の方を向いて言った。「これらの葉や毛布は全部捨ててしまえ……」私は彼を助け起こし、外へ出た。3年間の「監禁」の後、彼は驚きながら外の世界を眺めていた。そして、徐々に仕事にも通うようになった。これこそが、考えを育んだときに生まれる力というものだ！

従順さによって、すべては乗り越えられる

— ゲロンダ、根拠もなく自分が何か病気だと疑っている人を、どうすれば助けられますか？

— そのような人が助けを得るためには、霊的指導者を持ち、その人を信頼し、従わなければなりません。その人は霊的指導者に自分の思いを開き、指導者はこう助言するでしょう。「これにはこだわらないで、むしろそちらに注意を向けて…」もしその人が霊的指導者を信頼せず、その言葉に従わなければ、その思いは消えることはありません。人々が助けを求めてくるのに、自分では指一本動かそうとしない、という状況がどんなものか、わかりますか？ 例えば、放蕩な生活を送り、心の不安定さに苦しんでいる若者が、タバコの煙で赤くなった目をしながら私のカリヴァを訪れ、助けてほしいと頼んでくるのです。それだけでなく、彼にはある種の偽りの敬虔ささえある。彼は、私の庵の教会のイコノスタスから聖像を祝福として与えてほしいと頼んでくるが、その一方で、タバコをくわえたまま私の庵に入ってくるのだ。「兄弟よ」と私は彼に言った。「そのタバコで、お前の目は狂犬のように真っ赤になっているじゃないか。私のケリヤでは、老人たちでさえ喫煙を許していない。ここにある煙は、お香から出るものだけだ。」しかし、彼は頑として譲らず——それきりだった。助けを求めてくるくせに、自分の考えを曲げようとはしない。「なぜ、——と彼は尋ねる——僕を癒やしてくれないんだ？」彼は健康になりたいが、それは魔法のような方法——[苦勞せずに]、何の努力もせずに——で実現したいのだ。「お前——と私は彼に言った——は奇跡を受ける資格がない。だって、お前には何の病気もないのだから。ただ自分の思い込みを信じているだけだ。」もしこの若者が従順であったなら、助けを得られただろう。私は、助言に耳を傾ける者は急速に前進し、すべてが順調に進むことに気づいた。そのような人自身も、その家族も、安らぎを見出すのだ。

ある時、ある司祭が修道院を訪れ、そこで賛美歌の合唱に参加するよう頼まれた。彼はそれを断った。「なぜ、歌わないのですか？」と尋ねられると、彼はこう答えた。「詩篇にこう書かれているからです。『彼らの喉には神への賛美があり、彼らの手には両刃の剣がある』と。』²⁴ 彼は、歌うことは悪いことだと主張した。なぜなら、自分の「声を『高く上げる』」ことで、「両刃の剣」を恐れていたからだ！「愛しい我が子よ」と修道士たちは彼に言った。「我が宝よ、それは君が思っているようなことではない。」しかし、彼は頑として聞き入れようとしなかった。さて、そんな人とどうやって共

²⁴ 詩編149:6。

通の理解を見出せばよいのか？ 彼にどうすればよいのか？ たとえ彼の「解釈」が正しかったとしても、もしその上で他人の過ちに従順を示していれば、彼は恵みを受け取っていたはずだ。そして、謙虚になったことに対して与えられる、少なからぬ恵みを。

自分の考えを信じ、他人の言うことを聞かないがゆえに、このように何年も苦しんでいる人はどれほど多いことか！ あなたが彼らに何を言おうと、何をしようと、彼らはすべてを完全に逆さまに解釈してしまう。そして、悪は、人が一度自分の考えを信じただけで終わるものではない。悪は増幅し、膨れ上がっていくのだ。人は自分の中で「自分の考えへの信頼」をひたすら育み続け、それが精神錯乱に至ることもある。例えば、ある人が家を建てているとしよう。「一体どうやって建てているんだ？」と人々は彼に言う。『だって、それは崩れ落ちて、君を瓦礫の下に埋めてしまうだろう！』もし彼が建設の初期段階でその助言に従えば、不適切に建てられたものは簡単に壊して、新しいものを建て直すことができる。しかし、すでに完成した建物——彼に、それを破壊する気概などあるだろうか？「それは君を押しつぶすだろう」と人々は彼に言う。彼自身も、その建物が長くは持たないこと、危険を認識している。しかし、建設にどれほどの資金と労力を費やしたかという考えが、彼を躊躇させる。こうして、彼は自分の手で築いたものを壊す決心がつかず、結局、瓦礫の下敷きになってしまう。

— そんな人には助けられるのでしょうか？

— 本人が望めば可能です。しかし、何かが間違っていると指摘しても、本人が自分を正当化するだけなら、どうやって助けることができるのでしょうか？例えば、ある若者が糖尿病を患っていて、それが自分にどれほど深刻な影響を及ぼすかを知らず、すべてを冗談だと思っているとします。「糖尿病は」と医師は彼に言う。「深刻な病気であり、食事療法を守らなければならない。」もしその若者が医師の言うことを聞けば、病気は深刻な後遺症を残さずに治るだろう。しかし、彼がこう言うなら、どうやって相互理解に至ることができるだろうか。「糖尿病なんて、そんなに大したことあるの？ 甘いものを食べるよ。だって、甘いものを食べると体が熱くなるし、体が熱くなれば、毛布なしで眠れるし、雪の上を裸足で歩けるんだから。」相手が自分の主張を曲げようとしない場合、どうすれば相互理解に至ることができるのでしょうか？

— ゲロンダ、もし若者が自分の考えを信じているとしたら、それは自然なことですか？

— 若者が自分の考えを信じているなら、その人には多くの利己心があるということです。

— では、彼はどうすればそれを理解できるのでしょうか？

— 例えば、子供の頃のいくつかの出来事を思い返せば、当時自分にどれほどの利己心があったかが分かるでしょう。ある時、私は二人の少年を観察する機会がありました。一人が発泡スチロールで詰めた枕を手に取り、軽々と持ち上げました。もう一人の少年もそれを持ち上げようと近づいたが、まるでそのクッションがセメントの入った袋であるかのように、とても重そうに振る舞った。この2人目の少年には利己心があります。しかし、彼がもう少し成長すれば、その行動が利己心から生じたものであると理解するでしょう。彼はそれを罪として告白し、神の恵みが彼に降り注ぎ、その情欲から解放され、助けを受けることになるでしょう。そうでなければどうでしょうか——神は不公正な方ではないのですから。

— ゲロンダ、仮に私に何らかの経験があるとしましょう。その経験に基づいて、自分が置かれている状況がどのような展開を見せるかをおおよそ見通せる場合、そこにも自己確信があるのでしょうか？

— 自分で結論を出してはなりません。主が使徒ペトロを御自身のもとに招かれたとき、ペトロは水の上を歩いて主のもとへ向かいました。しかし、溺れるかもしれないという考えが使徒の心に浮かんだ途端、彼は溺れ始めました。²⁵ そしてキリストはこれを許されました。「溺れると言うなら、溺れなさい。」

謙虚な人を見てごらん。たとえ奇跡を起こしたとしても、彼は自分の考えを信じていない。ヨルダンには、奇跡を起こすとても質素な司祭が一人いた。彼は病気の人や動物のために祈りを捧げると、彼らは元気になるのだった。何らかの病に苦しむイスラム教徒でさえ彼の元を訪れ、彼は彼らを癒やした。聖体礼儀の奉仕に先立ち、この司祭は温かい飲み物と乾パンを少し口にし、その後は一日中何も口にしなかった。彼が聖体礼儀の前に食事をしているという噂が総主教の耳に入り、総主教は彼を総主教庁に呼び出した。なぜ呼ばれたのか分からなかった司祭は総主教庁を訪れ、他の来客たちと共に応接室で呼び出しを待っていた。外は猛暑で、窓はシャッターで閉ざされており、待合室の小さな隙間から一筋の日差しが差し込んでいた。その光を引き伸ばされたロープだと勘違いした、汗だくの司祭は、法衣を脱いでその光に掛けかけた。彼と一緒に待合室にいた人々は、その光景に愕然とした。その中の一人が総主教のもとへ行き、「ミサの前に朝食をとる神父が、自分の法衣を太陽の光に掛けたんです！」と告げた。総主教は彼を自分の執務室に呼び寄せ、尋ね始めた。「さて、生活はどうだ？ ミサは頻繁に執り行っているか？ その準備はどうしているのか？」——「ええ、そうですね」と司祭は答えた。「まず早課を読み、それから礼拝を行い、その後お茶を淹れて、軽いものを何か食べてから、礼拝に向かいます。」——「なぜ礼拝の前に食べるのか？」と総主教は尋ねた。「もし——」と司祭は答えた。「聖体礼儀の前に少し軽食をとれば、聖体拝領の後、²⁶キリストが上の方におられることになる。しかし、もし聖体礼儀の後に食べれば、キリストは下の方におられることになる。」どうやら、彼は善意から聖体礼儀の前に朝食をとっていたようだ！... 「いいえ」と総主教は彼に言った。「それは間違っています。まず聖なる供え物をいただき、その後に少し食べるのです。」司祭は総主教に頭を下げ、[謙虚に]その言葉を謙虚に受け入れた。

私が言いたいのは、この司祭は奇跡を起こすほど高い境地に達していたにもかかわらず、言われたことを素直に受け入れたということです。彼には独断独裁的なところはありませんでした。もし彼が自分の考えを信じていたなら、こう言ったかもしれません。「私——人や動物を癒やし、奇跡を起こす者——に指図するなんて、彼は一体何者だ！ いや、私の考えの方が正しい。だって、もし彼の言うことを聞いたら、朝食がキリストの上に落ちてしまうだろう！」

私は、従順であることが人間にとって大いに役立つことを理解した。たとえ知的能力に優れていない人であっても、従順を示すことで、哲学者や賢者となるのだ。人が賢かろうと愚かであろうと、健康であろうと病気であろうと（精神的にも肉体的にも）、もしその人が思いに苦しめられながらも従順であれば、[思いの苦しみから]解放される。従順とは、解放そのものである。

²⁵ マタイによる福音書14章28～31節を参照。

²⁶ 信徒への聖体拝領、典礼の閉会、およびアンティドールの配給の後、司祭または助祭は、聖杯に残った聖なる供え物を自ら摂取する。

最大の利己主義者とは、自分の思い通りに生き、誰にも相談しない者である。そのような人は自らを破滅させる。もし人にわがまま、自信過剰、自己満足があるならば、たとえ頭が良くて、七尺の知恵があろうとも、絶えず苦しむことになる。その人は迷い、自ら手足を縛りつけ、[次から次へと]新たな問題を抱えることになる。自分の道を見つけるためには、ある霊的指導者に心を開き、謙虚に助けを求めなければならない。しかし、中には霊的指導者の代わりに精神科医を訪ねる人もいる。もしその精神科医が信仰者であれば、その人を霊的指導者の元へ導いてくれるだろう。一方、信仰を持たない精神科医は、単に薬を処方するだけに留まってしまう。しかし、薬だけでは問題は解決しない。人々が自分に起きていることに正しく向き合い、状態が改善して苦しみがなくなるためには、霊的な助けも必要なのである。

第4章。 思いとの戦いについて

— ゲロンダ、イタリアとの戦争中、ギリシャ軍はまず敵の要塞を破壊してから、攻勢に出ようとしたと読みました。

— 悪魔もまた、同じ方法で行動する。つまり、まず飛行機から要塞を爆撃して破壊し、その後、砲兵の支援を受けて攻勢に出る敵と同様に、悪魔もまず人を邪念で攻撃し、その後、その人に襲いかかるのだ。悪魔は、まず人の思いを変質させなければ、その人に襲いかかることはない。なぜなら、善い思いこそが人を守り、善い思いこそが人の「塹壕」だからである。

「左」からの思いは異物であり、人はそれを拒絶するよう努めなければならない。私たち一人ひとりに、この戦いに立ち向かう力がある。弱くて戦う力がない、などと弁解する者はいないはずだ。何しろ「善き思い」とは、「弱い」人間が手が震えて持ち上げることでできない、つるはしや大ハンマーのようなものではないのだから。すべてを良い面から見ること、何ら難しいことなどない。例えば、なぜ他人の気まぐれに気を配らなければならないのか？ 実際、その人はわがままからそうしているのではなく、あえて謙虚になるためにそうしているのかもしれないのだから。

— ゲロンダ、私はいつも「左」へ「左」へと「向かって」しまい、それが気になっています。闘ってはいますが、「右へ方向転換」することができません。

— もしあなたが不純な考えを見分け、それを追い払おうと悩み、戦っているのであれば、それはすでに一定の進歩です。もし成功したいのなら、悪霊が「左」の思いであなを攻撃し、自分の方へ引き寄せようとしたとき、力強く舵を反対方向に切り、敵には一切注意を払わないようにしなさい。自分の中で、目立たず内面の修養に励んでいる年下の姉妹や年上の姉妹たちに対しても、善き思いを抱くよう努めなさい。何しろ、タンガラシュカはあなたの霊的成長を遅らせるために、あなたの思いをかき乱すのだ。もしあなたが自分の思いに囚われなければ、巨大な霊的歩みで前進していくだろう。すべての霊的生活は思いに基づいています。霊的生活における成功は、その思いにかかっているのです。

— ゲロンダ、いわゆる「左」からの思いとの戦いにおいて、何が助けとなるのでしょうか？

— 自己への自省と絶え間ない祈り。自己を自省することで、あなたは慎重に行動し、善き思いを行動に取り入れることができる。例えば、ある杯を見たとき、聖杯や最後

の晩餐、キリストについて考えるのだ。もし自分自身に注意を払わなければ、あなたの心は様々な非霊的なもの、さらには明らかに罪深い事柄へと向かってしまうかもしれない。だから、こうした雑多な思考のゴミを（自分の中に）溜め込まないように努めなさい。さもないと、後でそれらを追い払うために多大な努力を強いられることになる。イエスの祈りを唱え、内面を落ち着かせておきなさい。もし心がどこかへさまよってしまったら、再びそれを元に戻しなさい。これを絶えず行いなさい。心がさまよったのを許してはならない。なぜなら、たとえ心が直接的に罪深い事柄の領域ではなく、中立的な事柄の間をさまよっているだけであっても、それらの中立的な事柄は心を散漫にさせ、心を「中和」してしまい、心は無駄に消耗してしまうからだ。さらに、散漫さから生まれる思いは、[露骨に]邪悪な思いよりも狡猾です。なぜなら、前者の思いには気づかないため、自分の中から追い出せないからです。

— ゲロンダ、ある思いが私にこう囁きます。「あなたはもう何年も修道院にいるのに、少しも進歩していない……」

— さて、その思いがあなたにまだ何を言うのか、聞いてみようか。私の理解する限り、あなたはタンガラシュカの言葉を聞きすぎているようだ。なんと[簡単に]彼はあなたを手のひらで転がしていることか！ なぜタンガラシュカを信じるのか？ なぜ心の平静を失うのか？ 穏やかでいなさい。あなたは無駄に動揺し、理由もなく自分を苦しめている。タンガラシュカは、まるで手品師のように、すべてを複雑に見せかけている。彼は、あなたの時間を奪い、祈りや従順への集中をそらすために、暗く悲観的な考えであなたを惑わせているのだ。もし彼が、ほんの少しでもあなたの頭を混乱させ、彼と戦う気力を奪うことに成功すれば、それだけで彼は攻勢に転じ、新たな足場を築くのに十分である。黙想に励むときは、次の規則を守るように努めなさい。教会歌を歌うこと、神への賛美、心の中で、あるいは声に出してイエスの祈りを唱えること。これらは、悪魔のささやきを避けるために不可欠な手段です。つまり、自ら（思考の）話題を変える必要があるのです。悪魔が話題を変えるのなら、なぜ私たちにはそれができないのでしょうか？ 以前にもお話ししましたが、訪問者と話している最中、まさに私がその人に重要で有益なことを伝えようとしたその瞬間に、誰かがやって来て私の話を遮ったり、あるいは何らかの騒音などで私たちの注意がそらされたりすることがあります——それは、私が話を止めざるを得なくなるようにするためです。しかし、悪者がそのような計画を練り、実行するのなら、なぜ私たちも彼に対して同じようにできないのでしょうか？ 賢く振る舞い、あの悪者を愚か者のままにしておきましょう。

— ゲロンダ、私は悲しみや落胆に苛まれています……本当に苦しんでいます。

— ほら、まだ拷問に連れて行かれてもいないのに、もう苦しんでいるじゃないか！ あなたには自信がありすぎる。「左」からの思いがすでにあなたの状態になってしまい、そのせいで苦しんでいるのだ。君には「右」の思いが必要だ。自分の[霊的な]営みの狡猾な仕組みを、善なるものになるよう再構築しなければならない。人間にとって最も有益な事業とは、「善き思い」の工場を開くことだ。そうすれば、たとえ悪いことや醜いことであっても、君の心はそれを良いもの、善きものへと変容させるだろう。例えば、人の内に魂を見出し、その人に天使を見出すとき、あなた自身も天使のように天へと舞い上がるのです。その場合、あなたの人生は祝祭であり、歓喜そのものです。しかし、もし人の内に肉欲的なものばかりを見てしまうなら、あなた自身も地獄の苦しみへと堕ちてしまうのです。

— ゲロンダ、時々私は善意を持って行動するのですが、すぐに「左」からの思いが浮かび、私の[善意の努力]をすべて台無しにしてしまいます。もしかすると、私は心からではなく、表面的に善意を持って行動しているのでしょうか？

— 重要なのは、あなたが心からそうすることです。もし「左」からの思いが浮かんだら、こう言いなさい。「これは外からの思いだ。追い払わなければならない。この話題は終わり、議論の余地はない。」

— ゲロンダ、私が苦勞して「左」からの考えを追い払っても、それがまた戻ってくることがあります。「この話題は終わり」なのに、なぜそんなことが起こるのでしょうか？

— ええ、話題自体は終わったのですが、タンガラシュカ（悪魔）は終わらないのです[働き続ける]。悪魔はしつこく、決して死にません。ある年老いた修道士がこう話していました。「犬なら一、二回叩けば逃げ去ります。しかし悪魔は逃げず、自分の主張を貫き通します。なんてしつこいのでしょうか！ 彼を追い出すために、私は自分のケリヤ（修道室）の守護聖人のイコンの前にろうそくを灯すと、悪霊たちが私に言うんだ。『お前が俺たちのためにろうそくを灯したのか？』と。そこで私は『おい、このろくでなしたちめ、一体なぜお前たちのために？ お前たちのためじゃなくて、聖人のためだ！』——「ああ、——と彼らは答える——確かにそうだけど、結局のところ、お前をそうさせたのは俺たちなんだぞ！」

——ゲロンダ、もし何か不愉快なことが起こったとき、「神よ、なぜ私にもこんなことが起こったのか」と不平を言い始める人は、助けを得られるのでしょうか？

— そんな人が何の益を得られるというのか！ すべての基本は、人がすべてを善意をもって解釈することにある。そうして初めて、その人は益を得られるのだ。ある人々には[彼らの霊的な自動車に]良いエンジンが搭載されている。彼らには霊的な生活を送るための多くの前提条件があるが、彼らのハンドルは必要な方向とは逆を向いている。ハンドルを善意の方向へ切り直せば、そのような人々は正しい進路を取り、確かな足取りで前進していくだろう。

善き思いの育成

— ゲロンダ、善き思いは自然に湧いてくるものですか、それとも育む必要があるのでしょうか？

— 育む必要があります。自分自身に注意を払い、自制しなければなりません。敵があなたに悪しき、邪悪な思いをもたらしたときは、それらを追い払い、善良で善意に満ちた思いに置き換えるよう努めなければなりません。このように努力することで、あなたは自身の[内なる]心構えを育み、それを善良なものにしていくのです。そうして、あなたの善良な心構えを見て、神はあなたに憐れみを示し、助けてくださいます。そうすれば、悪しき思いはもはやあなたの心の中に居場所を見出せなくなります。それらは去っていき、あなたにとって善良な思いを抱くことが、もはやごく自然なことになるでしょう。あなたは善を行う習慣を身につけ、あなたの心には善が入り込み、そうしてあなたは自分の内なる聖殿に[天の]客、すなわちキリストをお迎えすることになる。しかし、これは一朝一夕で成し遂げられることではない。魂が勝利の冠を戴くためには、時間と絶え間ない闘いが必要です。それが実現した時、闘いは完全に終わりを告げます。なぜなら、[情欲との]闘いとは、内なる不調和の狂乱した現れであり、それを私たちの敵は利用しているからです。

— つまり、ゲロンダ、善意を持つ人々は、闘いを通じてこれを成し遂げたということですか？

— それは人による。ある人は、霊的な歩みを始めた当初から善意を持ち、前進し続ける。また、最初は善意を持っていたものの、後に警戒心を失い、「邪悪な」思いに流され始める人もいます。さらに、最初は「邪悪な」思いを持っていたものの、自分自身を省み、何度つまずくかを自覚することで、自分自身を信じられなくなり、やがて善意を持つようになる人もいます。ある人では、心の思いの半分が善であり、半分が悪である場合もある。別の人では善の思いが優勢であり、またある人では逆に悪の思いが優勢である場合もある。例えば、ある人が僧侶になろうとしているとする。世俗で暮らしていた環境や状況に応じて、その人には様々な善の思いや悪の思いが存在する。その人の悪意ある思いは、10%から20%、あるいは80%にも及ぶかもしれない。内面の修行を始め、自分自身を観察しながら、そのような人は悪意ある思いを追い払い、善意ある思いを育もうと努める。努力を続けるうちに、やがて悪意ある思いが一切なくなり、善意ある思いだけを持つようになる。邪悪な思いが消えるまでに要する時間は、その人が俗世でどれほど長くそれらを抱えていたかによって異なります。さらにしばらく経つと、善い思いも少しずつ消え去り、人はある種の空虚な状態に達する。この段階では、人には善い思いも悪い思いもなく、それゆえに魂に何らかの不安さえもたらされる。そのような状態にある人は、こう自問し始める。「これは何だろう？ 今、何が起きているのか？ 最初は邪悪な思いがあったが、それらは消え去り、善い思いに取って代わられた。しかし今、私には全く思いがない——悪い思いも、良い思いもない。」そして、この空虚感の後、心は神の恵みに満たされ、神の啓示が訪れるのです。

— ゲロンダ、その「神の恵みに満たされる」とは、どのような状態なのでしょう？

— 星さえ見たことのない人には、太陽がどのようなものを言葉で説明することは不可能です。少なくとも星を見たことのある人なら、太陽についておおよそのイメージを与えることはできます。

— ゲロンダ、あなたが言及されたあの「空虚」の状態に到達するには、何が助けとなるのでしょうか？

— それには、霊的な読書、絶え間ない祈り、沈黙、そして愛に満ちた修行——禁欲が役立ちます。邪悪な思いに対して熱心に闘う人は、邪悪な思いがほとんどなかった人よりも、より良い境地に達することができます。つまり、霊的生活の初期に邪悪な思いが九十、善い思いが十あったような人でも、善い思いが九十、邪悪な思いが十だった人よりも、より良い境地に達することができるのです。

心と魂の浄化

— ゲロンダ、心と精神の浄化はどのようにして訪れるのでしょうか？

— すでに申し上げた通り、心と精神を清めるためには、人はタンガラシュカがもたらす悪意ある考えを受け入れず、また自分自身も悪意を持って考えてはならないのです。常に善い思いを抱くよう努め、[他人の欠点]に安易に惑わされることなく、他人の過ちを寛容と愛をもって見つめる必要があります。善い思いが増えれば、人の魂は清められ、敬虔な態度で振る舞い、心は安らぎを得ます。そのような人の人生は楽園となる。逆に、すべてを疑いの目で見てしまう人は、その人生が地獄の苦しみへと変わってしまう。その人自身が自分の人生を地獄にしているのだ。

清められるためには、努力が必要です。自分の状態が邪悪であることを認めることはできますが、それだけでは不十分です。もし私たちが邪悪な考えを受け入れず、自分自身が邪悪に考えず、人から言われたことや目にするものすべてに対して善意の考えを働かせれば、心と魂は清められるでしょう。もちろん、誘惑者は時折、私たちに悪意ある「電報」を送り続けるでしょう。たとえ私たち自身の「邪悪な」思いを取り除いたとしても、悪魔の誘惑の矢は私たちに向かって飛び続けてくるでしょう。しかし、私たちの心が清ければ、悪魔の誘惑はそこにまとわりつくことはないでしょう。

—ゲロンダ、祈りは心を清めるのに役立ちますか？

— 祈りだけでは不十分です。祈りの最中に何キロもの乳香を燃やし尽くす人もいるかもしれませんが、もしその心が他者に対する悪意に満ちているなら、何の益もありません。心から「悪意ある」「電報」が心に降りてきて、人を獣に変えてしまうのです。神は、私たちが「清い心」を持つことを望んでおられます。²⁷ そして、他者に対する邪悪な考えを私たちの心に通さないとき、私たちの心は清いのです。

— ゲロンダ、まず人間自身が善意の思いを行動に移し、その後に神が助けてくださるのでしょうか？

— よく聞いてください。人が自ら善き思いを抱き始めた場合にのみ、その人は神の助けを受ける資格があるのです。人は善き思いによって、自分の邪悪な心を清めるのです。なぜなら、「心から出る」²⁸ すべての悪であり、「心にあふれるものこそ、その口から語られる」からです。²⁹

しかし、善意を仕事に込める人がそれによって自分の心を清めるだけでなく、神はその行いに報いてくださる。

疑いの思いの後に疑問符を付けなさい

—ゲロンダ、疑いの思いを取り除くにはどうすればよいのでしょうか？

— [本当に] すべてが、君が想像している通りなのだろうか？ 普段から物事の悪い面ばかり見てしまうなら、自分の考えの後に必ず疑問符を付けなさい。さらに、判断を誤らないように、他者への善意も考えに含めるようにしなさい。もし自分の考えの後に、疑問符を一つではなく二つ付けるようになれば、さらに良いでしょう。三つなら、申し分ありません。そうすることで、あなたは心が安らぎ、恩恵を受けるでしょう。そして、あなた自身だけでなく、他の人々にも恩恵をもたらすことになります。逆に、「左」からの考えを受け入れてしまうと、イライラしたり、動揺したり、落ち込んだりして、自分自身に精神的な害を与えてしまいます。身の回りで起こるすべてのことに善意を持って接すれば、しばらくして、善意を働かせて見た通り、実際にはその通りだったと気づくでしょう。「左」[悪意のある]な考えがどのような害をもたらすか理解してもらうために、ある出来事を話しましょう。ある時、一人の修道士が私のカリヴァを訪ねてきて、こう言った。「ハラランピイ長老³⁰ は魔術師だ——[私自身が、]彼が呪術を働いているのを見た。」「何てことを言うんだ、恥知らずな目をした者め！」——私は彼を叱りつけた。「そんなことを口にするなんて、恥を知らないのか！」「そうだ！ そうだ！

²⁷ 詩編50篇12節。

²⁸ マタイによる福音書15章19節を参照。

²⁹ 参照：ルカによる福音書6章45節。

³⁰ ハラランピイ長老（1914-1998年）——カプサレで修業に励んだアトス山の修道士であり、パイシイ長老の同時代人。——訳者注

」と彼は主張した。「ある夜、月明かりの下で、長老が『ムムメ……ムムメ……』と呻きながら、大きな藁で編んだ瓶から茂みに何か液体を注いでいるのを、私自身が目撃したんだ！」さて、私は暇な日を選んで、ハラランピエ長老のカリヴァへ向かった。「さて、」と私は尋ねた。「ハラランピエ神父、お元気ですか？ 生活はいかがですか？ どんなことをなさっているのですか？ ある人が、あなたが大きな瓶から茂みに何かを注いでいるのを見かけたそうです。しかも『ムムメ…！』と唸っていたとか。——「あその茂みの中に」と長老は指さして、「ユリが数本生えているので、水をやっていたんです。『喜びなさい、花嫁よ、花嫁とならない花嫁よ！』と歌いながら、³¹ 一輪の花に少し水を注ぎ、それからまた歌いました：『喜びなさい、花嫁よ、花嫁とならない花嫁よ！』——と歌いながら、別の花に少し水を注ぎ……それから瓶に水を満たし、花のもとに戻ってまた水をやって……」。ほら、こんな具合だ！ ところが、ある人がこの様子を見て、その老人を魔術師だと勘違いしてしまったのだ！……

世の中には、なんと善良な考えを持つ人々もいることか！ 一方で、他の者たち——哀れな者たちは——自然界に存在しないばかりか、悪魔でさえ思いつかないような事柄に、これほどまでに苦しめられているのだ！ ある時、ひどい干ばつの後に雨が降ったとき、私は神に対してこれほどまでの感謝の念を抱き、カリヴァに座りながら、絶え間なくこう叫び続けた。「神よ、あなたに何百万、何十億回も感謝します！」その間、窓の下に一人の世俗人が立っていて、それを聞いていたとは知らなかった。その後、私と会った際、彼はこう打ち明けた。「神父様、実は私は惑わされてしまいました。あの『数百万』や『数十億』という言葉聞いて、『なるほど！ このパイシイ神父という人はなかなかの変わり者だな』と思ってしまったのです。」彼にどう説明すればよかったというのか？ 私が言っていたのは、雨に対する神への[数多くの]感謝のことだったのに、その男は私がお金を数えていると思ったのです。もし彼の立場に別の誰かがいたとしたら、夜中に私を襲って強盗を働こうとしたかもしれません！ 私はひどい目に遭ったでしょうが、結局、彼は何も見つけることはできなかったでしょう。

また別の時には、病気の子どもの父親が私のところへやって来た。私は彼を私のカリヴァにある小さな教会へ案内し、その悲しみに耳を傾けた。そして彼を助けたいと思い、こう言った。「あなたの子どもが健康になるためには、あなた自身も何かをしなければならぬ。でも、何をすればいい？ あなたは礼拝もせず、断食も守らず、施しをするお金もない……こうやって神様に祈ってみてはどうですか。『神様、私の子供のために捧げるにふさわしいものは何一つありませんが、せめてタバコをやめるよう努力します』と。」この言葉に、その不幸な父親は心を打たれ、私の助言に従うと約束した。私が彼をカリヴァから出し、鍵をいじっている間に、彼はポケットからライターとタバコを取り出し、教会の救世主のイコンの下に置いた。私はそれに気づかなかった。次の来訪者は、私に何かを伝えたいというある青年だった。話を終え、カリヴァから出る間もなく、彼はタバコを取り出して吸い始めた。「ここ、君、タバコは吸っちゃダメだよ」と私は彼に言った。「少し横へ下がってくれ」——「じゃあ、お前は教会でタバコを吸ってもいいの？」——と彼は返した。教会の中にタバコの箱とライターがあるのを見て、この若者は「この人はタバコを吸っているに違いない」という思い込みを「作り上げて」しまったのだ！ 私は彼を説得しようとはせず、その思い込みを抱いたまま立ち去

³¹ 至聖なる神の母へのアカフィストにある有名な言葉であり、彼女の神聖な受胎、降誕、および無原罪の処女性を称えるものである。

るのを許した。まあいい、たとえ私が実際にタバコを吸っていたとしても、まさか聖堂で吸うような真似をするだろうか？ ほら、これが「思い込み」というものだ。

— ゲロンダ、疑心、不信、そして猜疑心は、魂にどのような害を及ぼすのでしょうか？

— どのような疑い深さかによって、その種の害が生じます。そして、不信感や心配性さは、[霊的な]病や衰弱をもたらします。

— では、この弱さをどう癒やせばよいのでしょうか？

— 善き思いによってです。

— ゲロンダ、もし人が、あることで見当違いをしていたこと、つまり自分の疑いが裏付けられなかったことに気づいたとしたら、それは（自分の過ちに気づく上で）助けにはならないのでしょうか？

— 一度だけ外したのなら、まだ許せる。しかし、二度外せば、もう身が傷つくことになる。注意が必要だ。なぜなら、たとえ事態が私たちの想像とはほんの千分の一ほど違っていたとしても、私たちは重大な罪を犯してしまうからだ。私が共同生活の修道院に住んでいた頃、年老いた修道士、ドロフェイ神父が四旬節の間にズッキーニを焼いていたのを覚えています。ある兄弟が、その長老がフライパンにズッキーニを載せるのを見て、急いで私にその感想を伝えました。「さあ、見に行ってみなよ！」と彼は言いました。「ドロフェイ神父が魚を焼いている！ ほら、こんなに大きなバラブールカだ！」「まさか、」と私は答えた。「ドロフェイ神父が四旬節にバラブールカを焼くなんてありえない！」「あるよ、あるんだ！」「自分の目で見ただ！ ほら、こんな風に泳いでいるバラブールカが！」「自分の目で見ただ！ ほら、こんな大きなバラブールカだ！」一方、ドロフェイ長老は15歳の少年として聖山にやって来て、修道者たちにとってはまるで実の母のような存在だった。修道士たちの誰かが体調を崩しているを見ると、彼はこう言った。「さあ、坊や、こっちへおいで。ある秘密を教えてあげたいんだ」——そして、病人の体をタヒニ³²に砕いたクルミを混ぜたもの、あるいは何か他のもので滋養を補ってあげた。年老いた修道士たちに対しても、彼は同じように世話を焼いた。さて、どうでしょう。私がドロフェイ神父のところへ行くと、彼が修道院の病院のためにズッキーニを焼いているのを見かけたのです！

「ゲロンダ、もし誰かに対する疑いの思いが実際に事実だと判明したら、どうすればよいのでしょうか？」

「もしそのような思いが一度だけ正しかったとしても、だからといって、そのような思いが常に正しいということになるのでしょうか？ それに、どうしてわかるのですか？ もしかすると、神は、あなたが疑っていた人が謙遜の試練に合格するために、その思いが事実として裏付けられるように許されたのかもしれないよ。」

もちろん、私たち自身も注意深くなければなりません。人々に誤った結論に至るような口実を与えてはなりません。例えば、ある人があなたに対して「悪意のある」[不親切な]思いを抱いた場合、その原因は、その人自身の悪意である可能性もあれば、あなた自身が相手にあなたを悪く思う口実を与えてしまった可能性もあります。しかし、あなたが配慮を持って振る舞っているにもかかわらず、相手があなたを悪く思うのであれば、神を賛美し、その人のために祈りましょう。

³² ゴマから作られた粥状の塊。——訳者注

思いとの対話

— ゲロンダ、高慢な思いが浮かぶと、私は苦しみます。

— その思いを抱え込んでいるのですか？

— はい。

— なぜそれを抱え込んでいるのですか？ その思いに扉を閉ざしなさい。そのような思いを心に留めておくと、あなたは傷ついてしまうのです。 思いは泥棒のようにあなたのところにやってくる——あなたはそれに扉を開け、家の中に招き入れ、会話を交わし、そして結局、あなたを襲うのだ。泥棒と会話などできるものか？ 泥棒とは会話を避けるだけでなく、入ってこないように扉をしっかりと閉めておくものだ。 さて、たとえその考えと会話を交わさなかったとしても、なぜわざわざ中に入らせるのか？ 例を挙げよう。仮に、あなたが修道院長になれるかもしれないという考えが浮かんだとしよう。あなたが実際にそのような考えを持っていると言っているわけではないが、これはあくまで例だ。 さて、そんな考えが浮かんだとしよう。いいだろう。 、それが浮かんだその瞬間に、こう自分に言い聞かせなさい。「ああ！ 素晴らしい！ 修道院長になりたいのか？ それなら、まずは自分自身のために修道院長になりなさい。」そう言えば、あなたはすぐに「悪魔との」対話を断ち切ることができる。 まさか、悪魔と無駄話を続けるつもりですか？ 考えてみてください。悪魔がキリストを誘惑しに来たとき、キリストは彼にこう言われました。「私について来い、サタンよ。」³³ キリストが一度悪魔に「さあ、ここから立ち去れ……」と言われた以上、私たちに一体何の理由があって、彼と会話を続ける必要があるというのでしょうか？

— ゲロンダ、もし私が「邪な」思いと対話して、それがどこから来ているのかを知ろうとするなら、それは悪いことですか？

— 悪いのは、あなたが思っているように、その思いと対話しているのではなく、悪魔と対話しているということだ。彼と対話していると、その時は楽しい時間を過ごせるが、その後で苦しむことになる。そのような「邪な」思いとは、一切話してはいけない。 [敵の]手榴弾を空中で受け止め、[すぐに]敵に向かって[投げ返して]——敵を葬り去るのだ。 爆発するまで2、3分かかる手榴弾もある。「左派的な」考えは、そのような手榴弾に似ている。もしすぐに追い払えば、あなたに害を及ぼすことはない。しかし、時には警戒心を緩め、イエスの祈りを怠ってしまうと、身を守ることができなくなる。悪魔は外から、あなたに「電報」を送ってきます。この「電報」を受け取ると、あなたはそれを読み返し、そこに書かれていることを信じ、そしてアーカイブに保管してしまいます。まさにこれらの「ファイル」こそが、審判の日にタンガラシュカによって開示され、あなたを告発するために使われるのです。

— ゲロンダ、では、「左派的な」思いが頭をよぎったとき、それがいつ「墮落」となるのでしょうか？

— ある思いが浮かんだとき、あなたがそれを即座に追い払う。これは墮落ではない。しかし、それが浮かんだとき、あなたがそれに対話してしまう。これこそが墮落である。 [あるいは、こんな場合もある：] それが浮かんで来て、あなたはそれを少しの間受け入れ、その後追い払う。これは墮落の半分だ。なぜなら、この場合でもあなたは傷ついているからだ。悪魔があなたの心を穢したのだから。つまり、後者の場合、あなたはまるで現れた悪魔にこう言っているようなものだ。「こんにちは、お元気ですか？ 元気

³³ ルカ 4:8。

？ 座って、何かご馳走するよ。えっ?!　じゃあ、君は悪魔か？　それなら、さっさと出て行け！」しかし、それが悪魔だと分かっていたのなら、なぜ中に入れる必要があったのか？　そして今、あなたは彼に「ご馳走」をしてしまったのだから、彼はまたやってくるだろう。

思いによる共犯

— ゲロンダ、なぜ修道院では様々な悪い思いが私を襲うのに、世俗にいた時にはそんなことはなかったのでしょうか？　もしかして、私が自らそれを許しているのでしょうか？

— そんなことないよ、おバカさん！　来たり去ったりするままにしておけばいい。修道院の上空を飛び、静寂を乱す飛行機が、君に許可を求めているか？　これらの思いについても、同じことなんだ。絶望しないで。これらの思いは悪魔があなたに吹き込んでいるのだ。それらは渡り鳥のようなもので、高空を舞っているときはとても美しく見え、あなたは口を開けてそれに見とれてしまう。しかし、その鳥たちが降りてきて、あなたの家に巣を作り、そこで雛を育てると、その雛たちはあなたの家全体を台無しにしようだろう。

— では、なぜ、ゲロンダ、私にそもそもそのような考えが浮かぶのでしょうか？

— それは悪魔の仕業だ。だが、あなた自身の中にも、ある種の濁った沈殿物がある。まだ浄化は起こっていないのだ。しかし、あなたがそれらの考えを受け入れていない以上、責任を負うことはない。犬たちは放っておきなさい——好きに吠えさせておけばいい。そして、彼らに石をたくさん投げつけてはいけない。だって、あなたが石を投げ続けている限り、彼らは吠え続けるのだから。そしてやがて、たくさんの石を使って「悪霊たちは」自分たちの「修道院」や家を建ててしまうだろう——建材が足りる限りは……。そうになってしまえば、彼らが建てたものを壊すのは、あなたにとっても容易なことではなくなるだろう。

— ゲロンダ、では、いつそのような考えが浮かんでくるのでしょうか？

— あなたがそれらを、まるでキャラメルのように舐め尽くす時です。外側は砂糖の飴で覆われていても、内側は毒のような苦味に満ちているそれらの思いの味に、甘んじないように努めてください。さもないと、やがてあなたは絶望に陥ることになるでしょう。人の心の中に[単に]悪い考えが通り過ぎることは、心配する理由にはならない。悪しき考えは、天使や完全さを極めた人々だけに宿るわけではないからだ。心配すべきなのは、人が自分の心の一部を固め、整え、そして「狼の飛行機」³⁴ [敵のウルフ空軍]——つまり悪魔たち——を受け入れ始める時です。もしそのようなことが突然起こったなら、直ちに懺悔を行い、ウルフの着陸帯を耕し、実のなる木を植える必要があります。そうしてこそ、心は再び楽園の庭へと変わるのです。

³⁴ 言葉遊び：長老が造語した「ヴォルコレット」（λυκόφτερο）は、ギリシャ語で「ヘリコプター」（ελικόπτερο）と発音が似ている。——訳者注

第2部。 正義と不正義について

「ああ、もしすべての人々が私に不公正な扱いをしてくれたら！ 私は心からこう言います。最も甘美な霊的な喜びは、不公正の中でこそ味わわれたのです」

第1章。 不公正を受け入れる方法について

不公正に対して正しい心構えを持つ必要がある

— ゲロンダ、私が不当な扱いを受けると、心が苛立ちを覚えます。

— 心が硬くならないようにするためには、自分に不当な扱いをする相手がどれほど悪いのか、あるいはその過ちがどれほど大きいのかなどとは決して考えず、むしろ自分自身がどれほど悪いのかについてよく考えてみなさい。考えてみてください。人々が口論するとき、それぞれが「自分こそが正しい」と主張します。だからこそ、人々は絶えず意見の対立に陥っているのです。例えば、二人が警察へ行き、互いを指さしながら、口々に「あいつが俺を殴った！」と主張する。しかし、どちらの者も、自分が相手にどれほどひどい仕打ちをしたかについては一言も言わない！ それどころか、それぞれが相手を訴えて裁判に持ち込んでいるのだ。

もし私たちが、キリストがすべての不義の中で最も大きな不義を自ら引き受けられたことを深く考えれば、私たちは不義を喜んで受け入れるでしょう。神であられるキリストは、深い愛ゆえにこの地上に降りてこられ、九ヶ月の間、聖母マリアの胎内に身を委ねられました。その後、30年間、彼は無名の生活を送り、15歳から30歳まではユダヤ人のために大工として働きました。ところで、当時の道具がどのようなものだったかご存知ですか？ あの頃は、木製の歯がついた木製ののこぎりが使われていました。彼には様々な板が渡され、「これを造れ、あれを造れ……」と言われました。しかし、それらの板を鉋で削るのは、どれほど大変だったのでしょうか？ 当時、鉋の代わりに使われていたあの不格好な鉄の道具で、一度削ってみてください！ それがどれほど過酷な労働だったか、お分かりになりますか？ そしてその後、3年間にわたる苦難が続きました。宣教のために、主は裸足で[彼らの土地]の隅々まで歩き回られました。主は病人を癒やし、鉗子で盲人の目を開かれましたが、人々は皆、主からしるしを求め続けました。主は悪霊に取りつかれた者から悪霊を追い出されましたが、恩知らずな人々は、主ご自身を「悪霊に取りつかれた者」と呼びました。御方については数多くの預言や予言があり、御方は数多くの奇跡を行われたが、それにもかかわらず、結局、御方は嘲笑にさらされ、十字架の死に処された。

それゆえ、不義に耐える者たちこそ、神に最も愛される子らなのです。なぜなら、不義に耐えることで、こうした人々は、不義を受けたキリストをその心の中に抱いているからです。流刑地や牢獄にあっても、彼らはまるで楽園にいるかのように喜びます。なぜなら、キリストがおられるところこそが楽園だからです。

— ゲロンダ、人の背負う重荷が、その人にとって耐え難いものになることはあるのでしょうか？

— 神は、その重荷が私たちの力を超えることを許されません。他人の肩に耐え難い重荷を背負わせるのです。しばしば、慈愛に満ちた神は、善良な人々が天の報いを受け取れるよう、悪しき者たちの手に委ねられることを許されるのです。

— ゲロンダ、不満と恩知らずの間には何か関係があるのでしょうか？

— はい。次のようなケースもあります。他者が（その人に注意を促すことで）その人のためを思って行動しているのに、本人はそれを理解できず、不当に傷つけられたと感じて不満を口にするのです。そのような人が自分自身を省みなければ、たとえ自分が何らかの過ちを犯し、もっと注意深くあるよう求められたときでさえ、自分に不当な扱いを受けていると考える可能性は大いにあります。そうして、彼は恥知らずな状態にまで至ってしまうかもしれません。例えば、ある尼僧がオリーブの木に散布をする際、農薬溶液を多めに混ぜてしまい、木々の葉を焦がしてしまった。注意を受けた彼女は、自分の過ちを自覚して「お許しください、お祈りください」と言う代わりに、不当に傷つけられたと感じて泣き出してしまう。「彼らは私に不当な扱いをしている」と彼女は思う。「もし木の葉をイナゴが食い荒らしていたら、彼らは一言も言わなかっただろうに！なのに、私が台無しにしてしまった今、彼らはこれほど大騒ぎしている！ああ、私のキリストよ、あなただけが私を理解してくださる。」そして、泣きじゃくるのだ！そのような修道女は、自分が受けた「不当な扱い」に対する報いを思い描き、そのことに喜びさえ感じ、キのキリストに感謝することさえあるかもしれない！このような状態は、大きな迷いである。

不義を受け入れることによる喜び

「ゲロンダ、私が何か過ちを犯して叱られた時に感じるその喜びは、清いものなののでしょうか？」

— ほら、不平を言わずに、喜びをもって、「神よ、あなたに栄光あれ。これこそ私に必要なことなのです！」という言葉と共に、自分の過ちに対する叱責を受け入れるなら、喜びの半分を得ることになるだろう。しかし、もしあなたが不当に、つまり自分には何の過ちもないのに叱られ、その叱責を善意を持って受け入れるなら、あなたの喜びは完全なものとなるだろう。私は、あなたが自ら不公正を招くよう促しているわけではない。その場合、タンガラシュカがあなたを傲慢へと陥らせてしまうからだ。しかし、不公正が自然に訪れた時にはそれを受け入れ、それを喜ぶよう呼びかけているのだ。

不公正に対する態度には四つの段階がある。例えば、誰かがあなたを不当に殴ったとしよう。もしあなたが第一段階にあれば、その相手に反撃するだろう。第二段階にあれば、心の中で非常に強い動揺を感じるが、自分を抑えて何も言わない。第三の段階では、もはや戸惑うことはなく、第四の段階では大きな喜びを感じ、魂の底から大いに喜ぶ。もし人が何かについて不当に非難された場合、その非難が根拠のないものであることを証明することで、その人は名誉を回復し、満足感を得る。この場合、その人は世俗的な喜びを味わう。しかし、不公正に対して霊的な態度で臨み、善意を持ち、自分の無実を証明することにはこだわらないとき、その人は霊的な喜びを味わう。つまり、この場合、その人は自分の中に神聖な慰めを持ち、神を賛美することがその人の在り方となるのだ。もし人が不当に傷つけられ、その際に「よくやった」や「ごめんなさい」と言ってもらうことを求めて弁明もしない場合、その人の魂はどのような喜びを感じるか、

ご存知でしょうか？そして、不当な扱いを受けながらも耐え忍んでいる今、そのような魂が味わっている喜びは、もし弁明に成功していた場合に味わったであろう喜びよりも大きいのです。このような境地に達した人々は、この世のな人生において自分に喜びを与えてくれたこと、そして永遠の命において喜びを保証してくれたことに対して、自分を傷つけた相手に感謝したいと願うのです。霊的な世界と世俗的な世界とは、なんと異なることでしょうか！

霊的な生活には、別の尺度がある。もしあなたが、醜いものや役に立たないものを自分のために手元に残しておけば、気分は素晴らしい。それを他人に譲れば、気分は良くない。もしあなたが[不平を言わずに]不公正を受け入れ、隣人を擁護するなら、あなたは心の中で、幾度も不当な扱いを受けたキリストを受け入れていることになる。そうすれば、存在する[霊的な]法則に従って、キリストはあなたの心の「賃貸契約期間を延長」³⁵ してくださる。キリストはそこに留まり、あなたを平安と喜びで満たしてくださる。ああ、私の愛する皆さん、ぜひこの喜びを自ら体験してみてください！世俗的な喜びではなく、この霊的な喜びを味わうことを学びましょう。それを学べば、あなたたちにとって毎日が復活祭となるでしょう。

不義を受け入れるときに感じる喜びほど大きな喜びはありません。ああ、もしすべての人々が私に不義を働いたなら！私は心からこう言います。最も甘美な霊的な喜びは、不義の中で私が味わったものです。誰かが私を「惑わされた者」と呼ぶとき、私がどれほど喜ぶか、ご存知ですか？「神よ、あなたに栄光あれ」と私は言います。「この言葉のおかげで、私は報いを受けるからです。しかし、もし私を『聖人』と呼んだら、私は借りを負うことになるでしょう。」この世に、[あなたが受け入れる]不義ほど甘美なものは他にありません！

ある朝、誰かが私の小部屋の門のそばで鉄のノック棒で叩いた。まだ訪問客を受け入れるには早すぎた。私は窓の外を見ると、目が輝いている若者の姿が見えた。神の恵みが彼をこのように「際立たせている」ということは、彼が自らの体験を通じて何か霊的なものを経験したに違いないと悟った。そこで、私には急ぎの用事があったものの、それを後回しにして、彼に門を開け、小部屋へ招き入れ、水を差し出した。そして、彼の中に何か霊的なものが秘められているのを見て、慎重に彼の人生について尋ね始めた。「君はどんな仕事をしているんだい？」と私は尋ねた。「仕事なんて、神父様、何があるのでしょうか」と彼は答えた。「私は刑務所で育ったのです。今は二十六歳ですが、人生の大部分をそこで過ごしてきました。」「一体何をやって、刑務所に入ることになったのですか？」と私が尋ねると、彼は私に心を開いてくれた。「子供の頃から」と彼は語り始めた。「不幸な人々を見るのが、とても辛かったんです。苦しんだり困窮したりしている人たちの名前を、私は一人ひとり知っていました——私たちの教区だけでなく、他の教区の人たちもです。私たちの教区の司祭や教区長たちは、ひたすらお金を集め続け、それを様々な建物やホールの建設、教会の整備などに費やしていたが、貧しく困窮している家族たちは、誰からも全く顧みられていなかった。これらすべての建設に本当に必要性があったかどうかを判断するつもりはないが、ただ、私が多くの恵まれない人々を目にしてきたという事実を述べているだけだ。そこで私は、献金として集められたお金をこっそり持ち出すようになった。すべてを盗んだわけではなく、必要な分だけを取ったのだ。盗んだお金で食料品や様々な[必要な]物を買って、それを貧しい

³⁵ 賃貸借法に基づき、住居および事業用物件の賃借人は、前回の契約期間が満了した後も、契約を更新する権利を有する。

人々の家のドアの下に置いていった。その直後、盗みの容疑で罪のない人が捕まるのを防ぐため、私は警察へ行き、「私が教会からお金を盗んで使い果たしました」と告げた。それ以上は何も言わなかった。私は殴られ、「チンピラ」や「泥棒」と呼ばれたが、黙っていた。その後、刑務所に収監された。そんな生活が数年続いた。私たちの町には3万人の住民がいて、皆が私のことを知っており、「チンピラ」や「泥棒」以外の呼び名で呼ぶことはなかった。しかし、私は黙り込み、喜びを感じていた。ある時、私は丸3年間も刑務所に収監されていた。時には、盗みの容疑だけで——私に罪はないのに——投獄され、真犯人が逮捕されると、私は釈放された。しかし、私が犯していない犯罪の犯人が見つからない場合、私はその泥棒に科された刑期をすべて刑務所で過ごした。だから、父さん、私は人生の大部分を刑務所で過ごしたと言ったのだ。」

彼の話に注意深く聞き終えると、私は言った。「ねえ、坊や。君が話してくれたことは、一見すると立派に見えるかもしれないが、実際には何一つ良いことなどない。もう二度とそんなことはするな。君に一つアドバイスをしよう。私の助言に従ってくれるか？」——「従います、神父さん」と彼は答えた。「故郷の町を離れるんだ」と私は言った。「誰も君のことを知らない場所、例えばあの町へ行きなさい。そこで君が善良な人々と出会えるよう、私が手配しておく。働き始め、力の及ぶ限り恵まれない人々を助け、最後のパンの切れ端さえも彼らと分かち合え。なぜなら、それには[これまで君がしてきたことよりも]はるかに大きな価値があるからだ。しかし、たとえ人が貧しい者に与えるものが何一つなく、そのことで心が痛むとしても、その人は最高位の施しを与えているのだ。その人は、自分の心の血をもって施しをしているのだ。なぜなら、人が持っているものから施しをすれば、その際に喜びも感じるが、与えるものが何もない場合は、心に痛みを感じるからだ。」私の話を聞き終えた青年は、私の助言に従うことを約束し、喜びに満ちた心持ちで立ち去った。

7ヶ月が過ぎた。ある日、コリダル刑務所から手紙が届いた。³⁶ 封筒を開けて、次のように書かれていたのを読んだ。「父上、あなたがこれほど多くの助言をくださり、約束もしてくださったにもかかわらず、私がまた刑務所から手紙を書いていることに、きっと驚かれることでしょう。しかし、今回私が服役しているのは、以前すでに服役を終えた刑期であることを知っておいてください。何らかの司法上の誤りが生じたのです。人間の中に正義が存在しないことを神に感謝します。もし正義が存在していたなら、それは霊的な人々に対する不公正となり、彼らは天の報いを失うことになっていただでしょう。」最後の言葉を読んで、私はこの若者に感銘を受けた。彼はこれほど熱心に霊的な人生に取り組み、人生そのものの最も深い意味をこれほど深く悟っていたのだ。キリストのための盗人！彼の中にはキリストが宿っていた。彼は、自分が感じていた喜びを抑えきれなかった。彼は神聖な狂気、祝祭的な歓びを味わっていたのだ！

「ゲロンダ、この喜びは、人々が彼を恥辱にさらしたことから生じていたのでしょうか？」

——その喜びは、彼が不当な扱いを受けたことに由来するのです。彼は世俗的な人間でした——聖人の伝記も、教父たちの著作も読んでいませんでした。そして、不当に殴られ、投獄されたにもかかわらず、町の人々からチンピラや悪党、泥棒と見なされ、辱められ、恥をかかされたにもかかわらず、——これらすべてにもかかわらず、彼は言い訳をせず、すべてに対してこれほどまでに精神的な態度で臨んでいたのだ！若い男でありながら、自分の評判を回復することではなく、他人をどう助けるかを気にかけていた

³⁶ ギリシャの主要な刑務所の一つ。——訳者注

。大物で本物の泥棒たちは、しばしば一度も刑務所に入れられることがないのに、この不運な男は同じ窃盗の罪で二度も投獄された。そして、真犯人が見つかるまで、彼は何度無実の罪で投獄されたことか！しかし、彼が感じたあの喜びは、その町の住民全員を合わせても味わえなかった。彼らの喜びを三万回重ねても、彼の感じたたった一つの喜びには及ばないだろう。

だからこそ、私は「霊的な人には悲しみはない」と言うのだ。人の内に愛が増し加わり、その心が神の慈しみによって温められるとき、悲しみはもはやその人の中に居場所を見いだすことはできない。人々はそんな人に痛みや苦しみを味わわせるが、キリストへの彼の偉大な愛がそれらに打ち勝つのだ。

不公正を受け入れること——それは有益な行いである

— ゲロンダ、時々、ある姉妹が私に対して根拠のない中傷を投げかけることがありますが、私はそれを（あるべきように）耐えきれず、彼女に対して冷たくなってしまいます。

— ちょっと待ってください！教会は私たちに何を教えているのでしょうか？そのような場合、どう振る舞うべきなのでしょう？そして、あなた自身にとって、どのような場合に大きな益が得られるのでしょうか？さて、仮に、事態があなたの言う通り、つまりあなたに非がないとしましょう。では、もしあなたに不当な扱いを受けたとしても、あなたは益を得るのです。そして、自分を正当化しようとしてあなたに冤罪をかぶせたあの姉妹は、後になって良心の呵責を感じ、悔い改め、あなたに対してより大きな愛を持って接するようになるでしょう。このように、あなたが不当な扱いを受けたことから、一つの善だけでなく、すぐに二つか三つの善が生まれるのです。それによって、あなたには富を得る絶好の機会が与えられ、みすばらしいジプシー娘から気高いお嬢様へと生まれ変わるのです。神様があなたに富を得る機会を与え、その富を他の人々と分かち合うことを許してくださっているのに、なぜあなたはこれからもジプシーのような生活を送り続けたいのですか？

— でも、私の心は、姉に「私の振る舞いをどう解釈して、私に不当な非難を浴びせたのか」と尋ねるべきだと主張しているの……

— まあ、当然のことでしょう。あなたに何らかの〔霊的な〕蓄えがあるのを見て、あの女が我慢できるはずがありません。彼女はあなたに弁明を強要し、そうすることであなたからキリストを追い出そうとしているのです。

— ゲロンダ、それでも、せめてたまには私の過ちを許してもらいたいのです。

— 自分を正当化してほしいのか？よし、仮に正当化されたとしよう。それによって、あなたは霊的な利益を得るのか、それとも霊的な損失を被るのか？

— 損失を被ります。

— もし君が店を経営していたとしたら、利益を得たいか、それとも損失を被りたいか？

— 利益を得たいです。

— つまりね、もし私たちが物質的かつ虚しい事柄において損失を被りたくないのなら、霊的な面において損失を被らないよう、どれほど一層努力すべきかということだ！世俗の人々は物質的な利益を追い求め、それを逃さない——それなのに、霊的な人々が霊的な利益を軽んじてよいものだろうか？しかし、世俗の人々についてはまだましな方だ。彼らは金を浪費することで、単に自分の物質的な財産を浪費しているに過ぎない。

それに対し、私たちは、自分に対して不公正を許さない限り、自分の霊的な、天上の財産を無駄にしてしまうのだ。その財産のすべてを、私たちはここ——この地上——で浪費しているのだ。では、なぜ私たちは天上のものを地上のものと取り替えるのでしょうか？ さらに言えば、哀れな世俗の人々は霊的な無知の中にいるのに対し、私たちには「私たちの生活の」「霊的な」意味が明らかです。私たちは天上のものを得るために修道士になったはずなのに、ある目標に向かって進んでいるつもりが、実際には全く別の目標へと向かっていることになってしまいます。世俗の人々が傷つけられたり、殴られたり、あるいは単に不当に追放されたりすれば、それは彼らにとって非常に辛いことだ。しかし、私たち「修道士」は自らこれらすべてを求め、キリストへの愛のためにこれらすべてに耐えなければならない。私たちは、不名誉や軽蔑、侮辱を受け入れるよう努めなければならない——それらは私たちの魂に益をもたらすからである。家庭を持つ人は、世俗的な心配事があるため、自分を正当化しようとします。なぜなら、例えば評判を失ったり破産したりした場合、自分や不憫な子供たちがどう生きていくかを考えるからです。それゆえ、世俗の人々には罪を軽減する事情がありますが、私たちにはそのような事情はありません。

私たちが不当な扱いを受けたとき、その不当さを受け入れることは、本質的に恵みを受け入れることなのです。例えば、私が誹謗中傷され、不当に投獄されたとします。さて、どうでしょう？ 第一に、私は何の罪も犯していないので、良心は安らかです。そして第二に、天の報いが私を待っている。これ以上の恩恵があるだろうか？ 私は不平を言わず、神を賛美する。「神よ、私がこの罪を犯さなかったことに対し、どのように感謝すればよいのでしょうか？ もし私が本当にそれを犯していたなら、良心の呵責に耐えられなかったでしょうから。」このように考える者にとって、刑務所は天国となる。あるいは別の例を挙げよう。誰かが不当に私を殴ったとする。「主よ、あなたに栄光あれ！」と私は言う。——もしかすると、これで私の罪のいくつかを贖えるのかもしれない。だって、かつて私も隣人に手を上げたことがあるのだから。」あるいは、不当に罵倒されたとき、私はこう感謝する。「主よ、あなたに栄光あれ！ 私は、私のために侮辱や罵声を耐え忍ばれたあなたの愛ゆえに、これを受け入れます。」

天の宝庫への献金

— ゲロンダ、他の人たちが私に対して良い印象を持ってくれないことが、とても気になります。

— それを教えてくれて本当に良かったわ！ 今日から、他の人たちがあなたを良く思わないように祈ることにするわ。だって、他の人からの好意なんて、私の愛しい子よ、あなたにとって何の役にも立たないものだから。神は、私たちを顧みて、人々が私たちに不当な扱いをするのを許し、私たちを侮辱することを許される。それは、私たちがそれによって自らの罪の一部を贖うため、あるいは来世のためにある種の「霊的な」資本を蓄えるためなのだ。しかし、私には理解できません。あなたは一体どのような霊的な生活を望んでいるのですか？ あなたはまだ、自分の霊的な利益が何にあるのかを理解していません。あなたは自分のすべての「霊的な」資本を、すでにこの世で使い果たそうとしており、天国のために何も残そうとしていないのです。なぜあなたはすべてをその

ように解釈するのですか？どんな本を読んでいるのですか？『エヴェルゲティノス』³⁷を読んでいますか？そこに、あなたがどう振る舞うべきかが書かれていないのですか？福音書は読んでいますか？毎日読むように心がけてください。

— ゲロンダ、私は何か善行をしても、他の人から認められないと悲しくなっています。

— 聞いてくれ。一体、どんな称賛を求めているのか？キリストからのものか、それとも人々からのものか？キリストからの称賛以上に大きな益を、何かから得られるというのか？そして、人々があなたに注目することになんの益があるというのか？もし人々が今、あなたの善行を認めてくれたとしても、その後、永遠の命の中で、あなたはこう言われるだろう：「あなたの善行は受け入れられた……」³⁸ 他者が私たちの労苦を認めず、[人間的な]報いを与えてくれないことを、私たちは喜ぶべきです。なぜなら、神はこれらの[人間的には報われていない]労苦を顧み、それに対して永遠の報いを与えてくださるからです。神からの報いがある以上、たとえわずかなものであっても、神の貯金箱に何かしらの貢献をしようと努めましょう。自分に対する不公正は、大きな祝福として受け入れるべきです。なぜなら、その不公正によって、私たちの[霊的な銀行]口座に、天の祝福という形で一定の金額が振り込まれるからです。

— ゲロンダ、もし人が自分に対する不公正を「快く」受け入れたとしても、それが来たるべき審判のことを考えているからではなく、単に「そのほうが良い」と考えているだけの場合、その人は正しく振る舞っていると言えるのでしょうか？

— まあ、「そのほうが良い」という考えは、結局のところ、来るべき審判への思いへと導くのではないのでしょうか？ただ、「単に良い人」であるために、あるいはヨーロッパ人がそうしているからという理由で、そのような振る舞いをするには気をつけなければなりません。³⁹ あなたは神の像であり、あらゆる点で創造主に似るべきであるということを考えなければならない。もし人がまさにこの考えによって行動に駆り立てられるなら、その人は正しい方向へと進んでいる。そうでなければ、その人はヨーロッパ人のヒューマニズムに陥る危険にさらされることになる。⁴⁰

聖なる偽り

— ゲロンダ、聖山には何人の隠者がいますか？⁴¹

³⁷ 『エヴェルゲティノス』——11世紀頃に、コンスタンティノーブルの「エヴェルゲティス」修道院の創設者であり修道院長であったパウロによって編纂され、18世紀末に聖ニコディモス・スヴィャトゴルツによって初めて刊行された、聖父たちの禁欲的教えを体系的にまとめた集成。

³⁸ ルカ16:25。

³⁹ ヨーロッパ人について語る際、長老は西ヨーロッパの諸民族を軽んじているわけではなく、これらの国々に支配的な合理主義の精神から私たちを守りたいと願っているのだ。

⁴⁰ ヒューマニズムとは、自律的な——すなわち、神や教会から切り離された——人間を中心とする文化的運動であり、中世後の時代に西洋で発展を遂げたものである。

⁴¹ 1950年のある日、長老パイシイが初めて聖アトス山を訪れ、カヴソカリヴィアから聖アンナ修道院へと続く小道を探していたとき、彼は顔から光を放つ隠者に出会った。「見た目は70歳ほどで、その身なりから、彼は人々と一切のつながりを持たないことがうかがえた……あらゆる点から、私の目の前に聖人が立っていることが明らかだった。」長老パイシイが隠者にどこに住んでいるのか尋ねると、彼は「ここだ」と答え、聖山の頂上を指さした。その後、経験豊富な長老たちがパイシイ神父に対し、アフォン山の頂上には12人の隠者が人知れず暮らしていることを裏付けた。参照：長老パイシイ『聖山の長老たちと聖山の物語』。聖三位一体セルゲイ・ラヴラ、2001年。45-47頁。

— わかりません。七人だと言われています。⁴² ここ数年、修業のための静かで物音一つない場所を見つけるのは非常に難しくなりました。そのため、聖山にまだ個人生活を行う修道院が存在していた頃、⁴³ 一部の修道士たちは別の修業方法を見出していました。例えば、当初はどこかで修業に励んでいた彼らが、ある時点でこう言ったのです。「いや、ここはなんだか気に入らない。それなら、どこか独立した修道院で働いて、少しお金を貯めておこう。」周囲の人々は、それが本当のことだと信じていた。その修行者は独立した修道院に移り、そこで3～4ヶ月働き、その後、給料の大幅な引き上げを要求した。そして、その昇給を断られると、彼はこう言った。「いや、それじゃ働く価値がない。俺は去るよ。」彼は少量の乾パンを持って修道院を去り、どこかの洞窟に身を隠して修行に励んだ。一方、修道院に残った者たちには、彼がどこか別の場所で仕事を見つけたのではないかという印象が抱かれた。この修道院の住人たちに「あの、○○神父さんはここにいましたか？」と尋ねると、彼らはこう答えた。「ええ、いましたよ。でも、なんて気難しい人だったことでしょう！ 金を貯めるためにここに来たんです。給料の増額を要求してきたんです！ 考えてみれば、修道士が給料の増額を要求するなんて！ 一体どんな修道士なんだ？」と。こうして、その修行者は二重の恩恵を受けていた——自らの修行からも、彼らの非難からも。そして泥棒たちからもだ。というのも、泥棒たちは彼が金を持っていると聞きつけ、彼の洞窟に押し入り、彼を殴りつけたが、何も見つからなかったからだ。

「ゲロンダ、もしその修道女が身を隠しているのなら、私はどうやって彼女の美德に倣えばよいのでしょうか？」

— 彼女を、自分を隠さないほど愚かだと思っているのですか？ 聖人たちは、徳を身につけるためではなく、それを隠すために、より大きな苦行を成し遂げたのです。キリストのために、聖なる狂人たちは何をしたかご存知ですか？ まず彼らは、この世の偽善を避け、福音の真理の領域へと足を踏み入れました。しかし、それだけでは不十分だったため、彼らはさらに先へ進み——キリストの愛のために「聖なる偽善」へと向かったのです。その後、彼らは自分たちに何が行われようとも、自分たちのことがどう語られようとも、もはや気にかけなくなりました。しかし、そのためには大きな謙遜が必要です。考えてみてください。世俗的な人に不快なことを言えば、その人は腹を立てます。何かを褒めてあげなければ、その人は落ち込みます。それに対して、キリストのために狂人となった人々は、人々が自分たちに対して歪んだ考えを抱いていることをむしろ喜んでいたのでした。

かつて、自らの徳を隠し、他人が自分に対して抱く好意を損なおうとして、悪霊に取り憑かれたふりをする修道士たちがいた。フィロフェイエフスキー修道院（⁴⁴）がまだ単独生活制だった頃、私はそこで、かつてヴィグリーの荒野で修行に励んでいたある修道士に出会った。⁴⁵ その地の修道士たちが、彼の禁欲的な修行や霊的な成長に気づいていると悟ると、彼は自分の霊的指導者から祝福を受け、そこを去った。「もう、まったく！ ——」と彼は去り際に言った。「このカビの生えた乾パンにはもううんざりだ。」

⁴² 1988年11月に述べられた。

⁴³ 独立修道院（自給自足型）とは、共同生活型（キノヴィ）の対極にあるものである。イグメーンを置かず、エビトロプによって運営される修道院である。独立修道院の住人は、各自の修道生活に従い、共同の食事はなく、奉仕の務めを果たす対価として修道院から金銭的な報酬を受け取る。アフォン山に残っていた最後の独立修道院は、1992年に共同修道院へと改組された。

⁴⁴ 1956年から1958年にかけて

⁴⁵ ヴィグラ — アフォン半島南東部に位置する山岳地帯の荒野。

どこか自給自足の修道院へ行こう。そこなら肉も食べられるし、人間らしく暮らせる！ここに留まるなんて、俺が馬鹿か？」こうして彼はフィロフェイの修道院に移り、悪霊に取り憑かれたふりをした。彼の霊的兄弟たち、⁴⁶ は、彼が「悪霊に取り憑かれた」と聞き、互いにこう語り合った。「かわいそうなやつだ——悪霊に取り憑かれてしまった。まあ、仕方がない。これくらいは予想されていたことだ。ここから逃げ出したのは、カビの生えた乾パンにうんざりしたからだ！ 私費で運営される修道院に移ったのは、肉が食べなくなっただけからだ！」では、「憑かれた者」はどうなったのか？ こうだ。彼はフィロフェイで二十五年以上を過ごし、その間ずっと自分で食事を用意することも、寝ることもなかった。眠気と戦いながら、彼は一晩中、ランタンを持って修道院の廊下を歩き回っていた。極度の疲労に襲われると、この修行者は立ち止まり、しばらく壁にもたれかかったが、眠気が彼を襲い始めるとすぐに飛び起き、ささやき声でイエスの祈りを唱え始めた。「主イエス・キリストよ……」その後、彼は心の中で——声に出さずに——祈りを続けたが、時折、祈りが思わず口をついて出てしまい、他の人にも聞こえてしまうことがあった。他の修道士たちと出会うと、その修行者はこう頼んだ。「祈ってくれ、祈ってくれ。私から悪霊が追い出されるように。」ある時、15歳の若い修道士が彼について私にこう言った。「あいつなんて、あの悪霊に取り憑かれた奴なんて、どうでもいいよ。」「そんなことを言うな」と私は彼に注意した。「この人はかなりの徳を積んでおり、悪霊に取り憑かれているふりをしているだけなのだ。」その後、その若い修道士は修行者に畏敬の念を抱くようになった。そして、その修行者が亡くなったとき、彼は修道院の兄弟たちの名簿が書かれた紙片を手握りしめたまま発見された。各修道士の名前の横に、[善良な偽者]はある種のあだ名を書き込んでいた。彼は、死後も、他の人々が自分に対して抱くかもしれない——たとえごくわずかなものであっても——善意の思いさえも台無しにするために、そうしたのだ。その後、彼の遺体は芳香を放つようになった。ご覧の通り、彼は身を隠そうとしたが、神の恵みが彼を他の人々に暴露してしまったのだ。

それゆえ、私たちは、その人が内に何を隠しているかを判別できない限り、目に見えるものだけに基づいてその人について結論を下すべきではない。

第2章。

自己正当化が

が私たちから神の恵みを遠ざけることについて

自己正当化は霊的な成長を妨げる

——ゲロンダ、聖書には自己正当化は見当たらないと言われるとき、それはどういう意味なのでしょう？

— 自己正当化には、ある意味で、正当化の余地がないということです。

— ゲロンダ、私が自分を正当化するとき、後になってから、修道士にとって自己正当化はふさわしくないのだと気づくのです。

⁴⁶ 霊的兄弟——同じ長老から修道誓願を受けた修道士たち。

— 単にふさわしくないというだけでなく、自己正当化は霊的生活とは何の関係もありません。自分を正当化しているとき、私は偽りの状態にあるということを理解しなければなりません。私は神とのつながりを断ち切り、神の恵みを自ら奪っているのです。なぜなら、神の恵みは、偽りの状態にある人には訪れないからです。人は、弁解の余地のないことを弁解するその瞬間から、自らを神から切り離し、隔離してしまうのです。人と神との間の空間は、いわば「霊的な」ゴムのような絶縁体で満たされてしまいます。ゴムを通して電流が流れるのでしょうか？ いいえ、流れません。ゴムは電流を通さないからです。同様に、神の恵みにとっても、自己正当化ほど強力な絶縁材はありません。自分を正当化することは、まるで神から自分を隔てる壁を築くようなものであり、それによって神とのあらゆるつながりを断ち切ってしまうのです。

— ゲロンダ、あなたはよくこうおっしゃいますね。「少なくとも、霊的な合格点以下にならないよう努めましょう」と。この霊的な合格点とは、どのようなものなのでしょうか？

— 霊的な合格点とは、自分の過ちを謙虚に認めること、そして少なくとも、自分が何に過ちを犯したかを指摘され、その罪を自覚した時には、自己正当化を拒むことです。そして、自分が過ちを犯していないことで非難された時に、自分を正当化しないこと——それだけでも、優以上の評価です。自分を正当化する人は、成功しないだけでなく、内なる平安も得られません。神は私たちが犯した過ちのために私たちを罰されることはありませんが、私たち自身もその過ちを正当化したり、それを当然のことだと考えたりすべきではありません。

— もし何らかの不注意について指摘されたものの、自分の過失がどれほど大きいかわ理解できない場合、次回もっと注意深くなるために、その点について尋ねるべきでしょうか？ それとも、やはり黙っているほうがよいのでしょうか？

— もし、5パーセントの過失があるのに、25パーセントも自分を責めるなら、それって得をしたことになるんじゃない？ 損をしないように、余裕を持って自分を責めなさい。これこそが、あなたがなすべき霊的な行いなのです。自分の過ちを探し出し、その現場で自分自身を捕まえること。そうでなければ、あなたは自分の「自我」を手放すことを恐れ、それを正当化してしまうが、内なる平安は得られない。

— ゲロンダ、習慣的に自分を正当化していた人が、後に自分の過ちに気づき、自らを責めるようになった場合、その人には何か益があるのでしょうか？

— 少なくとも、そのような人には経験が蓄積されていく。もしその人がその経験を正しく活用すれば、それはその人のためになるだろう。そしてもし神が「さて、彼は自分の過ちを悟り、悔い改めたのだから、何か与えてやろう」とおっしゃるなら、その人はある種の「補助金」を受け取るだろうが、それは別の「霊的な」基金、すなわち悔い改めの基金からのものとなる。

人が自分を正当化する原因は、その人の利己心にあるのです

— ゲロンダ、もし私が他人の行いに正当な理由を見出せないとしたら、それは私の心が冷酷だということですか？

— 他人の行動を正当化できず、自分の行動だけを正当化しているのですか？ それなら、間もなくキリストでさえ、あなたを正当化できなくなるでしょう。人が悪意を持って振る舞えば、その心は一瞬にして石のように硬くなってしまいます。しかし、愛を持って振る舞えば、心は一瞬にしてとても優しいものになるのです。母のような心を身に

つけなさい！ 母親はどのように振る舞うかといえば、彼女は（自分の子供たちの）すべてを許し、時には（彼らのいたずらを）気づかないふりをすることもある。

自分自身に対して正しく精神的な修行を行う者は、誰に対しても罪を軽減する事情を見つけ、すべての人を擁護する一方で、たとえ自分が正しい場合でも、決して自分のために言い訳を探そうとはしない。彼は、自分に与えられた好機を十分に活用できていないと考えて、常に自分を有罪だと認めるのである。例えば、そのような人が誰かが盗んでいるのを見かけたとき、もし自分が正しい道から外れていたら、もっと多く盗んでいたに違いないと考える。「神が私を助けてくださった」と、そのような人は言う。「しかし、私は神の賜物を自分の手柄にしてしまった。これは、私の隣人が犯す窃盗よりも大きな窃盗だ。違いはただ一つ、彼の窃盗は目立つが、私のそれは隠されたままであるということだけだ」。このように、その人は自分自身を厳しく非難し、隣人に対しては寛容に判断する。あるいは、隣人に大小を問わず何らかの欠点を見出したとき、そのような人は、善意の意図を織り交ぜて、その人を擁護する。自分にも、他者には目につく多くの欠点があるのだと考えるのだ。何しろ、よく探してみれば、自分の中にはこれほど多くの欠点が見つかるのだから！ そうなれば、隣人を擁護することは非常に容易なことになるでしょう。私たちは一体どれほど多くの過ちを犯してきたことか！ 「主よ、私の若き日の罪と、私の無知を、思い出させないでください。」⁴⁷

— ゲロンダ、時々、助けを求められたとき、私は喜んで手助けをするのですが、慌てているうちに少しばかり失敗してしまい、その後、指摘されると、言い訳をしようとしてしまうのです……

— 善行をしようとして、少しばかり失敗してしまったのなら、その過ちに対する指摘を[謙虚に]受け入れるべきです。そうしてこそ、十分な報いを得ることができるのです。悪魔は非常に狡猾だ。彼は自分の手口を比類なく熟知している。それならば——彼はその長年の経験を駆使していないだろうか？ あなたが善行から得られる恩恵を失うように、言い訳をするようそそのかしているのは、他ならぬ彼なのだ。もし、汗だくになって何かの荷物を肩に担いでいる人を見て、その人の負担を軽くするために自分の肩にその荷物を引き受けたいと思うなら、それは自然なことと言えるでしょう。その人がその重荷を背負っているのを見て、思いやりに駆られて、急いで助けようとしたのです。しかし、誰かから受けた不当な侮辱という重荷を自ら背負うことには、はるかに大きな価値がある。もし私たちに指摘をされ、すぐに言い訳をし始めるなら、それは私たちの中に、まだ世俗的な思惑が完全に生き続けていることを示しているのだ。

— ゲロンダ、では、自己弁護の原因は何なのでしょう？

— それは利己心にある。自己弁護とは墮落であり、それは神の恵みを追い払うものである。人は、弁解しないだけでなく、自分に対してなされるその不当ささえも愛さなければならぬ。何しろ、私たちを楽園から追放したのは、まさに自己弁解に他ならないではないか。アダムは墮落とは、まさにこのことではなかったのか。神がアダムの「もしかすると、私が食べることを禁じた木の実を食べたのか」と尋ねたとき、——と尋ねたとき、アダムは「はい、神よ、私は罪を犯しました」とは言わず、言い訳を始めた。「あなたが私に与えてくださった妻が、その木の実を私に与えたので、私は食べました」。それによって、彼は神に対して「エバを創造したのはあなたですから、これはあなたのせいだ」と言っているのと同じことだった。しかし、アダムはこの件に関してエ

⁴⁷ 詩篇24:7。

バの言うことを聞く義務があったのだろうか？ 神は同じ質問をエバにも投げかけましたが、彼女もまた言い訳を始めました。「蛇が私を惑わしたのです。」⁴⁸ もしアダムが「罪を犯しました、過ちを犯しました、神よ」と言い、エバもまた自分の過ちを認めていれば、すべては元通りになったでしょう。しかし、そうではありませんでした。二人は互いに先を争うように言い訳を始めたのです。

— ゲロンダ、もし人が自己弁解がいかに大きな悪であるかを理解していないとしたら、その責任は誰にあるのでしょうか？

— 何が原因か？ それは、彼自身の責任です。延々と自分を正当化し、他人は自分を理解していない、周囲のすべてが不公正で、自分は無実の苦しみを受ける者であり、不幸な犠牲者だと考えることで、人は正気を失い、自制心を失ってしまうのです。考えてみてください。時には不正を犯し、他人に過ちを犯したにもかかわらず、そのような人はこう言うのです。「もちろん、私はこの不正に耐えることはできたが、他人を罪に誘いたくないのだ」と！ つまり、彼は、愛という名目の動機から自分を正当化しようとしているのです。そうすれば、自分が傷つけられたと信じている相手が正気に戻り、罪を犯さずに済むようにと！あるいは、その「加害者」が、たまたま自分の意図を誤解したために罪を犯すことのないよう、山ほどの言い訳を並べ始める。悪魔がいかに巧妙な働きをしているか、お分かりだろうか？

自分を正当化する者は、霊的な助けを受けることができない

私は今日、老若男女を問わず、誰もが何らかの悪魔的な考えを用いてあらゆることを正当化していることに気づきました。悪魔は彼らのためにすべてを自分流に解釈し直し、その結果、こうした人々は現実から外れてしまうのです。悪魔的な解釈——それが自己正当化というものです。

— ゲロンダ、なぜ一部の人は、自分に投げかけられるどんな言葉に対しても反論するのでしょうか？

— ああ、言い訳をすることに慣れた人と話すなんて、恐ろしいことだ！ それはまるで、悪霊に取り憑かれた者と話すようなものだ。神よ、お許してください。しかし、自分を正当化する者たちの「師」は、まさに悪魔そのものである。彼らはひどく苦しめられている人々であり、心の中に平安を持っていない。彼らは自己正当化を自らの「学問」にしてしまったのだ。つまり、泥棒が一晩中眠らずに何かを盗む方法を考え出すのと同じように、こうした人々は絶えず自分の過ちを正当化する方法ばかりを編み出しているのだ。ある人は、どうすれば謙虚になれるか、あるいは何か善行を成し遂げられるかを考えるものですが、彼らはそれとは正反対のこと——言い訳のしようがないことを正当化する方法——を編み出しているのです。こうした人々は、まさに弁護士そのものになってしまいます！彼らを説得することは不可能です。それはまるで、悪魔そのものを説得しようとするようなものです。あるそんな人物と、私がどれほど苦労したか、ご存知だろうか！「君のやっていることは、どう考えても筋が通らない」と私は彼を諭した。「君はいくつかの点に注意を払う必要がある。、君は完全に手に負えなくなっている。こうすべきだ、ああすべきだ……」しかし、彼は私の言葉の一つひとつに対して言い訳を見つけ出し、会話の最後にはさらにこう言い放った。「君は、僕が何をすべきか結局言ってくれなかったじゃないか！」——「おいおい、君は」と私は呆気にとられた。

「じゃあ、一体何についてこんなに長い間話しているんだ？ 君の過ちについて、君が問

⁴⁸ 創世記3章11～13節を参照。

違った方向に進んでしまったことについて話しているのに、君は止まることなく言い訳ばかりしている。この3時間の会話の間、君は私をすっかり疲れ果てさせた！ もう限界だ！ ねえ、私が君に何をすべきか言ってなかったのか？」 ということだ。相手に適切な例を挙げて、その人が物事に対して抱いているような態度こそが悪魔的な利己主義だと説明し、悪魔の影響下にあり、変わらなければ滅びてしまうと警告する。それなのに、相手は結局、「何をすべきか」を言ってくれなかったと主張するのだ！ いや、本当に、こんな時、腹が立たないわけがないでしょう？ もしその人が何事にも無関心なら、こういう場合でも動揺することはない。何が起ころうとも、彼にとっては人生の些細なことに過ぎないのだ。

しかし、もしあなたが無関心さがなければ、こうした状況ではただただ爆発してしまうでしょう。いや、やはり何事にも無関心な人々こそが幸せなのです。

— とはいえ、ゲロンダ、あなたご自身は、いかなる状況でも無関心でいたくはないでしょう……

— 兄弟よ、無関心な人は、少なくとも無駄に自分を消耗することはないのだ。苦しんでいる人のために苦しむことには意味がある。だが、この場合はこうだ。その人のために疲れ果て、あれこれと語りかけるのに、結局彼は「何をすべきか教えてくれなかった」と言い放ち、決して許されるはずのないことを正当化してしまう。そうして彼は人間から悪魔へと変貌してしまうのだ！ なんて恐ろしいことだろう！ もし彼が、あなたがいかに苦勞して彼を助けようとしたかについて、せめて少しでも考えてくれたなら、少しは変わっていたでしょう。彼が、あなたが彼のためにどれほど心を痛めているかを感じ取ることは、もはや言うまでもありません。しかし、彼はあなたがどれほど苦しんでいるか、どれほどもがいているか、どれほど苦悩しているかを見ても、そのすべてに目をつぶっているのです！

— ゲロンダ、もし自分のとんでもない悪行を正当化しようとする人に、「それは自己正当化だ」と告げたとしても、その人が「自己正当化ではない」と証明しようと、なおも自分を正当化し続ける場合、彼には改心する余地はあるのでしょうか？

— そんな者が改心できるわけがないでしょう。彼は苦しみを感じているからこそ、過ちを犯したことを理解しているのに、利己心からそれを認めようとしないのです。これは非常に恐ろしいことです！

— ええ、でもその一方で、彼はこう主張するんです。「君は僕を助けることを拒んでいる。僕は助けを求めているのに、君は僕を話し合いに招くことさえしてくれない。君は僕を軽蔑しているんだ。」

— そう、つまり、そのような状態もまた利己心から始まるのです。それによって、彼はまるであなたにこう言っているようなものです。「私がこんなにひどい状況にあるのは、私のせいではなく、あなたのせいだ！」 そう、そう、そのような人はそこまで行き着いてしまうのです。彼を放っておいてください。あなたには彼を助けることはできないのですから、彼に時間を費やす必要はありません。そのような人間に対して、その告解司祭も、もし修道院に住んでいるなら修道院長や修道院長も、責任を負うことはない。これは人間的なエゴイズムではなく、悪魔的なエゴイズムだ。人間的なエゴイズムに苦しむのは、「ごめんなさい」と言うほど謙虚にはなれないが、それでも自分を正当化しようとはしない人である。しかし、罪を犯しながら自分を正当化する者は、自分の心を悪魔の巣窟に変えてしまう。もしそのような人が自分の「自我」を打ち砕かなければ、ますます多くの過ちを犯すことになり、何の益もなく、自らの利己主義に苛まれる

ことになるだろう。もし人が、自己正当化がいかに悪であるかを知らないのであれば、その人には罪を軽減する事情がある。しかし、もしそれを——自分自身で、あるいは他人の言葉から——知ったのであれば、その人には罪を軽減する事情はない。

言い訳をすることに慣れている人を助けたいときは、細心の注意を払う必要がある。なぜなら、その人が言い訳をするということは、彼の中に多くの利己心があることを意味し、そのため、次のようなことが時々起こるからだ。あなたが彼に「その行動は間違っていた」と伝えたと、彼は自分の「非の打ち所のない姿」を守り、[むしろあなたが間違っている]ことを証明しようと、嘘に嘘を重ね、自己正当化に自己正当化を重ね始めるのだ。その場合、で彼の過ちを指摘したあなたこそが、その人を以前よりもさらに大きな利己主義者かつ嘘つきにになってしまう原因となってしまうのです。彼が言い訳を続けているのを見たら、彼に何かを説き伏せるのはやめ、神が彼を啓発してくださるよう祈ってください。

もしあなたが自分を弁解しなければ、神があなたを正当化してくださる

— ゲロンダ、よく、誰かに指摘されたとき、何か説明をしなければならないと思い、「はい、その通りですが、もしかするとあなたがそう思われたのは……」と話し始めてしまうのです。

— なんでそんな「でも」や「もしかして」ばかり言うんだ？⁴⁹ この「もしかして」には……味がない！ それに、すべてを歪めてしまう。誰かに注意されたら、「すみません。あなたの祈りのおかげで、これからはもっと気を付けます」と言うんだ。

— ゲロンダ、もし誰かが、私が何か行動をしているのを見て、誤った結論に至ってしまった場合、なぜ私がそう行動したのかを説明すべきでしょうか？

— もしあなたに霊的な力、すなわち謙遜があるなら、自分の過ちを認め、何も説明してはなりません。あなたを正当化するのは神に委ねなさい。あなたが自ら語らなくても、後になって神があなたのために語ってくださいます。考えてみてください。兄弟たちがヨセフを奴隷として売ったとき、⁵⁰ 彼は「イシュマエルの商人たちに」こうは言いませんでした：「私は彼らの兄弟であり、奴隷ではない。父は私を他のどの子供よりも愛していた。」と一言も言わなかった。しかしその後、神が御言葉を語り、彼を王にされたのだ。⁵¹ さて、あなたはどうか——神は（物事の真実を）人々に知らせないというのか？ もし神が、あなたのために思って人々に真実を明らかにされるなら、それは良いことだ。しかし、もし神がそれを明かさないとしても、それもまたあなたのためになるのです。誰かがあなたに不当な扱いをしたときは、その人が悪意からそうしているのではなく、単に物事をそのように捉えてしまっただけだと考えてください。その人に悪意がないなら、時が経てば神がその人に真実の状況を告げてくださるでしょう。そうすれば、その人はあなたに不当な扱いをしてしまったことに気づき、悔い改めるでしょう。神が人に真実を告げないのは、その人に悪意がある場合だけです。なぜなら、神のラジオ局は謙遜と愛の周波数で放送しているからです。

— ゲロンダ、あなたとその人との間に何らかの誤解が生じた後、その人に説明を求めることはできますか？

— あなた、その人に対する考えが歪んでしまったのですか？

⁴⁹ 長老による言葉遊び：「Τὸ „ἀλλά δὲν ἔχει ἀλάτι καὶ ὅλα τὰ ἀλλοιώνει“。」——訳者注

⁵⁰ 創世記37章20節以降を参照。

⁵¹ 創世記41章41節を参照。

— いいえ。

— もしあなたの思いが乱れていないのなら、その人に何か説明してもらう必要もありません。もしあなたの思いが乱れているのなら、それがさらに乱れないように、何らかの説明を聞くのも悪くありません。

— ゲロンダ、でも、自分を正当化するためではなく、単に特定の出来事に対する自分の考えや、なぜそう行動したのかという動機を話すだけならどうでしょうか？

— それも無意味です。「ごめんなさい」と言って、説明は控えたほうがよいでしょう。ただし、相手から説明を求められた場合は別です。その時は、謙虚に、何が起きたのかを話してください。

— ゲロンダ、どのような場合に説明が必要なのでしょう？

— それは、他の人々に関わる誤解が生じた場合です。その時は、状況を何とか是正するために、説明をする義務があります。また、人が過度に敏感であったり、ある程度の利己心を持っていたりする場合、説明をしなければその人が傷ついてしまうこともあります。そのような場合は、その人がなぜそのような行動をとったのかを説明したほうが望ましいでしょう。

— ゲロンダ、時には、自己弁明と説明を見分けることができないこともあります。

— 自己弁明は魂に安らぎをもたらしますが、説明は魂に安らぎと平和をもたらします。

正しく自己を省みる者は、自分を正当化しない

— ゲロンダ、なぜ、自分の〔霊的な〕弱さを感じ、理解しているにもかかわらず、私はそれでも自分を正当化してしまうのでしょうか？

— あなたが言い訳をするのは、まさにまだ自分の弱さを感じていないからです。もし感じていれば、言い訳などしないでしょう。何しろ私たち利己主義者は、困難に直面することを望まず、努力を好まず、しばしば何の苦勞もせずに〔霊的に〕豊かになりたいと願うものです。少なくとも、あらゆる物事に対してこのような態度をとっている以上、私たちは精神的に両足を引きずっていることを認めなければならない。それを認めた上で、謙虚になるべきだ。だが、そんなことあるわけがない！ 私たちの場合、努力も、自分の無力さの自覚も、微塵も感じられないのだ。

— 自己認識に取り組み、自分自身を探究する人間は、自分を正当化することができるのだろうか？

— 自分を正しく見つめる者は、自分を正当化したりはしない。見てごらん。頭が良くて聡明な人の中にも、結局のところ、とんでもない愚行を犯してしまう者がいるではないか。それは、自分にとって都合の良いようにしたいという欲望が混じっているからだ。「どうすればもっと楽になれるか——」と、そのような人は考える。「どうすれば自分自身が心地よくなれるか」と。

「ゲロンダ、自分を正当化する人は、霊的な生活における自分の墮落に気づかないのでしょうか？」

— 悪魔はそのような人を、何をしようともあらゆる面で欺き、その人はあらゆることに言い訳を見出してしまうのです。自分のわがまま、頑固さ、利己心、嘘に対してです。

— もしそのような人が、聖父たちの著作、とりわけ聖書に目を向けて、まるで鏡を見るかのように自分自身を見つめ直したら、それはその人にとって助けにならないでしょうか？

— 正しく、霊的に考える人にとって、聖書や教父たちの書物はあらゆる困難を解決してくれる。その人は、そこに書かれた意味を明確かつ明瞭に理解する。しかし、もし人が霊的な修行に励まず、その魂が清められていないならば、聖書でさえもその人を助けることはできない。なぜなら、そのような人は読んだものをすべて、全く逆の意味に解釈してしまうからだ。そのような人は、自分の考えを指導司祭に打ち明け、読んだ内容の意味を自分で解釈しようとしないうほうがよい。例えば、旧約聖書を読む際、そのような人は、悪意を持ってその意味を解釈し、[霊的な]感染にさらされてしまう可能性がある。私は、霊的な書物から読んだ内容の一部を選び出し、それを自分にとって都合のよいように解釈する人々がいることに気づきました。その理由は、彼らに判断力が欠けているからでも、読んだ内容の意味を正しく理解していないからでもありません。いいえ、彼らは自分自身を正当化するために、読んだ内容に独自の解釈を与えているのです。恐ろしいことです！ さらに、他者から聞く霊的な助言や教えについても、こうした人々は、私が確信しているように、正しく受け止めることがめったにありません。例えば、彼らの注意を何かに向けさせたいとき、私はある出来事を話します。私はある一点〔極めて具体的なこと〕を強調したいのだが、彼らは私の話を遮り、その話の中から全く別の何かを見つけ出し、その「別の何か」にしがみついて、自分たちの欠点や過ちの何かを正当化しようとする。つまり、彼らは自分の情欲を正当化するために、これらすべてを行っているのだ。私が、不注意のせいで悲惨な状態に陥ってしまったある人物について話すと、彼らはその話を聞き終えても、それについて深く考えることなく、「まあ、あんなにひどい状態になる人もいるんだから、僕たちはそもそも称賛に値する存在だ」と言うのです。こうして彼らは自分を正当化するのです。そう、何と言っても、悪魔は自己正当化の材料をいくらでも見つけ出すものだ。

自己正当化は魂に安らぎをもたらさない

自分を正当化する者の魂は安らぎを見出せない。そのような人は慰めを奪われている。本人は自分の「自我」を正当化しているが、果たしてその「自我」は本人自身を正当化しているだろうか？ 彼の「自我」、すなわち良心は彼を正当化せず、それゆえ魂は安らぎを得られない。これは、彼が有罪であることを物語っている。神はなんと英知に満ちてすべてを定められたことか！ 神は人間に良心を与えられた。恐ろしいことだ！ 残酷さや狡猾さ、お世辞を用いれば、人は望むものを手に入れることはできるかもしれないが、その代償として心の安らぎを奪われてしまう。しかし、もし人が良心に従うならば、他人の助けがなくても、自分が道を踏み外してしまったことを自ら確信することができるのだ。

不公正を穏やかに耐え忍ぶことは、喜びをもたらす霊的な富を得ることに等しい。しかし、自分を正当化するとき、人はまるでその富の一部を浪費しているかのようで——喜びを感じることはない。私が言いたいのは、後者の場合、人は自分を正当化しなければ得られたはずの精神的な安らぎを失ってしまう、ということです。ましてや、実際に罪を犯しているにもかかわらず自分を正当化する人については、言うまでもありません！ そのような人は、自らの頭上に神の怒りを招くことになる。なぜなら、実のところ、彼は自分に属さないものを奪い取っているに等しいからだ。彼には富が与えられて

いるのに、それを無駄に浪費している。富を無駄に浪費する者の魂に、安らぎなどあるだろうか？

自分を正当化する者は、自らを盲目にしているのだ。[やがて]悪魔は、たとえその人が殺人さえ犯したとしても、彼に言い訳を見つけてやるだろう。「どうしてそんなに長く彼を我慢していたんだ？」と悪魔は言う。「お前はもっとずっと前に彼を始末すべきだった！」そして、そのような人は、自分が「我慢」していたその数年間に対して、キリストから報いを受けたいとさえ思うかもしれない！わかるか？そう、そう、そこまで行き着くこともあるのだ！

— ゲロンダ、しかし、自分を正当化する者が苦しんでいるのなら、なぜ彼は、自分を苦しめる良心の呵責を終わらせるために、[自分を正当化するのをやめる]ことを望まないのでしょうか？

— なぜなら、自己正当化は習慣だからです。それを断ち切るには、意志の力が必要です。そのような人は、単に自己正当化をしないだけでなく、正しい霊的な姿勢を保つことを学ばなければなりません。なぜなら、口には出さずに自分を正当化せずとも、心の中で「自分は不当に扱われた」という確信を抱き続けるようになれば、事態はさらに悪化するからだ。もし彼が自分を正当化するために何かを口にしていたら、それに対して反論が返ってきたはずであり、そうすることで彼は自分自身を知り、迷いから抜け出すことができたはずだからだ。それに対して、口には何も言わずに、「真実は私の側にあるが、私はそれより高潔だから黙っている」と心の中で考えてしまう場合、その人は依然として迷いのままになってしまう。

[他人の罪]の重荷を背負いましょう

— ゲロンダ、昨日、あなたは「忍耐」と「寛容」は別物だとおっしゃいました。それはどういう意味ですか？

— 耐えるということは、誰かに対して寛容であるということではありません。「私はある人に対して寛容である」と主張することは、つまり「あの人にはすべてがうまくいっていないが、私はうまくいっている。だから私は彼に寛容である」と言っているのと同じことです。真の忍耐とは、隣人が置かれている状況に対して自らの罪を感じ、その人に同情することにあります。そのような隣人への態度には、多くの謙虚さと愛が込められています。そうすることで、私は神の恵みを受け入れ、隣人は助けを得ることになります。例えば、足の不自由な人、耳の聞こえない人、あるいは薬物依存症の人を見かけたとき、私はこう考えるべきです。「もし私が霊的に成長した人間であれば、神に懇願し、神はこの不幸な人を癒してくださるだろう。」なぜなら、キリストはこう言われたからです。「わたしはあなたがたに、わたしが成し遂げたものよりも大きな奇跡を行う力を与える。」⁵² このような思索から、隣人への痛みと愛が生まれます。もし私がこう言うなら：「まあ、私に彼に何ができるというのか。彼は不自由な身なのだから。よし、少しの間彼と一緒にいてやろう。そうすれば、善行に対する報いも得られるかもしれない」と言うなら、私は隣人に対して「寛容」に接し、義務を果たしたとして自分を正当化しているに過ぎない。

— ゲロンダ、他人の罪の責任をすべて引き受けることは、常に有益なことなのでしょうか？

⁵² ヨハネによる福音書14章12節を参照。

— そう、もしその重荷を背負えるなら、そこから得られる恩恵は計り知れない。すべてを自分のせいにしなさい。隣人の罪の責任を引き受け、それを自分の肩に背負い、キリストに、それを背負い抜く力を与えてくださるようお願いなさい。そして、自分の実際の罪よりも重い重荷を背負うことで（たとえ自分に全く罪がなかったとしても、それでもやはり罪があるということを自分自身に証明する方法を見出せば）、他人の罪を背負っているという事実を、決して自分の力によるものとは考えなくなるだろう。[つまり] あなたは驕ることなく、神の豊かな恵みを獲得することができるだろう。しかし、自分の力を慎重に見極め、計算する必要がある。果たして、それ以上の重荷を背負い続けることができるだろうか？ もし無理をしてしまえば、ヘルニアを患ったり、腰を痛めたりすることになるのだから……

— その場合、「ヘルニアになる」や「腰を痛める」とはどういう意味ですか？

— 例えば、自分の力以上の重さを持つ他人の罪を引き受け、そのことについて何の説明もせずに、その後、不平を言ったり、苛立ったり、非難したりし始めるような場合です……

— でも、もし私が何か説明をしたとしたら、それは自己正当化になってしまうんじゃないですか？

— そこで、自分の力の及ばなかったことについてののみ、弁明するよう努めなさい。力の及ぶことについては、説明せずに置いておきなさい。例えば、感受性の強い人は、自分の力を超えるような（そのような霊的な）重荷を背負わないよう努めるべきだ。そのような人は、強がって見せるべきではない。その人は、自分の力を試み、理にかなった形で不当な非難に身をさらすべきだ——つまり、自分が持ち上げられる範囲の[霊的な]重さに応じて。そうしなければ、過度の感受性によってその人が疲れ果ててしまい、敵がそのような人を絶望の淵に突き落とし、無力な状態に陥らせてしまうことになるからだ。

— ゲロンダ、私は時々、不当な扱いを受け止める力さえ見出せないばかりか、自分の過ちの責任を他人の肩に押し付けてしまうことがあります。

— あなたは、愛ゆえに隣人の荷物を背負おうとしないばかりか、自分の重い荷物をその人の肩に背負わせようとしているのです。しかも、健常者だけでなく、力の弱い人にも！ あなたには、自分の罪に対するすべての責任を引き受けることができるよう、霊的な勇気を培うことが求められています。そして、他人の過ちを引き受けることで、私たちの[霊的な]荷をますます増やせば増やすほど、慈愛に満ちた神は私たちの重荷をますます軽くしてくださり——私たちは神聖な喜びを味わうようになるのです。

もし、隣人愛から、重いものを持ち上げる力もない屈強な男が、自分の肩にセメントの袋を二つ担いだとしても、それは、他人の罪の重荷を引き受け、その罪を自分の中に「吸収」すること——たとえ人々が、あたかもあなたが実際に罪を犯したかのように思っても——ほどには大きなことではありません。これは大きな美德であり、大きな謙遜である。

ある時、アトス山のある共同生活修道院の修練生が、⁵³ しかも司祭修道士でもあった規則担当者が無礼な態度をとった。規則担当者は、礼拝で朗読をしていた修練生を助けようと、彼のところへ近づき、どのコンダクを最初に読むべきかを示した。しかし、修練生は完全に激怒し、礼拝の後、怒りに任せて自分の独房に閉じこもってしまった。

⁵³ ウスタフシュチク——礼拝規律の遵守および教会内の秩序全般を司る修道士。

自らの過ちを省いた規律担当者は、その責任を自ら引き受け、修道士が自分に無礼な返答をしたのは自分のせいだと考え、深く悩んだ。良心の呵責に真に苛まれながら、彼は自分の行動を、「[修道院の規則担当として、教会で行われることに対する責任を負っていたため、]見習い修道士に何を唱えるべきかを指示する義務があった」という理由で正当化しようとはしなかった。その代わりに、彼は心の中でこう言った。「兄弟が動揺してしまったのは、私のせいだ。」そして、彼は見習い修道士の部屋へ行き、頭を下げて許しを請おうとしたが、見習い修道士は内側から鍵をかけて、ドアを開けようとしなかった。そこで修道士は、そのドアの下に座り込んだ。彼は朝から午後3時まで、そのままで座り続けた。晩課の鐘が鳴ると、見習い修道士は仕方なく扉を開けて外に出なければならなかった。長老はひざまずき、彼に地面に額を付けるほど深く頭を下げて言った。「許してくれ、兄弟よ。これは私の過ちだ。」こうして、神の恵みがもたらされるのである。

第3章。 神の正義と人間の正義について

— ゲロンダ、教えてください。神の正義とは何でしょうか？

— 神の正義とは、隣人に安らぎをもたらす行いをする事です。例えば、自分と隣人の間で何かを分け合う必要があるなら、自分の持っているものの半分を与えるのではなく、相手が望むだけ与えなさい。「あなたはどれくらい欲しいですか？ 2つ半、それとも3つ？ ほら、これを受け取って」と尋ねなさい。良いものを相手に渡し、腐ったものは自分に残しなさい。大部分を相手に渡し、自分は少ない分だけを残しなさい。例えば、今、姉が私たちにプラムを10個持ってきてくれたと想像してみてください。私が食欲に任せて8個食べて、あなたに2個だけ残したら、それはあなたに対して不公平な扱いになります。「私たち二人で分けるのだから、私は5個食べて、5個はあなたに残す」と言えば、それは人間的な公平さに沿った行動となります。もし、あなたがそのプラムを気に入っているのを見て、私がたった一つだけ食べて、「愛を示して、残りを食べてくれ。私はあまり好きじゃないし、それに食べるとお腹が痛くなるから」と言ったら、それは神の正義となる。

— つまり、人間の正義とは一体何なのでしょう？

— 人間の正義とは、例えば誰かと分け合う必要があるとき、半分を相手に渡し、もう半分は自分に残すということです。

— ゲロンダ、人間の正義は霊的生活においてどのような位置を占めるのでしょうか？

— 人間の正義は、霊的な人々のためのものではなく、この世の人々に対する抑制として機能するためのものです。もし霊的な人が人間の正義に希望を託すなら、その人は愚かだ。なぜなら、神の正義と比較すれば、人間の正義はゼロに等しいからだ。しかし、世俗的な人であっても、この人生で何かを成し遂げ、人間の正義を適用したとしても、真の喜びや心の平安を得ることはできないだろう。

例えば、二人の兄弟が10ストレム⁵⁴の土地を所有しているとしよう。人間の正義によれば、それぞれが5ストレムずつ分け合うべきだが、神の正義によれば、各人が自

⁵⁴ ストレマ——1000 m²に相当する面積の単位。——訳者注

分に必要な分だけを受け取るべきである。つまり、ある兄弟には7人の子供がいて、もう一方には2人しかいない場合や、一方が高給を得て、もう一方が低給である場合、土地の大部分は、より大きな必要に迫られている方が受け取るべきである。この場合、二番目の兄弟が最初の兄弟と同じだけ土地を分け取れば、それは不公正となる。しかし、世俗的な人間は、自分の兄弟が生活費をやりくりするのに精一杯であるという事実を考慮に入れない。霊的に考えないそのような人は、自分がしようとしているような財産の分配が不公正であることを理解していない。「あなたの兄弟が困窮していることを家族に説明し、あなたが大部分を彼に譲ることに同意してもらうべきだ」と、あなたはそのような人に言う。すると、こう返ってくる。「なぜだ？　だって〔財産を半分ずつ分けさえすれば〕、私は彼に対して決して不公正な扱いをしていないではないか。」

しかし、もしそう言う人が真に霊的な人であれば、たとえ妻や子供たちが反対したとしても、困窮している兄弟が彼らに与えると約束した分を受け入れるよう、彼らを説得すべきだったはずだ。もし困窮している兄弟が「あなたは一ストレマを取ってください」と言ったなら、もう一方は一ストレマを受け取り、一言も口に出さず、より多くの分け前を取った兄弟が気兼ねなくいられるようにすべきだった。どう見ても、最も公正な分配は福音書に基づいて行われるのである。

私はアブラハムの寛大さに感銘を受ける。ロトとアブラハムの羊飼いたちが牧草地をめぐる争い始めたとき、アブラハムはロトのところへ行き、こう言った。「私たち親族同士が争うのはふさわしくない。どちらの方面が君の心に合うか？　右へ行くか、左へ行くか？」と。ロトは、多少なりとも人間的な動機から行動し、ソドムとゴモラを選んだ。そこには緑豊かな牧草地があり、家畜にとって良い放牧地があったからだ。⁵⁵そして、その後、彼はそこでどんな災難に見舞われることとなったのか！　一方、アブラハムは神の正義に動かされ、ロトを喜ばせたいと願っていた。ロトがより良い場所に定住したことは、アブラハムにとっても喜びであった。

神の正義

— ゲロンダ、神の正義とは何でしょうか？

— 神の正義とは、謙遜と愛をも内包した忍耐のことです。神は極めて公正ですが、同時に極めて慈悲深く、⁵⁶、その慈悲は神の正義に打ち勝つのです。分かりやすくするために、次のような例を挙げましょう。もしある人が、神について聞く好機を一度も与えられなかったとしたら、神はその人を、現在の状態に基づいて裁くのではなく、もし神を知っていたならばどのような状態にあったか、という基準で裁かれるのです。そうでなければ、神は公正ではないことになるからです。神の正義には独自の数学的法則があります。時には「1+1」は「2」になりますが、時には「200万」になることもあります。

— ゲロンダ、では、何らかの過ちを犯した人間に対して、神の正義はどのように執行されるのでしょうか？

— 人間の正義は「あなたは過ちを犯したのだから罰せられなければならない」と言いますが、神の正義は「自分の過ちを認め、悔い改めているか？　赦しを受けるのだ」と告げます。考えてみてください。犯罪を犯した人が、たとえまだわずかな疑いもかけられていないにもかかわらず、心から悔い改め、自ら犯した行いを自白するならば、人間

⁵⁵ 創世記13章1～13節を参照。

⁵⁶ ギリシャ語「πολυεύσπλαγχνος」；教会スラヴ語「多慈悲なる」。——訳者注

の法律でさえもその人に対して寛大に扱うのです。そして、そのような人が人間によってさえ寛大に裁かれるのであれば、義に満ち、憐れみ深い審判者である神が、どれほどさらに大きな寛容をその人に示されることか。

私たちは皆、神の御手の中にあります。神は私たちを見守り、すべてを正確に見通しておられ、すべての人間の心は神にさらけ出されています。神は私たちに対して不公正な扱いをすることはありません。神の正義があり、神の報いがあり、そして何よりも重要なこととして、神が私たちを愛しておられるからこそ、人が行うすべての善行は無駄にはなりません。したがって、人々の間の公正な関係を追求する者は、無価値で、全く未熟な人間である。

私は、不当な扱いを受けた人が、その出来事に対して神の真理が求める通りに振る舞うならば、神はその人をこの世のうちにすでに義と認めてくださることに気づいた。戦後、勲章を授与するために将軍が私たちの部隊を訪れた時のことを覚えている。その日、私は不在だった。将軍が私の名字を叫んだとき、テッサリア出身の同僚の一人が隊列から抜け出し、本来は私に贈られるはずだった勲章を受け取った。他の兵士たちは黙っていた。当時、軍隊でそのような不正を働けば投獄されることになっていたからだ。将軍が去った後、その兵士は、他の兵士たちに半殺しにされるのではないかと恐れて身を隠した。私が部隊に戻った時も、彼は私に近づくのを恐れていた。ぐるぐると歩き回り、ついに「許してくれ、僕はこんなことをしてしまった」と言った。「その勲章を受け取ったのは正解だったよ！」と私は答えた。「さもないと、私がどうしただろう？」その後、彼はパレードのたびにその勲章を身につけていた。そして40年後、テッサリアから第1軍司令官がこの修道院を訪れ、私に「アレクサンドロス大王勲章」を授与してくれた。それを見たとき、私は思わず笑みをこぼしてしまった。40年ぶりだ！そして、私が驚いたのは、その元帥がテッサリアからやって来たということだった——当時、私の勲章を受け取ったあの兵士の故郷から。ほら、こういうこともあるのだ！もし私たちが、自分たちに公正な扱いを受けることを求めるならば、結局のところ、ここで求めているものも、そして私たちが不公正に耐えたことに対する報いとしてキリストが永遠の命の中で用意してくださっているものも、両方とも失ってしまうことになる。つまり、取るに足らないもののために、最も重要な、永遠のものを失ってしまうのだ。何しろ、いずれにせよ、この世のものはすべて無価値なのです。それなのに、なぜ私たちにそれが必要なのでしょう？

修道士が「権利」を持つものは、キリストが来世のために取っておいてくださるのです

—ゲロンダ、何かに対して「権利を持つ」とはどういう意味ですか？

—「権利を持つ」というのは、世俗的な論理です。人の内に世俗的なものが多ければ多いほど、その人は多くの「権利」を持っています。その人に霊的なものが多ければ多いほど、持つ権利は少なくなります。特に修道士は——彼には義務しかなく、何に対しても権利など持ちません。私が言いたいのは、修道士は誰に対しても何の要求も持つべきではない、ということです。キリストの愛のために、修道士はすべてを捨てたのです。ですから、もし彼がこの世で何らかの権利を持とうと望むなら、それは完全な過ちです。そのような振る舞いをするので、修道士はキリストを侮辱し、修道生活そのものを侮辱することになります。この世の人々は多くのことに「権利」を持っています——それこそが彼らを世俗的な存在にしているのです。しかし、修道士——いや、単に

霊的な人間であっても——が持つべき権利は、キリストが来世のために取っておいてくださるのです。

今日、「自分には権利がある」という傾向は、ほぼすべての[世俗の]若者だけでなく、若い僧侶たちの間でも見受けられる。彼らの中には、なぜ僧侶になったのか、そもそも出家とは何かさえも理解していない者もいる。だからこそ、彼らはこの「権利がある」という意識を内に抱き、世俗的な精神、[霊的に]説明のつかない論理、そしてあらゆるものに対する人間的な正義感を持っているのである。この人間的な正義感は、ヨーロッパの精神に端を発し、すでに修道生活にも浸透してしまっている。

現代の修道生活においては、次のような精神をしばしば見かける。「私は隣人に何の迷惑もかけていないし、隣人に迷惑をかけられたくもない。だって、私は彼を傷つけていないし、私の方には何の問題もないのだから。」あるいは、ある修道士たちが言うように：「私は自分の仕事を果たした。助けるべきところでは助け、終わらせるべきことはすべて終わらせた。私の方には何の問題もない。他の仕事？ それは私の仕事ではない。私はここを離れて、自分の独房に戻り、修道規則を実践する。」こうした人々は、兄弟が体が弱かったり頭痛に悩まされていたりして、ある仕事をこなせない、あるいは徹夜の祈りに参加してひどく疲れて戻ってきたために仕事量が減っていることなど、全く考えようとしめない。あるいはこう言う。「これは私の食事の分だ。私にはそれを受ける権利がある」と言い、隣人が自分より虚弱であることや、その体がより多くのエネルギーを消費し、より栄養のある食事を必要としていることなどには思いを巡らせない。こうしたことの結果、肉体的には霊的な環境にしながら、彼らは世俗的な考え方を持ち、この世の……非の打ち所のない人々となってしまうのだ。霊的な人々でありながら、すべてに対して世俗的な態度をとっている人々を見るのは、どのようなものか、お分かりでしょうか？ 私は、多くの修道士たちが——程度は人それぞれですが——断食し、祈り、礼拝に出席し、定められた服従を果たし、修道服を身にまとい、修道院の規則に従って生活しながらも、あらゆる事柄に対して霊的な態度ではなく、世俗的な態度で接していることに気づきました。彼らは、自分たちに傷つく言葉を言われぬか、不当な扱いを受けぬか、とばかり気にしている。つまり、これらの修道士たちは世俗的な正義の枠組みの中にいるのだが、中にはそれさえも満たしていない者もいる。さて、そんな彼らと霊的な相互理解に達しようなどという試みが、果たして可能だろうか！ これらの修道士たちは、将来、キリストが自分たちとの清算を容易に行えるように（キリストが彼らに対して 借金を残さないように）、あらゆることを整えようとしているのだ！ キリストは、各人が被る不公正の度合いと、その人が払った犠牲の度合いを見極め、それに応じた報いを与えようとするのに、これらの人々は自ら〔キリストに対して〕〔自分の功績の〕計算を立てようとしているのだ。

私は、一部の現代の修道士たちに見られるそのような考え方に、そもそも憤りを感じている。まったくもって人間的な正義だ！ しかし、人間的な正義が、どうして霊的な生活に適合するだろうか？ 人間的な正義では、世俗の生活でさえ遠くまで行けないのだから——ましてや霊的な生活など言うまでもない！ 私が共同生活の修道院に住んでいた頃、その住人たちは皆、ことあるごとに何らかの犠牲を払おうと努めていた。この精神は至る所に満ちていた——仕事中も、食事の席でも。まず隣人のことを考え、だからこそまるで楽園にいるかのように暮らしていた。例えば、食事の席では、ある修道士は他の人がもっと多く食べられるように、自分は少なめに食べるよう心がけていた。たとえ自分自身が並外れた健康体ではなかったとしても、それを気にかけることはなかった

。そのような修道士は、隣人が健康であろうと病弱であろうと気にしなかった。修道士は[ただ]自らを犠牲にしていたのだ。彼は自分の判断力さえも用いることはなく、「もし兄弟が規定量より多く食べれば、体に害があるだろう」などとは決して言わなかった。しかし、その僧侶が「自分が傷つけられないか」「過労にならないか」「自分の労苦が無駄にならないか」と気遣い始めたその瞬間から、彼はまるで、神の存在や、この世とは異なる生命の存在、そして誰もが待ち受ける来たるべき審判と神の報いを信じなくなったかのようになる。たとえ彼が[他の人たちより]ほんの少し多く労力を費やしたとしても、その労苦も無駄にはならない。無駄になるのは動物の労苦だけだ。しかし、これらの哀れな生き物たちでさえ、私たちのために自らを犠牲にしているのだ！そしてそれは、彼らが私たちのせいで苦しんでいるにもかかわらずのことである。何しろ、先祖の罪以来、自然は人間と共に嘆き、人間に同情しているのだから。なんと恐ろしいことか！狩人に傷つけられた野生動物たちが、どれほど苦しんでいるか見てください！傷つき、足を折られ、彼らは大きな肉食獣から逃げることができず、その獣たちに苛まれ、食い尽くされてしまうのです。それにもかかわらず、これらの哀れな生き物たちは、ほんのわずかな報いさえ得られないのです！もし人がこれを理解しないなら、その人は人間ではありません。神が人に理性を与えられたのは、まさにこのためです。すなわち、理性を用いて正しい行いをし、自らの道を見出すためです。私が今言っているのは、あなたがたに最後の力を振り絞れということではなく、慈愛の心を持つべきだということです。

— つまり、ゲロンダ、あなたは私たちの心が、隣人に安らぎと慰めをもたらしたいという熱い願いに震えることを望んでおられるのですね……

— そうです。なぜなら、隣人の苦しみを和らげ、安らぎを与えようと努めつつ、そのすべてを神の御手に委ねていれば、あなたは疲れ果てることはないからです。しかし、もし力尽きてからそれを（他人に）話してしまったら、あなたのすべての労苦は水の泡となってしまいます。キリストが、あなたが自分の苦難を嘆くことに対して、報いてくださると思いますか？（もし「報いる」としても）せいぜい平手打ちくらいでしょう。

可能な限り、私が語っているその働きを実践するように努めなさい。これこそが、あなたがたが取り組むべき霊的な行いである。この行いを実践しない者にとっては、禁欲的な行いさえも何の益にもならない。なぜなら、その人のラジオは、神のラジオとは異なる周波数で動作しているからだ。そうなれば、礼拝も断食も……他のすべてが無駄になってしまう。これらをすべて行う必要がないと言っているわけではないが、こうした行いをすべてこなせば万事順調だと考えるべきではない。

人々は自分たちで別の「福音」を作り上げてしまったのです

— ゲロンダ、どのような場合に人は「義人」と呼べるのでしょうか？

— 世俗的な観点から見れば、その判断が人間の正義に基づいている人が義人です。しかし、人間の正義の[法則]ではなく、神の真理に基づいて義である人こそが完全な人です。その場合、その人は神に祝福されます。自分の行動に「自我」や私利私欲を決して混入させないことで、私はいわば、神に神の恵みを授けてくださるよう促しているのです。

いかなる人間の真理であれ、たとえ最も完全なものであっても、その中には常に人間的な要素が含まれている。そして、霊的な人の中に人間的な正義が生きている限り、

御霊はその正義を異物のように彼から引き抜こうと努め、人は時に勝利し、時に敗北しながらもがくうちに、精神的に疲れ果ててしまう。しかし、神の正義を勝ち得た時、人は⁵⁷に清められ、神の啓示を受け入れるようになる。

— ゲロンダ、もし「自分は不当に傷つけられた」と主張する人に、神の正義が存在することを伝えたら、その言葉は彼を助けるのでしょうか？

— いいえ、むしろこう言ってあげてください。「福音書が教えているように、起きていることを霊的な視点から見てください。」なぜなら、もしあなたが「神の正義が存在する」と彼に告げれば、彼は本当に他者から不当な扱いを受けたと信じてしまうでしょう。しかし実際には、おそらく彼自身が他者を傷つけていたのかもしれないから。

いや、本当に、心が痛む。私は、定期的に教会に通い、断食をし、キリスト教徒として求められる他の行いもこなし、自分は霊的に生きていていると思い込んでいた人物を知っていた。彼は5つのアパートを所有し、2つの給料を得ており、子供も一人もいなかったにもかかわらず、貧しい人々に一ドラクマたりとも施しをしようとはしなかった。「まあいいさ」と私は彼に言った。「君には貧しい親戚がたくさんいるじゃないか。なぜ彼らを助けないんだ？ そんな大金、どうするつもりなんだ？ 未亡人や孤児たちに配ればいいじゃないか……」そして、彼が私に何と答えたか知っていますか？ 「じゃあ、——と彼は言った——『私の姉が未亡人だからといって、彼女から家賃を取ってはいけないということになるのか？ 』」それを聞いたとき、私は頭に血が上った！ これこそが、この世の真実だ！ 「食べるものもない子供たちが、自分の子供ではなく他人の子供である以上——そのような考えを持つ人間はそう考える——私は彼らに対して責任を負わない。私は誰にも迷惑をかけていない。神よ、私が誰かを傷つけることなど、決してありませんように！」 こうした人々は自分の考えを納得させる方法を見つけますが、真の安らぎは得られません。人間の論理や世俗的な正義に導かれて、彼らは無関心なままです——その一方で、彼らの目の前で、彼らの参加を必要とする重大な出来事が起きているというのに [彼らの関与を必要とする] 事態が目の前で起きているというのに。そんな彼らが、その後どうやって霊的な何かを感じ取れるのでしょうか？ 誰かに家一軒を捧げることもさえできる人が、一方で、誰かが家賃を滞納しただけで、その人を裁判に訴えることもあります。これをどう説明できるのでしょうか？

— ゲロンダ、これは人間の道理で説明できるのでしょうか？

— それは人間の道理ですらない。そんな人々には、人間の道理など微塵もない。一方で誰かに10万ドラクマを寄付しておきながら、他方では1,000ドラクマのためにタクシ一運転手と値切り合いをし、警察に引きずり込む。一体、これをどう説明するのですか？

— もしかして、ゲロンダ、彼らの頭がおかしいのでしょうか？

— いいえ、彼らの頭はむしろ正常なのです。

— もしかして、ゲロンダ、彼らは自己満足を得るために、誇りを持って施しをしているのでしょうか？

— そう、まさにそこが問題なのです！ 彼らは誇りを持って多額の寄付をしますが、それは神の栄光のためではなく、自分たちを称賛してもらうために行っているのです。

⁵⁷ 「Λαμπικάρισμα」は、動詞「λαμπικάρω」に由来し、浄化する、蒸留する、洗い流す、濾す、透明になる、という意味である。——訳者注

そのような人々は、持っているものすべてを他者に捧げることさえできますが、愛は持ち合わせていません。

今日、[人々の間には]ある種の邪悪な精神が蔓延している。霊的な人々でさえ、法的な正義を追い求め、その上、神を信じていると主張している。「お前にはこれをする権利があり、私にはあれをする権利がある……」ああ、もし人々の間にこの「常識の福音」、この恐ろしい「常識」がなかったら！「私を馬鹿だと思わないでほしい」——そうした人々はそう言います。キリスト教徒が、互いに裁判に訴え合うような事態にまで至っていることをご存知ですか？たとえ彼らが正しいとしても、裁判に訴えるべきではありません——ましてや、彼らが間違っているのならなおさらです！だからこそ、ある人々は信仰を失ってしまうのです——そうしたキリスト教徒のせいで。人々は、教会にも行かず、徹夜祈祷も行わない人がいても、それでも、教会に通い、徹夜祈祷に参加し、すべきことをすべてこなしているにもかかわらず、わずかな借金があるというだけで、ある貧しい人を裁判に引きずり出すようなクリスチャンほどひどいことにはならない、と気づいているのです。そして、その行為はただひたすらに「自分の権利を守る」ためだけに行われているのです。ある人物に、借金のある相手を訴えようとしていた理由を尋ねてみました。「君は、何か困っているのか？それとも、借金をしている相手より子供が多いのか？それとも、もしかして奥さんが裁判を起こすよう強く迫っていて、そのせいで困った状況にあるのか？」と尋ねた。「いいえ」と彼は答えた。「私は正義を勝ち取るためにこれをしているのです。」

これには何と言おうか！もちろん、特定の教会関連のサークルで幼少期に受けた教育も一役買っていた。もう何年も前から、ある出来事が私の記憶から離れない。ある家で、あるキリスト教の修道会の修道女たちが、ある子供の世話をしていた。その修道会では、結婚しないという誓いを立てていたのだ。ある日、ある幼児が病気になり、放射線被ばくを伴う検査を受ける必要が生じた。医師はシスターたちに手伝いに来てほしいと頼んだが、その修道会のシスターたちは誰一人として動こうとしなかった——放射線を恐れたのだ。しかし、そもそも彼女たちは結婚しないという誓いを立てていたのだから、この問題は議論の余地すらなかった。もし結婚するつもりだったならまだしも、その恐怖はある程度正当化されただろう。だが、彼女たちは霊的な人々であったのだから、たとえ家庭を築くつもりだったとしても、犠牲の精神を示すべきだったのだ。もしこれらのシスターたちが、自らを犠牲にする権利を主張して口論していたなら、それは「霊的に」正しいことだっただろう。しかし実際には、シスター会に所属していない別の看護師が医師の助けに駆けつけた。この女性は霊的な生活を送っていなかったばかりか、結婚を控えていたにもかかわらず、その赤ん坊を不憫に思ったのだ。

そして最も悪いのは、こうした人々がそのような行為に対して良心の呵責を感じないことだ。彼らはこう言うからだ。「こうした[自己犠牲]は私たちには向いていない。私たちは霊的な活動のために生きているのだ。」彼らの中には、次のような考えさえ浮かぶかもしれない。「まあ、自己犠牲を喜ぶ人もいるだろうが、私は穏やかで平穏な生活の方が好きだ……」とさえ思うかもしれない。時には、自らを犠牲にする者を非難し、その人は霊的な境地に達していないとさえ言うこともある。しかし、キリストは、高潔さと寛大さがあるところ、犠牲の精神、控えめさ、そして無名であり続けたいという願いがあるところに宿っているのだ。

— ゲロンダ、もし困難な状況にある人を見かけたら、たとえ自分が疲れていたり病気であったりしても、急いで助けに行くべきではないでしょうか？

— ええ、もちろんです！しかし、ご存知のように、多くの霊的な人々が自分の中に世俗的な思惑を育んでしまっていることに気づきました。彼らは自分たち独自の世俗的な「福音」——自分たちの基準に合わせて仕立て上げた「福音」——を作り上げてしまったのです。「クリスチャンは——」と、そうした人々は言う。「自尊心を持たなければならない。顔を泥に塗られてはならないし、愚か者に見えてはならない。」つまり、そうした人々はすべてのことに対して、世俗的な論理と真理で接しているのだ。「私にはその権利がある！——」と、そのような人は言う。「私は相手を傷つけていないし、相手にも私を傷つけてほしくない！」そして、その考えが「自分は正しい」と彼を納得させる。そのような人の中には、世俗の「真理」のあらゆる現れが見て取れる。彼には愛もなく、犠牲の精神もなく——彼には何もない。彼は自分だけの「福音」を作り上げ、神とは微塵のつながりも持っていない。えっ、それなのに、これだけのことを経て、神の恵みが彼に降り注ぐことなどあり得るだろうか？

私が軍隊に勤務していた頃、ある軍事飛行場の無線通信士が、コールサインを受け取りに私たちの部隊を訪ねてきて、⁵⁸ 彼と話をした。彼は民間人時代、神学の教育を受けており、部隊では同僚たちの前で説教さえ行っていた。しかし、誰もが彼を「イエズス会士」と呼んでいた。⁵⁹ というのも、彼は自分自身を何一つ犠牲にしないばかりか、ほんの少しでも他人を助けようとはしなかったからだ。時々、私は彼に頼んだ。「どうせ飛行場に行くんだし、お願いだから、あの無線通信士のコールサインも一緒に持ってきてくれないか」。しかし、彼は決して承諾しなかった。「いや、」と彼は言った。「俺は自分のコールサインを取りに行っただ。あいつは自分で取りに行けばいい。」彼は、他人に対して不公正なことをしていないと自分に言い聞かせていた。しかし、キリストはこう言われています。単に頼まれるだけでなく、一マイル歩くことを強制されたとしても、その人と二マイル歩むべきだと。⁶⁰ キリストは、「もし誰かが単にあなたのシャツを頼んだなら、上着も与えなさい」とは言っていません。むしろ、次のように戒めています。「もし誰かがあなたと争って、あなたのシャツを奪おうとするなら、上着までも与えなさい。」⁶¹ キリストは私たちにこのような戒めを与えているのに、自分を霊的な人間だと思っている人は、「私は自分の分を取りに行っただから、彼も自分の分を取りに行けばいい」と言うのでしょうか？つまり、それは「馬鹿を見つけたな！『一ヴェルスタ頼まれたのに、まさか二ヴェルスタも歩けというのか？』」とでも言っているようなものだ。さて、これでは、神の恵みがそのような人に近づくことなどあり得るだろうか？しかし、もし誰かがこの福音の戒めを[真に]自らに適用し、一つの試練を乗り越えるよう強要されているにもかかわらず、それ以上の道を歩むならば、その後、キリストが働き始められる。そして、その人に（自分と一緒に）歩むよう強いた者も、霊的に変えられ、驚いて後頭部をかきながら、「まあ、とんでもない！私はたった一ヴェルスタだけ歩かせようとしたのに、見よ、あの人、どれほど遠くまで行ってしまったことか！これこそ真の慈愛だ！」と言うのです。

もしキリストが、今日多くの「霊的な」人々にみられるような世俗的な論理を持っていたなら、彼は天の御座を離れて地上に降り、私たち——この呪われた人々——のた

⁵⁸ 軍隊では、長老は無線手だった。

⁵⁹ イエズス会——16世紀にイグナチオ・デ・ロヨラによって設立されたカトリックの修道会。厳格な内部規律と、目的達成のために極端な手段を用いることで知られる。比喩的な意味で、形式的な敬虔さの規則を厳格に遵守しているものの、それに見合う内面的な状態を備えていない人々を「イエズス会士」と呼ぶこともある。

⁶⁰ 参照：マタイによる福音書 5章41節。

⁶¹ 参照：マタイによる福音書 5章40節。

めに苦しみ、十字架にかけられることはなかっただろう。しかし、この——人間的な観点からすれば——キリストの「失敗」の中にこそ、すべての人々の救いの神秘が隠されていたのです。何しろ、私たちの救いのために、キリストはどれほど多くのことを耐え忍ばれたことでしょう！ キリストは自らをこれほどまでに低くされたため、人々はキリストを嘲り、「誰があなたを打ったのか、言いなさい」と言ったほどでした。つまり、ユダヤ人たちはキリストを嘲笑うことを楽しみとしていたのです！ 覚えていますか、私が幼い頃、他の子供たちが「チジャ」という遊びをしているのを見て、どれほど胸が痛んだか。そしてユダヤ人たちも、キリストに対して……まさに同じ遊びを始めたのです！ 「『誰があなたを打ったのか』と預言しなさい」⁶² ああ、なんて恐ろしいことでしょう！ それなのに私たちは、十字架のないキリスト教、つまり「その場限りの復活」を求める「キリスト教」を目指しています。私たちはキリスト教や修道生活を、自分たちの都合に合わせて改変しています。何事においても自分を制限することを望んでいないのです。

しかし、超自然的な体験をするためには、私たちは自然を超えた生き方をしなければならぬ。

第3部。 罪と悔い改めについて

「真の悔い改めとは、まず自分の過ちを自覚し、その痛みを感じ、神に赦しを請い、その後初めて懺悔を行うことにある。そうして初めて、神の慰めがもたらされる。それゆえ、私は常に人々に悔い改めと懺悔を勧めている。ただ、悔い改めを伴わない懺悔だけは、決して勧めない」

第1章。 罪が人を苦しめることについて

心の清め

— ゲロンダ、キリストはどんな人の心にも宿ることができるのでしょうか？

— キリストご自身は宿ることはできますが、問題は人々がキリストを受け入れる準備ができていないことです。なぜなら、彼らは改心しようと努力していないからです。キリストが私たちの内に宿るためには、私たちの心が清められなければなりません。「神よ、私の内に清い心を造り給え……」⁶³

— ゲロンダ、なぜ野生の動物たちは聖人たちに害を与えないのですか？

— 人々が穏やかになると、野生の動物たちもまた穏やかになり、人間を自分たちの支配者として認めるのです。アダムとエバが墮落する前の楽園では、野獣たちは彼らを畏敬の念を持って舐めていましたが、墮落後は彼らに襲いかかり、引き裂こうとしまし

⁶² ルカによる福音書 22章64節。

⁶³ 詩編50:12。

た。人が墮落前の状態に戻ると、動物たちは再びその人を主人として認めるのです。しかし今日、動物よりも、蛇よりも悪い人々が存在します。彼らは身寄りのない子供たちを私利私欲のために利用し、彼らからお金を巻き上げ、自分たちに不吉な兆しが見えると警察を呼び、すべての罪を未成年者に押し付け、さらには精神病院に送り込むことさえあります。それゆえ、聖アルセニオス・カッパドキオスが、野生の動物たちが穏やかになり、人々に害を及ぼさないようにと唱えた第147篇の詩篇を、私は、人々が穏やかになり、自分と同じ人間にも、動物にも害を及ぼさないようになることを願って、唱えているのである。

— ゲロンダ、人はどのようにして、墮落前の状態に戻ることができるのでしょうか？

— 心を清めなければなりません。心の清さ、すなわち誠実さ、正直さ、利己的でないこと、謙虚さ、優しさ、悪意のなさ、犠牲の精神を身につける必要があります。そうして初めて、人は神との絆を結び、その人の中に神の恵みが宿るのです。もし人に肉体の清さがありながら、心の清さがなければ、神はその人の中に留まられません。なぜなら、そのような人には、偽り、高慢、悪意、そして類似の情欲が宿っているからです。その人の人生は、まさに欺瞞の連続です。あなたの修行は、まさにここから始めなさい——心の清さを獲得するよう努めなさい。

— ゲロンダ、ある悪い習慣を一度に断ち切ることは可能でしょうか？

— まず第一に、その習慣が自分に害を及ぼしていることを理解しなければなりません。それを理解した上で、その習慣から解放されるために闘いを始めたいと願うべきです。悪い習慣を一気に断ち切るためには、強い意志力が必要です。ロープが井戸の丸太の壁に徐々に溝を削り出せば、もはや右にも左にも滑り落ちることはありません。それと同じように、どんな習慣も徐々に心に溝を削り出し、一度その溝に嵌まってしまうと、そこから抜け出すのは困難になります。だからこそ、悪い習慣を身につけないよう細心の注意を払わなければならない。なぜなら、一度身につけてしまうと、それを断ち切るには少なからぬ謙虚さと強い意志が必要になるからだ。ティホン神父が言ったように、「良い習慣とは、息子よ、美德であり、悪い習慣とは情欲である」。

しかし、何と言っても、私はこう確信している。努力を重ねてもなおつまずき続け、変わろうとしない人の原因は、その人の利己主義、自己愛、そして私利私欲にあるのだ。そのような人には謙虚さと愛が欠けており、それが神の介入を妨げている。その人自身が、神に助けをもらうことを拒んでいるのだ。例えば、もし神がそのような人が何らかの情欲を克服できるよう助けてくださったとしても、その人はそれを自分の手柄だと考え、高慢になってしまいうだろう。なぜなら、神の助けなしに、自分一人で情欲を克服したと決めつけてしまうからだ。

罪の闇からの解放

— ゲロンダ、もし人が聖なる洗礼を受けた後に（罪によって）自分を汚してしまったら、それは非常に重い罪となるのでしょうか？

— それは、その人がどれほど自分を汚すかによって異なります。ある人は頭からつま先までまみれ、ある人はほんの少しだけ飛び散り、ある人には汚れたシミが一つ、ある人には二つ……

— では、聖なる洗礼の恵みを汚す罪、つまり重い罪とはどのようなものですか？

— もちろん、大罪は聖なる洗礼を穢し、そうなれば神の恵みもまた、そのキリスト教徒から遠ざかってしまいます。もちろん、守護天使が彼を見捨てないのと同じように、恵みも彼を[完全に]見捨ててわけではありません。ある修道士が、ある偶像崇拜の祭司の娘と結婚しようとしたとき、悪魔がその祭司に何と言ったか覚えていますか？「急ぐな。この修道士は神を見捨てたが、神はまだ彼を見捨ててはいない」⁶⁴

— ゲロンダ、罪の闇の中に生きながら、それを自覚せずにいることは可能でしょうか？

— いいえ、誰もが感じているのです。ただ、人間には無関心さがあるだけです。誰かがキリストの光にたどり着くためには、その人が罪の闇から抜け出そうと願わなければなりません。例えば、暗い地下室に迷い込み、うっかりドアを閉めてしまった人を例に挙げましょう。地下室のどこかの小さな隙間から一筋の光が差し込んでいるのを見ると、その人は光の方へと進み、そっと隙間を広げ、ドアを見つけて外へ出ます。罪の闇の中にいる人も同様です。善を必要だと感じ、善への切実な思いが心に芽生えたその瞬間から、その人はこの闇から抜け出すために努力を重ねるようになるのです。「自分のしていることは間違っている、道を踏み外してしまった」と口にした時、人は謙虚になり、神の恵みが訪れ、その後は正しく生きるようになる。しかし、もしその人に善意の不安が芽生えなければ、改心するのは容易ではない。例えば、誰かが鍵のかかった部屋に閉じ込められ、気分が悪くなっているとする。あなたがその人に「立ち上がって、ドアを開けて、外の新鮮な空気を吸えば気分が晴れるよ」と言っても、その人はこう言い返すだろう。「外の新鮮な空気を吸うなんてできないよ。でも教えてくれ、なぜ私は四方の壁に閉じ込められて、息すらできないのか？なぜここには新鮮な空気がないのか？なぜ神は私をここに閉じ込め、他の人たちには自由を享受する機会を与えたのか？」さて、そんな人を助けることなどできるだろうか？霊的な助けを与えられる人の言葉に耳を傾けないがゆえに、どれほど多くの人々が苦しんでいるか、ご存知だろうか？

人は罪によって、地上の楽園を地上の地獄の苦しみへと変えてしまう。もし魂が死に至る罪で汚されているなら、その人は悪魔的な状態に陥る。反抗的になり、苦しみ、心の中に平安を見出せないのだ。それとは対照的に、神と共に生き、心を神聖な意味へと向け、常に善き思いを抱く者は平安である。そのような人は地上の楽園に生きている。彼には、神なしで生きる者とは明らかに異なる何かがある。

そして、周囲の人々にもそれははっきりと見て取れる。これこそが、たとえその人が人知れずありたいと願っても、その人を明らかにしてしまう神の恵みののだ。

自発的な罪

私たちは、自発的な罪に対して非常に注意を払うべきです。なぜなら、私たちの意志こそが、神が[私たちを裁く際]注目されるものだからです。不注意によって犯した罪は、それほど重くはありません。罪の中には、罪であることに変わりはないものの、情状酌量の余地があるものもあります。

さらに、もし私たちが望まずに罪を犯したとしても、神は私たちの過ちが何か良いことに用いられるよう、すべてを導いてくださいます。これは、その「善」が起こるために私たちが罪を犯すべきだったという意味ではありません。単に、私たちがに犯した過ちを、神が善のために用いてくださり、私たちが望まずに罪を犯したからこそ、そこ

⁶⁴ 『古代パテリコン』参照。モスクワ、1899年。87頁。

から何か良いことが生まれるのです。しかし、もし私たちが意識的に犯した罪を悔い改めるのであれば、その罪の結果として何らかの悪が生じないように、私たち[自身]が祈らなければなりません。

— ゲロンダ、では『エヴェルゲティノス』に語られているあの修道士は、どのようにして救われたのでしょうか？ 彼は10年間、毎日同じ罪を犯していましたが、毎日その罪を悔い改めていました。⁶⁵

— ここで言及されている修道士は、ある意味で情欲に支配され、その虜となっていました。彼には悪意はありませんでしたが、助けを得られず、悪へと突き落とされてしまったのです。だからこそ、彼には神の助けを受ける資格がありました。彼は苦闘し、苦しみ、心からの悔い改めを示しました。そして最終的に、神は彼を救われたのです。お分かりでしょう。人は善意を持っていても、幼少期に助けを得られず、悪に流されてしまえば、その後、再び立ち直るのは困難になります。人は立ち上がろうと努力し、また転び、また立ち上がる……つまり、彼は闘っているのです。神はそのような人間を見捨てたりはしない。何しろ、その不幸な人は自分なりにささやかな努力を尽くし、神の助けを求め、悪意なく罪を犯しているのだから。例えば、ある人が、罪を犯すつもりは全くないまま、ある道へと踏み出す。しかし、その道を歩むうちに、何らかの誘惑にさらされ、罪に陥ってしまう。その後、彼は悔い改め、[罪から解放されるよう]努力するが、また何らかの罠に嵌められ、その不幸な人は、悪いことをしようという気はなかったにもかかわらず、再び転び、また悔い改める。そのような人には、罪を軽減する事情がある。何しろ彼は悪いことをしようとは思っていないが、悪に流されてしまい、その後悔い改めるのだから。しかし、もし誰かが「この目的を達成するためには、このような不正を犯さなければならない。あるいは、別の何かを達成するためには、このような欺瞞に走らなければならない」などと考えるならば、その人は自分の行いを自覚した上で、故意に罪を犯していることになる。つまり、そのような人は自らの罪深い計画を練り、悪魔と共に、ある罪を犯すための計画を立てるのです。そしてこれは、あらかじめ熟考された意図を持って[罪]が犯されるため、極めて非難されるべき行為です。そのような人は、何らかの誘惑に陥るのではなく、誘惑者そのものと共謀して罪を犯し始めるのです。その人は、神の助けを受ける権利がないため、決して神の助けを得ることはない。結局、そのような人々は悔い改めずに死ぬことになる。

しかし、老後に悔い改めると言う人々もまた、果たして悔い改める時間が間に合い、死が不意を突くことはないという確信を、どうして持てるというのか。罪深い生活を送っていたある請負業者のことを覚えている。「年を取ったら、 」と彼は言っていた。「エルサレムへ行き、ヨルダン川で身を清めれば、私の罪はすべて洗い流されるだろう。」そして彼は、これまで通り暮らし続けた。ついに、罪を犯す力さえ失い——歩くのもやっとという状態になったとき——彼はエルサレムへ行くことを決めた。「なあ、 」と彼は自分の職人の一人に言った。「エルサレムに行って、ヨルダン川で身を清めることにしたんだ。」「えー、ご主人、 」と職人は答えた。「もしあなたが清いならたどり着けるでしょう。もし清くないなら、たどり着けないでしょう。」まるで予言のようだった！ しかし、請負業者は必要な書類の手続きをするためにアテネまでたどり着いた途端、亡くなってしまった。ある人々が彼の全財産を持ち去り、彼を葬儀場に運び、そこから棺に入れて彼の街へと送り返してきたのだ。

⁶⁵ 『Εὐεργετινός』第1巻、アテネ、1996年、34頁以降を参照。

キリストへの愛から善行を為そう

—ゲロンダ、これから訪れる困難な年々を思うと、恐怖に襲われます。

—何を恐れているのですか？もしかして、地獄に落ちて、タンガラシュキたちと一緒に苦しむことを恐れているのですか？もしあなたが言うのなら、私は理解できます。「私のキリストよ、あなたに悲しみを与えないよう、私が天国にふさわしい者になれるよう助けてください。あなたが私のためにこれほど多くのことをしてくださったのに、私が地獄にいと知るのは、あなたにとって非常に辛いことでしょうから。」しかし、自分が快適に過ごせるために天国に行きたいという願いには、愛はない。私が言うのは、私たちがだらだらと暮らし、好き放題に振る舞い、地獄の痛みを受けるようになることを勧めているわけではない。だが、時には人間に、ある種の「天国を失わないために善行をしよう」という偏った執着が芽生えることがある。もし私たちに愛があるなら、次のように考えるようになるでしょう。「この世でほんの少しの真の喜びさえ味わえなかった、これほど多くの不幸な人々が地獄で苦しむというのに、私が自分のことばかり考えていていいのか？」率直に言います。私が天国に行くのか地獄に行くのかという問題は、私には関係ありません。私はすでに自分自身を脇に置いてしまったのです。私が天国に行けるかどうかという問題は、キリストのそばにいたいと思わないからではない。そうではない。ただ、私は天国を手に入れるために善行を積むという目標を自分に課していないのだ。「たとえあなたが私を脇に追いやったとしても、私のキリストよ——私は恨みを持たない。なぜなら、私は天国にふさわしくないのだから」と私は言う。

今日、私たちの生活が喜びに乏しく重苦しいのは、英雄主義や愛の精神が薄れてしまったからだ。霊的な人々でさえ、ささいな商人のように考え、偽りの霊的生活を送るに至っている。彼らは、それが罪に変わるまでは、人生からあらゆる快楽を搾り取ろうとする。「これは[もう]罪か[それともまだ罪ではないか]？」——そんな人々は計算する。「いや、[まだ]罪ではない。それなら、これを楽しんでもいい。」例えば、断食についてはこう考える。「ああ、明日は金曜日だ。それなら、今日は深夜11時55分までは肉を食べてもいい。さあ、持ってこい、食べよう！ いや、12時を過ぎたらもうダメだ——新しい一日が始まるから、罪になってしまう。」つまり、こうした人々は、この世の生活も満喫しつつ、天国も失いたくないと願っているのだ。それゆえ、彼らは罪や地獄の痛みに対して、まるで小商人のように軽々しく接している。しかし、もし彼らが誠実に考えていたなら、こう[自分に]言い聞かせていたはずだ：「キリストは私のために十字架の痛みを受け、これほどまでに苦しんでくださった！ それなのに、どうして私が罪深い行いでキリストを傷つけることができるだろうか？ 私が地獄の痛みを受けるのは、地獄にいる私を見るキリストの痛みを耐えられないという理由以外には、決してあってはならない。」

見返りを期待して善行を行うのではなく、キリストへの愛のために努力しましょう。私たちの行うすべてのことが清く、キリストのために成されるよう努めましょう。私たちの行動に、人間的な動機や自己満足、利己心などが混じらないよう注意しましょう。キリストが私たちを見ておられ、見守っておられることを心に留め、キリストを悲しませないよう努めましょう。そうでなければ、私たちの信仰と愛はほころんでしまいます。

そして、霊的生活において私たちが行うすべてのこと——修業、断食、徹夜祈祷など——をよく観察してみると、これらすべてが私たちの肉体の健康も強めていることが

わかるでしょう。誰かが（修行の一環として）硬いベッドで寝ているのでしょうか？医師たちも同じことを勧めています。「柔らかいベッドで寝るのは体に悪いから、硬いベッドで寝なさい」と。誰かが深々とお辞儀をしているのでしょうか？多くの人は筋肉を鍛えるために体操をしています。また、睡眠時間を短く抑えている人はいませんか？しかし、長時間の睡眠は人を鈍らせます。「あの人は眠そうなハエのようだ」と言われ、「あそこの人は素晴らしい、あくび一つしない」と言われることはありませんか？つまり、人が行う霊的な修行は、その人の身体の問題も強めるのです。さらに、人は節制から大きな恩恵を受けます。実際、科学研究などに従事する人々でさえ、頭が混乱せず、思考が明晰であるように、節制した生活を送ろうと努めているのです。もちろん、それが私たちの「修道的な」節制の目的ではありませんが、私たちが行う霊的修行の結果の一つとして、まさに世俗の人々が求めるような恩恵が得られるのです。私たちは霊的な修行を行い、その霊的な修行を通じて、身体の問題も得ているのです。

私たちの生活における誘惑

神は、私たちの霊的な状態に応じて誘惑を許されます。ある場合には、神は私たちが何らかの過ちを犯すことを許されます。例えば、ある事柄において少し不注意になることを許されるのです。それは、次回私たちが注意深くなり、タンガラシュカが私たちに仕掛けようとしていたより大きな悪を回避する、あるいは、より正確に言えば、未然に防ぐためです。また別のケースでは、神は私たちを試すために、悪魔が私たちを誘惑することを許されます。つまり「この場合」、私たちは試験を受けているようなもので、悪の代わりに悪魔が私たちに善をもたらしてくれるのです。のフィラレート長老を思い出してみてください。彼はこう嘆いていました。「わが子よ、神は私を見捨てられた——今日は誘惑が一つもなかった！」⁶⁶ 長老は、キリストから勝利の冠を受けるために、毎日誘惑と戦ったのです。

長老フィラレートのような強い人は、誘惑を避けるのではなく、キリストにこう願う。「わがキリストよ、私に誘惑を送り、戦う力を与えてください。」しかし、弱い人はこう言うだろう。「わがキリストよ、私が誘惑に陥ることを許さないでください。」「私たちを誘惑に遭わせないでください……」⁶⁷ しかし、しばしば、何らかの誘惑に陥ると、私たちは不平を言い始めます。「そんなの無理だ！だって私も人間なんだから、もう無理だ！」——その一方で、私たちが言うべきなのは、「私は人間ではない、私は人間の屑だ。神よ、私が人間になれるよう助けてください！」と。私は、私たちが自ら誘惑を求めるよう呼びかけているわけではありません。しかし、誘惑が訪れたとき、私たちは忍耐と祈りをもってそれに立ち向かわなければなりません。

いかなる霊的な冬の荒天のさなかであっても、忍耐と希望を持って霊的な春を待ちましょう。最大の誘惑は、たいいていハリケーンのように吹き荒れます。そして、それが襲いかかってきたその瞬間に、私たちがそれを回避することができれば、悪魔の群れは「私たちの上を」飛び越えて去り、私たちは危険から解放されるのです。人が神と結ばれるとき、もはや誘惑に遭うことはありません。果たして悪魔が天使に害を及ぼすことなどできるのでしょうか？いいえ、[天使に近づこうとすれば]、悪魔自身こそが焼き尽くされてしまうのです。

⁶⁶ 参照：長老パイシイ『聖山（アトス）の聖父たちと聖山の物語』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、2001年、63頁。

⁶⁷ ルカによる福音書 11章4節。

霊的な生活は実に単純で容易なものです。私たちが誤った方法で精進することで、それを複雑にしているのです。少しの努力を払い、同時に多くの謙遜と神への信頼を持てば、人は大いに成功することができます。なぜなら、謙遜があるところには、悪魔の居場所はないからです。そして、悪魔がいないところには、悪魔的な誘惑もありません。

— ゲロンダ、人は神の許しによって何らかの罪に陥ることがあるのでしょうか？

— いいえ、神が私たちに罪を犯すことを許容していると言うのは、非常に大きな間違いです。神は決して、私たちが罪に陥ることを許容されることはありません。私たち自身が「悪魔に口実を与えることを」許容してしまい、その後、悪魔がやって来て、私たちを誘惑し始めるのです。例えば、高慢を抱いていると、私は神の恵みを自分から遠ざけてしまい、守護天使が私から離れ、別の「天使」——つまり悪魔——が近づいてきます。その結果、私は完全な失敗を味わうことになります。しかし、これは神の許しではなく、私自身が悪魔に「私を罪へと駆り立てることを」許してしまったのです。

— ゲロンダ、自分の墮落について「これは誘惑者が私を罪へと駆り立てたのだ」と言うのは正しいのでしょうか？

— 私もよく、ある人々から「自分の苦しみは誘惑者のせいだ」という話を耳にしますが、実際には、私たち自身に降りかかる出来事に対して誤った態度をとっていることが原因なのです。それに、誘惑者とは、そもそも誘惑者なのです。まさか彼が私たちを悪から遠ざけてくれるのでしょうか？ 彼は自分の役割を果たしているだけです。すべての責任を彼に押し付けてはいけません。ある見習い修道士が、師匠と共にカリヴァ（小部屋）で暮らしていました。ある日、師匠が少しの間席を外した隙に、その見習い修道士は卵を一つ取り、鍵の輪っかに乗せ——昔ながらの穀物倉庫の鍵を覚えていますか？——ろうそくの火で卵を焼こうとしたのです！ すると突然、長老が戻ってきて、彼がその行為をしているところを目撃した。「そこで何をしているんだ？」——「ええ、ゲロンダ、悪霊にそそのかされて卵を焼いてみたんです！」——見習いは言い訳を始めた。すると突然、部屋の中に恐ろしい声が響き渡った。「いやいや、そんなレシピは今まで知らなかったぞ！ 彼から教わったんだ！」悪魔は時々眠るが、私たち自身が彼を（私たちを誘惑するように）挑発しているのだ。

罪人たちは、謙遜するための多くの材料を持っている

かつては罪深い生活を送っていたが、後に悔い改めて霊的な生活を送り始めた人々は、自分に降りかかる屈辱や苦難を喜んで受け入れるべきである。なぜなら、それらを受け入れることで、彼らは過去の負債を清算しているからである。かつてで罪深い生活を送っていたエジプトの聖マリアが悔い改め、人生を変えたとき、彼女を世俗的な欲望が苦しめたことがわかります。しかし、これらの欲望を追い払うために、聖女は壮絶な闘いに身を投じました。悪魔は彼女にこう言いました。「アレクサンドリアをこっそり一瞥したところで、何が失われるというのか？」「まさか、遊びに行くように勧めているわけじゃないぞ！ 遠くからほんの少しだけ眺めるだけだ！」しかし、聖女はその方向さえ見ようとしなかった。なんと深い悔い改めであったことか！ 以前世俗の生活を送っていなかった他の聖女たちには、そのような戦いはなかった。しかし、かつて世俗の生活を送っていた聖女マリアには、その戦いがあった。この（戦いによる）苦しみは、罪の傷を焼き灼くようなものである。このようにして、前者も後者も、同じ（霊的な）状態でその生涯を終えるのである。

— ゲロンダ、エジプトの聖マリアのような場合、修行者は神からの慰めを全く得られないのでしょうか？

— そんなはずがありません！ ありますよ、それもたっぷりあります！ 聖マリアは、祈りの際に地面から肘ほど浮き上がるほど、高い霊的境地に達していたのです。

大罪人は、自分自身を知ること、当然ながら謙遜するための多くの「素材」を手になることになる。もちろん、どんな過ちも過ちであることに変わりはない。しかし、過ちとは同時に、謙虚さと祈りのための「原料」でもあるのだ。罪人が謙虚さのために用いる罪は、まるで植物を肥やすための肥料のようなものだ。それならば、なぜこの物質を自分の魂の畑を肥やすために用いて、その畑を肥沃にし、実りをもたらさないのか。つまり、大きな罪を犯した人は、自分の罪の重さを痛感し、「私は顔を上げて人を見るべきではない」と口にするので、深く謙虚になり、それゆえに多くの恵みを受け入れるのです。その人は着実に、途切れることなく成長し、かなりの〔霊的な〕境地に達することができます。一方、大きな罪を犯していない者は、正しい心構えを持てないため、「神は私を多くの危険から守ってくださったのに、私はこれほどまでに恩知らずだ。私は最も大きな罪人よりも罪深い」とは決して言わないでしょう。そのような人は、自らを謙虚にする罪人よりも霊的に劣っています。

せめてファリサイ人と徴税人の話を思い出してほしい。⁶⁸ ファリサイ人には行いがあったが、高慢もあった。一方、徴税人には罪があったが、彼はそれを認め、悔い改め、謙虚になった——これこそが、キリストが人に求める最も重要なことなのだ。それゆえ、徴税人は「容易な道」によって救われたのである。あるイコンに描かれたファリサイ派の人物の姿をご覧になったことはありますか？ 彼は指で徴税人を指さし、「私はあの人とは違う！」と言っているのです。かわいそうな徴税人は、柱の陰に隠れて、周りを見回すことさえ恐れて目を上げることができません。一方、ファリサイ派の人は、キリストに向かって指をさし、徴税人がどこにいるかを示しているのです！ この点に気づきましたか？ まるで、キリストご自身が徴税人がどこに隠れているのかご存じなかったかのように思えてしまいます！ そして、ファリサイ派が律法の外的な規定を遵守していたにもかかわらず、それらは彼に何の益ももたらませんでした。高慢とはなんと恐ろしいものでしょうか！ 謙遜さを持たない罪人は、徴税人の罪とファリサイ派の傲慢さを併せ持っています。まさに「二倍の『賜物』」です！ エピロス地方で言うところの、「⁶⁹（シラミだらけで、さらに疥癬まで）」という状態です。

霊的に健全になるためには、可能な限り、霊的な毒素——すなわち情欲——から身を清めるよう努めなさい。

第2章。

良心を大切に必要性について

⁶⁸ ルカによる福音書18章9～14節を参照。

⁶⁹ エピル——ギリシャ西部の地域。——訳者注

自らの良心を試してみよう

慈愛に満ちた神は、最初の人類に良心——最初の神の律法——を授けられました。神は良心を人間の心に深く刻み込み、それ以来、誰もが両親から良心を継承しています。

もし人が何か間違った行いをした場合、内面で働く良心がそれを告発し、悔い改めへと導く。しかし、常にその声を聞き取れるようにするためには、正しい霊的实践に励み、自らの良心を試さなければならない。良心を試さなければ、人は霊的な書物を読んでも、聖なる長老たちの助言を受けても、何の益も得られない。そして、良心を試さなければ、神の戒めさえも守り通すことはできないのだ。

— ゲロンダ、自分の実際の霊的な状態を全く見ず、道から外れてしまったことに気づかないまでもよいのでしょうか？

— もし人が自分の良心に注意を払い、それを清めなければ、次第に良心は垢の層に覆われ、感覚が麻痺してしまいます。その人は罪を犯しても、まるで何も特別なことが起きていないかのように感じるのです。

— ゲロンダ、良心をいかに大切にし、慈しむべきか、お話しください。

— 本当に自分の良心の声に従って行動しているのかどうかを確かめるためには、自分自身を省み、霊的指導者に心を開かなければなりません。なぜなら、良心を踏みにじりながら、自分は何の問題もないと思い込むこともあるからです。あるいは、良心を歪めてしまい、自分が犯した罪を善行だと考えてしまうこともあるのです。また、次のような可能性もあります。自分の良心を過度に敏感にしてしまったことが、その人に害を及ぼしているのです。

— ゲロンダ、私は心の中で他人を非難してしまい、その点で自分をコントロールできていません。もしかすると、私が無感覚になってしまったことが原因なののでしょうか？

— 細心の注意が必要です。というのも、初めて罪を犯したとき、人はある種の〔内なる〕非難を感じ、心を痛めるものです。同じ罪を繰り返し犯すと、その非難は弱まり、もし注意を払わずに罪を犯し続ければ、その良心は鈍感になってしまいます。例えば、ある過ちについて誰かに注意を与えると、良心の呵責を感じたり動揺したりしないように、彼らは話題をそらそうとする。まるで涅槃に没入するヒンドゥー教徒のようだ！⁷⁰ ヒマラヤのある青年は、5人のイタリア人登山家を殺害し、遺体を地中に埋めた後、意識を集中させる修行を始めた。地面に座り込み、彼は2時間ぶっ通しで「木、木、木……」と繰り返した。——それは「精神的な真空状態」に入り、起きたことを忘れ、思考による煩わしさから解放されるためだった。例えば、私が修道女たちの誰かを、あるわがままな過ちについて叱ったとしよう。もしその修道女が正しい霊的修行を行わず、改心しようとしなければ、私の叱責に対してこう返すかもしれない。「今日、晩課の鐘はいつもより早く鳴るわね……」——そうして会話の話題をそらそうとするのです。そして悪魔が彼女の頭を混乱させ、「心配するな！ あなたは長老をがっかりさせないためにそう言ったのだ！」と囁くのです。悪魔もまた彼女に言い訳を見つけさせ、「私は自分の良心を踏みにじるためにそうした」と認める代わりに、彼女はこう言い訳するのです。「私は長老をがっかりさせないためにそうしたのよ！」 ほら、タンガラシュカがどん

⁷⁰ 長老が指しているのは、東洋の宗教の信奉者たちが、彼らが「解脱」と理解するいわゆる「涅槃」の状態に到達するために用いるヨガや瞑想の技法である。

なことをしているかお分かりでしょうか？ 実に巧妙な手口です！ 彼は、私たちが自分の過ちに気づかないように、調整ノブを別の周波数に回してしまうのです。

— ゲロンダ、人は自分自身の些細な過ちには気づきながらも、重大な罪には気づかないことがあるのでしょうか？

— そんなはずがないでしょう！ 私の知り合いの告解司祭が、こんな話をしていたんです。ある女性が彼のところへ告解にやって来て、泣き崩れるように泣きながら、同じ言葉を繰り返し言っていたそうです。「私、 、彼女を殺すつもりはなかったんです！」 — 「聞いてください」と、告解司祭は彼女をなだめながら言った。「もしあなたが悔い改めているのなら、神は罪を赦してください。神は悔い改めたダビデをも赦されたのですから。」⁷¹ — 「ええ、ええ、でも私はそんなつもりはなかったんです！」と彼女は繰り返した。「では、どうやって彼女を殺したのですか？」と、告解司祭は慎重に尋ねた。「こうなんです。ほこりを拭いていたら、うっかり雑巾を振り回して、彼女を殺してしまったんです！ でも、あのハエを殺そうなんて思っていなかったんです！」 それに加えて、この女性は夫に不貞を働き、子供たちを捨て、家庭を崩壊させ、行方知れずになって暮らしていたのだが、そのすべてを、まるで取るに足らない些細なことであるかのように語っていた。「これらすべてに対して、悔悛の行いが課される」と、彼女の「偉業」を聞いた告解司祭は言った。「なぜ、彼女が『これらすべて』に対して悔悛の行いを課されなければならないのですか？」と、彼女は反論した。さて、このような人間を、どうすれば助けられるのでしょうか？

押し殺された良心

— ゲロンダ、時々こう言われるんです。「その欲望はあなたの潜在意識の中に潜んでいるけれど、あなたはそれに気づいていない」と。どうすればそれに気づくことができるのでしょうか？

— 自分自身をよく観察すれば、自分は「大丈夫だ」と言っても、やはり気分が優れないことに気づくでしょう。ですから、あなたは〔霊的に〕検査を受ける必要があります。もし人が（肉体的に）気分が悪かったり、体力が低下していたりする場合、その人の検査結果は微生物学研究所で調べられ、体調不良の原因を突き止めるためにCT検査などが行われます。もし心に平安がなく、落ち込んでいると気づいたら、それはあなたの内側に何かうまくいっていない証拠であり、その不調和を見つけ出して正す必要があることを知ってください。例えば、何らかの[罪深い]過ちを犯して心を痛めているのに、告解の場でそれについて黙り込んでしまう場合を想定してみましょう。時が経ち、あなたに嬉しい出来事が起こります。あなたは喜びを感じ、その喜びが罪に対する後悔を覆い隠し、次第にその罪を忘れてしまいます。喜びが蓋のようにその罪を覆い隠してしまったため、もはや自分の罪が見えなくなってしまうのです。

喜びは罪を覆い隠し、その奥深くへと追い込むが、罪は内側から働き続けている。こうして人は良心を踏みにじり、次第に心が鈍感になり、その心は静かに腐り始める。そして、その人はあらゆることに言い訳を見出すようになる。「これは些細なことだ、あれは自然なことだ……」と。しかし、そのような人には安らぎがない。心の奥底に押し込められた動揺が、決して静まることはないからだ。彼は心の中に不安を感じ、内なる平安も静寂も持ち合わせていません。絶え間ない苦悩を抱えて生き、苦しんでいます。その原因が何なのか理解できません。なぜなら、彼の罪は表面上は覆い隠され、心

⁷¹ 『列王記下』12章13節を参照。

の奥底に押し込められているからです。そのような人は、自分が罪を犯したために苦しんでいることに気づいていません。

— ゲロンダ、もしそのような人に、その苦しみの原因が何であるかを[気づかせて]伝えれば、彼にとって助けになるでしょうか？

— 注意が必要です。なぜなら、もし彼に目を開かせれば、彼の良心が目覚めてしまうからです。良心が彼を責め始めるでしょう。そして、もしそのような人が謙虚になれば、真実は彼には耐え難いものとなるため、絶望に至る可能性があります。しかし、もし彼が謙虚になれば、[苦しみの真の原因を知ることは]彼にとって助けとなるでしょう。

— ゲロンダ、生まれつき良心が鈍っている人はいるのでしょうか？

— いいえ、生まれつき良心が鈍っている人はいません。神は鈍った良心を創造されたわけではありません。しかし、もし人が自分の罪を隠蔽し、心の奥底に押し込め続けられ、その良心は徐々に垢の層に覆われ、もはやその人を責め立てなくなるのです。

— ゲロンダ、そのような人は「自己統治型」となり、自分自身の法則を作り出すのですね。

— ええ……恐ろしいことです！……

— それは何ですか？ 魅力ですか？

— そうでしょう？ もちろん、惑わしです。

歪められた良心

— ゲロンダ、あなたはよく、人は自分の良心を損なったり歪めたりしないよう注意しなければならないとおっしゃいます。良心はどのようにして歪んでしまうのでしょうか？

— 自分の考えをなだめることで、人は良心を踏みにじる。長い間自分の考えをなだめ続けると、人は自分用に別の——つまり、自分自身の尺度に合わせて仕立てられた、すなわち歪んだ良心を自ら作り上げてしまう。しかし、その場合、人は内なる安らぎを失ってしまう。なぜなら、歪められ、損なわれた良心は、内なる安らぎをもたらすことはできないからだ。何らかの過ちを犯した人は、たとえ誰かがその過ちに気づかないふりをしたり、「君のせいじゃない、心配するな」と慰めてくれたとしても、安らぎを見出すことはできないのである。様々なグルの信奉者となり、そのようなことに従事している人々の中には、自分たちに何かおかしいことが起きていると気づき、助言を求めて私のところに来る者もいる。しかし、彼らを助けようと私が何かを説明し始めると、彼らは頑なに抵抗し、自分の主張を曲げようとしない。「いいえ、私たちの信仰はすべて正しいのです。」 — 「ちょっと聞いてくれ」と私は答える。「もし君たちの『すべてが正しい』というその『正しさ』が、君に安らぎをもたらしているのなら、なぜわざわざ私に質問しに来るんだ？」 このように、嘘の中に内なる平安を見出せないにもかかわらず、こうした人々は依然として自分の主張を貫き、どこでも少しでも偽りの平安を「手に入れよう」と努めるのです。しかし、彼らは真の平安を見つけることはできません。

「ゲロンダ、人は一生、歪んだ良心を持って生きることができるのでしょうか？」

— 自分の考えを信じているなら、可能です。

— では、その歪んだ良心をどう正せばよいのでしょうか？

— 謙虚に考え、自分の思い込みを鵜呑みにせず、霊的指導者と話し合うならば、正すことができます。

— ゲロンダ、人は[過度に]感受性が強いがゆえに、自分の良心を歪めてしまうことはあるのでしょうか？

— もし良心を歪めてしまったのなら、それはおそらく、その人の感受性が役に立たないことを意味します。なぜなら、腐ったものは腐ったものを引き寄せるからです。「私は感受性の豊かな人間だ」と言う人もいますが、その一方で、他人に対して野蛮に振る舞い、理由もなく襲いかかるのです。

— ゲロンダ、自己正当化に明け暮れる人々の良心は、「垢」で覆われてしまっているのでしょうか？

— 自己正当化にふける者であっても、やはり内なる告発[良心の声]を完全に失っているわけではなく、無感覚というわけではない。そして、人間が無感覚でない以上、自分の罪深い過ちを痛ましく思い、その後、神からの慰めが訪れるのである。しかし、良心を歪めてしまった者は、無感覚の境地に達してしまう。そのような人は、自分が犯した犯罪を自慢するのだ。私は、まるで偉業を誇示するかのように、自分が犯した犯罪について語る人々を目にしてきた。というのも、もし誰かが歪んだ良心をさらに極限まで推し進めてしまうなら、それはもはや単なる心の硬化ではなく、それ以上の何かだからだ。かつて、私がコニツァのストミオン修道院に住んでいた時、⁷² ある男性がそこを訪れ、こう言った。「懺悔したいのです」——「私は司祭ではありません」と私は断ろうとしたが、彼は「いいえ、あなたにこのことを話したいのです」と主張し続けた。私たちのそばには、聖遺物を拝むために修道院を訪れた数人の女性たちがいた。「皆さん、お帰りになったほうがいいですよ」と私は彼女たちに言った。「いいですよ、座って聞いてもらっても構いません」と男は許可し、自分の若い頃の話を語り始めた。「若い頃、私は靴職人の修業に出されたのですが、昼間、工房に座っていると、いつもうたた寝をして、居眠りばかりしていました。『なぜかって？ だって、夜になると、同じように無鉄砲な連中と一緒に盗みに出かけていたからだ。うちの郡には、なかなか手強い警察官がいた。彼はこう言っていた。『さあ、よくやった。夜が暗ければ暗いほど、泥棒には儲かる。俺には羊が二頭必要だ。残りは君たちのものだ——持ち帰れるだけ持って行け』と。」まあ、そういうことなら、我々は、いわゆる「キリスト教徒の家々」を回った。まず、私は茶色の帽子を脱ぎ、真っ先に犬たちの顔に肩から鞭を振り下ろした。私の鞭は良質で、キジの木で作られていた。それから囲いに入り、雄羊二頭と、力の及ぶ限り多くの雌羊を選んだ。子羊は地区長に渡し、雌羊は私たちの羊小屋に隠した。すると、地区長は——どう思う？——ためらうことなく私たちを留置場に放り込んだのだ！ だが、話を続けて聞いてくれ！ 夜中に俺たちが盗みを働いているのを見た家主たちは、早朝から警察署に駆け込み、地区警部にこう言ったんだ。「あの者とあの者が俺たちから盗んだ！」——「どういうことだ？『あの者とあの者』だと？二人とも留置場にいるじゃないか！ 人を誹謗中傷しに来たのか？」と言って、彼らを殴りつけ、痛めつけたんだ！……でも、こんな出来事を話してやろう。ある日、僕らが羊の群れに近づくと、番人がいた。まだ若いヴラシエン人だが、⁷³、牛のようにたくましく、その父親も一緒だった。「どうやって羊の群れに近づけばいい？」と仲間たちが僕に言う。「あいつら、俺たちをマッチ棒みたいに吹き飛ばすぞ！」マッチ棒だって？ まあいい

⁷² コニツァ——ギリシャ西部の町で、長老パイシオスが幼少期から青年期を過ごした場所である。——訳者注

⁷³ ヴラヒ族——ギリシャの山岳地帯に居住し、ロマンス語系の方言を話すバルカン半島の民族。——訳者注

や……。俺は肩から短銃を下ろし、その若者を照準に捉えて——パン！——これで決まりだ、あいつは倒れ込んだ……。その父親はロープで梨の木に縛り付けた……。まあ、言わせてもらうけど、俺たちはそこでいいものをたくさん手に入れたんだ！」そして彼は、これらすべてをまるで英雄的な偉業であるかのように、笑いながら語っていた！ほら、歪んだ良心が人間をここまで追い詰めてしまうんだ。

一方、護送局に勤務していた私の知人の警察官は、ある刑務所から別の刑務所へ護送することになった犯罪者が、数々の罪で軍事法廷により死刑を宣告され、銃殺されたため、泣き止むことがなかった。その警察官は、銃殺された男の親族を探し始め、何人かを見つけ出して謝罪した。しかし、アメリカに住んでいた犯罪者の親族の一人は、彼に次のような返事を送ってきた。「とっくの昔に彼を銃殺すべきだった。そうすれば、これほど多くの人々が生き残れたはずだ！」

ご覧の通り、この警察官と、先ほど私が話したあの男との間には、どれほど[大きな]違いがあるのでしょうか？前者は職務上、単に悪党を刑務所へ護送しただけなのに、[その死について]自分を罪人だと考えていました。一方、後者は自分が犯した犯罪を、まるで英雄的な偉業であるかのように語り、それを自慢していたのです！

偽りは人に安らぎをもたらさない

— ゲロンダ、もし人が自分の考えを信じて独自の世界を作り上げてしまった場合、他者の祈りはその人を助けることができるのでしょうか？

— すでに自分だけの世界を築いてしまったのなら、助けなど必要ないでしょう……。その人は自分だけの世界を丸ごと作り上げたのです！それが些細なことだと思いますか？考えてみてください。もし誰かが自分の思い込みで自分だけの世界を築いたとしたら、その人は安らぎを得て、喜びを感じていると思いますか？それは嘘です。そして嘘は、人を無防備なままにしてしまう。例えば、誰かが隣人を救うために嘘をつかざるを得ない状況があるでしょう。その嘘によって、その人を死からさえ救うことができるかもしれないが、それでも嘘は半分の罪であることに変わりはない。時には、善意から、ある事柄を助けたり誘惑を避けたりするために、人は嘘をつくこともある。例えば、誰にも知られぬよう密かに修道院を訪れる巡礼者がいて、家族の問題を打ち明け、胸の内を吐き出そうとする。その後、仮にその巡礼者の兄弟が修道院を訪れ、「あの人、ここにいませんでしたか？」と尋ねてきたとします。もし真実を話せば、兄弟の評判が傷つくことになるため、長々とした説明をしなければならなくなります。そのため、あなたは「知らない」と答えるしかありません。もし彼が訪れたことを告げれば、事態は暴力沙汰にまで発展しかねないからです。とはいえ、今ここで取り上げているのはそのような事例ではありませんが、それでも注意を払う必要があります。なぜなら、このようなことが3、4回も続けば、人は知らず知らずのうちにさらに踏み込んでしまう可能性があるからです。必要もないのに嘘をつくことに慣れてしまうと、その人の良心は歪んでしまう。ついには、でたらめな話をでっち上げるようになり、その際、良心が全く咎めなくなる。やがて、そのような「でっち上げ」は、まるで科学のように洗練されていくのだ。

ある人たちは、この「嘘を重ねる」という技術を極め、見事に一つ一つの嘘をうまくつなぎ合わせていくものだ！ああ！あなたを何かを信じ込ませるためなら、彼らはでたらめな話を丸ごと作り上げてしまうのだ！ある時、私の知人が私の小屋を訪ねてきたが、彼と同時に、私が助けていた若者の同郷人たちが数人やって来た。その不運な若者

は頭も良く、心も優しいのだが、怠け者で働く気などなかった。何もしないでぶらぶらすることに慣れてしまっていたのだ。4年もの間、私は彼を何らかの仕事に就かせるために奔走してきた。今回もまた、彼の同郷の若者たちにこう頼んだ。「どうかこの若者をどこかの仕事に就かせてやってくれ。私も以前から彼を助けようとしてきたのだ。カストリアの知人のところへも送り、⁷⁴ 毛皮職人の技術を学ばせようとしたが、彼はそこから逃げ出してしまった。彼はまだ若いのだから、道を踏み外してしまうのは残念だ。彼には母親しかおらず、父親は亡くなっている。」これを聞いて、私が頼んでいた人々と同時にやって来た私の知人が、彼らにこう話し始めた。「そう、私とパイシイ神父は、あの子を弟子入りさせて皮革職人にするよう尽力したんだ。でもね、彼が逃げ出した後、彼を預かっていたカストリアの人たちをなだめるために、電報を送るのにどれだけのお金を浪費したか、君たちは知っているか！ まあ、それはもう過去のことですし、そういうことは黙っておいたほうがよいでしょう。当時、私はパイシイ神父にこう言いました。『背の曲がった者は墓が直してくれる』と。——『一体、何を言っているんだ！』——と私は思いましたが、この人を恥をかかせないように、声に出して驚きを表すことはしませんでした。考えてみれば！ その少年について人生で初めて耳にしたにもかかわらず、彼は、私たちが彼と一緒にその若者の世話をし、彼を助けたいと思って「毛皮職人の店に就職させた」などという、まったくの作り話をでっち上げたのだ！ 彼の口調は、私でさえ「もしかすると本当かもしれない」と疑ってしまうほどだった！

— 彼はあなたの目の前でそう言ったのですか？

— 面と向かって。しかも、他の人の前でも。

— 彼はどんな気持ちだったのですか？

— 彼が何を思っていたって！ あの嘘を並べ立てている間、彼はある種の利己的な満足感を抱いていたが、その後、良心の呵責に苛まれていた。彼が心の平安を持っていたと思うか？

— ある出来事を話するとき、人がそれを少し大げさに語ったりすると……

— そう、ちょっとばかり脚色するんだね！ …

— それは虚栄心からなのか？

— それ以外に何がある？ 人は虚栄心や利己心から、何かを誇張して話すものだ。

— そんな人が改心するためには、何が必要でしょうか？

— 嘘をつくのをやめなければなりません。たとえ罪を軽減する事情があったとしても、嘘は依然として罪の半分であることを自覚すべきです。

— ゲロンダ、次のようなことはあり得るでしょうか。誰かが助けの手を差し伸べて何かを与えてくれたとき、私たちは「自分がそれに値したから与えられたのだ」と考えてしまうことは？

— ほら、もし私があなたに「あなた、姉妹よ、あなたは聖人としての境地に達することができる！」と言ったとしたら——その言葉を聞いて、あなたはしばらくの間、愚かな微笑みを浮かべるかもしれないが、内なる平安を得ることはないだろう。偽りは人に平安をもたらさない。他人を傷つけながら「これは私のものだ」と言う不公正な人間も、その心には安らぎがないのと同じだ。考えてみてほしい。トルコ人がコンスタンティノープルを制圧したのはもう何年も前のことだが、に訪れるギリシャ人を見るたびに、トルコ人は他人のものを奪ったと感じ、まるで持ち主が戻ってきたかのような目で見

⁷⁴ カストリア——ギリシャ西部の都市で、毛皮加工の主要な中心地である。——訳者注

つめているのだ！ しかし、彼らはトルコ人であり、あれからすでに長い年月が経っているのだ！

汚れない良心は、決して誤らない警告を与えてくれる

人間にとって、穏やかな良心ほど大切なものではありません。もしあなたの良心が、「もっと何かできたはずなのにしなかった」とあなたを責めないのなら、それは素晴らしいことです。その場合、人は絶え間ない内なる喜びを持ち、その人生全体が祝賀であり、祝祭となります。この内なる喜びが、人に霊的な力を与えてくれるのです。

— ゲロンダ、私たちの行いが神に喜ばれるものであるかどうか、どうすれば分かるのでしょうか？

— 人には内なる啓示があります。

— 自分自身の内なる啓示だけで十分なののでしょうか、それとも他者の証言も必要なののでしょうか？

— 私が言っているのは、良心が損なわれていない人のことであり、自分の良心を歪めてしまった人のことではありません。損なわれていない良心は、誤りのない啓示を与えてくれます。その場合、人は希望を持ち、謙虚にこう言います。「私は天国に入る資格はない。永遠の苦しみを受けるに値するが、それでも神の愛と憐れみが私を見捨てないことを信じている。」彼はそう感じる。なぜなら、彼は努力を重ねており、ただ手をこまねいて「神が私を救ってくれる」という言葉で自分の心をなだめているわけではないからだ。

良心とは恐ろしいものだ！ 良心の灼熱感ほど激しい炎はなく、それ以上の地獄の苦しみもない。良心の呵責は、人間にとって最も恐ろしく、最も苦痛を伴う「虫」である。地獄にいる者たちは、永遠に苦しむことになる。なぜなら、地上での短い生涯——たとえその人生が良心の呵責と内なる息苦しさで満ちていたとしても——のせいで、天国の恵みを失ってしまったという考えに苛まれるからだ。

さらに、地獄の苦しみの中にいる人々の情欲は決して満たされることがなく、それ自体が彼らにとってさらなる苦しみとなるだろう。

— ゲロンダ、では、修道士は実際にどのようにして良心の「殉教」を経験することができるのでしょうか？

— 良心の「殉教」は修道士だけのものではなく、すべての人々のためのものです。さらに、修道士たちは、修業という甘美な苦しみにも耐えています。しかし、本質的に言えば、正しく修業に励む人にとって、良心の「殉教」など存在しないのです。なぜなら、人がより大きな霊的な苦痛を経験するほど、つまり、自分の罪のゆえに、あるいは主の受難に共にあるがゆえに、より深く苦しむほど、それに見合うほど大きな神の慰めが与えられるからです。もし人の良心が安らかであれば、たとえ悲しみや動揺などがあっても、その人は自分の中に神の慰めを感じるのです。

第3章。

自己観察と自己認識の必要性について

自己探求

軍隊、特に通信部隊では、無線追跡ネットワークが整備されており、無線手たちは「味方と敵の無線局を」識別するための表を持っていた。我々は無線局を監視し、どれが敵のものか、どれが味方のものであるかを把握していた。というのも、時折、味方の無線局間の通信に敵の無線手が割り込んでくることがあったからだ。同様に、あらゆる人は自分の思いや行動を観察し、それらが福音の戒めに合致しているかどうかを見極めるべきである。自分の過ちに気づき、それを正すために奮闘しなければならない。なぜなら、自分の過ちを見過ごしたり、他者から指摘されても自分の欠点について深く考えなかったりする者は、霊的に成長することはできないからだ。

自己探求は、他のあらゆる探求の中で最も有益なものです。人は多くの本を読むことができるが、もし自分自身を省みなければ、読んだものはすべて何の役にも立たない。しかし、もし自分自身を省みるならば、たとえ少ししか読まなくても、得られる利益は大きい。後者の場合、その人の行動や振る舞いは、何をするにせよ洗練されていく。

そうでなければ、人は重大な過ちを犯しても、それに気づかない。私のカリヴァに訪問者が来ると、私は庭の反対側から座るための切り株を持ってくる。そして私は、人々が帰る際、誰がこれらの切り株を元の場所に戻すのかについて、全く考えも及ばないことに気づきました。あるいは、私が切り株を一つ運んでいるのを見て、それだけでは全員が座るには足りないことを理解しながらも、訪問者たちは私が他の切り株を持ってくるまで待っているのです。しかし、もしこの人たちがほんの少しでも考えて、「ええと、私たち5、6人もいるのに、まさか神父様が私たちのために庭の反対側から切り株を一人で運ばなければならないのでしょうか?」と言っていたなら、一人一本の切り株を持って、すぐに所定の場所へ運んでいたことでしょう。

— ゲロンダ、ある若い修道女が私にこう尋ねました。「初学の修道士だった頃、長老は自分の闘いにおいて挫折を経験しなかったのですか?『左』への思いは一切なかったのですか?決して非難に陥ることはなかったのですか?」

— 私の闘いの中でそのようなことが起きたり、誰かに叱られたりしたときは、私はそれらすべてに「無条件の権利」を与えませんでした。

— ゲロンダ、「免税権」とはどういう意味ですか?

— 自分の過ちや罪に「無税の特権」を与えるとは、それらを無関心で受け流すことを意味します。つまり、過ちを自覚しても、それが魂に触れることなく、魂の横を「通り過ぎて」いくように努めるのです。もし大地が石のように固まってしまえば、どれほど雨が降っても、その水は大地に染み込まない。自分の過ちや罪に「無税の権利」を与える人間にも、まったく同じことが起こるのだ。そのような人の心の畑は、無関心によって荒れてしまい、何を言われようと、何が起ころうと、彼には何の影響も与えない。つまり、彼は自分の罪悪感を感じず、悔い改めることもないのだ。私が「まだ信仰の初心者の頃」、誰かが私を、例えば「偽善者」と呼んだと知ったとき、私はこうは言わなかった。「そんなことを言うなんて、あいつは馬鹿だ」とは言わず、その人が私についてそう言うに至った原因を探そうとした。「何かがおかしい——と私は考えた——この人は悪くない。私自身が何かに不注意で、彼に口実を与えてしまい、彼が私の振る舞いを誤って解釈してしまったのだ。彼には、何の理由もなくそんなことを言うはずがない。もし私が注意深く、分別を持って振る舞っていたなら、彼は私の行動をそれほど歪めて解釈することはなかっただろう。私は隣人に害を与えてしまった。その責任を神に問われることになる。」そしてすぐに、自分の過ちがどこにあるのかを見つけ出し、それ

を正そうとした。つまり、その人がなぜ私のことをそう言ったのか——嫉妬からか、羨望からか、あるいは他人から聞いた話を誤解したからか——といったことは探ろうとしなかった。その問いには関心がなかったのだ。そして今、あらゆる〔同様の〕状況において、私は同じように振る舞っている。例えば、誰かが私に厳しい言葉を投げかけた場合、私は眠ることさえできない。もしその人の言う通りであるなら、私は心を痛め、自分を改めようと努めます。しかし、たとえその人が考えて言ったこととは違っていても、私はやはり心を痛め、自分が不注意で隣人を誘惑してしまったから、何かしらの過ちがあるのだと考えます。私はすべての責任を隣人に押し付けるわけではない。人々が私の行動をどう見るかではなく、神が私の行動をどう裁かれるかを考えるのだ。

もし人がこのように起こっていることを考察しなければ、何一つ役に立つことはないだろう。「あの人物は自制心を失った」とよく言われる。ところで、人はいつ自制心を失うのか？ それは、自分自身を律していないときだ。もしその人が精神的に問題を抱えており、それゆえに自制できないのであれば、罪を軽減する事情があると言える。しかし、精神的な問題を抱えていないにもかかわらず、自分自身を律していないために自制できない人には、罪を軽減する事情はない。

失敗から得た教訓

自分自身を探究する上で、時折、幼少期から一步步自分の人生を振り返ってみることは非常に有益です。これは、自分が以前どこにいたのか、今どこにいるのか、そしてどこにいくべきなのかを見極めるために必要なことです。過去と現在を比較しなければ、たとえ比較的悪くない状態にあっても、本来あるべき場所にはまだ到達していないということに気づくことはできません……あなたは、神を悲しませているということに気づかないでしょう。人が若いうちは、あまり良い状態ではないことに対して言い訳ができます。しかし、すでに若さを過ぎていくにもかかわらず、同じ状態のままであったり、十分に改善していなかったりするなら、言い訳は通用しません。

年月が経てば経つほど、人は霊的に成熟していかなければなりません。そして、過去の経験を糧として、私たちはより確信を持って、より謙虚に前進していくのです。しばしば、[霊的な]闘いにおける浮き沈みさえも、人が天への霊的な道を実り豊かに、そして確信を持って歩む助けとなるのです。

赤ちゃんが歩き方を覚えている最中に、階段から転げ落ちたり、手すりに頭をぶつけたり、椅子に足を乗せてそこから落ちたりするのは、ごく自然なことです。幼い子は、椅子に足を乗せてその端に立ち上がれば、椅子ごと落ちてしまうことを理解していない。しかし、成長するにつれて、子供は経験を積み、成熟し、注意深くなっていく。「前は——」と子どもは考える。「椅子に足を乗せて、落ちてしまった。今度はもうそんなことはしない。」私たちの[霊的な]戦いにおいても同様です。起きていることすべてを注意深く見守り、すべてを善のために活用することで、私たちは経験を積み、その経験を活用して少なからぬ助けを得ることができます。

覚えているのだが、私たちの家、コニツァには、成馬も子馬も合わせて六頭の馬がいた。ある日、私は子馬たちを丸太の橋を渡らせることになった。ある丸太が腐っていて、4歳の若い馬の足が丸太と板の隙間に落ちてしまった。その後、私は橋を修理し、腐った丸太や板をすべて丈夫なものに交換した。しかし、私が馬たちをこの橋を渡らせるたびに、かつてそこで足を取られたその馬は落ち着きを失い、頭を振り始め、手綱を引きちぎって逃げ出したり、一気に橋の反対側へ飛び越えたりした。お分かりでしょう。

言葉を持たない動物——4歳の馬でさえ、自らの経験を生かして、かつて一度落ちたことのある橋には足を踏み入れなかったのです。それならば、人間は自分の失敗から得た経験を、どれほどもっと活かすべきでしょうか！

敵を一か所に釘付けにして、一撃を加えるべきだ

— ゲロンダ、私はまだ謙遜や犠牲、不公正の受容を愛することができていません

.....

— 事態はあなたが言うほど単純ではありません。私は[あなたを]心配していません。なぜなら、あなたの中に善意に満ちた懸念が芽生えているのを見ているからです。あなたはすぐに情欲から解放されるでしょう。なぜなら、あなたは「罪を犯している現場で自分自身を捕まえる」ようになったからです。そして、これは他のどんな偉業よりも大きな助けとなります。「罪を犯している現場で自分自身を捕まえる」者は、自分の古い人を脱ぎ捨て、正しい霊的な道へと歩み出すのです。私たちの「古い人」は、「新しい人」が成し遂げることを奪い取ります。「古い人」を「罪の現場で捕まえる」ことを学べば、神が私たちに与えてくださる善を奪い取る他のすべての「泥棒」も、その「古い人」と共に捕まえることができます。そうして、霊的な富は私たちの手元に残るのです。

— ゲロンダ、もし私が自分の過ち、例えば姉妹の一人に粗野な言葉を浴びせてしまったことなどを深く悔やんだら、それは私にとって有益になるのでしょうか？

— 確かにあなたにとって有益にはなりますが、やりすぎたり、[適度な悲しみ]の境界を越えたりしないよう、注意する必要があります。悔しさを感じつつも、その悔しさとともに喜びも感じてください。なぜなら、あなたには、表に出てしまった自分の病に気づき、それを癒やすという好機が与えられたからです。こう考えてみて：「私が姉に無礼な態度を取り、ひどい振る舞いをしたということは、私の内側に何らかの激情が潜んでいたということだ。そして今、私に好機が与えられた。その激情が表に出て、私がそれに気づき、正すことができるように。」もちろん、姉に許しを請うことも必要だ。つまりは、自分自身を知る助けとなる。すべてが表に出てきて、静かに（自分自身に対する）有益な働きが成し遂げられていくのです。考えてみてください。医師も、病気の症状を現れさせ、正しい診断を下すために、患者に様々な物質を与えることがあります。例えば、患者に砂糖を与え、その後血液検査を行い、血糖値が上昇したかどうかを確認するのです。

霊的な戦いにおいては、私たちの性格の弱点——つまり欠点——という「座標」を特定し、その後、その箇所に攻撃を集中させる必要があります。まるで戦争のように、ある地域を偵察する際、私たちは地図上に敵の位置や、敵が私たちに攻撃を仕掛けてくる可能性のある拠点に印を付けます。そして、私たちはこれらの場所を特に注意深く監視します。なぜなら、敵が具体的にどこにいるかを知っていれば、自信を持って行動できるからです。軍人は地図を広げ、「敵はここここにいる。つまり、私たちは急いでこの高地とあの高地を占領しなければならない。ここには増援を送る必要があり、ここにはこうした種類の武器が必要だ」と。つまり、敵がどこにいるかを知っていれば、何らかの計画を立てることができるのです。しかし、それを知るためには、[戦闘地域]を注意深く調査し、探り続ける必要があります。ここで気を緩めるわけにはいきません。

— ゲロンダ、人は自分の欠点を自分で気づくのと、他人に指摘されるのと、どちらが良いのでしょうか？

— 人が自分の欠点を自分で見つけるのが望ましいですが、たとえ他者から指摘された場合でも、それに反論すべきではありません。他者からの指摘を喜んで受け入れるべきです。なぜなら、人は自分がそうありたいと願う姿で自分を見てしまいがちで、実際の自分を見失いがちだからです。

— ゲロンダ、他人は、私自身が自分を見るよりも、私を客観的によく見ているのでしょうか？

— そうしたいと思えば、身近な人たちが私たちを見るよりも、自分自身をよりよく見ることができます。つまり、自分自身に対して何かへの反応や過ちを明らかにし、その原因を突き止める方が、本人にとってはやりやすいのです。一方、第三者の観察者は、自分の推測に基づいて身近な人について結論を下してしまうものです。

— ゲロンダ、人はありのままの自分を見ようと努力しても、それが叶わないことはあるのでしょうか？

— はい。その努力の中に高慢さが混じっているなら、人は自分のありのままの姿を見ることはできないでしょう。

他人を鏡のように見つめる必要があるのです

人は、他人を鏡のように見つめることで、自分自身をより良く見ることができる。神は、人がその賜物を善のために使うか否かに関わらず、利益を得るために必要な賜物を一人ひとりに授けておられる。もし人が自分に与えられた賜物を有益に活用すれば、その人は完全さへと至るだろう。私たちの欠点——それが自身の不注意から生じたものであれ、両親から受け継いだものであれ——それもまた私たち自身のものです。私たち一人ひとり、これらの欠点から解放されるために、相応の闘いをしなければなりません。そして、そこから解放されるまでは、隣人の欠点に「映し出される」ことで、自分たちが今どこにいるのかを見極める必要があります。例えば、隣人に何らかの欠点を見つけたら、すぐにこう言うべきです。「ちょっと待って、もしかすると、私にも同じ欠点があるかもしれない。」そして、もし本当に自分の中にその欠点を見つけたら、それを取り除くために闘いに立ち向かわなければなりません。

— ゲロンダ、もし心の声が「私にはそのような欠点はない」と囁く場合、どう答えるべきでしょうか？

— こう答えなさい。「私には他にも、もっと大きな欠点がある。私の欠点に比べれば、この隣人の欠点は取るに足らないほど小さい。」なぜなら、時にはあなたの欠点がいかに小さいこともあるかもしれませんが、その一方で、罪を軽減する事情もあなたの方には少ないからです。人がこのように自分自身を省みれば、自分の欠点は隣人の不完全さよりも大きいと気づくでしょう。そしてやがて、隣人の美德にも目を向け始めるのです。「ちょっと考えてみよう」と、そのような人は言います。「私にはこの美德があるだろうか？ ない。ああ、ああ、ああ！ 自分が本来あるべき〔霊的な状態〕からは、まだどれほど遠いことか！」このような内省を行うことで、人はあらゆるものから助けを得て、良い意味で変化し、より良くなっていく。聖人たちからも、修行者たちからも、さらにはこの世の人々からも恩恵を受けるのだ。例えば、世俗の人々が自己を顧みず、自らを犠牲にしているのを見て、そのような霊的修行を実践しているキリスト教徒はこう言う。「私にも、そんな自己犠牲の精神があるだろうか？ とんでもない！ それどころか、私は霊的な人間なのだから！」そして、そのようにして、彼は目にした善に倣

おうと努める。 私たち——つまりすべての人々——には、やるべきことが山ほどある！
慈愛に満ちた神は、私たちの益となるよう、すべてを英知をもって整えてくださる。

真に自分自身を知る者は、謙遜さを備えているのです

— ゲロンダ、私はたいてい、その罪に陥った後になって、振り返ってみて初めて自分の高慢に気づきます。

— 重要なのは、あなたが堕ちる前にそれに気づくことです。もし「あなたは良いことをした」と言われたとしても、満足感を抱いてはいけません。称賛に囚われたり、それにしがみついたりしてはいけません。

— それには、何が役立つでしょうか？

— 自己認識です。人が自分自身を知り尽くせば、それで問題は解決します。そうすれば、称賛は異物となり、もはやその人にまわりつくことはなくなります。例えば、自分がみすばらしい人間だと知っているなら、「自分は王様だ」という考えが心にまわりつくことはしない。もし自分が王女だと錯覚するなら、それは精神的に未熟であることを意味する。

— もし私があらかじめ、称賛を受け入れない覚悟をしておけば、今話しているような戦いにおいて、それは私の助けになるのでしょうか？

— もちろん、その覚悟を持つよう努めるべきです。しかし、それがうまくいく時もあれば、そうでない時もあるでしょう。 重要なのは、あなたが自分自身を知ることです。自分の「古い人間」を知らなければ、クリスチャンは謙虚になることはできません。そのため、霊的な軌道に乗るために必要な、その〔利己的な〕原子の霊的分裂は起こり得ません。そして、そのようにして、人は世俗的な軌道にとどまってしまうのです。

— ゲロンダ、教えてください。私自身の自己認識が間違っている可能性はあるのでしょうか？

— 私たちはお互いに、誤った状態について話しているわけではないでしょう。自分自身について正しい認識を持っている者は、謙遜を持っています。そして、人が謙遜になれば、必ず神の恵みが訪れます。

自己認識に必要な営みを行う人は、地面を深く掘り進み、その中で有用な鉱物を見つける人に似ています。自己認識を深めれば深めるほど、私たちは自分自身を低く見るようになります。このようにして人は謙虚になるが、神の御手は絶えずその人を高めてくださる。そして、人がついに自分自身を知ったとき、謙虚さはすでにその人の在り方となり、神の恵みは必然的に〔その人の心の中で〕「賃貸契約の更新」を受ける権利を得る。そのような人には、もはや高慢の脅威はない。一方、自分自身に対してそのような行いをしない者は、自らの（霊的な）ゴミに次々と新しいものを加え続け、ゴミの山を膨らませ、しばらくの間はその頂上に高慢に座っているが、最終的には底へと転落してしまう。

私たちは、自分がどのような病にかかっているのかを知る必要があります

— ゲロンダ、私はよく他人の欠点に気づき、彼らを非難してしまいます。

— あなたは自分の病みを知っていますか？

— いいえ。

— だからこそ、あなたは他人の病を知っているのです。もし自分の病を知っていたなら、他人の病など気にも留めなかったでしょう。私は、あなたが他人の苦しみに共感

することをやめるべきだと言っているのではなく、他人の欠点に目を向けるのをやめるべきだと言っているのです。もし人が自分自身と向き合わなければ、悪霊がその人に仕事を見つけ出し、その人は他人のことに気を取られることになる。しかし、自分自身と向き合うことで、人は自分自身も、隣人も理解できるようになる。そうでなければ「誤った認識を抱いたまま」、自分自身について誤った結論を下し、同じ基準で他人に接することで、その人に対しても過ちを犯してしまうのだ。

—ゲロンダ、人が改心するために最も役立つものは何でしょうか？

—何よりもまず、意志、願望です。意志、願望「改心したいという」——それは、ある意味で、善き第一歩なのです。次に、人は自分が病んでいることを理解し、それに応じた「霊的な」抗生物質を服用し始めなければなりません。なぜなら、もし「肉体的に」病気の人が自分の病気を隠し続けていれば、ある時点で——自分自身にとっても予期せぬことに——突然倒れてしまい、その時にはもう医療手段は役に立たなくなってしまうからです。

例えば、ある人が自分が結核にかかりやすい体質であることを知っていて、そのせいで食欲がないとしよう。「どうして食べないの？」と尋ねられる。「えー、」と彼は答える。「この料理、あまり口に合わないんだ！」その後、彼は体力が衰え始め、かろうじて足を動かすのがやっとになる。「どうしたんだ、なぜよろよろ歩いているんだ？」と人々は不思議がる。「いや、僕はね、」と彼は答える。「ゆっくり歩くのが好きなんだ。なんで狂ったように駆け回らなきゃいけないんだ！」彼は、体力が衰えていて、そのせいでかろうじて足を動かしているだけだということを隠している。その後、彼は咳をし始める。「どうして咳をしているんだ？」と人々は彼に尋ねる。「これはアレルギーなんだ！」と彼は答える。彼は、結核がすでに肺を侵し、それがひどく悪化していることを隠している。さらにしばらくすると、患者は血を吐き始める。「これは一体何だ?!」と周囲の人々は尋ねる。「大したことじゃないよ」と彼は答える。「喉の粘膜の炎症さ！」

—ゲロンダ、この人は自分の病気が他人に気づかれないようにするために、これらすべてをしているのですか？

—ええ、彼は自分の病気を隠すためにそう振る舞っているのです。そうして隠し続けていた結果、結核は急速に進行する型へと移行してしまうのです。肺が壊れ、患者の喉からは破裂したパイプのように血が流れ出し、彼はその場に倒れ込み、周囲の人々は彼の病気を知るのです。しかし、その時点で病気はすでに手遅れな段階に達しており、彼を助けるのは容易ではありません。もし病気の初期段階で、例えば微熱の原因が結核の初期症状であると認め、治療を受けていれば、誰よりも健康になっていたはずだ。霊的な生活においても同様である。自分の情欲を正当化する者は、結局のところ悪魔の影響を受け、それは決して見過ごされることはない。ところで、人が悪魔の影響を受けるとどうなるか、知っていますか？悪魔の影響を受けた者は、荒々しくなり、獣のようになり、反抗的になり、人に対して傲慢かつ恥知らずな態度で接し、誰からの助けも受け入れなくなります。

したがって、最も重要なのは、まず人が自分の病を自覚し、それを喜ぶことです。その後、治療を受け入れ、適切な薬を服用しなければなりません。さらに、医師——霊的指導者や長老——に感謝し、その指示に逆らわないことが大切です。例えば、患者に輸血が行われる場合、彼は医師に手を差し出し、静脈を穿刺させ、痛みを感じるが、輸血が自分に役立つことを知っているから耐えるのである。そして、外科手術を受ける人

はどれほど苦しむことか！しかし、その苦しみにもかかわらず、患者は健康になるために手術を受けることに同意するのです。

— ゲロンダ、例えば、誰かからの厳しい指摘が自分のためになると分かっているなら、なぜその指摘を嬉しいこととして受け入れられないのでしょうか？

— まあいい、その指摘に心地よさを見出せないとしても。でも、少なくとも自分が間違ったことをしているとは理解しているだろうか？

— はい、それだけは分かっています。

— まあ、分かっているなら、それだけでも何か進歩だ。考えてみてほしい。病気の人、甘いキャラメルよりも、苦くて苦い薬を喜んで飲む。なぜなら、その薬が自分に利益をもたらすことを理解しているからだ。苦い薬を飲まなければ、病気の人には治らない。人は自分の弱さを自覚し、それに応じた〔霊的な〕薬を受け入れなければ、後にキリストによって強められることはないのだ。

第4章。

私たちが自らの罪深さを自覚することが が神を感動させることについて

自分の過ちを認めること

— ゲロンダ、アバ・イサアクは、祈りにおいては子供のように振る舞うべきだと言っています。⁷⁵

— ええ、子供のように感じるべきですが、それは「言うことを聞かない子供」としてです。自分が父を悲しませたことを自覚し、それを嘆き悲しむ必要があります。そうすれば、神の慈愛を感じる事ができるでしょう。「私は子供だから、神は私を愛し、許してくださるはずだ。だから、好き勝手に振る舞ってもいい」などと言ってはいけません。

— ゲロンダ、聖グリゴリオス・ニッサスのお言葉に、神を「父」と呼ぶためには無情の境地に達さなければならない、そうでなければそれは「罵倒や侮辱」に過ぎないとありました。⁷⁶

— 心配しないで、おバカさん。聖人は、怠惰で罪深い生活を送っている人々のためにそう書いたのです。しかし、罪を犯しながらも、その罪を深く自覚している人であれば、神を「父」と呼んでもよいのです。

— ゲロンダ、私は神に対して多大な負債を抱いていると感じており、それが私を苦しめています。

— あなたが神に対して負い目を感じ始め、謙虚に「罪を犯しました、わが神よ」と口にするその瞬間から、神はあなたを赦し、助け、御自身の恵みを与えてくださいます。そして、その状態で死が訪れたとしても、あなたは救われるのです。だって、あなたは単に自分を罪人だと言いながら、同時に墮落の道を転げ落ち続けているわけではない

⁷⁵ 参照：『聖イサアク・シリア人の修道生活に関する言葉』モスクワ、1993年、97頁。

⁷⁶ Αγίου Γρηγορίου Νύσσης. Εἰς τὴν προσευχὴν. Λόγος Β΄, PG 44, 1141 A; 参照：聖グレゴリオス・ニッサス。著作集。第I部。// モスクワ神学アカデミー発行『聖父たちの著作集（ロシア語訳）』。第37巻。モスクワ、1861年。

でしょう。いいえ、あなたは霊的な努力を続けているのです。あなたは悪魔に支配された状態にあるわけではありません——神よ、どうかお守りください！ 何しろ、神の助けにより、ここ修道院では、すべての修道女たちが、多少の差はあれ、悔い改めの状態にあるのですから。さらに、知っておいてほしいのは、自分には何の価値もないと感じることで、霊的な人は神の恵みを受け入れるのだということだ。なぜなら、自分の罪深さを自覚することが、そのような人にとって〔霊的な〕清めとなるからである。

誰かが私との会話の中で、苦しそうに「私はこういう人間だ、ああいう人間だ、こんな人間だ」と自分自身について語る時、私は嬉しくなります。なぜなら、人が自分の過ちを認めることで、そこから解放されるからです。ある時、アトス山で、私は偶然、ある小屋にたどり着きました。そこには、一人の男が猫や犬たちと一緒に暮らしていました。火事を恐れて、暖を取るために火さえも焚かなかった。この人は、誰からも忘れ去られ、見捨てられていたのだ！ 私は彼を気の毒に思ったが、同情の言葉をかけようとする、彼はこう答えた。「私を憐れむな、修道士よ。私は苦しむべきなのだ。もし私がどれほど多くの悪事を働いたかを知れば、君は私を憐れむことはないだろう。私にとって、今こうして暮らしている環境さえ、あまりにも恵まれているのだ。」しかし、たとえ以前どんな罪を犯したとしても、神はそんな人の救いを用意してくださらないだろうか？ 最近、⁷⁷ 私が病院にいたとき、ある女性が私のところにやって来た。彼女の両手は輸血のせいでひどく傷だらけで、見るのも恐ろしいほどだった！ 文字通り、傷のない場所などどこにもなかったのだ！ 「私には良いところが何一つありません」と彼女は私に言いました。「もしかすると、神様は私を憐れんで、天国に連れて行ってくださるかもしれませんが。だって、私にはこんな悪癖や、あんな欠点があるんですから……」——そして彼女は、ありとあらゆる欠点を挙げて自らを責め立てました。なんと繊細な自己批判をしていたことでしょう！ 私は、彼女のような状態にある他の人を見たことがありません！

「ゲロンダ、ある人がこう言っているのを耳にしました。『私には、〔人を裁くことについて〕キリストは私たちに寛容に接してくださるだろうという考えがあります。』これは正しい考えでしょうか？」

— もしその人に深い謙遜があり、自分の過ちを自覚し、強い罪悪感を抱き、苦しんでいるのであれば、キリストはその人を寛大に「扱って」くださり、赦してくださるでしょう。「わが子よ」とキリストはその人に言われるでしょう、「もうそのことを考えるのはやめなさい。それはすべて取り返しのつかない過去のことで。」しかし、もし自分の罪を自覚せずに、キリストが寛容と慈悲をもって「接してくださる」という考えで自分をなだめているのであれば、それは非常に危険です。それでは、キリストは罪人に報いを与えるということになってしまうのでしょうか？

自分自身を正しく知ることこそが、神を感動させ、私たちに神の助けと天国の喜びを与えてくれるのです。しかし、もし自分自身を知らなくても助けを得ることができたなら、神は私たちにそれさえも求めなかったでしょう。

— ゲロンダ、あなたは「正しい自己認識」とおっしゃいました。では、誤った自己認識もあるのでしょうか？

— はい、あります。自分の内なる人間について誤った認識を持っていると、自分を正当化し、自分の考えをなだめてしまうことがあります。ですから、人が過ちを自覚し

ていると言うとき、私が意味しているのは、その人が少なくとも少しは改めようと努力しているということです。例えば、私があなたに50万ドラクマ借りてしているとします。あなたに会った時、私は「50万の借金がある」と言いますが、その返済については気にかけおらず、単に借金があることを認めているだけです。少し時間が経ち、またそのことを思い出し、再びあなたに「そうだ、そうだ、借金がある」と言います。しかし、これは（借金の）自覚を意味するものではない。本当に借金を自覚している人は、眠れないほどその返済方法を模索する。そしてその場合、「君に借りがある」という言葉は、貸し手が「この借金の返済が債務者を本当に気にかけている」と実感できるような口調で発せられるのだ。

罪深さの自覚と霊的闘争における成功

— ゲロンダ、もし人が霊的な闘いにおいて成功していない場合、自分自身に「お前は今のままだ。お前からはこれ以上何も期待していない」と言うのは正しいことでしょうか。

— 自分の状態をそのように捉えると、惑わされる恐れがあります。そのような人は、ついには「天国に行く運命にある者は、そこへ行くのだ。それなら、なぜ私が努力しなければならないのか」と言い出すことさえあるでしょう。では、聖人たちは闘いなしに聖化されたということになるのでしょうか？ そう言いながら、その人は努力することなく、自らの改心と情欲からの解放を待っている。それは、イチジクの木の下に座り、口を大きく開けて、実が木から落ちて口の中に入ってくるのを待っている老人のようなものだ。

— ゲロンダ、教えてください。どうすれば、自分が霊的に成長しているのか分かるのでしょうか？

— もしあなたが自分の罪深さを自覚しているなら、霊的な進歩もあるでしょう。自分の罪をいかに大きく見るかによって、罪深さへの自覚は深まり、それだけ進歩も大きくなるのです。

— ゲロンダ、自分の罪深い過ちを自覚していても、霊的に成長しないことはあり得ますか？

— 人が自分の罪深い過ちを自覚しながらも、望まないのに再びそれを犯してしまう場合、それはその人に高慢、あるいは高慢になりやすい傾向があることを意味します。そのため、神はその人が成長するのを助けてくださらないのです。

もし人が自分の罪深さを自覚するならば、それは偉大な力であり、偉大な行いです。そうして人は自分自身を嫌悪し始め、謙虚になり、すべての善を神の慈愛と慈しみに帰し、神に対して深い感謝を抱くようになります。それゆえ、神は、自らの罪深さを自覚し、悔い改め、謙虚に生きる罪人たちを、多くの善行を積んでいながらも自らの罪深さを認めず、悔い改めを持たない者たちよりも、より深く愛しておられる。

私たちは、自らの改心を願って、謙虚に神の憐れみを求めるべきです。

— ゲロンダ、聖なる父たちが「悔い改めとは、人が過去の罪を繰り返さないという決意を固め、その罪を深く嘆くことにある」とおっしゃいますが、それは、私たちが犯した罪を常に心に留めておかなければならないということですか？

— いいえ、一つひとつの罪を個別に思い出す必要はありませんが、常に自分の罪深さを自覚しておく必要があります。ある時点までは、人は自分の過ちについて考えるべ

きですが、その後は謙虚に神の慈悲を請うべきです。そして、もしその人に高慢さがなければ、神は彼を助けてくださいます。特に感受性の強い人にとっては、もし悔い改め、過去の罪を告白したのであれば、それらを忘れたほうがよいでしょう。そうでなければ、タンガラシュカが過去の罪を思い出させ、思いに重荷を背負わせ、時間を奪い、祈りから引き離そうとするかもしれないからです。しかし、感受性の鈍い人が、自分の中に高慢が芽生えているのを感じたなら、謙虚になるために自分の罪を思い出すのも悪くありません。

— ゲロンダ、人は自分の罪深さを自覚しつつも、悔い改めを持たないことはあり得るのでしょうか？

— 謙虚さがなければ、あり得ます。悔い改めに利己心が混じると、人は「どうしてこんなことをしてしまったのか」「人々はこれをどう見るだろうか」「私のことをどう思うだろうか」といった考えに際限なく苛まれ、苦しむことになります。「どうしてまたこんなことをしてしまったのか」や「どうしてここまで墮落してしまったのか」という言葉には、利己心が含まれています。そのような言葉には悔い改めはありません。人は自分が罪を犯したことを理解し、それを理解した上で、謙虚に神の慈悲を請わなければならない。「神よ——そのような人はこう言うべきだ——私は罪を犯しました、お赦してください。私はこれほどまでに取るに足らない者です。私を憐れんでください。もしあなたが助けてくださらなければ、私はさらに悪くなるかもしれません。これ以上良くなることはできません。自分だけでは決して改めることはできません。」そして、そう言った後は、その罪を繰り返さないよう努めなければならない。多くの人は、罪を犯したとき、人々の目から見て落ちぶれたからではなく、自分の罪によって神を傷つけてしまったがゆえに、苦痛を味わったのである。

世俗的に生きてきた人が、その世俗的な精神とのつながりを断ち切ると、その後、しばしば望まぬうちに、その精神が自分を惹きつけようとしているのを感じるものです。しかし、そのような人は絶望する必要はありません。私は、このような場合、罪人の内に芽生えた善なる不安こそが前進であると考えます。それは、犯した過ちや、何か[善いこと]をすることができたにもかかわらず行わなかったことについて、その魂を責め立てるものである。静かに葛藤が繰り返され、人は知らず知らずのうちに謙虚になり、善なる絶望、すなわち自らの「自我」に対する絶望を抱くようになる。その時、彼はすべての善を神の恵みによるものと解釈し、主が語られた「わたしなしには、あなたがたは何もできない」という言葉を真に信じるようになる。⁷⁸ その後、そのような人が謙虚な心をもって、神の全能を頼りに精進するようになれば、慈愛に満ちた神は彼を憐れんでくださるだろう。

私たちの罪に対する悲しみ

— ゲロンダ、人は自分が犯した過ちを繰り返さないよう、どのように自分自身を助けることができるのでしょうか？

— もし人が自分の過ちを心から痛ましく思うなら、それを繰り返すことはないでしょう。人が改心するためには、心からの悔い改めを伴う内なる砕かれた心が必要ではありません。それゆえ、聖マルコ・アスコエティスはこう言っています。「もし人が自分の罪を、その重さに応じて深く嘆かないならば、再び容易に同じ罠に陥ってしまうだろう

⁷⁸ ヨハネ15:5。

う。」⁷⁹ つまり、罪が軽ければ、必要な悔い改めも小さく、罪が重ければ、必要な悔い改めも大きくなる。自分の過ちの大きさを顧みず、その大きさに応じてそれを嘆かないなら、人は容易に同じ、あるいはそれ以上の罪に陥ってしまう。

— では、自分の墮落を、その重大さにふさわしいほどに嘆いていないことを、どうすれば理解できるのでしょうか？

— 墮落と悲しみの間に不釣り合いがあることの証拠は、あなたが再び同じ罪に陥ってしまうことです。さらに、自分自身を観察するにあたっては、単なる〔霊的な〕診断だけに留まってははいけません。何しろ、あなたは延々と〔霊的な〕微生物学的研究に没頭しているのですから。自分の〔霊的な〕病原体を見つけると、それをじっと見つめて、「この小さな虫を潰さなきゃ」と言います。しかし、治療には一向に取り掛かりません。さて、あなたは自分が何らかの不調に苦しんでいると確信しました。すぐに、この病気をどう治すかを考えなければなりません。改善しようとしないうまま、ひたすら分析ばかりしていても何の役に立つのでしょうか？ あなたは「私にはこんな情欲がある、あのような情欲もある」と言います。しかし、それらの情欲を切り捨てず、嘆き悲しみながら、相変わらず情欲に囚われた状態のままです。そのようにして、あなたは自分の力を無駄に浪費し、自分自身を無為に消耗させています。あなたは自分の知性と心を浪費しているのです。動揺のせいで病気になり、その後は何もできなくなってしまいます。そして、回復すると、また嘆き始めます。「どうしてあの時、あんなに病気になってしまったのだろう？ なぜこんなことが起きたのか？」と。自分を律すべきではないと言っているわけではありません。いいえ。自分の過ちを見逃してはいけません。しかし、兄弟よ、落ち込むのにも限度があるのです！ 無関心であってはなりません、不幸や不運という感情も避けるべきなのです！ 何か間違ったことをしましたか？ それについて考えましたか？ 自分の過ちがどこにあったのか見つけましたか？ それを自覚しましたか？ その過ちを告白しましたか？ もしそうなら、その道を歩み続け、その過ちにこだわらないでください。ただ記憶の中にしまっておき、次に同じ過ちを繰り返すきっかけが訪れた時に、注意を払えるようにするためです。もし自分の過ちを正そうと努力しないのなら、その過ちを嘆くことは無意味です。過ちを嘆きつつも、それを正そうと努力しないのは、まるで病気の人を泣きながら嘆き続けるだけで、その人が健康になるよう助けようとしないうと同じことです。

— ゲロンダ、自分が犯した過ちのせいで当然の報いを受けているときでさえ、悲しむ必要はないのでしょうか？

— そうではありません。その場合は悲しむべきですが、その悲しみは過ちにふさわしい、相応のものでなければなりません。もし自分が犯した過ちに対して痛みを感じなければ、軽率さから再び同じ過ちを犯してしまうでしょう——つまり、改心できないままになってしまうのです。しかし、悔い改めの悲しみから始まり、絶望にまで至ってしまったなら、それは必要以上に悲しんでしまったということです。そのような場合は、少し気持ちを立て直し、自分の過ちに対して、ある程度の穏やかな無関心を持ちましょう。

⁷⁹ 参照：『慈愛』（ロシア語訳）。第I巻。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1992年。560頁。

私たちに必要なのは、絶望ではなく、自己懺悔です

— ゲロンダ、しかし、霊的な道のりの初めにあって、自分の罪深さを深く自覚することは、果たして容易なことでしょうか？

— 私たちが霊的生活の初めにいるとき、神はご自身の愛ゆえに、私たちが（その重みに）押しつぶされないよう、自分の罪深さを自覚することを許されません。ある純真で感受性の強い魂たちは、自分の罪深さを自覚することに耐えられず、害を被ってしまうでしょう。そのため、神は私たちの目を曇らせ、すべての過ちを一挙に見えないようにしてくださるのです。例えば、服の袖が鳥の糞で汚れていても、それを見て「これは糞ではなく、花びらだ」と思ってしまうようなものです。しかし、私たちが霊的な戦いに進歩を遂げるにつれて、神は少しずつ、私たちに自分の過ちを見られるようにしてください。それと同時に、神は私たちが奮闘し、それらの過ちを正すための力も与えてくださいます。経験がなければ、繊細な働きは役に立ちません。神の恵みを自覚することについても、同じことが言えます。もし人が、霊的生活の初期の段階で神の恵みを見てしまったら、霊的な出血を起こしてしまうでしょう。なぜなら、神の恵みを見て、それに対する自分の不感謝を自覚すると、人は苦しみ、萎んでしまうからです。

— ゲロンダ、私は自分の過ちが見えず、私の心は石のようです。

— 時には、神は私たちの目が自分の過ちを見ないように、また私たちの心が石のようになることを許されます。そうでなければ、悪魔が私たちを絶望の淵へと突き落とし、してしまうかもしれないからです。人は自分の罪深さに対して、分別を持って向き合わなければなりません。心の苦悩や絶望を伴う悔い改めは、神からのものではありません。そのような悔い改めは、タンガラシュカが自分の尻尾で巻きつけたものです。人は注意深くなければなりません。なぜなら、悪魔は人を「右側」——すなわち悔い改めの状態——で捕らえると、「左側」——悲しみと絶望——へと投げ込むことができるからです。悪魔は人間を——精神的にも肉体的にも——打ち砕き、無力な状態に陥らせたいと願っている。つまり、悪魔は別の「砕かれた心」——心の不安に満ちたもの——をもたらし、その「砕かれた心」によって人間を打ち砕こうとするのだ。例えば、悪魔は人にこう言うかもしれない。「お前はそれほど大罪人だから、救われることはない。」人の魂を氣遣っているふりをしながら、悪魔はその人を精神的な不安と絶望に陥れるのだ！では、なぜ悪魔に好き勝手にさせる必要があるのでしょうか？悪魔が「お前は罪人だ」と言ってきたら、こう言い返してください。「それ、あなたには何の関係があるの？私が罪人だと言うのは、私がそうしたいと思った時であって、あなたがそう望む時ではないわ。」

— ゲロンダ、なぜ魂はしばしば落胆に襲われるのでしょうか？

— 気落ちや心の重さは、通常、人が過度に敏感であるために生じる良心の呵責に原因があります。その場合、人は告解を行い、霊父から助けを得られるようにする必要があります。というのも、人が過度に敏感である場合、その人が犯した罪はごく些細なものかもしれませんが、敵はその人の目にはその罪を大きく見せかけるからです。敵は、その人を絶望の淵に突き落とし、無力な状態に陥らせるために、その罪を顕微鏡で覗き込むかのように見せつけるのです。

例えば、悪魔は、そのような過度に感受性の強い人に、自分が身近な人々をひどく悲しませたり、彼らに困難をもたらしたりしたかのように思わせることがある。こうして悪魔は、その人の耐えうる力を超えるほどの動揺に陥らせるのである。しかし、もし悪魔が本当に私たちの魂の幸福を気にかけているのなら、なぜ彼は無感覚な人の良心を

誘惑〔目覚めさせる〕ことには行かないのだろうか？ いや、むしろその逆だ。無感覚な人が正気に戻らないように、悪魔はその人に、大きな罪を何の意味もないものだと考え込ませるのだ。

人は、敵である悪魔が自分の目を通して描く姿ではなく、現実のありのままの自分自身を知らなければならない。何しろ、悪魔が気にかけているのはただ一つ、いかにして私たちに害を及ぼすかということだけだからだ。人は決して絶望してはならない——ただ悔い改めさえあればよいのだ。なぜなら、その人の罪は悪魔の罪よりも小さく、罪を軽減する事情もあるからだ——その人は土から造られたが、不注意のあまり滑って泥にまみれてしまっただけなのだから。

霊的な戦いを正しく行うためには、私たちは〔私たちの霊的な機械の〕車輪を、悪魔が回そうとする方向とは反対の方向に回さなければならない。悪魔は、あたかも私たちが何か大した存在であるかのように思わせようとしているのか？ 私たちは自分の中に自責の念を育む必要がある。「自分には何の価値もない」と吹き込んできますか？「神は私を憐れんでくださる」と言いましょう。もし人がこのように——謙虚に、神を信頼し、神に依り頼んで——振る舞うならば、その人生には悔い改めと謙遜が入り込み、霊的な高みへと登っていくのです。

— ゲロンダ、では、自己非難は霊的な戦いには役立たないということですか？

— 役立ちますが、分別が必要です。例えば、人は自分自身に「ああ、お前はなんて無能なんだ……」と言うかもしれません。しかし、自分を責める際は、悪魔を嘲笑うために謙遜をもって、また勇気をもって行うべきであり、自分の不幸を嘆くような気持ちで行うべきではありません。私たちに必要なのは自己非難であり、絶望ではありません。

もし人が、自分は何も良いことをしていないと信じているなら、もし——良い意味での——自分自身、つまり自分の「私」に対して絶望しているなら、もし、自分の行いによって常にゼロにゼロを重ねていると思いつつも、神への希望を持って霊的な闘いを続けているなら——それは、その人が霊的な成熟に達した証拠である。その場合、慈愛に満ちた神は、その人の善意の「ゼロ」をご覧になり、憐れみをもって、その「ゼロ」の先頭に「1」を置いてくださる。こうして、その人の「ゼロ」は価値を高め、彼は霊的に豊かになる。自分自身への失望という謙虚な状態の中に、善き霊的な状態が潜んでいるのである。

拡大鏡を通した霊的な営み

— ゲロンダ、人はどのようにすれば常に自分を罪深い者と見ることができるのでしょうか？

— 人は、注意深く自分自身を省みることによって、自分を罪深い者と見なすことができます。注意深く省みれば省みるほど、人は自分をより罪深い者と見なすようになるのです。

— では、多くの心配事に追われている人は、どのようにしてそのような修行に取り組めばよいのでしょうか？

— そのような人が、一日のうちに少しでも時間を割いてイエスの祈りを捧げ、また自分の〔霊的な〕得失を計算する決まった時間を設けることができれば、それで良いでしょう。考えてみてください。食料品店の店主は毎日、自分の金を数えています。なぜ

なら、利益や借金を把握していなければ、破産してしまい、借金の穴に突き落とされてしまうからです。

— ゲロンダ、懺悔の際に何を話せばいいのかわからない人もいるようですが、それはなぜでしょうか？

— これは、彼らが自分自身に対する繊細な内省を行っていないことを示しています。もし私たちが繊細な内省を行わなければ、自分自身の粗雑な過ちさえも気づかないのです。私たちは魂の目を清める必要があります。目の見えない人は何も見えません。片目の人はまだ何かを見ることができますが、両目があり、しかも健康な人の方が、他の人よりもよく見えます。ましてや、そのような人が手元に望遠鏡や顕微鏡を持っていれば、はるか遠くにあるものも、すぐ近くにあるものも、非常に鮮明に見ることができるでしょう。例えば、小さな彫刻のアイコンなら、3日で完成させることができます。しかし、それを数日間置いておき、その後再び手に取ってみると、そこには多くの欠点が見つかるでしょう。一つのアイコンに、1週間、1ヶ月、あるいは2年も取り組むことがあります。もし望めば、5年間もそれに取り組むこともできます。しかし、その場合は、拡大鏡を使って作業しなければならないでしょう。私が言いたいのは、霊的な営みにも終わりが無いということです。人が霊的に成長すればするほど、その魂の目は清らかになり、そうして次第に自分の罪をますます大きく見えるようになるのです。こうして人は謙虚になり、神の恵みがその人に訪れるのです。「『私は呪われた罪人だ』と語った聖人たちは、これを信じていました。なぜなら、彼らの魂の目は〔霊的な〕顕微鏡へと変容していたからです。彼らが霊的に成長すればするほど、より強力な霊的な顕微鏡を手に入れ、それによって自分たちを大きな罪人として見ることはできたのです。例えば今、私は肉眼で自分の手を見ていますが、それは美しく見えます。しかし、もし虫眼鏡を通してそれを見ると、今かろうじて見えるこれらの産毛が、まるでヒノキの林のように見えてしまうのです！「おい、兄弟よ」と私は驚いて言うでしょう、「これでは、私はまるで穴居人のようだ」と。このように自分自身に対して霊的な働きを行うことで、あなたは自分の「古い人」に嫌悪感を抱くようになるのです。

私たちの「古い人間」とは、私たちの中に住み着いている悪意に満ちた「居候」のようなものです。彼を追い出すためには、その住処を破壊し、新しい建物を建て始めなければなりません——つまり、新しい人間を築き上げなければならないのです。

第5章。

悔い改めには偉大な力があるということについて

「自ら来て……」⁸⁰

神は私たちに非常に近くにおられますが、同時に非常に高いところにもおられます。人が神にひれ伏し、神が降りてきて共にいてくださるよう願うためには、その人は謙虚になり、悔い改めなければなりません。そうして、その人の謙虚さをご覧になったとき、慈悲深き神はその人を天へと高め、その人に対して大きな愛を注いでくださいます

⁸⁰ ルカ15:17。

。「天では、ただひとりの悔い改める罪人のために喜びがある」⁸¹ ——と福音書は語っている。

神は、人間に知性を与えられたのは、その人が自分の罪がいかに大きいかを深く考え、悔い改め、赦しを請うためである。悔い改めない人は、非常に心が硬くなり、愚かになっている。なぜなら、悔い改めて、自分が今生きているあの小さな地獄の苦しみから解放されようとはせず、それがさらに悪い——永遠の苦しみへと導くからである。このようにして、人は自分自身を、この世の楽園の喜びからも遠ざけてしまう。その喜びは、はるかに大きな永遠の喜びへと変わり、神の御許の楽園で続くものなのだ。

神から遠く離れているとき、人は自分を見失っている。見てごらん、福音書には、放蕩息子が「我に返り、言った。『父のもとへ行こう』」と書かれている。つまり、放蕩息子は、我に返り、悔い改めたことで、父のもとへ戻ることを決心したのです。罪の中に生きていた彼は、自分を見失っており、理性を失い、意味のない生活を送っていました。なぜなら、罪とは常識の及ばないものだからです。

— ゲロンダ、アヴァ・アロニオスはこう言っています。「もし人が望むなら、朝から晩まで神聖な境地に達することができる。」⁸² 彼は何を意味しているのでしょうか？

— 霊的生活には、長い年月は必要ありません。悔い改めれば、人は一瞬にして地獄の苦しみから楽園へと移ることができるのです。⁸³ 人は変わりやすいものです。天使にもなれば、悪魔にもなり得ます。ああ、悔い改めとはなんと大きな力を持っていることでしょう！ それは神の恵みをその内に吸収するのです。もし人がたった一つの謙虚な思いを抱くなら、その人は救われる。もし人が高慢な思いを抱き、かつ悔い改めず、その状態で死を迎えたなら、すべてが終わり——その人は滅びてしまう。もちろん、謙虚な思いには、内なる嘆き、内なる悔恨が伴わなければならない。なぜなら、思いは思いに過ぎないが、人には心もあるからだ。「全き魂と、思いと、心をもって」⁸⁴ ——と、聖歌作家は歌っている。しかし、アッバ・アロニオスは、それよりもさらに確固たる状態を念頭に置いているのだと思う。

善き境地に達するには、ある程度の時間が必要です。私はつまずき、悔い改め——そしてその瞬間、赦しを受けます。もし私に修道者の精神があれば、少しずつ自分の境地を強固にすることができますが、それが実現するまでは、私はあちこちと振り回されてしまうでしょう。

— ゲロンダ、高齢者は霊的に自分自身を助けることができるのでしょうか？

— 人は年を重ねると、幻想が消え去るため、悔い改める特別な機会が与えられます。若く、肉体的にも力があり、困難を経験していなかった頃は、自分の弱さに気づかず、自分は良い状態にあると思い込んでいました。しかし、老いてからは、直面する困難や、それによって生じる嘆きが、自分が正常ではないこと、つまり（霊的に）不自由であることを理解する助けとなり、それを理解した上で悔い改めることができるのです。もしそのような人が、残されたわずかな人生の年月から霊的な益を得、過ぎ去った多く

⁸¹ ルカによる福音書 15章7節。

⁸² 参照：『聖人および至福の父たちの修道生活に関する記念すべき物語』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1993年。42頁。

⁸³ 本件において、長老が念頭に置いているのは、人の死後の運命ではなく、罪人が墮落から立ち直り、この世での生活の状態が変化することである。——訳者注

⁸⁴ 『至聖なる神の母への正規の祈願カノン』、第7歌を参照。

の年月から得た経験を活用するならば、キリストはその人を捨てず、この人を憐れんでくださるだろう。

悔い改めの涙

悔い改めとは、涙による洗礼である。悔い改めることで、人は新たな洗礼を受け、生まれ変わる。使徒ペテロは、その否認によって、ある意味でキリストを裏切った。しかし、彼は「激しく泣いた」⁸⁵、それゆえに、その過ちを赦されたのである。つまり、誠実な悔い改めが使徒ペテロを洗い流し、再び清めたのである。考えてみてください。神はまず大地を創造し、海を創造し、その他すべてを創造し、それから大地を取り、人間を創造されたのです。人はまず肉体的に生まれ、その後、聖なる洗礼の秘跡において、神の創造物である水と、神の恵みである聖霊によって、霊的に生まれ変わる。「水と聖霊によって」⁸⁶、人は生まれ変わり、新しい人となるのである。

— ゲロンダ、つまり、神が人間を創造された際、土を取って人間を造られたのと同様に、今、聖洗礼の秘跡においても、神は人間を新たに造り直すために水を用いられているのでしょうか？

— はい、水には清めの意味があります。そのため、聖洗礼の秘跡において司祭は人を水に浸すのです。人は原罪から洗い清められ、罪から清められ、神の恵みに包まれ、キリストを身にまとい、新しく生まれ変わった人となります。これが聖洗礼の結果です。ニコデモがキリストのもとに来て、人はどのようにして新たに生まれ得るのかと尋ねたとき、キリストは彼にこう明確に答えられました。「まことに、まことに、あなたに告げます。だれでも、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」⁸⁷ 聖なる洗礼の秘跡において、人は墮落後の神による新しく完全な被造物となります。したがって、もし人が自分の聖なる洗礼を汚さなければ、その人には多くの神の恵みが与えられます。しかし、たとえ聖なる洗礼の秘跡を受けた後に自分を汚してしまったとしても、その人には悔い改めの洗礼があります。もし人が自分の罪を自覚し、その罪を痛ましく思うならば、ある意味で悔い改めの涙によって清められ、再び⁸⁸ 神の恵みが彼に訪れるのです。

— ゲロンダ、私はもう何年も自分の罪について泣くことができず、涙が一滴も出ません。これは、私に真の悔い改めがないということでしょうか？

— あなたは、自分が犯している罪に対して、痛みを感じていないのですか？

— 痛みはありますが、おそらくその痛みは浅いのでしょうか。

— 涙だけで結論を出してはなりません。もちろん、涙は悔い改めの顕著な特徴ですが、唯一のものではありません。中には泣いていながら、まだ涙で濡れた目で笑い出す人もいます。心の痛みと内なる嘆き——それこそが、外側の涙よりも高次の、内なる涙なのだ。ある不幸な人が私にこう言った。「神父様、私はなんて冷酷な人間なんだろう！ 私には涙の一滴もないのです！ 私の心は石のようになってしまった。ああ、私の心はなんて冷酷なんだろう！」と。非常に感受性の強いこの不幸な人は、泣かなかつたために自分を極めて冷酷だと感じていました。しかし、彼は深くため息をつき、うめ

⁸⁵ マタイ 26:75 およびルカ 22:62。

⁸⁶ ヨハネによる福音書 3章5節。

⁸⁷ ヨハネによる福音書 3章5節。

⁸⁸ この文脈において、「神の恵みが訪れる」と述べているのは、神の恵みが再び働き始め、悔い改めた罪人の中にその力を現すことを、長老は意味している。

き声を上げており、そのうめき声やため息が、まるでこの不幸な人の心の奥底から湧き出ているかのように見受けられました！ 一方で、泣いたかと思えばすぐに笑ってしまう人もいる。そのような人は、変わりやすい春の天気のようなものだ。例えば、不幸な人を見かけると、そのような人は心を動かされ、少し泣いたかと思うと、すぐにこう自分に言い聞かせる。「ほら、私は他人の痛みにどれほど共感していることか！」あるいは、祈りの最中に少し涙を流した後、こう言う。「涙を流して祈っているのだから、神はそれを聞いてくださるに違いない！」と。こうして、その人は自分の心をなだめるのだ。

しかし、慰めようのない涙もある。こうした涙は「タンガラシュカ」によるものだ。そのような涙には悔い改めはなく、傷ついたエゴイズムがあるだけだ。この場合、人は自分の墮落について利己的に泣いている。神を悲しませたからではなく、不注意だったために他人の目から見て落ちぶれてしまったから、自分の傷口をほじくり返しているのだ。このようにして、彼は二重の苦しみを味わうことになる。内戦中の反乱軍の首領の一人を思い出す。神よ、この人に悔い改めをお与えください！ ある時、9人の子供を持つ貧しい一家の父親が、彼の手に落ちた。この男は共産主義のイデオロギーに同意しなかったため、反乱集団の首領は彼を地面に押し倒し、容赦なく殴り始めた。かつてこの不幸な男は、彼の使用人だったのだ。「聞いてくれ——」と、その男は叫んだ。「まさか、俺を哀れに思わないのか！俺には9人の子供がいるんだぞ！お前が子供の頃、俺がお前を肩車してやったことを覚えていないのか？俺がお前に何をしたというんだ？」首領がその不幸な男を容赦なく蹴り続けているのを見て、一味の一人が彼に叫んだ。「おい、こいつがお前に何をしたというんだ？彼を気の毒に思わないのか？彼は一家の大黒柱なんだから。」すると、たちまち驚くべき変化が起こった。悪党は、仲間のその言葉が自分の利己心を突いたため、苦々しく泣き出したのだ！

このような涙は利己的であり、ユダの悔恨に似ている。キリストを裏切ったユダは、ファリサイ派の人々のところへ行き、「罪を犯しました」と告げようとした。しかし、ファリサイ派の人々はユダにこう答えた。「ところで、なぜ私たちに罪を犯したなどと言うのか？」この言葉にユダは傷つき、激怒してファリサイ派の人々に銀貨を投げつけ、立ち去り、その利己心から首を吊った。⁸⁹ しかし、もしユダが悔い改め、キリストのもとへ行き、「許してください」と告げていたなら、彼は救われていたはずだ。

悔い改めの果てしない営み

— ゲロンダ、喜びをもたらす涙とは何ですか？

— 喜びをもたらす涙とは、自分自身が犯した罪を嘆くことから生じる喜びのことです。喜びをもたらす涙には痛みと喜びの両方が含まれているため、それは「喜びの悲しみ」とも呼ばれます。愛の心から、人はキリストを悲しませたことを嘆きますが、同時に喜びも感じます——それは神の慰めを感じているからです。心から悔い改めた罪人は、神から赦しを受け、自分の中に神の慰めを感じ、霊的な喜びに達することができるのです。

— ゲロンダ、修行に励む人は、生涯を通じて悔い改めのうちに生きることができるのでしょうか？

⁸⁹ マタイによる福音書27章3～5節を参照。

— はい、正しく修行を積む者は、自分の成功などではなく、ただ失敗ばかりを目にし、絶え間ない悔い改めの中で生きています。その人は、最初は一人の悪魔と戦っていたのに、今ではおそらく悪魔の大群と戦っていることさえ気づいていません。 というのも、人が自分の中から情欲を根絶し、美德を植え付けようとするほど、その情欲の根元に敵が集まってくるからです〔彼らはその根を引っ張って下へ引きずり下ろし、修行者がそれを 根絶するのを妨げます〕。そうして、人は自分の進歩に気づかないにもかかわらず、実に大きな進歩を遂げているのです。 こうして人は、死ぬまでその状態で生きることができる。人は自らの進歩に気づかず、一度転べば、それは（霊的に）足踏みしているに過ぎないと考えるかもしれない。しかし実際には、そのような人は進歩しているのだ。なぜなら、絶えず闘いを深め、ますます多くのタンガラシュと戦っているからである。

精進する者にとって、悔い改めは終わりのない手仕事である。誰かが死ぬと、人々はそれを悼み、土に葬り、そしてやがて忘れてしまう……。しかし、私たちは自分の罪について、死ぬまで絶えず嘆き続けることになる。とはいえ、この行いは、私たちを霊的に復活させるために十字架の苦難を耐え抜かれたキリストへの信頼と希望を持って行わなければならない。

人生の変化

罪に陥ることをやめるためには、人はその罪を誘発するあらゆるものを避けるよう努めなければなりません。例えば、アルコール依存症の人が助けを得て酒をやめたいと思うなら、酒場の近くさえ通ってははいけません。少しの熱意と善意があれば、慈愛に満ちた神が私たちが困難を乗り越えるのを助けてくださいます。 例えば、ある人に何らかの情欲があるとします。その人はその情欲を認め、それを断ち切るために努力し、悔い改め、謙虚になります。その人にはその情欲を断ち切ろうという心構えがあり、その心構えが神に伝えられ、神はその人を助けてくださいます。 しかし、もし人が変わろうと努力せず、罪を犯し続けているなら、神はどうしてその人に御自身の恵みを与えることができるのでしょうか。神の恵みは、正しくない状態にある人には訪れません。なぜなら、そのような人にとって神の恵みは助けにならないからです。もし恵みがそのような場合にも助けとなるのであれば、神は悪魔にさえ恵みを授けてしまうことになるでしょう。

何らかの罪に陥ったものの、その罪に沈んでいない人、すなわち罪深い考えにとどまらず、自らの過ちを悔い改め、二度と同じ過ちを繰り返さないよう努めている人は、神の恵みを受け入れ、助けを得ます。しかし、もし人に悔い改めがなく、罪を流行のように考えているなら、その人の状態は悪魔的です。

— ゲロンダ、キリストの隣で十字架にかけられた強盗の一人は、どのようにして救われたのでしょうか？

— この強盗は塀を乗り越えて、楽園に忍び込んだのだ！ 「強盗の悔い改めは楽園を盗み取った」。⁹⁰ つまり、賢明な強盗は、その偉大な悔い改めによって、楽園さえも「盗み取る」ことに成功したのだ。

⁹⁰ 『オクトイヒ』第1声。復活祭の早課（イバコイ）を参照。

— ゲロンダ、人生を改めた人が、かつての罪深い習慣に従って生きてはいないものの、時折、かつての罪のいずれかに陥ってしまう場合、それはその人に悔い改めがないということになるのでしょうか？

— えーと、もし彼が改心するために必要な努力を払っているにもかかわらず過ちを犯してしまうのであれば、彼には罪を軽減する事情があると言えます。最初は人生を変えるのは容易ではありません。しかし、自分が犯した罪がいかに重いものかを真に理解すれば、人はその罪に陥ることをやめるのです。

昔は、悔い改めは誠実なものでした。一度悔い改めた人は、二度と元には戻りませんでした。ある悔い改めた女性のことを覚えています。彼女の真摯な悔い改めは、私にとってどれほど大きな助けとなったことか！彼女は非常に控えめに振る舞い、何も語りませんでした。修道女のような黒い服を身にまとったその女性は、ある小さな礼拝堂を訪れ、そこで片付けをしたり、灯明に火を灯したりしていました……。ただ彼女を見ているだけでも、大きな恵みを得ることができた。しかし今、かつての罪深い生活からようやく改心したばかりの人々が、自分の中にまだ「古い自分」が生き続けているにもかかわらず、他人を教え始めようとしているのを見る。もちろん、誰かが悔い改め、以前のような——淫行や放蕩にまみれた——生き方をやめ、霊的な生き方を始めれば、それは他の人々にとっても大きな助けとなるでしょう。しかし、ある状態から別の状態へと移行したばかりなのに、すぐに自分を霊的な人間であるかのように振る舞い、説教し始めるのであれば、それは惑わしです。

— ゲロンダ、もしかすると、そのような人々は、そうすることで他者を助けられると考えているから、そのような振る舞いをしているのでしょうか？

— ええ、彼らは他者を助けるためにそう振る舞っています。しかし、彼らの行動の背後には——特に多少なりとも有名な人々であればなおさら——「今や、カライスカキス⁹¹やコロクトロニス⁹²のことは忘れられ、私のことが話題になるだろう！」という高慢な思いが潜んでいます。ここから、彼らの動機がいかに墮落しているかがわかります。もし彼らが本当に自分の罪を痛感しているのなら、しばらくの間はそれらの罪を心に留め、自信過剰になることを避けるべきだ。彼らは非常に注意深くなければならない。そして、過去の生活から様々なイメージや思いが浮かんだときは、それらを冒瀆的な思いとして追い払わなければならない。そのような追い払いは、彼らがもはやそれらの思いを受け入れておらず、彼らの「霊的な」存在がそれらに「否定的に」反応していることの証拠となる。つまり、真に変わるためには、人は自分の過去を嫌悪し、深い謙虚さを持たなければならない。もし以前の生活からほんの少し——それほど有害ではないと考えるものだけ——を残しておけば、その後、その「無害な」ものによって、残りのすべてが汚されてしまうことになる。人が、たとえほんのわずかな考え——自分の古い人間性に対するわずかな自惚れ——を抱いたその瞬間から、神は彼への助けを絶ち、その人が行うことは何一つ清らかなものではなくなる。

— ゲロンダ、人は自分の人生を変えた後、以前人々が自分に対して抱いていた考えを正そうと努めるべきでしょうか？

⁹¹ カライスカキス・ゲオルギオス（1782–1827）——エラダの国民的英雄、1821年のギリシャ革命の指導者——訳者注。

⁹² コロクトロニス・テオドロス（1770–1843）——エラダの国民的英雄、1821年のギリシャ革命の主要な指導者。——訳者注。

— 他人の思い込みを正そうと、利己的に努める必要はありません。もし人が自ら改めようと努めれば、人々の思い込みも自然と消え去るでしょう。また、もしその人の以前の罪深い生活が、社会や周囲に傷跡を残していたとしても、その人が正しく、キリスト教徒らしく振る舞うようになれば、その傷跡は自然に癒えていくのです。悔い改めた人は、人々に何も言う必要はありません。神ご自身が、その人の悔い改めの言葉をもって人々に語りかけてくださるのです。

「...私の罪は、私の前にある」⁹³

— ゲロンダ、懺悔の前に自分の罪を忘れないように書き留めておくことは有益でしょうか？

— もし私が犯した罪を本当に痛ましく思っているなら、それを忘れることはできません。私の良心が私を責めるからです。私の魂は痛み、犯した罪を絶えず思い起こしています。罪を犯してから告白するまでの間、その罪は私の中で「働き続け」、私の心を傷つけ、私を責め立てます。つまり、私は苦しんでいるわけですが、その苦しみに応じて神から報いを受けるのです。しかし、もし何らかの罪を犯しても、そのことについて全く考えないのなら、それは私の罪が私を全く傷つけていないことを意味します。私はそれを忘れてしまい、改心しないままになってしまう。だからこそ、ある過ちについて注意されたとき、まるでそれが取るに足らないことであるかのように笑う人々がいるのだ。そこには恥知らずさと無関心がある。自分の罪に対してそのような態度をとることは、まさにサタンのような行いである。預言者ダビデが何と言ったか覚えているだろうか。「わが不義を告白し、わが罪を顧みる。」⁹⁴ また、「わが罪は、わが目の前にある。」とも。神は悔い改めたダビデを赦されたにもかかわらず、彼は——愛のゆえに——内なる痛みを感じ、それゆえ絶えず神からの慰めを受けていた。

一方、一部の人々は絶えず「霊的な」「自己診断」に没頭しており、その行為に飲み込まれてしまっている。彼らは、あたかも繊細な霊的修行を行うためであるかのように、自分の過ちを延々と細かに書き留め、それらの過ちを構成要素に「分解」し、頭を悩ませているが、改心することはない。それに対して、もし彼らが一つずつ自分の大きな欠点に気づき、自らを改める努力をすれば、小さな欠点も自然と消えていくでしょう。

— ゲロンダ、もし人が悔い改めの生活を送らず、それにもかかわらず神を賛美した場合、神はその賛美を受け入れてくださるのでしょうか？

— いいえ、どうして神がそのような賛美を受け入れられるのでしょうか？ 何よりもまず、悔い改めが必要です。なぜなら、もし人が罪の中に留まっているなら、「私たちに光を示してくださったあなたに栄光あれ……」と言ったところで、何の益があるのでしょうか？ そこには厚かましさがありません。そのような人にふさわしい唯一の賛美は、「私の神よ、私を焼き尽くすために雷を落とさないでくださることを感謝します」というものです。なぜなら、この種の賛美には悔い改めが含まれているからです。

⁹³ 詩篇50篇5節。

⁹⁴ 詩篇37篇19節。

強制された悔い改め

— ゲロンダ、アバ・イサアクはこう記しています。「自らの意志によらずに行われるあらゆる悔い改めには、喜びが含まれておらず、また報いに値するともみなされない。」⁹⁵ 人は、自らの意志なしに、どのようにして悔い改めることができるのでしょうか？

— これは、他人の目から見て失墜してしまったために悔い改めを強いられているが、その際に謙遜の心を持っていない人のことを指しています。私は聖イサアクの言葉をこのように理解しています。

— つまり、私たちの意志によらない悔い改めもあるということですか？

— ええ、やむを得ず悔い改めることもあります。例えば、自分にとって不都合な結果を避けたいがために、あなたに与えた悪行を許してほしいと頼むものの、心の中では何も変わっていないのです。狡猾さを極めた人は、悔い改めたふりをし、狡猾に振る舞い、偽りの親切さで人々に頭を下げ、彼らを惑わすために許しを請うのです。しかし、罪人が地獄の苦しみを受けることを恐れて、自分の罪を告白するために告解司祭のもとへ行く場合でも、それは悔い改めとは言えません。つまり、そのような人にとっての課題は、いかにして悔い改めるかではなく、いかにして地獄の苦しみから逃れるかということなのです！ 真の悔い改めとは、自分の罪を自覚し、その罪に対して痛みを感じ、神に許しを請い、その後で告白することである。そうして初めて、神からの慰めが人にもたらされる。だからこそ、私は常に人々に悔い改めと告白を勧めている。告白だけを行うことは、決して勧めない。

考えてみてください。地震が起きると、善意のある人々は強い動揺を覚え、悔い改め、生き方を改めるのがわかります。一方、大多数の人々は、一瞬だけ正気に戻るものの、危険が去ると、また以前の生活に戻ってしまいます。そこで、ある人が自分の街で強い地震が起きたと私に話してくれたとき、私は彼にこう尋ねた。「つまり、かなり激しく揺れたということですね？ しかし、その地震はあなたを『目覚め』させましたか？」——「目覚めた、目覚めた！」——と彼は答えた。「目が覚めたのは確かですが」と私は言った。「でも、また眠ってしまうでしょう。」

悔い改めは人に神の慰めをもたらす

「ゲロンダ、神の慰めとは何ですか？」

— 神の慰めとは何でしょうか？ それをよりよく理解していただくために、一つの例を挙げましょう。例えば、子供が安価な物を壊してしまう、例えば父親の道具を壊してしまったとします。そして、自分が与えた損害を非常に大きなものだと考えて、落ち込んで泣きます。しかし、自分が損害を与えたことを自覚して、悲しみに暮れて泣きじゃくるほど、父親はさらに優しく抱きしめて慰めます。「大丈夫だよ、我が子よ、落ち込まないで。大したことはない、新しい道具を買ってあげよう。」ところが、子供は父親の優しい愛情を見て、その愛情に感動して、さらに泣きじゃくってしまうのです。「落ち込まないわけにはいかないんだ」と、彼は涙ながらに言う。「ちょうど今、この楽器が必要だったのに、僕が壊してしまったんだ。」「我が子よ」と父は再び慰める。「大丈夫だよ、その楽器はもう古かったんだから。」しかし、子供は落ち込み続ける。そして、落ち込めば落ち込むほど、父は彼を強く抱きしめ、キスをして、優しく撫でてや

⁹⁵ 参照：『聖人イサアク・シリア人の修道生活に関する言葉』モスクワ、1993年、11頁。

る。 同じように、人が自分の罪深さや神への不感謝を深く嘆き、自分の罪によって神——すなわち自分の父——を悲しませたことを心から悔いて泣けば泣くほど、神はその人に大きな神の喜びを与え、その人の内面をより一層満たしてくださるのだ。 そのような人の悲しみには痛みが伴うが、そこには希望と慰めがある。

しかし、神の慰めを得たいと願う者は、慰めを求めてはならない。そのような人は、自らの罪を深く自覚し、それを悔い改めなければならない。そうすれば、神の慰めは自然と訪れるのである。 ある時、聖山で一つの誘惑が起こり、何人かの修道士が評判を落としてしまった。そのうちのひとりが、偶然私に出くわすと、こう言い出した。「ああ、君に会いたくてたまらなかったよ。君に慰めてほしかったんだ。」彼は、私に慰めてほしかったのだ。というのも、彼はひどく叱りつけられたからである！ そして認めざるを得ないのは、彼を叱りつけた者が正しく行動したということだ！ 私はこの修道士の話に大きな驚きを覚えながら耳を傾けた。過ちを犯しておきながら、慰めを求めるなんて！ もし彼が慰めを求めず、謙虚に「私は罪を犯しました、神よ」と語っていたなら、神からの慰めが彼の内面に湧き上がっていたはずだ。 しかし、罪を犯したにもかかわらず、彼は私に「大丈夫、心配するな。君の罪はそれほど大きくない。それに、君だけが悪いわけじゃない、他の人たちも悪いんだ」といったことを言ってほしいと望んでいた。さて、これは一体どんな慰めなののでしょうか？ これは慰めではなく、嘲笑です。神からの慰めは、悔い改めから訪れるのです。

— ゲロンダ、罪を犯して墮落した後、人が悔い改めのうちにありながら、同時に心身ともに打ちのめされていると感じる場合、それはその人の悔い改めが正しくないということなののでしょうか？

— 最初の日には、心身ともに打ちひしがれるのも当然です。しかし、その人に真の悔い改めがあるならば、内なる悲しみや痛みを抱えつつも、同時に神からの慰めも感じているはずです。

— ええ、でも、その人は自分の罪も忘れてはいないでしょう？

— はい、自分の罪を忘れてはいません。そのような人は、悲しみ、そして慰められ、悲しみ、そして慰められます。彼は犯した罪のために自らを責め、神は優しく彼を撫でてくださり、彼は再び自らを責め、神は再び彼を撫でてくださる……これこそが、人に神からの慰めをもたらす悔い改めなのです。

第4部。 闇の黒き力

「闇の黒き勢力は無力である。人々自身が神から遠ざかることによって、それらを強大にしているのだ。なぜなら、神から遠ざかることで、人々は悪魔に自分たちに対する支配権を与えているからである」

第1章。 魔術について

これまで、皆さんを助けたいという思いから、天国や天使、聖人たちについてお話ししてきましたが、今回もまた皆さんを助けたいという思いから、私たちが誰と戦っているのかを知っていただくために、地獄の苦しみや悪魔について少しお話ししたいと思います。ある日、チベット出身の若き呪術師が私のカリヴァを訪ねてきました。彼は自分の人生について多くのことを語ってくれました。生後3歳の赤ん坊——母の乳を離れたばかりの頃——に、彼は父親によって30人のチベットの呪術師の集団に預けられ、彼らに呪術の秘術を伝授されることとなったのです。この青年は魔術の11段階まで達していた——最高位は12段階である。16歳になった時、彼はチベットを離れ、父親に会うためにスウェーデンへ向かった。スウェーデンで、彼は偶然正教会の司祭と知り合い、彼と話をしてみたいと思った。若い魔術師は、正教会の司祭がどのような存在なのか全く知らなかった。二人が会話を交わしていた部屋で、青年は自分の力を示そうと、様々な魔術のトリックを披露し始めた。彼はミナという名の年長の悪魔の一人を呼び出し、「水が欲しい」と言った。彼がそう言い終えると、コップの一つが勝手に宙に浮き上がり、蛇口の下まで飛んでいき、蛇口が開くとコップに水が満たされ、その後、閉ざされたガラス扉を突き破って、二人が座っていた部屋へと飛び込んできた。青年はそのコップを受け取り、水を飲み干した。その後、その場から一步も出ることなく、彼は目の前に座る司祭に、全宇宙や空、星々を見せつけた。彼は第四段階の魔術を用い、第十一段階にまで到達しようとしていた。それから彼は司祭に、目の前の光景をどう評価するかと尋ねた。「もし彼がサタンを冒涇していたら——と若い魔術師は私に語った——私は彼を殺すこともできただろう。」しかし、司祭は何も答えなかった。そこで青年は尋ねた。「それなら、なぜあなたも私に何かしらの奇跡を見せてくれないのですか？」——「私の神は謙虚な神である」——と司祭は答えた。それから司祭は十字架を取り出し、それを若い魔術師の手に渡し、こう言った。「もう一つ、何かしるしを見せてみろ。」若者はミナ——最年長の悪魔——を呼び出したが、ミナは白樺の葉のように震えながら、彼に近づく決心がつかなかった。そこで若者はサタンそのものを呼び出したが、サタンもまた、彼の手に十字架があるのを見て、同じように振る舞い、近づくのを恐れた。サタンは彼にただ一つだけ命じた。それは、一刻も早くスウェーデンを離れ、再びチベットへ戻ることだった。すると若者はサタンを罵り始めた。「今、私はわかった。お前の偉大な力は、実は偉大な無力に過ぎないのだ。」その後、若者はその善良な司祭から信仰の真理を教えられた。司祭は彼に聖地、聖アトス山、そしてその他の聖なる場所について語った。スウェーデンを後にした青年は、エルサレムへの巡礼を行い、そこで聖なる火を目にした。エルサレムから彼はアメリカへと向かい、知り合いのサタニストたちに思い切り叱りつけ、彼らの考えを正すためだった。神はこの青年を最高の説教者にされたのだ！ 彼はアメリカから聖アトス山へとやって来た。

幼少期、この不幸な青年は不当な扱いを受けていたため、慈愛に満ちた神ご自身が、彼自身の努力を要することなく、彼の人生に介入して助けてくださった。しかし、魔術師たちがすべての悪魔の軍勢を率いて彼に対して戦いを仕掛けているので、彼のために祈ってほしい。彼らが私に対してこれほどの戦いを仕掛けてくるのだから——彼が私のところに来て助けを求めてくる時——彼自身に対しては、どれほど激しい戦いを繰り広げていることか！ 司祭たちが彼のために呪文を唱えると、この不幸な若者の手の静脈

が破裂し、血が流れ出る。悪魔たちはこの不幸な若者を恐ろしく苦しめている。しかし以前、彼が彼らと親しくしていた頃は、彼らは彼に何の害も与えず、ただ彼を助け、彼の望みをすべて叶えていたのだ。祈ってください。しかし、彼自身も今は非常に注意深くなければならない。なぜなら、福音書には、汚れた霊が人から出て行くと、「出て行って、自分よりもさらに凶暴な七つの霊を連れて戻り、その家に入り住み着く。そして、その人の末路は、初めよりもさらに悲惨なものとなる。」⁹⁶

魔術師たちは、さまざまな悪魔的な「聖物」も利用しています

— ゲロンダ、いわゆる「呪術師」とはどのような者たちですか？⁹⁷

— 魔術師たちです。彼らは占いの際にダビデの詩篇や聖人の名などを用いますが、それを悪魔の召喚と混ぜ合わせています。つまり、私たちが詩篇を読みながら神の助けを求め、神の恵みを受けるのと同様に、彼らもまた詩篇や聖なるものを同じように用いて、正反対のことは行っているのです。すなわち、神を冒瀆し、神の恵みから離れ、その後、悪霊たちが彼らの求めることを行うのです。ある若者の話を聞いたことがある。彼はある目的を達成するために、呪術師のところへ行ったのだ。呪術師は彼の頭上で詩篇の一部を唱え、その若者は望んでいたことを成し遂げた。しかし、ほんの少し時間が経つと、その若者は次第に衰え始め、ろうそくの火が消えるように萎れていった。呪術師は一体何をしたのだろうか？

彼は手のひらに何らかのナッツや種を乗せ、その若者の上で第50篇の詩篇を読み始めた。「神への捧げ物」という言葉——⁹⁸——を口にしながら、彼は手を握りしめ、その中に挟んでいたナッツや種を投げ捨て、そうして悪魔たちに捧げ物をし、自分の願いを叶えてもらおうとしたのだ。こうして、この魔術師は詩篇を用いて神を冒瀆したのである。

— ゲロンダ、魔術を行う者の中には、十字架やイコンを使う者もありますが……

— ええ、それは知っています。このことから、彼らのすべての行動の裏にどのような欺瞞が潜んでいるかがわかります！ 彼らは聖なる品々を利用して、不幸な人々を巧みに操っているのです。人々は、魔術師たちがろうそくに火を灯し、イコンの前で「祈り」、そのような行為を行っているのを見て——そして、その詐欺師たちを信頼してしまうのです。ある人が私にこう話してくれました。彼が住んでいる街で、あるトルコ人女性が、ある石の上に聖母マリアのイコンを置き、今ではその石を「人々を助ける石」と呼んでいるそうです！ 彼女は、聖母マリアが人々を助けているとは言わず、その石が人々を助けていると言っているのです。聖母マリアのイコンを見るキリスト教徒たちは、これに惑わされてしまいます。健康に問題を抱えている人々は、その石から助けを得られるという思いで駆けつけますが、その後、悪魔は彼らを思うがままに操ってしまうのです。というのも、トルコ人女性が「人々を助けるのは神の母ではなく、石だ」と言い出した瞬間、その言葉自体が至聖なる聖母への侮辱であるため、悪魔が即座に介入してくるからだ。人々から神の恵みが離れ、悪霊に取り憑かれる状態が始まる。そこでキリスト教徒たちは、その石に癒やしてもらおうと全速力で駆け寄る——その石とタンガラシュカ（魔女）と共に！ しかし結局のところ、彼らは傷ついてしまう。なぜなら、悪魔から助けを得ることなどあり得ないからだ。もしこれらの人々に少しでも分別があれば

⁹⁶ マタイによる福音書 12章45節。

⁹⁷ 『規則集』を参照。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1992年。101頁。第6回全地公会議の第61条。

⁹⁸ 詩篇50篇19節。

、こう考えるはずだ。「あのトルコ人女性はイスラム教徒だ。彼女が至聖なる聖母マリアのアイコンと、一体どのような関係を持ち得るといえるのか？」と。たとえそのトルコ人女性が「聖母マリアが人々を助けてくれる」と言ったとしても、イスラム教徒である彼女が聖母マリアとどのような関係を持ち得るのか、考え直すべきだったはずです。ましてや、彼女が主張するように、石が人々を癒やすなどと言うことなど、なおさらです！この話を耳にした私は、知人に、その出来事が起きた都市の教区事務局の責任者に事態を報告し、人々をこの悪から守るための適切な措置を講じるよう依頼しました。

—ゲロンダ、人々が私たちに聖像を求めに来ています……

—もし誰かがあなたに「ラダンカ」をねだってきたら、十字架を渡したほうがいいですよ。ラダンカは今や魔術師たちも使っているから、自分で縫うのはやめましょう。彼らはラダンカの外側に聖像や十字架を貼り付けていますが、中には様々な魔術の道具を仕込んでいます。人々は外側の聖像や十字架を見て、惑わされてしまうのです。実は数日前、イブラヒムという名のトルコ人から手に入れたというラダンカが私のもとに持ち込まれました。そのラダンカの外側には十字架が刺繍されていました。ある魔術師について聞いたことがある。彼は神を全く恐れておらず、様々な聖像を筒状に巻き、その中に羊毛や小さな木片、ピン、様々なビーズ、その他類似の品々を詰め込んでいるという。⁹⁹ 教会がこの魔術師を糾弾したとき、彼は自分が霊媒だと主張した。そして、わが国では霊媒に自由が認められているため、彼は相変わらず思いのままに振る舞い続けている。私は、この魔術師によって害を受けたある人物にこう言った。「懺悔しに行きなさい。あなたは悪魔の影響を受けているのだから。」その人は告解に行き、その後私のところに帰ってきてこう言った。「今の状態と、告解前の状態との間に、何の違いも感じられません。」「ねえ、もしかして、あの惑わされた人物から渡された何かを身につけているんじゃないのか？」と私は尋ねた。「ええ、」と彼は答えた。「福音書に似た小さな箱を一つ持っています。彼がくれたものです。」私は彼からその箱を受け取り、開けてみると、中にはさまざまな巻き上げられた小さな聖像が入っていた。それらをほどこいていくと、中には数珠や羊毛の切れ端、木片、その他類似の物が見つかったのだ！私がその哀れな男からその小箱を取り上げた後、彼は悪魔の影響から解放された。ほら、悪魔とはなんと巧妙な存在か！

不幸な人々は、助けを得るためだと称して、このようなお守りや護符を身につけていますが、結局は苦しむことになります。魔術師と関わってしまい、彼らから「祝福」という名目でこのような魔術的な品々を受け取った人は、それらを燃やし、その灰を地面に埋めるか、海に投げ捨てる必要があります。その後、そのような人々は懺悔に行く必要があります。悪魔の影響から解放されるには、それしか方法はありません。ある日、私のカリヴァに、多くの点で非常に深刻な状態にある若者がやって来ました。彼はすでに4年以上もの間、肉体的にも精神的にも苦しめられていました。彼は罪深い生活を送っていましたが、最近では家に閉じこもり、誰とも会おうとしませんでした。聖山に定期的に訪れていた彼の友人二人が、大変な苦勞の末、彼を説得して同行させました。彼らは彼を私のところへ連れてくるためにそうしたのです。ウラヌポリスからダフニ¹⁰⁰までは船で移動した。船が聖山の様々な修道院に停泊するたびに、その青年は疲れ果てて船

⁹⁹ 第61カノン（第6回全地公会議）は、「護符を作る者」に対し6年間の悔悛を課し、もし彼らが悔い改めない場合は教会から破門することを定めている。このカノンは、様々な魔術的物品（例えば、髪の毛、羊毛、爪、ヘビやコウモリの骨など）を封入したお守りや護符を製作する魔術師たちを指している。魔術師たちは、これらの物品を魔術を用いてあらかじめ悪魔の力にさらしておくのである。

¹⁰⁰ ダフニ——聖山の中央にある埠頭。——訳者注

の甲板に倒れ込んでしまった。船に乗っていた友人や修道士たちは、イエスの祈りを唱えながら、彼を正気に戻そうと努めた。大変な苦勞の末、彼らはなんとか彼を私のカリヴァまで連れてくることができた。その不幸な青年は私に心を開き、自分の人生について語った。彼が何らかの悪魔的な影響に苦しんでいると悟った私は、アトス山のある靈的指導者のもとへ行き、その人が言う通りに実行して、そうして癒やしを得るようにと助言した。彼は実際にそこへ行き、懺悔をした。アフォンから戻り、船に乗り込んだとき、その青年は友人たちに、靈的指導者が、知人から贈られ、常に身につけていたお守りを海に投げ捨てるよう命じたと語った。「でも、それを投げ捨てるなんてできない!」と、その若者は嘆いた。友人たちが立ち上がって海に護符を投げ捨てるよういくら説得しても、彼はまるで石像のように固まってしまい、その場から立ち上がることはできなかった。そこで、友人たちは大変な苦勞をして彼を腕に抱えて甲板へと運び出した。友人たちの助けを借りて、青年はその悪魔のようなお守りを外した。彼にはそれを海に投げ捨てる力さえなかった。ただ手を緩めただけで、悪魔のようなお守りは自ら海に落ちていった。瞬く間に、彼は両手が自由になったのを感じ、疲れ果てた体がたちまち力強くなった。生き生きとした若者は喜びのあまり蒸気船の上を飛び跳ね、それから鉄製の船の手すりや船体に手をかけ、自分の手の力を試すために駆け寄った。

魔術を弄ぶ者たちは、多くの嘘をでっち上げる

— ゲロンダ、魔術師たちは人間や起きている出来事などについて、何らかの啓示を受けるのでしょうか?

— 悪魔から何かを教えられることもあります。彼ら自身も多くのことをでっち上げています。アルコンダリクで奉仕しているあなた方、¹⁰¹ は注意深くあるべきです。そこで起きていることを制御不能にしてはなりません。修道院を訪れる人々がどのような者たちかを見極める必要があります。なぜなら、魔術を弄ぶ者がやってくるかもしれないからです。これは皆さんにとって驚きでしょうか? ある時、ここでの徹夜祈祷に、魔術を弄ぶ二人の男がやって来ました。彼らは人々にまわりつき、頭を混乱させました。彼らは、まるで大主教アウグスティヌスとつながりがあるかのように装って、皆を騙していたのです。¹⁰² ある女性に対して、彼らはこう言いました。「あなたには呪いがかけられています。さあ、あなたの家に行って、私たちが持っている十字架を使ってその呪いを解いてあげましょう」と。そして、人々は、魔術師たちが徹夜祈祷会に来て、靈的なことについて話しているのを見て、「彼らは徹夜祈祷会に通っているのだから、きっと信仰深い人たちなのだろう」と思い込み、詐欺師たちに心を開いてしまうのです。彼らはなんと巧妙に、その嘘で人々の頭を惑わせていることか! ある嘘つきは、ある少女を騙そうとして、こう言った。「パイシイ神父は、君と僕が結婚するという幻視を見たんだ。だから、この小さなものを首にかけてくれ。ただ、中身を覗かないでね!」そして、彼は彼女にある種の魔術のお守りを渡した。幸いなことに、その娘はそれを身につけなかった。「ああ、そうか、つまりパイシイ神父はこんな『小物』を扱っているのね!」と彼女は激怒した。迷うことなく机に向かい、私に手紙を書いた——激しい言葉に満ちた手紙だ。4ページにも及ぶ、整った筆跡で! 彼女は私を最もひどい言葉で罵りつけた! 「罵っていい、罵っていい」と、私は手紙を読みながらつぶやいた。「大したこ

¹⁰¹ アルホンダリク——ギリシャの修道院における来客の応接所。——訳者注

¹⁰² アウグスティン（カンディオティス）（1907年生まれ）——1967年から1999年までフロリナ都主教を務めた。——訳者注

とじゃない。私にとって、君の罵倒はまるで癒しの薬のようなものだ——だって、君は騙されずに、悪魔の護符を身につけなかったのだから！」

「彼女はあなたをご存知だったのですか、ゲロンダ？」

— いいえ、知りませんでした。私も彼らを知りませんでした。彼女も、あの詐欺師も。

悪魔的な魔術行為

「ゲロンダ、今日訪ねてきて、霊を呼び出したとあなたに話した生徒たちに、あなたは何とおっしゃいましたか？」

— 彼らに何と言えというのか？ まず最初に、私は彼らを厳しく叱りつけた！ だって、彼らがしたことはすべて、キリスト教の信仰からの背信だったのだから。人々が悪魔を呼び出し、それを受け入れるその瞬間、彼らは神を否定しているのだ。だからこそ、私はまず彼らに悔い改め、心から懺悔し、今後は注意深く振る舞うよう助言した。つまり、教会に通い、担当司祭の許可を得て聖体拝領を行い、貞潔を保つように、と。しかし、これらの生徒たちには——子供である以上——罪を軽減する事情があります。彼らはまるで遊びであるかのようにそれに興じていました。もしこれが大人であったなら、そのような行為は彼らに甚大な害を及ぼしたでしょう。悪魔は彼らに対して少なからぬ支配力を得ていたはずですが、しかし、悪魔はすでにこれらの子供たち全員を翻弄してしまっています。

— ゲロンダ、彼らは具体的に何をしていましたか？

— 多くの人がやっているようなことです……彼らはテーブルの上に水の入ったコップを置き、その周りにアルファベットで円を描きます：アルファ、ヴィータ、ガンマ、といった具合に。それから指を水に浸し、霊、つまり悪魔を呼び出します。コップがテーブルの上を動き回り、文字の前で止まり、そうして言葉が形成されるのです。今日来た子供たちは精霊を呼び出し、それが現れると「神様はいますか？」と尋ねました。「神様なんていない！」と悪魔は答えました。「じゃあ、あなたは誰？」と子供たちは尋ねました。「サタンだ！」と彼は答えました。「サタンはいるの？」と子供たちは尋ねました。「いる！」と彼は答えました。つまり、まったくもって理不尽な話です！ 神はいないのに、悪魔はいるなんて！ そして、彼らが再び「神はいるのか」と尋ねると、彼は「はい、います」と答えました。ある時はいい、ある時はない。そのため、子供たち自身も何を考えればいいのか分からなくなっていました。神は彼らを助けるために、そう仕組まれたのだ。そしてその後、そのグループの一人の少女が、そのコップを割ってしまった。彼女は神の御心に従ってそれを割ったのだ。そうすることで、他の子供たちも正気に戻るためだった。

今日、多くの人が誰かに害を与えようと、蠟人形を使う魔術師の助けを借りています。蠟人形とは、いわばおもちゃのようなもので、魔術師たちの趣味に過ぎません。

— ゲロンダ、彼らはその人形に何をしますのですか？

— 彼らは蠟で人間に似た人形を作ります。誰かが訪ねてきて、例えば敵を盲目にしてほしいと頼むと、彼らは人形の目に針を突き刺し、その際、盲目にしてほしい相手の名前を唱えます。彼らは他にも悪魔的な行為を行います。そして、このように呪いをかけられた人が、罪深い生活を送っていて懺悔もしていない場合、悪魔的な影響がその人の目を襲います。痛みのあまり、まるで目が眼窩から飛び出してしまうかのようです！ その人は医師の診察を受けますが、医師は何も見つけることができません。

そして、霊媒師や超能力者、透視能力者、そして彼らに類する人々が人々にどれほどの悪事を働いていることか！ 人々から金を搾り取るだけでなく、家族をも崩壊させてしまうのだ。例えば、ある人が透視能力者のところへ行き、自分の悩みを打ち明ける。「ほら」と透視能力者は答える。「あなたの親戚の一人、少し浅黒い肌で、身長が平均より少し高い女性が、あなたに呪いをかけたのです。」その人は、親戚の中でそのような特徴を持つ人物を探し始める。親戚の中に、占い師が説明した人物に少しでも似ている人がいないはずがない。「ああ」と、その人は自分の苦しみの「原因」を見つけたと気づく。「つまり、彼女が私に呪いをかけたということか！」そして、彼はその女性への憎しみに支配されてしまう。一方、その可哀想な女性自身は、彼がなぜ自分を憎んでいるのか全く知らない。時には、彼女が彼に何らかの恩恵を与えていたとしても、彼は彼女に対して憎しみを燃やし、彼女の顔を見るのも嫌がるほどだ！ その後、彼は再び呪術師のもとへ行き、呪術師はこう言う。「さて、それでは、君からこの呪いを解かなければならない。そのためには、私にいくらかのお金を払ってもらうことになる。」「まあ、いいだろう」と、混乱した男は言う。「彼が、誰が私に呪いをかけたのか見つけ出したのだから、彼に報酬を払わなければならない！」そして、大金を支払うのだ。

ほら、悪魔がどんなことをしているか分かるか？ 悪魔は誘惑を生み出すのだ。一方、善良な人は——たとえ実際に誰かが誰かに悪いことをしたと正確に知っていたとしても——被害者に「あの人が君に悪事を働いた」などとは決して言わない。いや、彼はその不幸な人を助けようとするだろう。「ねえ、 」と彼は言うだろう。「余計な考えを抱かないで。懺悔しに行って、何も恐れることはない。」こうして彼は、双方を助けるのだ。なぜなら、隣人に害を与えた者は、その人が自分に対して親切に振る舞うのを見て、良い意味で深く考え直し、悔い改めるからだ。

悪魔は決して善を行うことはできない

— ゲロンダ、魔術師は病人を癒すことができるのでしょうか？

— 呪術師が病人を癒やすためか？ 悪魔に苦しめられている人を、呪術師は「癒やす」ことができる——その悪魔を別の人へと送り込むことで。何しろ、呪術師と悪魔は仲良し同士なのだ。呪術師は悪魔にこう言う。「この人から出て、あの人の中に入りなさい」つまり、悪魔の影響下にある人から悪魔を追い出す際、呪術師は通常、悪魔に自分に対する支配権を与えたその人の親族や知人の誰かに、その悪魔を送り込むのだ。すると、体内に悪魔を宿していた人は、「私は苦しんでいたが、あの治療師が私を癒してくれた」と言う。こうして呪術師には宣伝効果が生まれる。しかし結局のところ、その人から追い出された悪霊は、その親族や知人の間をさまようことになる。仮に、悪魔の影響を受けて人が猫背になったとしよう。呪術師はその人から悪魔を追い出し、別の人へと送り込むことができる。そうすることで、猫背だった人は背筋が伸びる。しかし、もしその人が事故の結果として猫背になったのであれば、呪術師は彼を癒すことはできない。

ある時、ある女性が様々な神聖な[シンボルや品物]を用いて病人を「癒している」と聞いた。彼女の行いを知り、私はその虚構、すなわち悪魔の術に驚愕した。儀式の間、その魔女は十字架を手に取り、様々な教会賛美歌を歌う。例えば、彼女は「聖母マリア」を歌い、歌詞の「あなたの胎内の御子は祝福された」という部分に至ると、十字架のそばに唾を吐く。つまり、このようにしてキリストを冒瀆しており、だからこそタンガラシュカが彼女を助けているのだ。このようにして彼女は、悪魔の影響によって病に倒

れた人々——例えば、精神的な落ち込み〔うつ病〕に苦しむ人々——を「癒す」のである。医師たちはこうした人々を治すことができないが、彼女は彼らの魂を圧迫している悪魔を追い出すことで、彼らを「癒す」のである。そしてその後、その悪魔を別の人へと送り込む。しかし、患者の多くは、この魔女を聖人だと信じている！彼らは彼女に相談するが、彼女は密かに彼らの魂を傷つけ、破滅へと導いているのだ。

注意が必要です。人は火や蛇から遠ざかるのと同じように、魔術師や魔術からは遠ざかるべきです。異なるものを混同してはいけません。悪魔は決して良いことをすることはできません。悪魔が「癒す」ことができるのは、自分自身が引き起こした病気だけなのです。

私はある事例を知っている。ある青年が魔術師と関わり、自ら魔術を営むようになった。その後、彼は精神を損ない、病に倒れ、ついには病院に収容された。彼は数ヶ月間入院し、当時は保険などなかったため、父親は多額の費用を費やした。医師たちは病気の原因を突き止めようと努めたが、何も見つからなかった。青年は恐ろしいほど衰弱してしまった。そこで悪魔は一体何をしたか？彼は、その地域の守護聖人である「誠実な先駆者」の姿をとって、この青年の前に現れた。「誠実な先駆者」は病人にこう言った。「お前の父親が教会を建ててくれれば、お前を癒やしてやる。」青年はその幻視を父親に話すと、悲嘆に暮れた父親はこう言いました。「これは私の子供だ。彼が健康になるためなら、私が持っているものはすべて差し出そう。」そして、病人の父親は、聖ヨハネ・バプティストに捧げる教会を建てることを誓いました。悪魔は病人から去り、青年は健康を取り戻しました。悪魔は……「奇跡」を仕組んだのだ！癒やされた後、青年の父は言った。「私は教会を建てるという誓いを立てた。今こそ、その誓いを果たす時だ。」この家族には余分なお金などなく、教会を建てるために、彼らは所有する土地をすべて売り払った。青年の父は破産し、子供たちは皆、路頭に迷うことになった。「この正教会なんて、くたばっちまえ！」——彼らは怒りに任せてそう言い、エホバの証人になった。ほら、悪魔がどんなことをしているか分かるか？おそらく、その地域には以前エホバの証人はいなかったのだろうが、悪魔はそこにもエホバの証人という雑草を撒き散らす方法を思いついたのだ！

どのような場合に魔術は効力を発揮するのか

——ゲロンダ、どのような場合に魔術は効力を発揮するのですか？

— 魔術が効力を発揮したということは、その人が悪魔に自分に対する支配権を与えてしまったということです。つまり、その人は悪魔に何らかの重大な口実を与え、その後、悔い改めと告白によって自分自身を正すことができなかったのです。もし人が懺悔すれば、たとえその人に呪いがシャベルでかき集められるように仕向けられたとしても、害を及ぼすことはない。これは、人が懺悔して清い心を持っているとき、魔術師たちはその人に害を与えるために悪魔と「結託」することができないからである。

ある日、中年の男が私のカリヴァを訪ねてきた。彼は横柄で無作法な態度で現れた。遠くから彼を見ただけで、私は彼が悪魔の影響下にあることを悟った。「君に助けてもらいに来たんだ」と彼は私に言った。「私のために祈ってほしい。長い間、ひどい頭痛に悩まされているのに、医者たちは原因を特定できないんだ。」「君の中には悪魔がいる」と私は答えた。「君が悪魔に自分を支配する権利を与えてしまったから、悪魔が君の中に入り込んだのだ。」「いや、そんなことなんて何もしていないよ」と彼は私に言い張った。「何もそんなことしてない？——と私は言った。「あの娘を騙したこと、

忘れたのか？ そう、彼女は呪術師のところへ行き、君に呪いをかけたんだ。さあ、今すぐ騙したその娘に許しを請い、それから懺悔しなさい。それに、君が健康になるためには、呪文を唱えてもらう必要がある。しかし、もし君が自分の罪を理解せず、自覚せず、悔い改めなければ、たとえ世界中のすべての告解司祭が集まって君のために祈ったとしても、悪魔は君の中から出てはいかないだろう。」このような厚顔無恥な人々が私のところに来ると、私は遠回しな言い方はせず、物事をありのままに言って彼らに語りかける。

また別の人物は、妻が邪悪な霊に取り憑かれており、家で恐ろしい大騒ぎを起こし、夜中に飛び起きて家族全員を起こし、家中をひっくり返していると私に話した。「あなたは告解をしていますか？」と私は彼に尋ねた。「いいえ」と彼は答えた。「おそらく」と私は言った。「あなたは悪魔に自分に対する支配権を与えてしまったのでしょうか。そのようなことは、理由もなく起こるものではありません。」その人は自分のことを話し始め、ついに私たちは彼の妻に起こっていたことの理由を突き止めた。実は、彼はあるホジャを訪ねたことがあり、そのホジャは「幸運を祈って」と、家に振りかけるための何らかの水を与えていたのだ。この男は、この悪魔的な散水に何の重要性も感じていなかった。そしてその後、悪魔は彼の家で本気で暴れ始めたのだ。

呪術はどのようにして破ることができるのか

— ゲロンダ、もし魔術が人に作用し、その人に力を及ぼしてしまった場合、どうすればそこから解放されるのでしょうか？

— 魔術から解放されるには、悔い改めと懺悔が必要です。なぜなら、まず第一に、魔術が人に影響を及ぼした原因を見つけ出さなければならないからです。その人は自分の罪を認め、悔い改め、懺悔しなければなりません。呪いによって苦しめられている多くの人々が、私のカリヴァを訪れ、「この苦しみから解放されるよう、私のために祈ってください！」と懇願してきます。彼らは私の助けを求めますが、その一方で自分自身を深く見つめようとはせず、自分に降りかかった悪の根源が何なのかを理解しようとしません——その原因を取り除くために。つまり、こうした人々は、自分たちの過ちが何であったか、そしてなぜ呪いが自分たちに効力を発揮したのかを理解しなければならないのです。彼らの苦しみが終わるためには、悔い改め、懺悔をしなければならないのです。

— ゲロンダ、もし呪いをかけられた人が、もはや自分自身ではどうすることもできないような状態になってしまったらどうでしょうか？ つまり、もう懺悔に行ったり、司祭と話し合ったりすることができない場合です。他の人がその人を助けることはできるのでしょうか？

— その人の身内は、司祭を家に招き、その不幸な人に「聖油の秘跡」を授けたり、聖水による祈祷を行ってもらったりすることができます。そのような状態にある人には、聖水を飲ませるべきです。そうすることで、悪が少しでも退き、キリストが少しでもその人の中に入ってくるからです。ある女性は、お子さんがあなたが言及しているような状態にあった際、このように対処し、その結果、その子は助けを得ました。彼女は、息子に呪いがかけられたため、とても苦しんでいたと私に話してくれました。「彼には懺悔に行ってもらする必要があります」と私は彼女に助言しました。「神父様、」と彼女は叫びました。「そんな状態で、どうして彼が懺悔に行けるというのですか？」——「それなら、」と私は彼女に言いました。「あなたの担当司祭に、ご自宅に来て聖水祈願

の礼拝を行ってもらうよう頼み、その聖水を息子さんに飲ませてあげてください。「でも、彼はそれを飲んでくれるでしょうか？」——「飲んでくれます」と彼女は答えた。「それなら」と私は言った。「まず聖水祈願の礼拝から始めて、それからお子さんが神父さんと話せるように努めてください。もし彼が懺悔をすれば、悪魔を遠くに追い払うことができるでしょう。」そして実際、その女性は私の言うことを聞き、息子もその恩恵を受けた。少し時間が経つと、彼は懺悔することができ、健康を取り戻した。

ところで、別の不幸な女性がどんなことを思いついたかご存知ですか？ 彼女の夫は魔術師たちと関わってしまい、首にかけられる十字架さえ身につけたがらなかったのです。少しでも彼を助けようと、彼女は夫のジャケットの襟に小さな十字架を縫い込みました。ある日、夫は橋を渡って川の対岸へ行く必要がありました。橋に上がると、ある声が彼にこう囁くのが聞こえました。「アナスタシー！ アナスタシー！ そのジャケットを脱いでくれ、そうすれば俺たちも一緒に橋を渡れるから。」幸い、その日は寒かったので、彼は「脱ぐなんてとんでもない。凍えるような寒さだ！」と答えた。「脱げよ、」と同じ声が彼を説得した。「脱いでくれ、そうすれば俺たちも橋を渡れるから。」くそっ、悪魔め！ 悪魔はこの男を橋から川へ突き落とそうとしたが、彼には十字架が縫い付けられていたため、それができなかった。結局、悪魔は不幸な男を橋の端まで突き落とすのが精一杯だった。家族は一晩中探し回り、ついに橋の上に横たわっている彼を見つけた。もし寒くなければ、彼は上着を脱いでいたでしょう。そうなれば、悪魔は彼を川に突き落としていたはずです。この男を救ったのは、服に縫い付けられていた十字架でした。彼の不運な妻は信仰深い人でした。もし彼女に信仰がなかったなら、彼の服に十字架を縫い付けることなどしたのでしょうか？

魔術師と悪魔たちの共謀

— ゲロンダ、聖性を備えた人は、ある魔術師を助けることはできないのでしょうか？

— どうして彼を助けられるというのか？ 神への畏れを少しばかり持っている人に対してさえ、「その生き方は誤った道だ」と注意を促しているのだ。それなのに、そのような人は、たとえ神への畏れを持っていても、相変わらず自分の好きなように振る舞う。ましてや、悪魔と結託している魔術師など、言うまでもない！ そんな人間をどうやって助けられるというのか？ 君が彼に霊的なことを話しても、彼は相変わらず悪魔の側に留まるだろう。魔術師には何の助けにもならない。ただ、彼の面前でイエスの祈りを唱えるなら——そのとき、悪霊が混乱し、魔術師は自分の仕事を成し遂げられなくなるだろう。

ある人が病気でした。すると、魔術師——これほどひどいペテン師も珍しい——が、「助ける」と言って彼の家を訪ねてきました。しかし、その病人はイエスの祈りを唱えていました。彼はとても素朴な人で、訪ねてきたのが魔術師だとは知りませんでした。だからこそ、神はその出来事に介入されたのです。そして、その不幸な男が、自分が誰と対峙しているのかを理解できるよう、神がどのような出来事を許されたか、ご覧なさい。病人がイエスの祈りを唱えていると、悪霊たちが呪術師を殴り始めたため、呪術師は、自分を「癒やす」ために訪れたその家の主人に、自ら助けを求める羽目になったのです！

— ゲロンダ、その病人は、自分の目で悪魔を見たのですか？

— 彼は悪魔そのものを見たわけではありません。ただ、想像を絶する何かが起きているのを目撃したのです。呪術師は「助けて！」と叫びながら、床を転げ回り、倒れ込み、目に見えない敵からの攻撃から身を守るために両手で顔を覆っていました。ですから、呪術師たちの生活が楽で、悪魔が彼らの頼みごとをいつでも何でも叶えてくれるなどとは、決して思わないでください。魔術師たちが一度でもキリストを否定しただけで、悪魔にとってはそれで十分なのだ。当初、魔術師たちは悪魔に助けを求める契約を結び、数年間は悪魔たちが彼らの命令に従う。しかし、少し時間が経つと、悪魔たちは魔術師たちにこう言い放つ。「一体、なぜ俺たちが君たちに気を使う必要があるんだ？」そして、もし魔術師たちが悪魔たちの課した課題をこなせなかったら、その後、彼らがどんな目に遭うか、お分かりだろう？

以前、私が皆さんに話した、チベット出身のあの若い魔術師と、カリヴァの中庭で話していた時のことを覚えています。突然、彼は飛び上がり、私の両腕をつかんで背中に回した。「さあ、ハジェフェンディ¹⁰³ が今すぐ来て、お前を解放してくれるがいい！」と、彼は挑発的に私に言った。「この悪魔め！——私は激昂した。「さっさとここから出て行け！」私はその神を冒瀆する者を突き飛ばし、彼は地面に倒れた。まさか、彼が聖人を冒瀆するのを黙って聞いていられるものか！その後、彼は跳ね起きて私を蹴ろうとしたが、それもできなかった。彼の足は私の唇のすぐそばで止まってしまったのだ。神が私を守ってくださったのだ。私は彼を中庭に立たせたまま、自分の部屋に入った。しばらくすると、見ると、彼は全身を棘や枝に絡められながら、私のカリヴァの近くにある雑草が生い茂った谷間から出てきた。「サタンが私を罰したんだ」と彼は私に言った。「お前を打ち負かすことができなかったからな。彼こそが、私をこの茂みの中に引きずり込んだんだ。」

闇の黒き勢力は無力だ。人々自身が神から遠ざかることで、それらを強くしているのだ。なぜなら、神から遠ざかることで、人々は悪魔に自分たちに対する支配権を与えてしまうからである。

第2章。 不浄な霊に取り憑かれた者について

— ゲロンダ、ガダラ人の悪霊に取りつかれた者には、いくつの悪霊が宿っていたのでしょうか？¹⁰⁴

— 「多くの悪霊」¹⁰⁵ と、福音書に記されています。だからこそ、汚れた霊は憑かれた者の口を通して、自分の名を「レゲオン」だと告げたのです。¹⁰⁶ そしてごらんください。悪霊に取りつかれた人の体の中に多くの悪霊が宿ることができるのと同様に、信者の心の中にはすべての聖人が宿ることができるのです。キリストご自身がクリスチャンの心の中に宿られるのですから、聖人については言うまでもありません！これは偉大な神

¹⁰³ すなわち、聖アルセニオス・カッパドキアス。

¹⁰⁴ ルカによる福音書8章26節以降を参照。

¹⁰⁵ ルカによる福音書8章30節。

¹⁰⁶ ルカによる福音書8章30節；レギオン（教会スラヴ語：レゲオン）——3千人から6千人の兵士からなるローマ軍の部隊。

秘です！ かつて、私が「聖なる十字架」の小屋に住んでいた時、ある訪問者がやって来て、門のそばで鉄のノック棒を叩いた。窓から外を覗くと、私の目に恐ろしい光景が飛び込んできた！ 一人の男の後ろを、悪魔の整然とした隊列が連なっていたのだ。彼は、黒い悪魔の群れに完全に取り囲まれていた！ これほど多くの不浄な霊に支配されている人間を、私は初めて目にした。この不幸な男は超能力者だった。教会の祈りの言葉の合間に悪魔を呼び出す言葉を挟み込み、キリスト教の書物をオカルト文学と混ぜ合わせていた。その結果、悪魔たちは彼を支配するようになったのだ。恐ろしいことだ！ 彼を見て、私は深く心を痛めた。

不浄な霊に取り憑かれた人々を精神疾患患者だと見なす精神科医もいる。一方、一部の精神疾患患者を「悪霊に取り憑かれた者」と見なす司祭もいます。しかし、精神疾患患者と悪霊に取り憑かれた者は、それぞれ異なる場所で、異なる方法で助けを受けるべきなのです。精神科医は、どのようにして悪霊に取り憑かれた者を助けることができるのでしょうか？¹⁰⁷

— ゲロンダ、悪霊に取り憑かれた人は、自分の過ちが何であったか、またなぜ自分に悪霊が入り込んだのかを理解できるのでしょうか？

— はい、理解することは可能です。ただし、すでに理性が損なわれている場合を除きます。後者の場合、悪霊に取り憑かれた者を助けるのは非常に困難です。もし単に悪霊に取り憑かれているだけであり、つまり理性が損なわれていないのであれば、その人とは容易に相互理解に至り、援助を行うことができます。ただし、そのような人は従順でなければなりません。そうでなければ、どうやって助けを得ることができるのでしょうか？

ある日、南ギリシャから一人の訪問者が私のカリヴァを訪ねてきた。彼は現地のヒンドゥー教徒たちと関わった結果、邪悪な霊に取り憑かれてしまった。彼は卑劣な罵詈雑言を吐き散らし、口からは泡を吹いていた。その哀れな男の目は狂気じみており、眼球が眼窩からはみ出していた。「そのような神を冒瀆する言葉を口にしてはならない。そうすることで、お前は悪魔を呼び寄せているのだ」と私は彼を諭したが、彼は私の言うことを聞こうとしなかった。それと同時に、彼は私に助けを求めてきた。「助けてくれ」と彼は懇願した。「君だけが私を助けてくれるんだ。」「よく聞いてくれ」と私は答えた。「一体どうやって君を助ければいいんだ？ キリストの恵みによって不浄な霊から解放されるよう祈ってほしいと言いながら、同時に君自身がその不浄な霊たちを呼び出しているじゃないか！ さあ、懺悔に行って、お祓いの祈りを捧げてもらい、それからまた私のところに来て、話し合おう。」——「行かない」——と彼は答えた。「ああ、まあいい。それならせめて教会に行こう。ランプの油をあなたに塗ってあげる」と私は彼に提案した。「嫌だ」と彼は答えた。「君に助けてほしいんだ。」それから彼はの方へ離れ、私の庭にいた訪問者の一人と話し始めた。その間、私は巡礼者たちのグループと、神が私たちの救いのために試練を許しておられることについて話していた。私の言葉を聞いた悪霊に取り憑かれた男は、私たちに近づかずに叫んだ。「おい、お前、神が人々の救いのために尽力しているなんて、一体何を言っているんだ？ 私たちには天に一人の父、地に一人の父がいる！ それに、何よりも上に、私たちにはもう一人の君主が

¹⁰⁷ 長老は、精神疾患を患う人は、善良で 信仰心のある精神科医による医療的ケアと、霊的指導者による霊的ケアを必要としているのに対し、不浄な霊に取り憑かれた者（その理性が損なわれていない場合）は、不浄な霊から解放されるために、自らの罪——つまり、自分が悪霊に取り憑かれるに至った原因——を見出し、悔い改め、懺悔しなければならない、と語っていた。

いるんだ！」——「悪魔め、黙れ！」——と私は彼に言い返し、イエスの祈りを唱え始めた。「ああ、——」と彼は言った。「今、お前は俺を混乱させたな！」——と彼は言った。「さっさと消えろ！」——と私は彼に命じると、彼は横へ飛び去った。それから彼は私に尋ね始めた。「お前自身は、誰の味方なんだ？」——「キリストの味方だ」と私は答えた。「嘘をつくな、——と彼は言った——お前はキリストの味方なんかじゃない。なぜなら、キリストとは私であり、お前は私を殴っているからだ。」悪魔はすべてを彼に逆さまに思い込ませていたのだ。

—ゲロンダ、それはすべて悪魔自身が言ったことですか？

— ええ、悪魔です。しかし、考えてみてください。神はこの人に、聖山に来られるよう力を与えられたのです。あのような状態で、ギリシャの反対側からアフォン山に来るというのは、並大抵のことではありません！ しかし、どうしようもありません。彼はあなたの言うことを聞かず、ますます悪くなっていくのです。もし彼が従順であったなら、助けも得られたはずだ。

悪魔的な高慢さを持つと、人は憑依された状態になってしまう

高慢な人は、心が曇っている。その頭は、まるで排気ガスで煙が充満しているかのように曇っている。彼は重大な罪を犯しながらも、それに気づかない。「私は——」とある人物が私にこう宣言した。「すべての人を愛しているし、悪魔も愛している。だって悪魔は悪意のある存在じゃない、いや……」——「一体何を言っているんだ？」と私は反論した。「もし神が悪魔に完全に自由に振る舞うことを許していたら、悪魔は私たち全員を引き裂いてしまうだろう。悪魔から何か良いものを見たことがあるのか？ それなら、君も同様のことを期待できるだろう？」しかし、この不幸な男は、もはや判断力が曇りきってしまい、たとえ助けようとして何を言っても、何も理解できなかった。彼はすぐに、あなたが「彼に圧力をかけている」と言い出したのだ！ まさか[彼をその考えから解放しようとする試み]が、圧力だと言えるだろうか？ この男は狂人ではない。彼の頭脳は正常に機能しているのだから。彼は、そのようなことを言うことはキリストを否定することと同じであり、[悪魔が悪意を持たないと言い張ることは]神への冒瀆であることを理解しなければならない。

こうして人々は、知らず知らずのうちにサタン崇拜へと至っていくのです。サタニストたちを見ると、彼らが悪魔に支配されていることがよくわかります。彼らの外見にさえ、悪魔的な何かが刻み込まれているのです。闇の勢力は、サタニック・ミュージックを利用して、不幸な子供たちをも自分たちの望む方向へと導いているのです。もはや、サタンの助けを求めるまでになっています。あるロック音楽のCDを逆再生すると、サタンを呼び出す歌声が聞こえるという話を聞いたことがあります。¹⁰⁸ さらには、「サタンよ、私はあなたに身を捧げます」とサタンを「賛美」するまでになっています。なんと恐ろしいことでしょう！

—ゲロンダ、つまり、高慢さは人を憑依状態に追い込むことがあるのでしょうか？

¹⁰⁸ 長老が言及しているのは、一部のディスクに収録され、聴き手が潜在意識レベルで受け取る情報のことである。ギリシャのロック音楽研究者E. ダディの著書『ロック音楽』には、西洋およびギリシャの著名なロック・ポップスアーティストによる楽曲やレコードのうち、潜在意識レベルで受け取られる「サタンを崇拜せよ」「麻薬を摂取せよ」「淫行にふけれ」といった呼びかけを含む16の具体的な例が挙げられている。参照：Ελ. Δάδη, 『Μουσική Ρόκ』, Τεσσαρονικι, 1993年。——訳者注

— ええ。ある人が何らかの罪を犯し、自分を正当化しているとしましょう。人々が彼を助けるために注意を向けると、彼は「自分に対して不当な扱いをしている」と言います。自分を注意する人々よりも自分は優れていると信じ、彼らを非難するのです。そして次第に、聖人たちを裁き始めます。最初は新しい聖人たち、次に古い聖人たち……。「この聖人は何の奇跡も起こさなかった」と、そのような人は言う。「あの人にはこんな欠点があった……」さらに少し時間が経つと、その人は非難の度合いをますます深め、やがて私たちの教会の公会議までも非難し始める。「そして、これらすべての公会議で」と彼は言う。「あれこれと決議が採択された……」つまり、彼の考えによれば、私たちの教会の公会議さえも誤っていたことになる。結局のところ、そのような人は、「では、なぜ神はこれほどまでにこうしたのか？」と主張するに至る。さて、もし人がそのような状態に達したとしても、それは狂気ではない——いいえ。その人は悪霊に取り憑かれた者となるのだ。

ある時、私のカリヴァに、自らを「神」と名乗る悪霊に取り憑かれた男がやって来た。彼は父親と一緒に私のところへ来た。この男は、聖アトス山外に住むある霊的指導者のところに通っていたのだが、その指導者は悪魔が自分に襲いかかるのではないかと恐れ、悪霊に取り憑かれた男にこう言った。「さあ、それなら、私を祝福してくれ！」これについて、何と言おうか？ まあ、この話は置いておこう……そしてその後、この憑かれた男は父親にこう言い出した。「見てごらん、パイシイ神父も、私が神であることに同意するだろう。」こうして彼は、自分が持っていた全財産を賭けて、私が彼を神として認めるかどうかを父と賭けをした。しかし、私が数珠で祈り始めた途端、憑依された男はまるで刺されたかのように飛び上がった。「その数珠で何をしているんだ？」と彼は叫んだ。「俺はありとあらゆる罪を犯した！ こんな罪も、あんな罪も……俺の中には悪魔が宿っている。俺は神になった。お前も、俺が神であることを認めなければならない。それなのに、お前のような奴は、何もしていないじゃないか！ ただひたすら、その数珠をカチカチ鳴らしているだけじゃないか！」彼がどんな忌まわしいことを口にしたか、お分かりだろうか？ 私は怒りに駆られた。「さあ、ここから出て行け、このろくでなしめ！」と私は彼に怒鳴りつけた。彼をこっぴどく叱りつけたのだ！すると彼は完全に狂乱し、まるで獣のようになった。ポケットからお金を取り出し、父に投げつけた。「ほら、」と言う。「お前の勝ち分だ。俺は賭けに負けた。」

悪霊に取り憑かれた者は、あらゆる聖なるものに反応する

— ゲロンダ、その人が悪霊に取り憑かれているのか、それとも精神疾患なのか、どうすれば見分けがつくのでしょうか？

— それは、敬虔な医師であれば誰でも見分けることができます。悪霊に苦しむ人々は、聖なるものに近づくと興奮し、体が震え始める。ここから、彼らの中に悪霊が宿っていることがはっきりと分かる。そのような人々に聖水を少し飲ませようとしたり、聖遺物で十字を切ろうとしたりすると、彼らは抵抗する。なぜなら、神の恵みは彼らの内側にいる悪霊を締め付けるからだ。一方、何らかの精神疾患を患っている人々は、聖なるものに全く抵抗を示さない。悪霊に取り憑かれた人々は落ち着きを失い、たとえ十字架を身につけて単に近づいただけでも、体を震わせ始める。ある時、私は聖山にあるある修道院の徹夜祈祷会に参加した。修道院の修道士たちは、修道院を訪れた巡礼者の一人が不浄な霊に取り憑かれているのではないかという懸念を抱いていると私に告げた。私はその人の隣の席に座り、主の聖なる十字架の断片が嵌め込まれた自分の十字架で彼

に触れた。憑かれた男は体を震わせ、飛び起きて、教会の奥の隅へと逃げ去った。徹夜祈祷の後、人々が散っていった後、私は丁寧に、優しく、彼に話しかけようとした。しかし、また同じことが繰り返された。そして私は、この男が本当に悪霊に憑かれているのだと悟った。

時々、子供たちが私のカリヴァに連れてこられ、「悪霊に取り憑かれている」と言われることがある。それが本当かどうか確かめるために、私は聖アルセニオス・カップドキアスの聖遺物の断片を取り出し、手のひらに握りしめることがある。その様子をぜひご覧いただきたい。私の両手は握りしめられているのだが、もしその子供が邪霊に取り憑かれているなら、聖遺物が隠されている手を恐怖の眼差しで見つめる。一方、もしその子供に取り憑きなどなく、単に、例えば脳の病気などに苦しんでいるだけなら、聖遺物に対して全く反応せず、抵抗もしない。また、時には、あらかじめ聖遺物の破片を浸しておいた水を子供たちに与えることもある。しかし、子供たちに悪霊が憑いていると、その水は飲まず、逃げ出してしまう。ある時、悪霊に取り憑かれた小さな子が私のところに連れてこられた。まず、その子の喉の渇きを誘うために、しっかりと甘いものを食べさせ、それから聖遺物の水を差し出した。「うちのヤナキスには」と私は言った。「他の人たちよりもおいしい水を飲ませてあげるよ。」その水をほんの少し飲んだ途端、その子は叫び始めた。「この水、熱くてたまらない！ 何が入ってるの？」——「何も入ってないよ」と私は答えた。「僕に何をしてるんだ？ この水、僕を焼くよ！」と、かわいそうな少年は叫んだ。「君を焼いているんじゃない、」と私は言った。「それは他の誰かを焼いているんだ。」私は少年の頭に十字を切ると、彼は体を震わせ、悪霊に取り憑かれたような発作を起こした。少年の体の中にいた悪霊が、彼の体をねじり上げた。

ところで、何年も前にここ、この修道院を訪ねてきたあの学生を覚えていますか？「私の中には悪魔が宿っているんです」と彼は私に言いました。「その悪魔が私をひどく苦しめています。この悪魔のせいで、私は恐ろしいほど苦しんでいます。何よりも、その悪魔が私に様々な卑劣な言葉を言わせようとするからです。もう絶望の淵に立っています。悪魔が内側から私を締め付け、あちこちを圧迫しているのを感じます」——そう言いながら、その不幸な青年は自分の腹や胸、肋骨、そして腕を指さしました。彼はとても感受性の強い人でした。そこで、彼の気持ちを傷つけず、慰めるために、私はこう言った。「聞いてくれ、君の中に悪魔などいないよ。君に起きていることは、外部からの悪魔の影響にすぎないんだ。」私たちが彼と一緒に教会に入ると、私はそこにいた修道女たちに、この不幸な神の被造物のために祈ってほしいと頼んだ。そして私は祭壇に入り、聖アルセニイの聖遺物の一部を取り、祭壇から出て、その可哀想な人のそばに近づき、再び彼に尋ねた。「では、悪魔はどこで君を圧迫し、苦しめているんだ？ 君自身はどう思う？ 悪魔はどこにいますか？」すると彼は自分の脇腹を指さした。「どこ？ ここか？」と私は尋ね、聖遺物で彼に触れた。うわっ、彼はそこでなんと激しく悲鳴を上げたことか！「お前、俺を火傷させた、火傷させた！ 俺はここを離れない、離れない！」彼は叫び、悪態をつき、様々な忌まわしい言葉を吐き散らした。そこで私は心の中でイエスの祈りを唱え始めた。「主イエス・キリストよ、主イエス・キリストよ、あなたの被造物から不浄な霊を追い出してください。」祈りながら、私はその不幸な男に聖遺物を塗った。それは約20分間続いた。その後、悪霊が彼を激しく揺さぶり、地面に倒し、その男は床の上を転げ回った。ほこりで汚れた彼のスーツは、まるで床拭き布のようになっていた。私たちは彼を立ち上がらせた。彼は全身を震わせ、激しく

、痙攣するように体をひきつらせていた。立ち続けるために、彼はイコノスタスにしがみついていた。彼の手は冷たい汗で覆われていた——まるで朝の草に降りた露のように。やがて悪霊は彼から抜け出し、その人は落ち着きを取り戻した。彼は不浄な霊から解放され、現在は健在で、健康であり、気分も絶好調だ。

悪霊に取り憑かれた人の言葉に重きを置いてはならない

— ゲロンダ、悪霊に取り憑かれた人と話す際、何に注意すべきでしょうか？

— イエスの祈りを捧げ、そのような人に対して親切に接すべきです。

— ゲロンダ、悪霊に取りつかれた人たちは、発作の最中に言ったことを覚えているのでしょうか？

— 覚えていることもあれば、覚えていないこともあります。神がどのように働かれるかは、私たちにはわかりません。時には、神は不幸な人々が、謙虚になり悔い改めるために、憑依の発作中に言ったことを思い出すことを許されることもあります。

もし憑依された人が何かを求めるとき、それが悪魔の影響下で求めているのか、それとも自分自身——人間として——その必要を感じているのか、見分けるのは容易ではありません。ある時、私はある悪霊に取り憑かれた少女に出会った。彼女はカザンザキスの本『¹⁰⁹』を読みふけり、その本に書かれた神を冒瀆する言葉たちを信じていた。その結果、彼女には不浄な霊が取り憑いてしまった。私たちが彼女と話している最中、彼女は突然、悪霊に取り憑かれたような発作を起こし、恐ろしい声で「燃えている、燃えている！」と叫び始めた。家族が彼女を押さえつけ、私が彼女に十字を切れるようにしてくれた。その後、彼女は「水、水！」と叫んだ。「水を持ってきてください」と私は彼女の家族に頼んだ。「いや、だめだ！」と彼らは答えた。「ある人が、悪魔の言うことを聞いてはいけなさと私たちに言ったんだ。」「今、この不幸な女性は水を飲みたいのだ。水を持ってきてくれ」と私は言った。彼女が感じていた灼熱感が、いつ悪魔によるものか、いつ喉の渇きによるものか、私には分かっていた。その不幸な女性はコップ二杯の水を飲み干した。「私の体の中には——」と彼女はその後言った。「まるで燃える炭があるかのように、そんな灼熱感を感じるの。たとえバケツ一杯の水を飲んだとしても、私の中に感じていた炎は消えなかっただろう。」それほどまでに彼女は焼かれるような痛みを感じていたのだ！

— ゲロンダ、もし悪霊に取り憑かれた者が叫んでいる場合、いつ悪魔がその口を通して話しているのか、いつ彼自身が人間として話しているのか、どうすれば見分けがつくのでしょうか？

— 悪魔が話しているときは、憑かれた人の唇の動きが不自然です。機械的に動いているのです。一方、憑かれた人が人間として話しているときは、唇の動きは自然です。憑かれた人に呪文のような祈りを唱えている最中に彼が叫ぶのは、その人自身が苦しんでいて、例えば悪魔にこう言っているからかもしれません。『出て行け、なぜ出て行かないのか？』と。また別のケースでは、悪魔自身がその人間や、彼を叱責する司祭を罵倒することもある。悪魔がキリストや聖母マリア、聖人たちを冒瀆することもある。時には悪魔が嘘を吐くこともあれば、キリストの御名の力が彼に真実を語らせることもあ

¹⁰⁹ カザンザキス・ニコス（1885-1957）——著名なギリシャの冒瀆者であり反キリスト教作家。極めて冒瀆的な小説『最後の誘惑』（M・スコセッシ監督の映画で広く知られる）をはじめ、キリスト、教会、およびキリスト教信仰の聖物を誹謗中傷する他の著作の著者である。 — 訳者注

る。また、悪霊に取り憑かれた者が、自分が読んだ霊的な書物などから何かを叫び出すようなケースもあります。これについて何と言えましょうか？ これらすべては非常に複雑です。ですから、悪霊に取り憑かれた人と話す際は、細心の注意を払ってください。その言葉に過度な意味を付与してはいけません。例えば、その人が「お前は俺を燃やしている」と言うかもしれません。もしあなたが実際に彼を燃やしていて、それに同意して「私は彼を燃やしている」と言ったら、それでおしまい——あなたは〔霊的に〕破滅してしまいます。もし、実際にはそのようなことは何も起きていないのに、自分が悪魔を燃やしていると信じてしまったなら、あなたは二度破滅することになります。あるいは、例えば、悪霊に取り憑かれた者が「ああ、お前たち、醜い女どもめ！」と叫び、ある一人の修道女に対して「でも、お前は清い」と言うかもしれない。もしその修道女が悪魔の言葉に信じてしまったら、それでおしまい、彼女は破滅してしまう。だから、悪魔と実験をするようなことはしてはいけません。

ある時、ある修道院に悪霊に取り憑かれた者が連れてこられた。修道院長は兄弟たちを教会に集め、ロザリオを使ってその者のために祈るよう命じた。この修道院には、ランプサキスの聖パルフェニオ司教の頭蓋骨が安置されていた。¹¹⁰ 神の恵みが悪霊を激しく追い詰め始めた。修道士たちは数珠を数えながら憑依された者のために祈りを捧げ、同時に修道院長は、ある修道院の司祭修道士に、憑依された者の上で呪文のような祈りを唱えるよう命じた。この司祭修道士は外見上は敬虔に見えたが、内心には隠れた高慢を抱いていた。彼は〔肉体的に〕修道規則に定められたことをすべて忠実に実行していた。彼は教養があり、他者に霊的な助言を与えていた。しかし、彼自身は誰からも助けを受けていなかった——なぜなら、他の兄弟たちは、彼が何か間違ったことをしているのを見ても、彼への敬意から、それを指摘する勇気がなかったからである。この男は、自分自身に対する錯覚を抱き始めた。彼は自分を修道院で最も徳の高い住人だと考え、その種の他の思いを抱くようになった。その日、悪霊はこの修道士に害を及ぼす好機を見出した。悪霊は、この不幸な修道士に「自分が悪霊に取り憑かれた者から悪霊を追い出している」という錯覚を抱かせるため、あらゆる狡猾さを尽くした。そこで、彼が悪霊に取り憑かれた者の上で呪文のような祈りを唱え始めたとき、悪霊は叫んだ。「私は燃えている！ 『どこへ私を追い込むつもりだ、無慈悲な者よ？』」と叫んだ。修道士は、自分が祈りを唱えているからこそ悪霊が燃えているのだと思い込んだが、実際には他の兄弟たちの祈りによって悪霊が追い出されていたのである。不幸な修道士は悪霊にこう答えた。「私の中に入りなさい。」確かに、聖パルフェニオスの伝記によれば、ある同様の事例において、彼が実際に悪魔にそのような言葉を述べたことは知られている。しかし、あれは聖人だったのだ！ 実際、かつて聖パルフェニオスに次のような出来事があった。彼が悪魔に取り憑かれた者から悪魔を追い出そうとしていた時、悪魔は叫んだ。「私は燃えている、燃えている！ どこへ行けばいいのだ？」すると聖パルフェニオスは彼にこう答えた。「私の中に入りなさい。」すると悪魔は聖人にこう答えた。「パルフェニオ、お前の名さえも私を焼き尽くすのだ！」——そして、自分が苦しめていた憑依された人から出て行った。そして、ここで話題になっているこの修道士は、聖パルフェニオのふりをしたくなり、自らも悪霊に取り憑かれた者となってしまった。その瞬間から、悪魔は彼を支配するようになった。その後、何年もの間、この不幸な男は苦しみ続け、どこにも安らぎを見出すことができなかった。彼は絶えずさまよい、一箇所に留まることがなかった。時には世の中を、時には聖アトス山をさまよった。この不幸な

¹¹⁰ 聖パルフェニオス・ランプサキオスの記念日は2月7日である。

男は、いったいどれほどの苦しみを耐え抜いたことか！ 彼が置かれた状況は、精神的な消耗と肉体的な衰弱へと彼を追い込んだ。彼の は、まるで熱にうなされているかのように震えていた。見てください、かつて彼は立派な司祭だったのに、このような状態ではもはや神聖な典礼を執り行うことさえできなかったのです。¹¹¹ 悪魔がどんな悪事を働いているか、お分かりでしょう？

— ゲロンダ、コーヒーの摂取と悪霊に取り憑かれた者の行動との間には、何か関連があるのでしょうか？

— 人の神経系が興奮状態にあり、さらに大量のコーヒーを飲むと、神経はさらに乱れ、タンガラシュカはその状態を利用します。コーヒーに悪魔的な何かが含まれているというわけではありませんが、タンガラシュカはカフェインが神経に及ぼす作用を利用し、その結果、憑依された人の状態はさらに悪化するのです。

悪霊に取り憑かれた人々への助け

— ゲロンダ、ある書物には、悪魔は憑依された人の心に宿るが、その人にそのことを知られ、イエスの祈りによって悪魔と戦われ始めることを望んでいない、と書かれています。それは本当でしょうか？

— はい、なぜなら悪魔には、一定期間、憑依された人の体内に住む権利があるからです。悪魔はその人に潜み、水面下でひっそりと身を潜めることができます。しかし、イエスの祈りによって悪魔と戦われると、悪魔は苦しみ、憤り、その人から出て行ってしまうことがあります。イエスの祈りは、悪魔に対する重火器のようなものです。ある時、私のカリヴァに、絶えずイエスの祈りを唱え続けていた、悪霊に取り憑かれた青年が連れてこられました。その不幸な青年の父親はかつて修道士でしたが、修道服を脱ぎ捨て、世俗に戻って結婚しました。そして、その不幸な子供は悪霊に取り憑かれた状態で生まれたのです。神は、この子が神から報いを受け、その父が救われるため、また私たち修道士が、俗世に戻り今苦しんでいる修道士たちの姿を目の当たりにするために、このことを許されたのです。私たちが話している最中、悪霊が憑かれた者を苦しめ始め、彼は鶏のように非常に大きな声でクックッという鳴き声を上げました。「どうしたんだ？」と私は彼に尋ねた。その時、私は次のように言っていた。「イエス・キリストの御名によって、不浄な霊よ、神の被造物から出て行け。」「いや、俺だって出て行きたいんだ！」と悪霊は叫んだ。「だって、この男は俺をひどく苦しめている！ 彼は休むことなく祈りを唱え続けているんだ！ ああ、パキスタンへ行って、せめて少しでも息抜きしたいものだ！」

— ゲロンダ、なぜこの少年がイエスの祈りを唱えていたのに、悪魔は彼から出て行かなかったのですか？

— おそらく、彼自身が悪魔に自分に対する何らかの権利を与えたのでしょう。しかし、悪魔にも上司がいて、そこから命令を受けているのです。

— ゲロンダ、悪霊に取りつかれた人のために祈る際、具体的にどのような言葉を唱えればよいのでしょうか？

— まず第一に、神に賛美を捧げなければなりません。「私の神よ、あなたが私を助けてくださり、私が正常な状態にあることを感謝します。もし私がこの不幸な人の立場

¹¹¹ 参照：長老パイシイ『アトス山の聖父たちとアトス山の物語』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、2001年、101頁。

に立っていたなら、私の中に住んでいたのは五、六体の悪魔ではなく、何千体もの悪魔だったでしょう。どうか、これほどまでに苦しんでいる御自分のしもべを助けてください」と。つまり、まず心のこもった祈りを捧げ、その後、イエスの祈り「主イエス・キリストよ、御自分のしもべを憐れんでください」を続けて祈るのです。

時に、悪霊に取りつかれた人のために祈る際、私たち自身が、悪霊がその人から去らない原因となってしまうことがあります。これは、私たちが傲慢な心で祈っているからなのです。もし、たった一つの高慢な考えを抱くだけで、例えば「さあ、今、私の祈りによって、悪霊が憑かれた者から弾丸のように飛び出していくようにしよう」などと考えるなら、そのような考えは即座に神の助けを妨げ、私たちは悪魔がその不幸な人に留まり続けるのを助けることになってしまいます。

汚れた霊に取りつかれた人々のために祈る時は、常に謙虚さと痛み、そして愛をもって行いましょう。私の魂が深く痛んだ、ある悪霊に取りつかれた女性のことを覚えています。この という不幸な女性は、罪に屈し、悪魔に「はい」と答え、それ以来、長年にわたり不浄な霊にひどく苦しめられている。その霊は彼女の肉体を焼き尽くすように苦しめている。彼女と夫は様々な修道院を巡り、16歳の娘を連れて回っている。この家族は夜を教会で過ごし、徹夜の祈りを捧げている。もしこの不幸な女性が男性だったら、私は彼女を私の腕の中にしっかりと抱きしめただろう。もし、神の愛をもって、悪霊に取り憑かれた人をしっかりと抱きしめれば、その人の中にいる不浄な霊はひどく苦しむのだ。

取り憑かれた人を苛立たせたり、反論したりせず、その人のために心を痛めれば、悪霊は去っていく——その期間は短くとも長くともある。謙遜こそが、悪魔に対する最も強力な一撃である。ある修道院では、礼拝の後、巡礼者たちに聖遺物が持ち出され、礼拝が行われた。すると突然、不浄な霊に取り憑かれていた巡礼者の一人が、修道院長のもとへ飛びかかり、狂ったような声でこう尋ねた。「何だ、無理やりこの聖遺物に頭を下げさせるつもりか？」修道院長は謙虚さと優しさをもって答えた。「いいえ、無理強いではなく、あなた自身の自由な意志によるものです。」すると、その憑かれた者は「なら、俺は無理やりやるぞ！」と叫び、聖遺物へと突進して、それに額をこすりつけたのです。ご覧の通り、修道院長の謙虚さと優しさは、悪魔の意に反したのです。何しろ、悪魔たちは謙虚さと優しさを恐れているのですから。

— ゲロンダ、聖人の記念日に、不運な人々が聖人の名に捧げられた教会で執り行われる荘厳な礼拝に参加するとき、聖人の恵みは悪霊に取り憑かれた人々を助けるのでしょうか？

— 悪霊に取りつかれた人たちは、主祭日（聖人の記念日）には行かないほうがよい。なぜなら、そうした日は人々を祈りから引き離してしまうからだ。教会内は混乱に陥ってしまう。聖人の遺骨やイコンに接吻するために、別の日に来させればよいのです。たとえ憑依された人の家族が、主祭日に彼らを助けてくれるような[恵み深い]人物が参列することを知っていたとしても、大勢の人が集まる日にその人をそこに連れて行く必要はありません。宣伝活動をするつもりはないのですから！

さらに、人々は、悪霊に取り憑かれて発作を起こしている人の周りに集まるべきではありません。数日前、ある不幸な悪霊に取り憑かれた子供が私にこう訴えてきました。「僕は豆の人形になってしまった。」彼が悪霊に取り憑かれて発作を起こしている間、その周りには大勢の人が集まっていました——まるでカラスの群れのように。それは私のカリヴァの近くで起こった。「立ち去ってください」と私はその人々に懇願した。

「これはサーカスの見世物ですか？」しかし、彼らは私の言葉を聞き入れず、立ち去ろうとはしなかった。人々は理解していないのだ。もし人に欠点があり、その欠点が皆の前で露呈してしまうと、その人は他者から嘲笑の的になってしまうということを。

— ゲロンダ、悪霊に取り憑かれた者にとって、聖体拝領は助けになりますか？

— 生まれつき不浄な霊に取り憑かれている者たちにとって、頻繁な聖体拝領は最も効果的な薬です。なぜなら、不浄な霊が彼らに入ったのは、彼ら自身の過失によるものではないからです。もしそのような人々が、神の恵みが彼らを不浄な霊から解放するまで不平を言わずに耐え忍ぶなら、彼らは大きな報いを受けるでしょう。耐え忍ぶことで、そのような人々は殉教者に数えられるため、頻繁に聖体拝領を行う必要があります。しかし、もし人が自身の不注意によって不浄な霊に取り憑かれたのであれば、その人は悔い改め、懺悔し、そして癒されるために苦行を成し遂げなければなりません。そして、その人は、可能になった時点で、自分の霊的指導者の祝福を受けて聖体拝領を行うことになります [その人が相応の悔悛の行いを果たした後]。もしそのような人が、悔い改めも告解もせずにキリストの聖なる秘跡を拝領すれば、不浄な霊はさらに強くその人を支配するようになる。ある悪霊に取り憑かれた者が聖杯に導かれて聖体拝領しようとしたとき、彼はキリストの聖なる賜物を吐き出してしまった。キリストはご自身を犠牲として捧げ、人間に御自身の御体と御血を与えるほどに身を下げてくださいったのに——この不幸な者は、キリストの聖なる賜物を吐き出してしまったのです！ なんと恐ろしいことでしょう！ お分かりでしょう：悪魔は助けを受け入れないのです。

— ゲロンダ、悪霊に取り憑かれた人々の名前を、プロスコミディアの祈りの中で記念として挙げてよいのでしょうか？

— はい、もちろんです。司祭たちがプロスコミディアの間に、心を痛めながら悪霊に取りつかれた人々の名を記念に挙げるとき、その不幸な人々は多大な助けを受けるのです。

— ゲロンダ、時々こんなことがあります。悪霊に取りつかれた人が悔い改め、定期的に懺悔し、聖体拝領もしているのに、それでもなお悪霊の影響下にとどまり続けているのです。この場合、何が起きているのでしょうか？

— 悪霊が去らないのは、その人の霊的な状態がまだ安定していないからです。もし神がすぐにその人を悪霊の影響から解放してしまえば、神は即座に悪霊に再びその人の中に入る口実を与えてしまうことになる。それゆえ、神は——その偉大なる愛ゆえに——悪がゆっくりと、徐々に退くことを許される。このようにして、人は犯した罪の代償を払い、同時に自身の霊的な状態をより安定したものにしていくのである。そして、その人が霊的な状態をより安定させればさせるほど、悪はより早く退いていく。人がどれほど早く悪魔の影響から解放されるかは、その人自身にかかっている。ある日、悪霊に取りつかれた子供を持つ父親が私に尋ねた。「私の子供はいつ元気になりますか？」「あなたが自身の霊的な状態を安定させた時です」と私は答えました。「そうすれば、あなたの子供も助けを受けるでしょう。」この不幸な子供は当初、霊的な生活を送っていましたが、父親はそれに反対し、生活様式を変えなければ正気を失うだろうと言っていました。その後、父親自身が息子を売春宿に連れて行くようになりました。その結果、その子は罪に溺れ、不浄な霊に取り憑かれてしまった。その後、体内に宿った悪霊が彼を支配するようになると、その不幸な子は不純な意図を持って母親に襲いかかった。実の息子からの暴行から逃れるため、不幸な母親は島の一つへ避難せざるを得なかった。その不幸な子供の父親は悔い改め、霊的な生活を送ろうと努めたが、それでも息子は

癒やされなかった。彼が癒やされたのは、父親が彼と共にすべての修道院や聖地を訪れ、すべての聖人の伝記を読み込みしっかりと心に刻み込み、自身の霊的な状態を安定させた時になってからであった。

「お説教」について

— ゲロンダ、今日、私たちの修道院に悪霊に取り憑かれた女性が連れてこられ、司祭を呼んで彼女に呪文のような祈りを唱えてほしいと頼まれました。私たちはどうすべきだったのでしょうか？

— そのような場合、彼女を連れてきた人たちに、この不幸な女性の霊的指導者が、彼女に対して悪魔祓いの祈りを唱える必要があるかどうかを判断するよう伝えるべきでした。なぜなら、もし彼女の中に悪魔がいるのであれば、それは彼女自身か、あるいは彼女の両親が重大な罪を犯し、それによって悪魔にこの不幸な女性に対する支配権を与えてしまったことを意味するからです。罪は悪魔を招き寄せるのです。罪を犯した人々が悔い改めず、懺悔もしなければ、罪は消えず、したがって悪魔も去りません。あるいは、神は、私たちが知らない何らかの別の理由から、この不幸な女性が憑依状態に陥ることを許されたのかもしれませんが。

— ゲロンダ、悪霊に取り憑かれた者には、説教は効果があるのでしょうか？

— 憑依された人によって、効果は異なります。祈祷が役立つのは、悪魔に支配されることを許さず、告白とは何かを理解していない憑依された子供に対して、呪文のような祈りを唱える場合です。あるいは、正気を失い、告白できない大人に対しても、祈祷が役立つことがあります。もし憑依された人が正気であるならば、まず第一に、その人が自分の罪——つまり、憑依された原因——に気づけるよう手助けする必要があります。その人は悔い改め、懺悔を行う必要があり、その後——必要であれば——初めて、その人に対して呪文のような祈りを唱えることができる。というのも、懺悔の秘跡において解放の祈りが唱えられた後でも、悪霊は憑かれた者から出ていく可能性があるからだ。

一部の司祭は、悪霊に取り憑かれた者も病気の人とひとまとめにし、これらすべての人々に対してまとめて呪文のような祈りを唱える。かつて、パーキンソン病を患っている人が祈祷のために連れてこられたことを覚えている！ そう、今日だってここへある高齢の男性が連れてこられ、彼は悪霊に取り憑かれていると言われていた。この不幸な人の左手は小刻みに震えていた。時には発作を起こすこともある。「いつ頃から、——と私は彼に尋ねた——そんな状態になっているのですか？」——「子供の頃から」——と彼は答えた。私は驚いた。その後、この不幸な人の頭の左側に小さなくぼみがあることに気づいた。どうやら、そのくぼみは出生時の外傷によるもので、彼に起こっていたことはまさにそれが原因だったのだ。想像してみてください。病気の人が、自分の中に悪霊が宿っていると告げられ、呪文のような祈りを唱えられ、「出て行け、悪霊よ……」と命じられ、その結果、人々の目の前で笑いものになってしまうのです！ そんなことは許されません！ 「悪霊に取り憑かれている」と見なされている子供たちのうち、実際には自分の中に何の悪霊も宿していない子がどれほど多いことか！ ある時、悪霊に取り憑かれていると言われていた25歳の青年が私のところに連れてこられた。私は彼に聖水を飲ませたが、その不幸な青年はそれに対して全く反応を示さなかった。「あなたが言っている症状は、具体的にどのように現れるのですか？」と私は彼の父親に尋ねた。「いつ頃からこの病気に苦しむようになったのですか？」——「6歳の頃からですよ」と

彼は答えた。「私たちは店を営んでいたのですが、ある日、殺された彼の祖父の遺体が店に運ばれてきたんです。その直後から、彼にこうした奇妙な現象が現れ始めたのです。」なるほど、そういうことか。そのかわいそうな子は、単に精神的なショックを受けただけだったのだ。もし彼の立場に大人がいたとしても、そのような体験の後では、健康を損なう可能性さえあっただろう。ましてや幼い子供ならなおさらだ！そして、ご覧の通り、今やその子は「悪霊に取り憑かれた」と呼ばれているのだ！

—ゲロンダ、呪文の祈りは声に出さずに、心の中で唱えてもよいのでしょうか？

—心の中で唱えるほうがむしろ良い。呪文の祈りを唱える際の肝心な点は、誇り高ぶることなく、痛みと謙虚さをもって唱えるべきだということだ。司祭たちが大声で誇らしげに、不浄な霊に「出て行け」と命じる時、「出て行け、不浄な霊よ」と大声で傲慢に「命じる」と、それは悪魔を激怒させ、悪魔は猛り立ち、憑依された者の利己心に訴えかけ、さらにはこう言うことさえある。「ほら、あいつは全世界の前で、お前を笑いものにしたじゃないか！さあ、この神父の首を殴ってやれ！」悪霊に取り憑かれた者は、悪霊に煽られて司祭を殴り始め、その結果、逃げ出すのは悪霊ではなく、祈祷書を持った司祭の方になってしまう……ある時、ある司祭が抜いの儀式中に悪霊に取り憑かれた者にこう言った。「私はお前に命じる、不浄な霊よ、この人から出て行け！」——「そう、その通りだ」と悪魔は憑かれた男の口を通して答えた。「お前が私に命じているからこそ、私は出て行かないのだ……」だからこそ、私は司祭たちに、呪文の祈りを唱える際、決して「出て行け、不浄な魂よ！」と叫んではならないと忠告する。まるで悪魔たちがその言葉を聞いていないかのように思われてしまうからだ！

また、憑かれた者の親族は、追い出しの祈りを唱えてもらうために司祭を自宅に招いたことを、他人に話す必要はない。むしろ、司祭が祈祷会を行うために来たのだと人々に伝えるほうがよい。そして、追い出しの祈りについては——誰の注目も引かないように——小声で唱えるのが望ましい。

悪霊に取り憑かれた人々の苦難に満ちた人生

何と言っても、体内に悪霊を宿している人々は、非常に苦しんでいる。そのような人々は謙虚ではあるが、悪魔に苦しめられているのだ！かつてスタヴロニキタ修道院で、私は不浄な霊に取り憑かれた23歳の青年に出会った。皮と骨ばかりだった！ひどい寒さで、教会ではストーブが焚かれていたのに、その青年は薄手の半袖シャツ一枚で、教会の玄関に座っていた。私は我慢できず、近づいて暖かいウールのセーターを渡した。「このセーターを着なさい」と私は彼に言った。「本当に寒くないのか？」——「寒だなんてとんでもない、神父様」と彼は答えた。「私は全身が燃えているんです！」お分かりでしょう、これこそがまさに苦しみそのものです。

生まれつき並外れて感受性が強い悪霊に取り憑かれた者たちがいます。そのような人々に対し、悪霊は「お前たちは救われない」と吹き込み、自殺へと駆り立てます。なんて恐ろしいことでしょう！これは決して冗談ではありません！私は、司祭たちさえもうんざりさせるような、ある憑依者に知り合いだった。その不幸な男は、呪文のような祈りを唱えてもらうために教会に来ていたが、司祭たちは彼を追い返していた。その後、悪魔は彼に私についてもこう言い始めた。「あの人にも行くな。あの人にも君を受け入れてくれない。」悪魔は彼を絶望の淵に突き落としたのだ。

もう一人の憑依された人のことも覚えている。彼は聖アルセニオス・カッパドキアスの恵みによって、不浄な霊から解放されたのだ。その後、悪魔が彼にどんな試練を仕

掛けたことか！すでに不浄な霊から解放されていた彼は、ある日、聖アルセニオスの聖遺物に礼拝するため、この修道院を訪れた。しかし、修道院は閉まっていた。¹¹²すると、修道院の下門のそばで、悪魔が聖アルセニオスの姿をとって彼に現れ、こう言った。

「二度とここへ足を踏み入れるな。私にも、パイシオスにも、お前の顔など見たくない。」こうして悪魔は彼を追い払った。わかるか？その後、その不幸な男は聖アルセニオスを誹謗し、私を罵り始めた……。まあいい、私を叱るのもまだしも、聖人を誹謗するとは！……。その結果、その不幸な男は再び悪霊に取り憑かれた。そう、ここで人がただ恥知らずな振る舞いをしただけでも、神の恵みは彼から離れていく。ましてや聖人を誹謗する者など、言うまでもない！その後、彼は聖アトス山にもやって来て、私のカリヴァ（小屋）にやって来て、こう叫び始めた。「俺が君に何をしたというんだ？なぜ俺に会いたくないんだ？なぜ君も俺を助けようとしらないんだ？まさか、俺を苦しめたいのか？」——「愚かな人よ」と私は彼を諭した。「君の前に現れて、君を追い払ったのは悪魔だった。あれは聖人ではなかった。聖人は人を追い払ったりはしない。」しかし、彼は私の言うことを聞かなかった。彼は自分の思い込みを信じていた。この不幸な人たちが、毎日どれほど苦しみ、どれほど苦しんでいるか、ご存知だろうか？

しかし、多くの悪霊に取りつかれた者たちは、他の人々が正気に戻るために苦しんでいるのです。悪霊に取りつかれた者たちの苦しみを目の当たりにすることで、他の人々は考えを巡らせ、正気に戻り、悔い改めるからです。憑かれた者たちの罪が、他の人々よりも多いなどと考えてはなりません。しかし、神は彼らが憑かれることを許しておられ、その結果、彼らは自らを卑しめ、謙虚になり、自分の罪の代償を払い、自ら報いを受けるのです。しかし、他の人々もまた、彼らの苦しみを目の当たりにすることで、助けを受けるのです。

もちろん、数え切れないほどの罪を犯しているにもかかわらず、悪霊に取り憑かれない人々もいる、と言う人もいるかもしれません。なぜそうなるのでしょうか？その理由はこうです。人が完全に心が硬くなってしまうと、もはや悪霊の攻撃を受けることはなくなります。なぜなら、神はその人が（そのような攻撃から）何の益も得られないと見ておられるからです。なぜなら、私たちは、傷つきやすさや悪魔の影響を受けやすい状態も、ある意味で、罪深い人間が謙虚になり、悔い改め、救われるために、神から与えられた賜物であることを知っておく必要があるからです。

第3章。 恐ろしい惑わし

修道生活と惑わし

—ゲロンダ、私は惑わしを恐れています。

¹¹² 聖アトス山以外の多くのギリシャの修道院では、週の断食日（月曜日、水曜日、金曜日）には、修道士たちがこれらの日に世俗と接触することなく、自己の霊的修養に専念できるよう、修道院の門は一日中閉ざされている。その他の曜日には、修道院の門は特定の時間帯に開かれ、巡礼者が修道院を訪れて聖遺物に礼拝を捧げることができる。

——訳者注

— その通りだ。惑わしを恐れる者は、惑わしに陥らない。なぜなら、そのような人は注意深くあり、自分のすべての思い（思い）を[長老]に告白するからだ。彼は何も隠さず、そうして助けを受けるのだ。

— ゲロンダ、教えてください。誘惑への素地とは何でしょうか？

— 惑わされやすい素地があるということは、自分が何か特別な存在であるという考えを持ち、他人に自分が何か偉大なことを成し遂げているかのように見せかけることです。惑わされやすいとは、例えば何らかの偉業を成し遂げているからといって、自分が霊的な境地に達したと見なし、他者についてはまだ霊的生活の意味を理解していないと思込み、彼らに対して高慢な態度をとることを意味します。もし人が、ある聖人の境地に達し、他者から称賛されたいという欲求から、利己的に自己を犠牲にして修行に励むならば、それは迷いの始まりである。自分を強制することと、偉業のために自分を犠牲にすることは別物だ。ある時、私はある人にこう言った。「霊的生活に対する誤った態度から惑わされないよう、注意しなさい。あなたは霊的な危険にさらされている。」「私が惑わされる？」「私は肉さえ食べていないのに！」と彼は憤慨した。ところが、その人は懺悔さえしていなかった。彼は自分の罪をアイコンに「懺悔」していた。「君は正教徒なのか、それともプロテスタントなのか？」と私は彼に尋ねた。「どの本で、そんな風に懺悔すべきだと読んだんだ？」——「えっ、何だって？——と彼は私に問いかけた。「キリストは私の声を聞いていないというのか？」一体何が起きているか、わかるだろう！

— ゲロンダ、肉体の苦行は情欲との戦いにおいて役立つのでしょうか？

— もし肉体的修行が情欲を克服するために用いられるのであれば、役立ちます。体は謙虚になり、肉体は霊に従うようになります。しかし、もし誰かが「形だけの」修行に励むなら、¹¹³ その結果、その人には幻想が生まれてしまいます。というのも、この種の修行は心の情欲を育み、高慢さを助長し、自信を膨らませ、惑わしへと導くからです。そうして、自分の「形だけの」修行を見つめながら、人は自らの霊的な進歩について結論を下してしまうのです。「私はこれこれの肉体的修行を行っている」と彼は誇らしげに言う。「しかし、あの兄弟はこの点で不十分だ。私はすでにあの聖人の域に達しており、別の聖人をも凌駕している……」——そうして彼は断食や徹夜祈を増やしていく。しかし、彼が成し遂げているすべての修行は水の泡と化してしまう。なぜなら、その人は情欲を断ち切るためではなく、利己的な満足を得るためにそれを行っているからだ。私は、高慢のあまり肉体的苦行に励んでいたある修道士を知っていたが、彼の心の中では、自分は偉大な苦行者だと信じ込んでいた。彼はすでに極限に達していた。食事もせず、衣服も全く洗わず、ひどい悪臭と汚れの中に横たわっていた。汚れのせいで、彼の衣服はすっかり腐り果てていた。ある日、私は彼の衣を洗濯しようと手に取った。しかし、洗濯などできる状態ではなかった！ある時、彼は私にこう言った。「聖ヨハネ・クシュチニク¹¹⁴ は、もう私の後ろに置いてきた。」「一体、何を言っているんだ？」と私は言った。「君の考えでは、聖ヨハネ・クシュチニクは汚れを通じて聖性に達したというのか？」さらに数日後、彼はまた私のところへやって来て、こう宣言した。「聖マ

¹¹³ 「乾いた」とは、長老が、心の浄化やキリストにおける完全性の達成のための手段ではなく、目的そのものとして行われる苦行や禁欲を指して用いた言葉である。

¹¹⁴ 聖ヨハネ・クシュチニクの記念日は1月15日である。

クシム・カヴソカリヴィト¹¹⁵ も、もう私の後ろに置いてきたよ。」——「つまり、どうやって彼を後ろに置いてきたんだ？」と私が尋ねると、「どうって？——とても簡単さ。聖アトス山でコマのようにぐるぐる回っているだけさ！」——「おい、君は——」と私は言った。「すごいね！ マクシム聖人は無形の境地に達して飛んでいたのに、君のようにコマのように回っていたわけじゃないだろう！」その後、この男は自分の中で「死の記憶」を「耕し」始め、心の中でこう自分に言い聞かせた。「今、私は地獄にいる。」さらに少し時間が経つと、彼は——おそらく屈服するためだったのだろう——こう言い始めた。「今、私は悪魔となり、サタンとなった。さあ、自分の信奉者たちを集めに行こう。」こうして、この男は惑わされてしまったのである。

想像力への配慮

— ゲロンダ、あなたは、祈りの最中、私たちの心はキリストの生涯に関する様々な情景や、それに類するものを避けるべきだとおっしゃいました。なぜそのような情景を避ける必要があるのでしょうか？

— 悪魔が空想や想像力を利用して、私たちを惑わさないようにするためです。想像力というのは良いものであり、賢く使えば大きな力を発揮します。例えば、ある風景を見た人が、一年経ってもその風景を現実と全く同じように思い出し、絵に描き出すことができるような人々もいます。そのような能力は神が人に与えてくださるものですが、悪魔はそれを自分の目的のために利用します。惑わされやすい人々は、自分が見たり読んだりしたものを、自分の望む通りに想像してしまう。そして、その想像によって描かれた絵が現実であると信じてしまうのだ。こうした不幸な人々が助けを得るためには、絶えず[霊的な]見守りを受ける必要がある。なぜなら、悪魔は常に彼らを巧みに操っているからだ。

したがって、生まれつき[豊かな]想像力に恵まれた人が、自分の考え方が間違っていると指摘されたときは、立ち止まって考え直し、自分の考えの後に疑問符を付ける必要がある。私はある素朴な女性を知っていた。彼女は絶えず祈りを捧げており、キリストに、この世で、この生涯のうちに御姿を見られるよう願っていた。というのも——彼女によれば——あの世ではどうせ御姿を見られないからだという。そして実際、彼女が聖体拝領に近づいたとき、キリストは聖杯の中に、血まみれの髪をした幼子として彼女に現れた。その後、その幻影は消え、その女性は聖体拝領を済ませることができた。この出来事の後、敵は彼女に「自分は特別な存在だ」という考えを植え付け始め、さらに彼女の想像力を煽り立て、絶えず彼女に「映画鑑賞会」を強要した。ある時、聖アトス山から世間に下りてきた私は、ある家でこの不幸な女性に出くわし、彼女がそこに集まっていた男女に自分の空想を語っているのを耳にした。彼女を正気に戻すのに、私は多大な労力を要した。私は、彼女のその恍惚とした状態が明らかになり、彼女が謙虚になるよう、皆の目の前で彼女を厳しく叱りつけた。

「ゲロンダ、あの幻視は彼女の空想だったのですか？」

「空想であり、錯覚です。」

「ゲロンダ、彼女はこれらの幻視について、自分の霊的指導者に話していなかったのですか？」

¹¹⁵ 聖マクシム・カヴソカリヴィトの記念日は1月13日である。

「こういう場合、何が起こるか知っていますか？ サタンは、そうした人々に『見えるもの』で欺くのです。彼らは理性を働かせず、そのような『幻視』を霊的指導者に話すべきだなどとは、頭にも浮かばないのです。なんと巧妙な悪魔でしょう！ 恐ろしいことです！

もし人が自分の想像に無頓着であれば、誘惑者は、ごく単純で自然な出来事さえ利用して、その人を惑わすことができる。私がストミオン修道院に住んでいた頃、冬に晩課を唱えながら、ストーブに火を入れていた。時折街から修道院を訪れる女性たちが、晩課の最中にイコノスタスにある至聖なる聖母マリアのイコンから、ある種のパキパキという音が聞こえることに気づき始めました。私はその音に気にも留めませんでした。女性たちは互いにささやき合いました。「信じられますか！ 修道士が晩課を唱えていると、聖母マリアのイコンからパリパリという音がするわ！」と。彼女たちのささやきを耳にして、私は「あの音がするイコンをちょっと見てみよう」と思った。私は神聖な出来事を信じていないと言いたいわけではない——いや、私は聖母が人々の前に現れて語りかけ、霊的に清らかな状態にある者たちは彼女を見ることができると信じている。しかし、このような場合には注意が必要だ。さて、私は椅子を一つ取り、その上に登って、イコンに何が起きているのか見てみた。一体何が起きたのか？ イコンが描かれていた板は古く、裏側から木釘が打ち込まれていた。ストーブが十分に熱くなると、ある木釘が熱で膨張し、パキパキという音を立てていたのだ。そこで私はイコンに釘を打ち込み、パキパキという音は止んだ。その後、私はその女性たちに尋ねた。「さて、今は何かパキパキという音が聞こえますか？」——「いいえ」と彼女たちは答えました。「ほらね」と私は言いました。「そんなことに意味を付けてはいけません。」注意深くある必要があります。なぜなら、もし人の心の中で想像力が少しずつ膨らんでいけば、その人の人生全体が台無しになってしまうからです。

— ゲロンダ、ある[超自然的な]出来事が神から来たものなのか、それとも悪魔から来たものなのか、どうすれば見分けられるのでしょうか？

— それは一目瞭然です。もしその出来事が神からのものでなければ、悪魔は人に高慢な思いを抱かせます。それに加えて、悪魔の幻視は拙劣なものです。彼は神への冒瀆にまで及ぶのです。ある時、惑わされ、不浄な霊に取り憑かれていた男が私のカリヴァを訪ねてきました。私は彼と話をし、それが彼にとって有益となりました。そして、その後彼が私に何と言ったかご存知ですか？ 「こんな——」と彼は言いました、「これほど賢明な言葉を聞くのは初めてだ！ 福音書でさえ、こんなことは読んだことがない！」つまり、彼は私にこう言っているようなものでした。「あなたが言ったことは、キリストが言ったことよりも優れていた。」悪魔が、あなたに高慢な思いを抱かせるために、どんなことをしているか分かりますか？ どう言おうと、もし人が、自分の力では何もできないこと、そして自分の行いはすべてキリストの力によって成されていることを理解しなければ、たとえ悪霊に取りつかれた者から何千もの悪霊を追い出したとしても、その人は何一つ成し遂げられないのです。

悪魔は光の天使の姿で現れる

もし、至高の天国の喜びを経験したことのない人——つまり、霊的な体験〔神の臨在〕を持たない人——が不注意であれば、容易に惑わされてしまう。悪魔は狡猾である。彼は人の心をわずかに刺激し、何か心地よい感覚を味わわせる。こうして、その心地よさが霊的かつ神聖なものだったという印象を人に植え付けることで、悪魔はその人を

惑わしへと陥れる。彼は人の心をだまし、その人は自分に起きていることが霊的に正しいのだと思い込む。「私は何の動揺も感じていない」と、そのような人は言います。確かに、あなたは動揺を感じてはいなかったでしょう。しかし、あなたが感じたものは、真の霊的な喜びではありませんでした。霊的な喜びとは、天に由来するものです。

悪魔は天使や聖人の姿で現れることがある。天使や聖人に化けた悪魔は、その内面に宿るもの——すなわち動揺や混乱——を周囲に広める。一方、真の天使や聖人は、常に楽園の喜びと天上の歓びを広めるのである。謙虚で清らかな人は、たとえ経験が浅くても、神の天使と、光の天使の姿を装って現れた悪魔とを見分けることができる。それは、そのような人が霊的な清らかさを持ち、天使と親和性があるからだ。一方、利己主義者や肉欲に囚われた人は、狡猾な悪魔に容易に惑わされてしまう。悪魔は光の天使の姿で現れるが、人がたった一つの謙虚な思いを抱くやいなや、悪魔は姿を消す。ある晩、晩課の後、私は自分の独房の小さなベンチに座り（私はストミオン修道院に住んでいた）、イエスの祈りを捧げていた。すると突然、修道院のすぐ近くにあり、巡礼者の宿として使われていたある建物から、弦楽器とクラリネットの音が聞こえてきた。私は大変驚いた！「こんなに近くで聞こえるこの音楽は何だろう？」と私は心の中で呟いた。修道院の主祭日はすでに終わっていたのだ。私はベンチから立ち上がり、中庭で何が起こっているのか確かめるために窓へと近づいた。見渡すと、周囲は完全な静寂に包まれていた。その時、私はこの音楽のすべてが悪霊によるもの——私が祈りを中断させるために仕組まれたものだ——と悟った。私はベンチに戻り、イエスの祈りを続けた。すると突然、部屋がまばゆい光に満たされた。天井と私の頭上の階が消え、屋根が開き、天まで届く光の柱が見えた。その光の柱の頂上には、長い髪と髭を生やした金髪の若者の顔が見え、その姿はキリストに似ていた。顔の半分が私からは隠されていたので、私はベンチから立ち上がり、その顔をはっきりと見ようとした。その瞬間、私は心の中で声を聞いた。「あなたはキリストを見るにふさわしい者と認められた。」「いや、私のような者が、キリストを見るにふさわしいなどと言えるのでしょうか？」と私は答え、十字を切った。その瞬間、光と偽キリストは消え去り、天井が元の位置に戻っているのが見えた。もし誰かの心がしっかりと鍵で閉ざされていないなら、悪しき者はその人に高慢の思いを抱かせ、幻想や偽りの光を用いて誘惑するかもしれない。それらは天国へと導くのではなく、混沌へと突き落とすものである。それゆえ、決して、光を見たいとか、神からの賜物を受けたいとか、そのようなことを求めてはならない。求めるべきは悔い改めである。悔い改めは人に謙虚さをもたらし、その後、慈愛に満ちた神は必要なものを与えてくださる。かつて、私がシナイ山で聖エピステミアの洞窟に住んでいた時、あるタンガラシュカが……私に「親切」をしようとしたのだ！修道室のすぐ近くに、三、四段の階段があった。夜、空が澄み渡り星が輝いている時、私は洞窟へ出かけていき、その階段を降りるためにライターで明かりを照らしていた。ある夜、ライターに火をつけようとしたが、点かなかった。すると突然、ある岩から、まるでサーチライトのような明るい光が放たれたのだ！うわっ、辺り一帯が明るくなった！「いや、」と私は言った。「そんな『プロジェクター』には近づかないほうがいい！」私は引き返すと、光はすぐに消えた。ほら、あの悪魔は、私がライターの明かりを頼りに梯子を降りるのを、どうしても嫌がっていたのだ！「まあ、本当に気の毒だ——」と彼は私を憐れんで言った。「人があんなに苦しんでいるなんて！私が彼のために光を当ててあげよう！」これぞまさに「親切」というものだ！

— ゲロンダ、その光が神からのものではないと、どうやってお分かりになったのですか？

— それは明白です……恐ろしいことです！

夢は欺く

— ゲロンダ、私は卑猥な夢に悩まされています……

— 不潔な夢を見たときは、決して、何を見たか、どのように見たかを思い返してはいけません。なぜなら、もし悪者が昼間にあなたを誘惑できなかったなら、夜にやってくるからです。時には、神ご自身が、私たちの「古い人」がまだ生きていることを自覚させるために、悪しき者が夢の中で私たちに誘惑することを許されることもあります。また、敵が夢の中で人に近づき、様々な夢を見せ、目が覚めた時にその人が動揺に陥るように仕向けることもあります。ですから、夢には全く意味を付与してはいけません。自分に十字を切ります。枕にも十字を切り、その上に十字架と小さなアイコンをいくつか置き、眠りにつく際にイエスの祈りを唱えましょう。夢に意味を付与すればするほど、敵は頻繁に訪れてあなたを誘惑するようになるのです。悪魔は大人だけでなく、子供たちにも夢を見せます。悪魔は、たとえ彼らが小さな天使たちであっても、眠っている幼い子供たちのところにもやって来ます。子供たちは恐怖で飛び起き、涙を流しながら母親の懷へ駆け寄ります。また、時には眠っている子供たちのところに天使たちが訪れ、子供たちは喜びのあまり夢の中で笑ったり、大きな喜びを感じて目を覚ましたりすることもあります。このように、悪魔がもたらす夢とは、睡眠中に人間に対して敵が及ぼす外的な影響なのです。

— ゲロンダ、もし眠っている間に、理由のわからない心の重さを感じたら、それは何でしょうか？

— そのような重苦しさの原因は、日中に人が抱えている不安な状態や、様々な恐怖、疑念などが原因であることがあります。そしてもちろん、これらすべてをタンガラシュカが利用する可能性があります。彼は、人を混乱に陥れるためなら、これらの恐怖や不安、疑念をあらゆる組み合わせでかき混ぜることができます。また、人はしばしば非常に敏感に眠っているため、自分は眠っていないと思い込み、呼吸さえも圧迫するほどのこの重苦しさが消えるよう祈ることがあります。

また、時には次のようなこともある。悪魔はどんな姿にも変身し、聖人の姿さえも装って、夢の中に現れるのだ。ある時、悪魔はある病人の夢の中に、聖アルセニオス・カッパドキアスの姿で現れ、こう言った。「私は聖アルセニオスだ。お前が死ぬことを伝えに来たのだ。聞こえるか？ お前は死ぬのだ！」その人は恐怖に襲われた。しかし、聖人は決してそのような言い方はしない。たとえ病人が本当に死を目前にしており、聖人が死を告げるために現れたとしても、聖人は優しくこう告げるだろう。「神は、あなたが苦しんでいるのをご覧になった。だから、神はあなたをこの世から連れ去られるのだ。心の準備をしておきなさい。」聖人は決して病人にこうは言わない。「聞こえるか？ お前は死ぬのだ！」

— ゲロンダ、人が寝言で叫ぶのは、なぜなのでしょう？

— 叫ぶほうがましです。そうすれば目を覚ますからです……多くの夢は不安から生じます。人が不安を感じたり疲れたりすると、その不安や疲れが内側から彼を蝕み、不安な夢を見るのです。私は日中に人々と会い、彼らの様々な悩みを聞くことがよくあり

ます。すると、夢の中で誰かを叱りつけるのです。「この無神論者め！」と叫び、「お前は誰のことも気にかけていない！」と。そして、自分の叫び声で目が覚めるのです。

— ゲロンダ、人は自分の夢から、現実にある出来事が起こることを理解できるのでしょうか？

— いいえ、夢に意味を付与する必要はありません。夢がどんなに心地よいものであれ、不快なものであれ、それを信じるべきではありません。なぜなら、惑わされる危険があるからです。実際、夢の95パーセントは偽りなのです。それゆえ、聖なる父たちは、夢に意味を付与すべきではないと説いているのです。神に由来する夢はごくわずかですが、そのような夢でさえ解釈するためには、清らかさやその他の必要な条件を備えている必要があります。それは、神からの恵みを受けた義人ヨセフ¹¹⁶ や預言者ダニエルのようにです。「私は」とダニエルはネブカドネツアルに言った。「あなたがどのような夢を見たか、そしてそれが何を意味するのか、あなたにお話ししましょう。」¹¹⁷ しかし、預言者ダニエルはなんと高みへと達したことでしょう！彼は獅子のいる穴の中に座っていましたが、獅子たちは空腹であったにもかかわらず、彼には手を出しませんでした。¹¹⁸ アバクムがダニエルに食べ物を運んできたとき、ダニエルはこう言いました。「まさか、神が私のことを思い出してくださったのでしょうか？」¹¹⁹ もし神が預言者ダニエルのことを覚えておられなかったとしたら、一体誰のことを覚えておられるのでしょうか？

— ゲロンダ、中には夢を見ない人もいますが。

— 夢を見ないのは良いことですよ！ チケット代もガソリン代も無駄にしませんから！夢の中では、たった1分で、現実なら数時間あるいは数日かかるような出来事を目撃することができます。なぜなら、眠っている間は時間が無効になるからです。だからこそ、人は詩篇の言葉を理解できるのです。「……「主よ、あなたの御目には、千年の歳月も、過ぎ去った昨日の一日と同じです……」」¹²⁰

幻視に対する注意

— ゲロンダ、自分たちが体験した幻視について、ある聖人を見たと言ったり、それに類することを話してくる人々には、どう答えるべきでしょうか？

— そのような人々には、慎重で控えめであるよう助言したほうがよいでしょう。幻視に対するそのような態度はより確実です。なぜなら、その幻視が神からのものであるか、それとも悪魔からのものであるかを区別できる人は皆ではないからです。しかし、たとえその幻視が神からのものであったとしても、人は最初からそれを鵜呑みにしてはなりません。神は、ご自身の被造物である人間が幻視を受け入れないのを見て「悲しむどころか、むしろ」ある意味で、心を動かされるのです。なぜなら、幻視に対するそのような態度は、その人に謙遜があることを示しているからです。

もし本当に聖人が人に現れたにもかかわらず、その人がその幻を受け入れなかったとしても、神はその人の魂にどのように知らせて、神が望む場所へと導くかをご存知で

¹¹⁶ 創世記37章5～11節を参照。

¹¹⁷ ダニエル書2章25～46節を参照。

¹¹⁸ ダニエル書6章16節以降を参照。

¹¹⁹ ダニエル書14章30～42節を参照。

¹²⁰ 詩篇89章5節。

す。注意が必要なのは、[聖人の代わりに]タンガラシュカが現れ、[悪魔の]「テレビ」をつけて、自分の番組を流し始めるかもしれないからです……

ある女性のことを覚えています。彼女は人々から何の助けも得られなかったため、神の助けを受ける資格がありました。神はその女性を助けたいと願われ、ある幻を与えました。しかし、その幻を見た後、悪魔は彼女に次のような考えを吹き込みました。「誰が知っているだろう、もしかすると、神があなたにそのような幻を見せたのは、あなたを何らかの崇高な使命に就かせるためなのかもしれない！」彼女がそのような悪魔の唆しに信じるようになった瞬間から、悪魔は働き始め、彼女は悪魔の支配下に入ってしまった。しかし、結局のところ、神は再び彼女に憐れみを示されました。彼女には幻が見え、ある声がこう告げるのを聞いた。「パイシイ神父に手紙を書き、あなたに現れたすべての幻について書き記しなさい。」彼女は私に手紙を書き、彼女に見られたすべての幻について語った。悪霊は彼女を徹底的に翻弄した。確かに、彼女の幻はすべて本物だったが、そのほとんどすべてが誘惑者によるものだった。彼女が経験したすべての幻視のうち、最初と最後のものだけが神からのものでした。彼女を正気に戻し、惑わしから解放するために、神はこの最後の幻視を起こされることを許されたのです。結局、その不幸な女性は私の助言に従い、彼女を襲っていた悪魔的な幻視の罠から抜け出すことができました。

惑わされた人の特徴

— ゲロンダ、人はどのようにして、その人が惑わされていると分かるのでしょうか？

— それはその人の外見からも見て取れる。惑わされた人は、表向きは一種の偽りの「無感情」をまとっている。謙虚で柔和に見えるが、その内側には大きな自惚れ——すなわち、自分自身に対して抱いている偉大な自負——が潜んでいる。惑わされた人の目を見つめれば、彼が他のすべての人を、まるで哀れな存在、まるで蟻のように見下していることがわかるだろう。しかし、惑わされた人は、その口から発せられる言葉からも見抜くことができる。多くの人々から聖人だと見なされていたある惑わされた人のことを覚えている。彼は、キリストが馬に乗った姿で自分に現れたと語っていた。キリストは手にワインの入った小瓶を持っており、そこからその男に飲ませたところ、その男は透視能力という賜物を得たというのだ！ある時、この「透視能力者」が人々と話していたところ、ある男が彼に尋ねた。「なぜ僕だって奇跡を起こせないんだ？」——「それは、君がこんな罪やあんな罪を犯したからだ……」——と、その惑わされた男は答え、その人が実際に犯した罪を列挙し始めた。その不幸な男はパニックに陥り、私に会いに来て、この一連の出来事をすべて話してくれた。「ちょっと聞いてくれ、」と私は彼に言った。「まさか、聖人たちが人々を笑いものにするなんて思っているのか？人々を笑いものにするのは悪魔だけだ。[その惑わされた者の口を通して]話しているのは悪魔だということが、本当に分からないのか？そして、もし彼の言うことが真実だとしても、その真実を語っているのはやはり悪魔なのだ。」また、ある女性は、悪霊に取りつかれた女性を、悪霊を追い出し、そのような奇跡を行うという噂の男のもとへ連れて行った話を私に語ってくれた。その「奇跡を行う者」は、二人の女性を人里離れた廃墟となった礼拝堂へと連れて行った。彼女たちが礼拝堂に入るとすぐに、彼はエピトラヒルを手に取り、それを身にまとった。その女性は大変驚いた！世俗の人間がエピトラヒルを身に着けるなんて！「あなた、神父さんですか？」と彼女は尋ねた。「神父なんて、何

の意味があるんだ！」と彼は答え、司祭たちを非難し始めた。こうして、不運な女性たちは彼が惑わされていることに気づき、飛び起きて逃げ出した。

錯覚と狂気

— ゲロンダ、惑わされている人は、何らかの精神疾患を患っているのでしょうか？

— 必ずしもそうとは限りません。『魅惑』と精神疾患は別物です。単に『魅惑』に陥る人もいれば、『魅惑』に陥って精神疾患を患う人もいます。私はアトス山で、誰の言葉も聞こうとしないある修道士を知っていました。彼は自分の修道院を去り、アトス山をさまよっていました。彼は、いわゆる禁欲的な生活を送るための祝福を受けるために、4、5回私のところへやって来ました。そのたびに、私は彼に、出家したあの修道院に戻るよう勧めました。結局、彼はカリヴァ（小部屋）を購入し、そこで一人で暮らしました。7ヶ月間のそのような隠遁生活の後、彼は私の部屋を訪ねてきました。「自分の修道院に戻りなさい」と、私は彼を説得した。「今や——」と彼は答えた。「私は修道院から離院許可書を受け取ったので、もう戻ってはもらえないのです。」——「よく考えてくれ——」と私は彼を諭した。「よくよく考えてくれ。せめて、どかの長老に師事し、自分の意志ではなく、従順に従って生きるよう努めてほしい。」「ああ、従順といえば——」と彼はそれに答えた。「私は神の御心に従うつもりだ。」「さあ、さあ——」と私は彼を説得しようとした。「どこか修道院に入らせてくれと頼んでみる。」「私か——」と彼はそれに答えた。「隠者になったのに、また元に戻るつもりか？ 君こそ、修道院に行ったら頼んでこい。」——「どうして僕一人だけで頼むんだ」と、私は彼を助けたいと思いながら言った。「もし君が、僕と一緒に修道院に入りたいと望むなら、心からそうするよ。」——「そうだな」と彼は私に答えた。「よく聞いてくれ。もし沈黙の生活が嫌になって、修道院に入りたいのなら、行って頼めばいい！」彼がそのような——恥知らずな——振る舞いをしているのを見て、私も彼を放っておくことにした。しばらくして、私はその修道士に不浄な霊が取り憑き、さらに正気を失ってしまったことを知った。悪魔が聖母マリアの姿で彼に現れ、こう言った。「わが子よ、もし私の足元にひれ伏すなら、聖霊の七つの賜物を与えよう……」その不幸な男は、「これで聖霊の七つの賜物を受け、皆を驚かせてやる！」と考えた。そして、地面にひれ伏して悪魔に礼拝した。彼が礼拝するやいなや、悪魔は彼を揺さぶり、不浄な霊が彼に取りついた。しかし、この悪魔による衝撃によって、彼の精神状態も揺さぶられてしまった。彼はプロテピスタトになりたいと思い立ち、聖キノトを訪れ、¹²¹ 建物内にいた修道士たちを鍵で閉じ込め、プロテピスタトの杖を手に取り、自分を誇らしげに見つめながら階段を降り始めた。カリエスの修道士たちは、聖キノートの階段を新しい「プロテピスタト」が降りてくるのを見て驚いた！ 修道士たちの一部は、ジープでこっそりとその病人の後を追いかけていき、カリエスから少し離れた場所で彼を車に乗せ、精神病院へと連れて行った。現在、憑依状態に関しては彼の状態は改善されたが、精神疾患は依然として残っている。

— ゲロンダ、惑わされている人は、ある意味で、悪霊に取り憑かれた人と同じではないのでしょうか？

¹²¹ アトス山の聖キノトは、アトス山にある20の共同生活を行う修道院の代表者で構成されている。聖キノトの会議では、アトス山の修道院の生活に関する一般的な問題が議論され、その活動が調整されるなどしている。日常的な問題の解決のために、毎年、4人のエピスタトスからなる聖エピスタシアが任命される。プロテピスタトスは、聖エピスタシアおよび聖キノタの議長である。——訳者注

—では、その人は一体何なのでしょう？ 単に悪霊に取り憑かれた者というだけではありません。惑わされている人は、悪霊に取り憑かれた人よりも多くの悪霊を宿している可能性があります。しかし、惑わされている人と悪霊に取り憑かれた人とは、別物なのです。

惑わされた人々には注意が必要だ

[世俗には]、わずかな敬虔さと頭の中のごちゃごちゃが混在している司祭が二、三人いる。こうした司祭たちは人々の頭を混乱させている。そして、誰に対しても「悪霊に取り憑かれている」という診断を下す。彼らは誰の言葉も聞こうとしない。

「私は司祭だから、権威を持っているのだ！」と彼らは言う。もしそのような事例を耳にしたら、人々に何が起きているのかを説明し、考え直させるようにしてください。なぜなら、そのような霊的指導者たちは教会に害を及ぼすからです。そのような霊父たちの影響下にある人々には、「正しい[惑わされていない]霊父を見つけ、その人から指導を受けて助けを得なさい」と伝えてください。これらの「長老」たちは、人々に自分たちが私と関係を持っているかのような印象を与えるために、私の名前や写真まで利用するほどです。

言うまでもなく、こうした霊的指導者たちは知性が乏しい人々であり、それゆえに罪を軽減する事情がある。しかし、意識的に酔をワインだと偽るような、良心の欠けた者たちもいる。その一人——元会計士——は現在、北ギリシャ中を回り、私の修道見習いであると偽っている。彼は、私が彼に透視の賜物と、さらに「5つの賜物」を与えたと語っている。こうして彼は人々を惑わせ、金を集めているのだ。

—ゲロンダ、この人物は聖職者ですか？

—いいえ、平信徒です。かつてダフニで私に会ったことがあります、私に気づかれないよう、さっさと姿を隠してしまいました。「真の子」とは！　せめて彼が酒好きだということは救いです。彼からは酒の臭いが漂っています。彼がよろめいているのを見て、彼を疑い始める人々もいます。

ああ、人々の苦しみを食い物にし、その苦しみを商売に変えてしまうような詐欺師が、なんと多いことか！　そんな悪党の一人が、ある未亡人にこう言った。「亡くなったご主人の片手は、墓の中で腐敗していない。それは、彼の魂が祈りを必要としているからだ。」「さて、私は今、どうすればいいの？」と、その不幸な女性は考えた。「彼に金を渡して、夫の魂のために祈ってもらおう」と。彼女からかなりの金額を受け取った後、彼はほどなくしてこう言った。「さて、最初の危機は回避できた。今、あなたの夫の状態は少し良くなりました……」その不幸な女性は詐欺師にお金を渡し続け、彼は夫の魂が安らぎを得られるようにと称して、彼女の財産の半分を奪い取ったのだ！

また、ある種の騙されやすい人々は、何か言葉を呟きながら、病人に十字を切って、あたかも彼らを癒やしているかのように振る舞う。人々は騙され、告解に行かず、司祭を家に招いて「病者の塗油」の秘跡を行わせたり、相応の祈りを唱えてもらったりすることもなく、むしろこうした詐欺師のもとへ駆けつける。そして、ついでに言えば、彼らはこれらの詐欺師に大金をつぎ込んでいるのだ。ある村では、惑わされた二人の男が、実に儲かる事業——まさに協同組合のようなもの——を立ち上げたという話を聞いた！　…悪魔は、例えば村人の誰かに激しい頭痛を引き起こしたり、あるいは悪魔のささやきによって、その村の住民の誰かに腰痛を襲わせたりした。その後、悪魔は誘惑された者の一人のところへ行き、「あの人はこんな理由でひどい頭痛に悩まされている」と

告げた。好機を捉えると、その誘惑された者は病気の村人にこう言った。「君の頭痛の原因がわかるよ」——そしてすぐに、その病気の「原因」について語り始めた。「本当か! ——と、患者は驚いた。「なんて驚くべき啓示だろう! では、頭痛を治すには今、何をすればいいんだ? 」——「あの人のもとへ行けば、助けてくれるよ」——と、惑わされた男は言い、彼を別の惑わされた男のもとへ送り出した。悪魔が人々を惑わしたままにしておくために、どのような策略を編み出したかお分かりだろうか? 二人の惑わされた者を「医療協同組合」として結びつけたのだ! 一人が診断を下し、もう一人があたかも癒やしているかのように振る舞った! 悪魔は、人々を教会から遠ざけるためにこうしたのだ。

惑わされた者たちの安っぽい「賜物」

— ゲロンダ、なぜ人々は何か問題を抱えたと、しばしば惑わされた者たちに頼ってしまうのでしょうか?

— それは、悪魔の賜物が安っぽく、簡単に手に入るからです。何しろ、惑わされた者たちは、自分たちのところに来る人々に厳しいことを求めず、人々をなだめ、その情欲を正当化してしまうのです。そして、不幸な人々は、罪を悔い改める代わりに、霊的指導者のもとへ行っても懺悔する代わりに、こうした惑わされた者たち——つまり悪魔そのもの——を見つけ出し、自分の問題を解決してくれるよう頼むのです。その後、彼らは苦しみながらも、悪魔に縛られ、悪魔が自分たちに対する支配権を握ってしまったことに気づかないのです。

— ゲロンダ、教えてください。なぜ人々は、そのような惑わされた者たちを信じるのでしょうか?

— 人々の頭は混乱しているのです。ご存知でしょう、人々を正しい道へと導いていると主張する人々がどれほど多いか。それなのに、彼ら自身の背中には、ただの誰かではなく、悪魔が潜んでいる袋を背負っているのです! しかし、慈愛に満ちた神は、悪魔が完全に気づかれずにいることを許されません。時折、詐欺師たちが背負う袋から、悪魔の角や尻尾がのぞき出ることがある。人々はそれを見て恐怖のあまり叫ぶ。「ああ、これは何だ? 角? 尻尾? 」——「いや、そんなこと言わないで! 角だの尻尾だの、とんでもない! これなんてただの……ナスですよ」——と、詐欺師たちは人々をなだめ、彼らを巧みに操り、悪魔の所業を善良で有益なものとして見せかけようとするのです。

そしてある日、ある「惑わされた者」を先頭に、そんな一団がこの修道院を訪ねてきた。その詐欺師は十人ほどの人々を周りに集め、彼らの長老を装っていた。「あなたたちは、何かキリスト教の団体に所属しているのですか? 」と私は尋ねた。彼らは何も答えなかった。「何かの団体ですか? 」彼らは黙り込んだ。「では、告解司祭はいますか? 」沈黙。その後、彼らは私に近づき、頭を下げ始めた。この惑わされた男は、彼らをここに連れてきて、彼らを惑わした状態に留めておこうとしたのだ。そうして彼はこう言うつもりだったのだ。「私たちはパイシイ長老のもとを訪ね、彼は私たちに同意してくれた! 」これ、わかるか? そもそも、私は彼と会うべきではなかった。なぜなら、私が彼と会ったという事実そのものが、この男の思惑に利用されてしまうからだ。彼は非常に怪しげな様子だった! そして、ひざまずいていた彼の哀れな信奉者たちを見れば、彼らがこの詐欺師にすっかり魅了されていることが明らかだった。

— ゲロンダ、彼らには何もおっしゃらなかったのですか?

— 確かに私は彼らに話しましたが、あの悪賢い者は、彼らがここを去るやいなや、別のことを吹き込むでしょう。あらゆる手段を尽くして、彼は再び彼らを自分の道へと引き戻すのです。

— ゲロンダ、教えてください。惑わされた者たちから、どうすれば身を守ることができるのでしょうか？

— それは、私たちの教会の庇護の下にとどまることで可能です。もちろん、もし人が無知ゆえに惑わされた者に従ってしまったとしても、神はその人を見捨てたりはしません。神はそのような人が自分の過ちに気づくよう助け、真理へと導き戻してくださるでしょう。

惑わされた者の更生

— ゲロンダ、何らかの誤った考えを抱いている人が、正常な状態に戻るためには、何が助けになるのでしょうか？

— 自分の無力な状態を自覚し、すべての思いを守り師に告白し、守り師の言うことすべてに従うことが助けとなります。そのような人は、神の恵みが再び自分に返ってくるよう、絶えず神の憐れみを求めなければなりません。つまり、正常な状態に戻り、救われるためには、謙虚になる必要があるのです

そして見てごらん：神の裁きや御心は深淵のようだ。ああ、神の愛には限界がない！ 頭の中が惑わされるような考えでいっぱいになったある男が、頻繁にアトス山を訪れ、私のカリヴァに来ていた。私が何を言っても、彼は全く耳を貸さなかった。すべてを完全に逆さまに解釈していた。そして聖山を去ると、彼は説教を始め、人々に大きな「霊的な」損害を与えた。彼は、あたかも私が彼に説教を任せたかのように語り、そのようにして人々の頭を混乱させていた。かつて、私は彼に祝福として数冊の本を贈ったことがあったが、彼はその本さえも人々に示し、自分が私と相談しているのだと信じ込ませようとしていた。しかしある日、そのような「説教」の最中、ほんの一瞬、神の恵みが彼から完全に離れ、彼は最も卑猥な言葉でキリストと聖母マリアを冒瀆し始めた。そのような神への冒瀆を耳にした人々は恐怖に駆られ、逃げ去りました。その後、パトカーが到着し、彼は精神病院へ連行されました。ご覧の通り、神の愛はこれほどまでに及ぶのです！神は、御自身の御名が冒瀆されることさえ許しておられます——それは、ただ御自身の被造物が助けを受け、悪を免れるためなのです！

— ゲロンダ、もしある惑わされた者が、自分が惑わされていることに気づいて悔い改めた場合、その信奉者たちも悔い改めるのでしょうか？

— もしその悔い改めが本物であれば、彼は謙虚になり、信者たちに自分が誤っていたことを伝え、彼らを正しい「霊的な」道へと導こうと努めなければなりません。しかし、そのような人物の惑わされた思想が公になり、本人が依然として惑わされたままである場合、その信奉者たちには、穏やかに、かつ丁寧に啓蒙し、警告を与えなければなりません。というのも、惑わされた者の中には、教会内で自らの思想を広めてしまう者さえいるからです。そのため、そのような人々の信奉者たちは、自分たちが教えられてきたことが惑わしであったことを突然知って、誘惑に負け、教会から離れてしまう危険性がある。

第4章。 「惑わす者と惑わされる者」¹²²

ペンテコステ派の惑わしについて¹²³

— ゲロンダ、ペンテコステ派の惑わしに陥った人々は、幻を見たり、異言を話したりすると語っています。彼らが語ることは、単なる空想なのでしょうか、それとも実際に悪魔の影響によって起こっていることなのでしょうか？

— これは悪魔の影響によるものです。というのも、ペンテコステ派の異端に惑わされ、彼らから洗礼を受けることで、人々は聖正教会によって授けられた聖なる洗礼を踏み躪っているからです。「罪の赦しのための唯一の洗礼を告白する」と、使徒信条は述べている。そして、このような分派的な洗礼を受けることで、これらの不幸な人々は悪魔の影響下に陥り、様々な不可解な音を立て始め——あたかも異なる言語で話しているかのように振る舞うのだ。「これは」とペンテコステ派の人々は言う。「ペンテコステの聖霊が語っているのだ。」しかし、これは実際にはペンテコステの聖霊ではなく、不浄な霊の群れに他ならない。ましてや、何という「異言」などあるはずがない！彼らは支離滅裂な戯言を並べ立てているだけで、自分たちでさえ何を言っているのか理解していないのだ。さらに、この支離滅裂な言葉をすべてテープレコーダーに録音し、その後、その記録をもとに計算を行い、「このテープでは、この言語で『ハレルヤ』がこれだけの回数、あの言語でこれだけの回数……と発せられている」という結論に至っているのだ。まあ、そんなことはさておき、この支離滅裂な言葉の羅列の中に、世界のどこかの民族の言葉で「ハレルヤ」に似た音が見つかるのは当然のことだ！考えてみれば、このような「異言」は悪魔の仕業に他ならない。しかし、彼らはこの悪魔的な行為を聖霊の働きだと考え、まるで聖五旬節の日に聖なる使徒たちが体験したことを自分たちも体験しているかのように主張している。彼らが信じていることは神への冒瀆であり、それゆえに、こうした人々は悪霊に取り憑かれた状態になってしまうのだ。

— ゲロンダ、なぜ彼らは改めて洗礼を受けるのですか？

— 彼らはこう言うからです。「私は幼少期に洗礼を受けましたが、その時に自分に何かなされようとしているのか理解していませんでした。しかし今、それを自覚した上で洗礼を受けるのです。」このようにして、彼らは再び洗礼を受け、それによって「この異端的な洗礼以前に犯した」自分の罪を正当化しようとしているのです。しかし、もし教会が幼児洗礼を行わなかったとしたら、洗礼を受けずに亡くなる子供たちの魂はどうになってしまうのでしょうか？それゆえ、聖なる洗礼の秘跡において、代父は幼児の保証人となり、その子の代わりに『使徒信条』を唱え、その子が成長するまで責任を負うのです。果たして、幼児に洗礼を授けることは、彼らに対する不公正なことなのだろうか？もちろん、そうではない。それどころか、洗礼を受けた幼児は、キリストの聖なる秘跡に与るため、神の助けを受けるのである。そして、大人になってから何らかの罪によって聖なる洗礼の秘跡を汚してしまったとしても、だからといって改めて洗礼を受け

¹²² テモテへの手紙第二 3章13節。

¹²³ ペンテコステ派——1907年に米国で設立されたプロテスタント系の宗派。ペンテコステ派の異端的な見解によれば、彼らは「聖霊の洗礼」を受け入れ、その結果として「未知の言語を話すこと」（いわゆる「グロッソラリア」）、預言などを受けるとされる。ペンテコステ派は、教会としての特質を自らの宗派にのみ認め、千年王国説を信奉し、聖伝を認めないなどしている。——訳者注

なければならないというわけではありません！教会には悔い改めと告解があり、それらは人が犯した罪を洗い流してくれるのです。

火渡りについて¹²⁴

— ゲロンダ、聖コンスタンティヌスの祝日には、火渡り師たちが燃え盛る炭の上を歩き、火傷をしないとされています。これは一体どのような現象なのでしょう？

— それは悪魔的な現象であり、同時に欺瞞です。そして、彼らは何らかのアイコンや十字架を手に持ちながら炭の上で踊るとするのは、恥知らずな行為です。なぜなら、そのような行為は信仰を否定することになるからです。そのような人々からは神の恵みが遠ざかり、だからこそ悪魔が彼らを助けるのです。いや、そんなことをしたら、悪魔が彼らを助けないわけがないでしょう？ だって、彼らには悪魔の助けを受ける「権利」があるのですから！

しかし、この炭の上を歩く行為においては、彼ら自身の狡猾さも彼らを助けている。火渡り師たちは、パフォーマンスが行われる場所に事前に到着し、すべてを準備する。つまり、彼らはプラタナスの枝を燃やすのだが、それらは炭をほとんど残さず灰を多く残すため、踊りながらどこを踏めばよいかを把握しているのだ。なぜだろう、彼らは石櫟やイチゴノキの枝を焚き火に入れないのだろうか。それらを燃やせば、炭は長く消えないのに。さあ、誰かに代わりに焚き火を準備してもらって、それから彼らがそこへ行って、炭の上で踊ってみればいいではないか！

ある人が私にこう言った。「なんて奇跡だろう！ 火渡り師たちは素足で炭の上を歩き回っているのに、燃え尽きないんだ。」「それで驚くのか？」と私は彼に尋ねた。「悪魔たちは地獄の炎の中で長年にわたり、いや、今や何世紀にもわたって苦しめられているが、それでも燃え尽きないではないか！ これこそ驚くべきことであり、誰かが炭や灰の上を少し歩いただけでは燃えないことなど、驚くに値しないのだ。」

輪廻転生¹²⁵

「ゲロンダ、なぜ一部の人々、さらには教養のある人々でさえ、輪廻転生を信じるのでしょうか？」

「輪廻転生は、人々、とりわけ不信心な者や無信仰者にとって都合が良いのです。この偽りの教えは、悪魔による最大の欺瞞です。悪魔は、彼らの魂がこの世を去って再び戻ってくるという考えを植え付けることで、そのような人々を罪深い生活にとどめ続けているのです。「大したことはないさ」と、悪魔は輪廻転生を信じる者たちに囁きます。「もし今回失敗したとしても、次にこの人生に戻ってきた時には幸運が待っている。もしまた失敗したとしても、また戻ってくるし、その次はまた…… お前は進化を遂げるのだ！……」こうして人々は、「この罪を犯したところで大したことではない」と言い、すべてを軽くあしらってしまう。彼らは無頓着に生き、悔い改めることもない。悪魔がいかにしてこうした人々を盲目にし、地獄に閉じ込めているか、お分かりだろうか！ 私は、輪廻転生という偽りの教え以上に、悪魔の狡猾さと虚構を見たことがない。悪魔は人々を地獄に集めるためにこれをでっち上げたのだ。もし悪魔に一度捕まってし

¹²⁴ 「火歩き者」（ギリシャ語：ἀναστενάρια）——フラキアやマケドニア（北ギリシャ）の一部の集落で広まっている、燃える炭の上を歩くという異教の風習の信奉者たち。——訳者注

¹²⁵ 輪廻転生とは、肉体の死後、魂が別の人間や動物の体に入り込み、生まれ変わりと死の無限のサイクルを繰り返すという、誤った宗教的観念である。

まったら、彼があなたを元の世界に戻してくれると思うか？ 輪廻転生の理論は、ヒンドゥー教のあらゆる理論の中で最悪のものだ。

ある晩遅く、一人の若者が私のカリヴァを訪ねてきた。「私が晩課を唱えようとしていたこんな時間に、私のところへ来るなんて」と私は彼に言った。「まだそんな馬鹿げたことを続けているのか？」と彼は答えると、立ち去ってしまった。翌日、彼は再びやって来て、自分が体験した幻視について語り始めた。「君は」と私は言った。「以前、ハシシを吸ったことはあるか？」「はい」と彼は答えた。「以前は吸っていました。しかし、あの幻覚を見た時は、ハシシなんて吸っていませんでした！」「もしかして」と私は彼に尋ねた。「輪廻転生に関する本を読んだことはあるか？」「ああ」と彼は答えた。まさにそこが彼の落とし穴だった。彼は輪廻転生について読み漁り、そこにエゴイズムが混ざり合い、悪魔が彼に『千年前、お前は偉大な人物だった』という夢を見せ始めたのだ！ そんな話、ありえない！ その後、幻視の中で彼は「天に引き上げられた」が、天国ではまだ「登録されていなかった」ため、降りてくるよう命じられた。彼をその状態に追い込んだのは悪魔だった。「君が話してくれたことはすべて、作り話だ」と私は彼に言った。「それなのに、君はそれを信じてしまったのか？」

残念ながら、こうした馬鹿げた話を信じる教養のある人々もいる。私のカリヴァの近くで、一頭のロバが草を食んでいた。そのロバは活発だったので、私は彼をナセルと名付けた。¹²⁶ ある日、スイスに住むギリシャ人の巡礼者が私のところへやって来た。彼は私がロバを「ナセル」と呼んでいるのを耳にし、次に訪れた際、お菓子が入った箱を二つ——一つは普通のもの、もう一つは贈り物用のもの——持ってきてくれた。「このお菓子は君へのものだ」と彼は私に言い、普通の入った箱を手渡した。「そして、この高級なケーキはナセルのためだ。あの時、彼が本物のナセルだと気づいたんだ。彼と出会った時、彼は私をととても悲しげな眼差しで見つめてきて、その眼差しが私の心を突き刺したんだ！」つまり、彼はナセルが転生してロバになったと思い込んでいたのだ！そして、それを本気で信じていたのです！「おい、兄弟、」と私は彼に言いました。「頭、大丈夫か？ あのロバをナセルと呼んでいるのは、彼が元気いっぱいだからだ！」しかし、私がどんなに説明しても、彼は私の言っていることを理解してくれませんでした。

しかし、それだけではない！ もう一つの出来事をお話ししよう。数年前、ドイツによるギリシャ占領中にそこで戦死したドイツ兵の追悼のために、ドイツ人のグループがクレタ島を訪れた。ドイツ人たちが式典を行っている最中、買い物を積んだロバを引いた一人の農民が彼らのそばを通りかかった。人だかりを見て、ロバは鳴き始めた。ドイツ人の一人は、その鳴き声を「戦争で戦死した自分の兄弟が、ロバに生まれ変わったのだ！」と解釈してしまったのです！「兄弟」が自分を認識し、その鳴き声で挨拶しているのだと悟ったドイツ人は、直立不動の姿勢を取り、軍式敬礼で片手を前に突き出しました……笑止千万！……ドイツ兵は一瞬も躊躇せず、農夫のもとへ駆け寄り、こう尋ねた。「このロバ、いくらで売ってくれる？ 俺が買うよ。」「ふざけるな、どこへでも行け……」と農夫は答えた。しかし、ドイツ兵はそれを聞き流して、すでにマルクを数え始めていた。もっと、さらに……「さっさと行けよ、——」と農夫は説得した。「道を空けてくれ。」さらに多く、さらに多く……結局、この光景を見ていた一人の男が農夫に言った。「馬鹿だな、お前は馬鹿だ。あいつはロバの代金として、まるで『メルセ

¹²⁶ ナセル・ガマル・アブデル（1918–1970）——1956年から1970年までエジプト大統領を務めた——訳者注

デス』を買うかのような金額を払っているんだぞ。 さあ、彼に譲ってやれ。」農夫はしばらく立ち止まり、考え込んだ後、ロバの綱を解き、鞍を外して、その動物をドイツ人に引き渡した。ドイツ人は目に涙を浮かべてロバを受け取り、それをドイツへと連れて行ったのだ！

— ゲロンダ、これは本当の話ですか？

— これ以上ないほど真剣な話だ！ もしある真面目な人からこの話を聞いていなければ、私自身も信じられなかっただろう。

ヒンドゥー教における苦行について¹²⁷

— ゲロンダ、ヒンドゥー教徒たちは、ヨガで行う厳しい苦行のおかげで、ある種の自制心を身につけているのでしょうか？

— 確かに彼らはそうした修行を行っているが、結局のところ、何を目指しているのだろうか？ 正教の節制、そして霊的な苦行全般は、常に最高の霊的目標、すなわち魂の聖化を念頭に置いているのだ。 一方、私たちが話しているような者たちの、悪魔的な世俗的な苦行は、体を柔軟にし、まるで紙のカラヨーズのよう手足をひねり回せるようにするため、¹²⁸ これらの「苦行者」を一部の愚かな人々が称賛し、嘲笑に値する悪霊たちが彼らを嘲笑うために行われているのです。 このような東洋の苦行に励む者は、幼い頃から脚を伸ばし始め、片方の脚を片方の肩にかけ、もう片方をもう一方の肩にかけ、その姿勢で座って祈りを捧げる。 彼らは、何時間も碎石の入った袋を拳で叩き続けるため、手にタコができ、その後、石や板などを砕くことができるようになる。

しかし、東洋の宗教の信者たちが語る感覚や体験は、説明がつくものである。 例えば、舌を鼻の先まで伸ばしたり、逆に舌を口の中に引き込んで舌先を喉頭に触れさせたりすると、彼らはある種の刺激を感じ、くすぐったいような甘美さを味わい、こう言うのです。 「私たちはネクター〔神々の飲み物〕を飲んだ。」その後、こうした「修行者」たちは指で耳の近くの神経を圧迫し、 ある種のうなり声を聞き始める。「ウーウーウー……」音楽だ！ ……あるいは、指で目を押さえると、目の前にかすかな星がちらつき始める！ あるいは、目を大きく見開いて太陽をじっと見つめ、それから目を細めて光を見ることがある！ 「ほら、」と彼らは言う。「我々は望んでいたものを手に入れた。創造されざる光を見たのだ！」すると悪魔は彼らにこう言う。「ああ、そうか、君たちは光を望んでいるのか？ それなら、私が与えてやろう。」悪魔は彼らの想像力を煽り立て、やがて彼らは、もはや指で目を押さえたり太陽を見たりすることなく、「光」を見るようになる。 私たち〔正教会の修道士〕は、悪魔にしばしば惑わされようとしています。悪魔は何か光やそれに似たものを示して、私たちを誘惑しようとするのです。私たちはそれを求めてはいませんし、むしろその光に背を向けているのに、それでもなお悪魔は私たちを惑わそうとするのです！ ましてや、人間自身が悪魔を挑発しているとなれば、何と言えましょうか！ 悪魔には、きっかけさえ与えればそれでいいのですから！

— ゲロンダ、つまり悪魔自身が彼らに様々な光景を見せているということですか？

— そうです。悪魔は彼らの想像力を煽り立て、極限まで鋭敏にさせ、そして彼らを惑わしの罠に陥れるのです。

¹²⁷ 本章で長老が述べたことは、ヒンドゥー教だけでなく、ヨガや瞑想の手法を用いる「ニューエイジ」の宗教的潮流全般にも関連している。

¹²⁸ カラヨーズ——ギリシャの影絵劇の主人公であり、道化師。——訳者注

また、私たちの同胞の中には、インドの師のもとへ赴く者もいます。インド人たちは、彼らに自分たちの言語で、キリストや至聖なる聖母、聖人たちについて、様々な冒瀆的な言葉を語るように教えます。その中には、それが冒瀆であることを知っている者もいれば、知らない者もいます。こうして、これらの人々は悪霊に取り憑かれた状態になります。その後、彼らは「言い表せない言葉」を口にします。彼らは恍惚状態、正気を失った状態にまで達し、それを見た人々は、彼らが霊的な境地にあると思い込んでしまいます！しかし、この状態は悪霊によるものです。

ヒンドゥー教は多くの悪をもたらした

インド人は賢い民族だ。彼らは「地上のものに満足せず」、自然の枠を超えたものに心を奪われている。そして、豊かな心を備えている。しかし、それにもかかわらず、彼らはいわゆる哲学や魅惑的な教え、そして魔術に没頭している。インド人は自らの理論によってヨーロッパ人を堕落させている。そして、東洋の宗教潮流を率いる者たちを見てみよ。彼ら自身の体格はまるで雄牛のようであるのに、一方で、それらの国々の大多数の人々は飢えで死んでいるのだ！これらの指導者たちは、ここギリシャにもやって来て、ニルヴァーナ——つまり、怠惰に過ごす機会や輪廻転生——といったもので人々を惑わしている……それだけでなく、彼らは自らの著書の中で、聖書や『善意』、教父たちの書物からの抜粋を用い、それによって人々を惹きつけている。かつて、正教徒がヒンドゥー教の理論を信じるなど、想像さえできただろうか！ところが今では、どう言えばいいか、いわゆる「正しい」あるいは「前向きな」人々でさえ、そのような愚かな考えを支持し、こうした教師たちに大金を払っているのです。ヒンドゥー教は私たちに計り知れない害をもたらしました。

—ゲロンダ、教えてください。インドには正教徒はいるのでしょうか？

—ごくわずかです。かつて使徒トマスがインドで設立した教会の信徒がわずかに残っていましたが、彼らも姿を消してしまいました。そのうちの何人かはカトリックに、他はプロテスタントになりました。今日、それらの国々で正教徒は指で数えられるほどしかいません。

他の宗教や宗教運動が「奇跡」と称するものは、私たちの信仰における奇跡とは、まったく無関係です。キリストは私たちに愛を求めておられます。キリストは、ご自身が全能であるからといって、私たちに自分を愛してほしいとは望んでおられません。もしキリストが望まれたなら、何らかの奇跡を起こすこともできたでしょうし、そうすれば全世界が即座にキリストを信じたことでしょう。しかし、そうすれば、キリストは人間の自由を束縛することになってしまいます。だからこそ、キリストはこう言われるのです。「*見ずして信じる者は幸いである。*」¹²⁹

正教会には、奇跡と神の恵みが存在します。ヒンドゥー教には、魔術と哲学がある。ヒンドゥー教は奇跡を魔術で置き換え、神の恵みを哲学で置き換えている。悪魔はグルや魔術師、そして彼らに類する人々に力を与える。なぜなら、彼ら自身が悪魔に自分たちに対する支配権を与えているからだ。こうして、こうした人々は、一見奇跡のように見えることを行い、それを見た他の人々は感嘆する。

東洋の宗教的教えに夢中になった人が、偽りの奇跡を行う者がキリストとは微塵も関係がないことに気づいたその瞬間から、そのような「奇跡を行う者」が行うことはす

¹²⁹ ヨハネ20:29。

べて、悪魔の欺瞞であることを理解しなければならない。悪魔は真実を語ることはできません。彼は嘘ばかりを語り、神の被造物を惑わすのです。もし、東洋の教えに関わった人々が、以前に正教会について少しは知っており、好意的な心持ちを持っているならば、東洋の魔術師たちの生活が不純で混乱しているのを見て考えを巡らせるでしょう。一方で、正教会においては、清らかな生活とより高い〔霊的な〕賜物を見出すのです。正教会において、彼らは聖性を備え、真の奇跡を行う人々を見出すのである。

正教における善は、神と隣人に対する人間の愛の溢れ出るものです。異教徒や惑わされた者たち、そして彼らに似た者たちによって行われる他のあらゆる種類の善は、キリストにおける〔生活の〕霊的な基盤を持っていませんが、それ自体には何らかの肯定的な人間的な基盤があるかもしれません。正教の生活を正しく送る者は、謙遜と愛を持ち、隣人に全身全霊を捧げ、自らを犠牲とする。また、その禁欲的行いや断食、徹夜祈祷も、何か心地よいものを感じるためではなく、神への愛から行っているのだ。

キリストはこの世に来られたのは、ご自身の被造物への愛ゆえに十字架の苦難に耐えるためでした。まず十字架の苦難に耐え、その後、復活されました。霊的な喜びを求めることは、安っぽい行為です。しかし、キリストご自身が人に天の甘美さを味わわせてくださるなら、話は別です。一方、例えば様々なヒンドゥー教の哲学やヨガなどに従事する人々は、いわゆる霊的な状態やエクスタシーに到達しようと努めてこれを行っている。彼らは快楽を味わおうとしたり、他者より優位に立とうとしたりしているが、その一方で、誰に対しても何の共感も関心も抱いていない。

仮に、ある東洋の宗教の信者が海辺に座って瞑想にふけっているとしよう。もし、彼がその修行に没頭している最中に、海で人が溺れて「助けて!」と叫んだとしても、その信者はその叫び声に対して全く無関心なままであるだろう。彼は、自分が感じている至福の喜びを失わないよう、身動き一つせず、その場から立ち去ることさえしないだろう。しかし、もしその場所に、イエスの祈りを捧げていた正教会の修道士がいたとしたら、溺れている人の叫び声を聞いた途端、すぐに数珠を脇に置き、海に飛び込んでその人を救おうとするだろう。

人々はどれほど惑わされていることか

— ゲロンダ、再臨の前に、預言者エリヤとエノクが悔い改めを説くために地上にやって来たとき、世界は彼らの説教を理解し、正気に戻るでしょうか?

— 善意のある者は理解するでしょう。しかし、善意のない者は理解できず、惑わされてしまうでしょう。キリストは、私たちに「偽キリストや偽預言者たちが現れ、しるしや奇跡を行って、もし可能ならば、選ばれた者たちまでも惑わそうとする」から、非常に注意深くなければならないと警告されました。¹³⁰

一部の惑わされた人々を預言者と見なす人々がいます。数年前、あるプロテスタントの男が、革製の小さなスーツケースを携えて、ある都市から別の都市へと絶え間なく移動していました。そのスーツケースには、英語で次のように書かれたステッカーが貼られていました。「私は預言者イリヤだ!」このプロテスタントの男は半袖のシャツを着ており、英語の聖書を携え、人々に「自分は天から降りてきたのだ!」と語っていた。彼が何を信じ、どの宗教に属しているのかと尋ねられると、こう答えた。「えー、今となってはそんなことは何の意味もない! 私がまだ地上にいた時代には、どんな宗教も

¹³⁰ マルコによる福音書 13章22節。

存在しなかった！」わかるか？つまり、カトリック、プロテスタント、ペンテコステ派、あらゆる異端や分派——このプロテスタントにとっては、それらに何の違いもなかったのだ。しかし、これを見れば、この「預言者」が一体何者なのか、明らかになるのではないか？彼は私にどれほど多くの手紙を送ってきたことか！彼の手紙はすべて、聖書の引用や様々なプロテスタントの思想で埋め尽くされていた。彼は他の人々にも山ほどの手紙を送っていた。ある人にはイギリスから、別の人には他の場所から。中には彼を信じ、預言者エリヤが現れたという記事のある雑誌に掲載しようとした人々さえいた。「あなたたち、正気なのか？——と私はその人たちに言った。「一体、何をしようとしているんだ？」哀れな人たちだ。頭の中がすっかり混乱している！

惑わされた者たちの話をただ聞くだけでも、人は罪を犯してしまう。中には、「ある出来事が起こることを信じれば、それは起こる」と言う者もいる。そのような信仰は、自分の「自我」への信仰に過ぎないが、その「自我」の裏にはタンガラシュカが潜んでいる。そのような人々は、自分の「自我」を神とし、神の恵みを失ってしまう。そして、こうした理論を用いて、人々を惑わそうとする者もいる。ある45歳ほどの惑わされた男は、ハルキ神学校¹³¹の卒業生を装い、様々なヒンドゥー教の理論を説いていた。「こうした美化されたインドの愚かな説を広めながら——と私は彼に言った——同時にハルキの学校の卒業生を装うことは、あなた自身にも人々にも害を及ぼす。気をつけなさい。あなたは悪霊に取り憑かれるかもしれない。」

「ゲロンダ、なぜギリシャで広まっている一部の疑似宗教的潮流は、非宗教的な団体やクラブ、協会などであるかのように装おうとするのでしょうか？なぜ彼らは、自分たちの教えの内容が宗教的なものであるとは明言しないのでしょうか？」

——彼らは人々を惑わすためにそうしているのです。考えてみてください。かつて聖使徒同等のコンスタンティヌス大帝は偶像崇拜を廃止し、キリスト教を当時のローマ帝国全体の国教としました。そして今日、彼らは再び私たちを偶像崇拜へと引き戻そうとしているのです。[国家レベルで]モスクの建設が許可され、様々な「グル」たちがわが国に自らの修道院を設立し、自由に講演を行い、様々な改宗センターを開設することを許されている……フリーメイソンも、エホバの証人も、わが国で自由に活動している……正教会に対しては、実に多くの異なる宗教的教えが牙をむいている。しかし、これらすべては長くは続かず、カードの家のように崩れ去るだろう。

不幸な人々は、神から遠ざかり、心が曇ってしまったがゆえに、こうしたあらゆる偽りの教えに夢中になっているのだ！二人の若者が、聖地を巡礼中にヘブロンを訪れ、アブラハムの墓に参拝しようとしたところ、ユダヤ教の帽子をかぶることを条件にのみ、墓への立ち入りを許可されたと私に話してくれた。しかし、もしユダヤ教の宗教儀式で使われるものを頭に被ってしまったら、正教会の巡礼に何の意味があるというのか？

もう、何と言えればいいか！恐ろしい[霊的な]大混乱が起きているのだ！パリのあるローマ・カトリック教会の入り口には、「ヨガの方法でイエスの祈りのレッスンを行っています」という看板が掲げられていた。一体どこまで墮落してしまったのか！そして、そのような「祈りの実践者」たちは次第に精神が乱れ、正気を失っていく。彼らは、何を求めているのかさえ分かっていないのだ。一部のローマ・カトリック教徒やプロ

¹³¹ ハルキ島（コンスタンティノーブル近郊のプリンツェフ諸島）にある神学校——全地総主教庁の教育機関。1844年に設立された。3つのギムナジウム課程と4つのアカデミー課程を有していた（ロシアの神学校やアカデミーと同様に）。神学部門は1971年にトルコ政府によって閉鎖され、ギムナジウム部門は1984年に閉鎖された。——訳者注

テスタント、それに類する人々は、正教会での洗礼によって人は変容し、生まれ変わるということを知る。そして、こうした人々は、自分たちも正教会の洗礼を受ければ、精神状態が再び正常に戻ると考えているのだ。あるプロテスタントが正教徒になりたいと望んだ。彼が洗礼を依頼した人々が私のところに来たとき、私は彼らにこう言った。「聞いてください、彼に洗礼を授ける必要はありません。彼は洗礼を受ける準備ができていないのです。」「いいえ」と彼らは答えた。「彼が洗礼を受ければ、助けを得られるはずです。」「しかし、彼は洗礼を受ける準備ができていないのです！ 本当にそれが分からないのですか？」しかし、彼らは私の言うことを聞き入れず、そのプロテスタントを海辺に連れて行き、洗礼を授けてしまったのです！ 2、3日後、彼は私のカリヴァを訪れ、こう言いました。「私は洗礼を受けましたが、洗礼によって私の精神状態は改善されませんでした。」—「ちょっと待ってくれ、まさか、君は精神状態を改善するために洗礼を受けたというのか？」と私は彼に尋ねた。「考えてみてくれ。もし君が洗礼の必要性を感じ、その尊さを理解し、その偉大さのためにこの秘跡を求めようとしたなら、そのときこそ君の精神状態も正常に戻ったはずだ。しかし今、君が精神の不調を正すためだけに聖なる洗礼の秘跡に臨んだとして、その不調がどうして正されるというのか？ 魔法のように治ると思っているのか？」

こうした人々は、魔術と奇跡を混同している。彼らは金と青銅を見分けることができない。見てごらん。あるプロテスタントが、例えば正教会の洗礼を受け、その後カトリックに改宗し、さらに「いや、これも気に入らない」と言って、再びプロテスタントや正教会に戻ってしまうようなことがある。あるカトリック教徒が正教会の洗礼を受け、修道士となり、9年間正教会の修道院で暮らしていた。ある日、彼は私のカリヴァ（小屋）を訪れ、こう宣言した。「正教徒として、私はまだ世俗の生活を送ったことがないので、世俗に戻って結婚したい！」聞いてみてよ！ さらに、そんな考えを持つことがどれほど重い罪であるかを彼に説いても、彼はこう返すのだ。「なぜそれが重い罪なんだ？ 私には理解できない。」

正教会への復帰

現代の奇妙な人々は、正しいことではなく、奇妙なことそのものに満足を見出しています。例えば、彼らは地球の反対側にあり、魔術で知られるインドへと旅立ちます。それなのに、自分たちの故郷にあり、すぐそばにあり、キリストにおける真の神秘的な生活を保っている聖アトス山については、彼らは知らず、軽んじているのだ！ ある学生が、インドへ行き、そこで3年半過ごした話を私に語ってくれた。彼は、どの宗教が真実なのかを解き明かし、理解しようとしていた。結局、あるインド人が彼にこう言った。「なぜここにきたのか？ 君が探しているものは、正教会にある。光はそこから発している。聖アトス山へ行き、そこで探しているものを見つけなさい。」¹³² こうして、その青年はギリシャに戻り、聖アトス山を訪れた。

— ゲロンダ、さまざまな東洋の宗教的儀式に関わった正教会の信徒が、そのことを悔い改めた場合、正教会は再びその人を信徒として受け入れてくれるのでしょうか？

— そのような人には、大いなる悔い改めと聖油の塗油が必要です。もし彼が正教に復帰し、再び教会の会員になりたいと望むなら、規則に従い、まず書面で東方諸教団の

¹³² 神は、神に好意を抱く者に対して、様々な方法で御心を示されることが知られている。数多くの例の一つとして、神の御心に反する行動をバアラムがとらないよう、人間の声で語りかけた雌ロバが挙げられる（民数記22章18-35節参照）。

邪説を放棄し、正教の信仰を告白しなければなりません。その後、司祭は、真の信仰に立ち返る者に対する祈り（¹³³）を彼のために唱え、聖油を塗らなければなりません。

私は、一部の若者——私たちの同胞たちが、福音書の一行も読まずに、バラモン教や仏教の文献、コーランなどを読み始めているのを目にします。彼らはインドのグルのもとへも赴く。その後、その環境が気に入らず、正教会へ戻ってくるが、すでにこれらの東洋の宗教から、様々な「霊的な」病原菌を大量に感染させられてしまっている。人々は傷つき、その後、真理を見出すことが難しくなる。人はまず「人生経験を通じて」正教会を知り、その後——もし正教会が気に入らなければ——そこから離れてもよい。正教会を正しく理解した上で、耳にする様々な宗教的教えと比較すべきである。何しろ、正教を知れば、人は偽物と本物の金を見分けたり、その金がどれほど純度が高く、に何カラット含まれているかを理解できるようになるからだ。そのような人は、初めに騙されることはない。光るものすべてを金だと受け入れることはないのだ。

私が注目したのは、正教会を去るのは利己的な人だけだということです。謙虚な人は、決して正教会を去ることはありません。

第5部。 懺悔の力について

「内なる平安を味わうためには、自分の中からゴミを取り除く必要がある。それは懺悔を通じて行わなければならない。霊的指導者に心を開き、自分の罪を告白することで、人は謙虚になる。そうして天の扉が開かれ、神の恵みが豊かに注がれ、人は自由になる」

第1章。 霊的指導者の必要性について

告白によって人は解放される

— ゲロンダ、キリスト教の初期には、教会のすべての信徒が公の場で告解を行っていました。そのような公の告解には、何か益があるのでしょうか？

— キリスト教の初期の時代と、私たちのような現代とは事情が異なります。今日、そのような公の告白に益はありません。

— なぜですか、ゲロンダ？ あの時代のキリスト教徒は、より熱心だったのでしょうか？

— 確かに彼らの信仰心はより強かったが、私たちが今日陥っているような状況は、彼らにはなかった。今日では昔とは異なり、理由もなく夫婦が離婚し、家族が崩壊している。

¹³³ 参照：『Εὐχολόγιον τὸ Μέγα』。「Ἀστήρ」社刊、アテネ、1986年、591頁。

告解の秘跡から遠ざかった人々は、思いや情欲に窒息しそうになっています。どれほど多くの人々が私のところに来て、何らかの困難を解決してほしいと頼んでくるか、ご存知ですか？ しかし、そうした人々は告解にも教会にも行きたがらないのです！ 「教会にはせめて行っているのか？」と私は尋ねます。「いいえ」と彼らは答えます。「せめて一度でも告解をしたことはあるか？」と再び尋ねます。「いいえ。私はあなたに癒やしてもらうために来たのです。」「しかし、どうやってあなたを癒やせばいいというのか？ あなたは自分の罪を悔い改め、懺悔をし、教会に通い、聖体拝領を受けなければなりません——もしあなたの霊的指導者からその祝福を得ているなら——そうすれば、私はあなたの健康のために祈ります。私たちには別の世界があり、そのために備えなければならないということを、まさか忘れてしまったのですか？」—— 「ちょっと聞いてください、神父様」と、そうした人々は反論する。「あなたが話していること——教会やあの世のことなど——は、私たちには関係ありません。それらはすべておとぎ話です。私は呪術師や霊能者のところにも行きましたが、彼らは私を癒やすことができませんでした。そして、あなたなら私を癒やせるということを知ったのです。」 一体どういうことか、想像できるだろうか！ あなたは彼らに懺悔や来世について語るのに、彼らは「それはすべておとぎ話だ」と返す。しかし同時に、「助けてくれ、さもないと薬を飲み続けなければならない」と頼んでくる。だが、どうすれば彼らを助けられるというのか？ 彼らが魔法のように「何の苦労もなく」癒やされるというのか？

それに、自分の罪によって自ら招いた問題に苦しんでいる多くの人々は、本当に助けになってくれる霊的指導者のところへは行かず、結局、心理カウンセラーに「懺悔」することになってしまう。彼らは心理学者たちに自分の病気の経緯を語り、問題について相談しますが、その心理学者たちは「その助言によって」、まるで患者たちを、渡らなければならない川の真ん中に放り投げているかのようです。その結果、不幸な人々は、その川で溺れてしまうか、あるいはなんとか対岸にたどり着くものの、流れによって、本来たどり着きたかった場所から遠く離れた場所に運ばれてしまいます。……しかし、霊的指導者のところへ告解に行き、告解を済ませたならば、そのような人々はリスクや恐れなく、橋を渡って川を渡ることができるでしょう。なぜなら、告解の秘跡においては神の恵みが働き、人は罪から解放されるからです。

— ゲロンダ、一部の人々は「良い霊的指導者が見つからないから、懺悔に行かない」と弁解しています。

— それらはすべて言い訳に過ぎません。エピトラヒルを身にまとったすべての告解司祭は、神聖な権威を授かっています。司祭は秘跡を執り行い、神の恵みを授かっており、悔い改めた者のために赦しの祈りを唱えるとき、神はその者が心からの悔い改めをもって告白したすべての罪を消し去ってくださるのです。告解の秘跡からどのような恩恵を受けるかは、私たち自身にかかっている。ある時、精神に問題を抱えた男が私のカリヴァを訪れた。彼は、私が透視の賜物を持っており、自分を助けてくれるだろうと考えていたのだ。「私のこと、何が見える？」と彼は私に尋ねました。「霊父を見つけて、その人に懺悔しなさい」と私は答えました。「そうすれば、赤ん坊のようにぐっすり眠れるようになり、今飲んでいいる薬も捨てられるでしょう。」「今の時代には」と彼は答えました。「良い霊父なんていない。昔はいたけれど、今はもういなくなってしまった。」 このように、人々は助けを得ようという善意で私のところへやってくるが、私が言うことを聞き入れない。それなら、アフォン行きの切符代を無駄にただけだ。

しかし、私は悪魔が人々を罠にかけるために新たな策略を編み出したのを見抜いている。悪魔は人々に、例えば聖地への巡礼に行くといった、自分たちが立てた誓いを果たせば、霊的には問題ないのだという考えを吹き込んでいるのだ。そして、大きなろうそくや、ある奇跡を起こすアイコンに吊るすと約束した銀のペンダントを手に、多くの巡礼者が修道院や聖地を巡り、そこで銀のペンダントを吊るし、大きく十字を切って、目に溢れた涙をぬぐい、それで満足している。こうした人々は悔い改めず、懺悔もせず、改心もしない。それゆえに、タンガラシュカを喜ばせているのだ。

— ゲロンダ、懺悔をしない人は、内なる平安を得ることができるのでしょうか？

— どうして内なる平安を得られるというのでしょうか？ 内なる平安を感じるためには、自分の中からゴミを洗い流さなければなりません。それは告白を通じて行わなければなりません。霊的指導者に心を開き、罪を告白することで、人は謙虚になります。そうして天の扉が開かれ、神の恵みが豊かに注がれ、人は自由になるのです。

告白をするまでは、人の〔霊的な〕頂点は霧に覆われています。人はこの霧を通して、非常にぼんやりと、曖昧にしか物事を見ることができず——そして自分の罪を正当化してしまうのです。というのも、もし心が罪によって曇っているなら、人はまるで霧の中を見ているかのように感じるからです。しかし、懺悔はまさに強い風のようなもので、それによって霧が晴れ、地平線が開けるのです。ですから、私に助言を求めてやってくる人々がまだ懺悔をしていない場合、私はまず彼らを懺悔へと送り出し、懺悔を終えてから再び私のもとに来て話し合うように伝えます。中にはこう言い訳する者もいます。「ゲロンダ、もし私の問題を解決するために何をすべきか、あなたが理解できるのであれば、ただそれを教えてくれればいいのです。」——「たとえ私が本当にあなたが何をすべきかを理解できたとしても」と私は答えます。「あなたにはそれを理解することはできないでしょう。だから、まずは懺悔に行ってから、また来て、二人で話し合いましょう。」確かに、相手が別の〔霊的な〕周波数で「動いている」場合、どうやってその人とつながりを築き、相互理解に至ることができるのでしょうか？

告白を通じて、人は内側から不要なものをすべて取り除き——そして霊的に実を結ぶのだ。ある日、トマトの苗を数株植えるために菜園を耕していた時、一人の訪問者がやって来て尋ねた。「ゲロンダ、何をしていますのですか？」——「何をしていますかって？——と私は言った。「ああ、ほら、自分の菜園に懺悔しているんだ」。「まさか、ゲロンダ」と、彼は戸惑った様子で言った。「まさか、菜園だって懺悔が必要なんですか？」「もちろん、必要です。私は、菜園に懺悔——つまり、土から石や雑草、とげなどを取り除いてきれいにすると、そこで育つ野菜はどれも丈夫で、見事に健康なものになることを確信しています！もし菜園を『懺悔』せずに放っておけば、その畝には、発育不良の黄色っぽくてしわしわのトマトばかりが育ってしまうだろう……！」

神は、人が人を通じて改心することを望んでおられます

— ゲロンダ、私は何らかの困難に直面し、それが解決されるよう祈るとき、神の御心が何であるかをどうすれば理解できるのでしょうか？

— 神の御心は、そのような方法では見出せません。むしろ、その困難について他の人に尋ねるほうがよいでしょう。人に相談できるのなら、神からの啓示を求めるべきではありません。そうでなければ、惑わされてしまう恐れがあるからです。ある人が教会に来ると、イコノスタスの前に立ち、「私の御母よ、では、献金箱からお金を取ってもいいのでしょうか？」と言い始めました。「取っていいよ」と、彼の思いが答えました。

「よし、それなら取ろう」と彼はその思いに答え、お金を取りました。これが何度か繰り返された後、教区評議会のメンバーの一人が、献金箱からお金が消えていることに気づいた。「一体何が起きているんだ？」と彼は驚いた。「まさか誰かが金を盗んでいるのか？」彼は、誰がそんなことをしているのか突き止めようと決心した。そして、彼は何を見たか？間もなくその男が現れ、同じことが繰り返された。「わが御母よ、これで献金箱からお金を取ってもいいでしょうか.....？よし、それなら取ろう。」こうして、教区評議会のメンバーは彼を犯行現場で捕まえた。

常に、近くに霊的な人がいれば、その人に助言を求めるべきだ。しかし、相談できる人がいない場合——例えば、あなたがどこかの荒野にいるような時——それでもあなたの中に従順への渴望が生きているなら、その時、慈愛に満ちた神ご自身があなたの「長老」となられる。神はあなたを啓発し、導いてくださるのだ。例えば、聖書の特定の箇所をあなたに説明できる人を見つけられないとしましょう。しかし、その場合でも、神があなたを啓発してくださり、あなたはその箇所を理解することができるのです。

— ゲロンダ、教えてください。私の霊的生活におけるある現象の原因が何なのか、どうすれば理解できるのでしょうか。それは悪霊による誘惑なのか、それとも私自身の不注意のせいなのでしょうか？

— 行って尋ねてみるべきです。

— つまり、人は自分だけではそれを理解できないということですか？

— たとえ何かを理解したとしても、確信を持つことはできません。ここにおいては、経験豊富な人でさえ、他の人に尋ねに行くものです。もしその質問が私個人に関するものであれば、私は必ず誰かに尋ねます。私個人に関わる事柄については、たとえそれがどれほど賢明に見えても、私自身の決断こそが最大の愚かさだと考えています。その際、私は、どの決断が私の気に入るかあらかじめ知っている人ではなく、それを知らない人に相談しに行くのです。考えてみてください。医師でさえ、難しい症例で正しい診断を下しているかどうか確信を持つために、他の医師に相談するではありませんか。ましてや、学生に相談すべきです！人がどれほど霊的であろうと、自分に関わる問題をどれほどうまく整理できようとも、内なる平安を見出すことはできない。なぜなら、神は人が人から助けを受け、人を通じて改心することを望んでおられるからだ。慈愛に満ちた神は、人が謙虚になるために、このように定められているのだ。人は、自分の思いや身に起きていることを、自分の霊的指導者に打ち明け、彼と相談し、難しい問題を独力で解決しようとすべきではありません。また、霊的な闘いの中で直面する困難を、自分一人で乗り越えようとしてはなりません。そうすることで、自ら試練を招くことになり、悪霊に惑わされて、新たな問題を引き起こされる恐れがあるからです。中には、自分で悔悛の行いを決めてしまう人もいるほどです。そのような行為は極めて危険です。

霊的な道を歩む上で相談できる告解司祭を持たないキリスト教徒は、道に迷い、疲れ果て、後れを取ってしまう。そのような人が目標を達成するのは、非常に難しい。もし人が自分の問題を独力で解決しようとするなら、たとえどれほど賢明な人であっても、自信過剰や高慢な態度をとってしまうため、心は曇ったままになってしまう。しかし、謙虚になり、信頼と献身をもって指導者のもとへ赴き、その意見を尋ねる人は、助けを得ることができます。これは、後者の場合、神が必ず指導者を啓発し、指導者がその人に正しい答えを与えるからです。さて、私自身のケースもまさにそうだ。私は一体何者か？缶詰の蓋に過ぎない。しかし、もし私が聖人であるという思いを抱いて人が私のところに来ると、私は自分の中に何らかの変化を感じ、自分の言葉ではなく、別の力に

よって語っているのだと気づく。ここから、私を訪ねてきた人が畏敬の念を持って来たこと、そして神がその人に不公正な扱いをすることのないよう、私をこの善き状態へと導いてくださっていることが、二乗二は四であるのと同じくらい明白になります。そのような場合、もしあなたが何か深刻なことについて尋ねられたら、神はあなたに知らせてくださるので、その人に、何が起こるのか、いつ起こるのか、そしてそれに対してどのように向き合うべきかを伝えることができるのです。

霊的生活には、霊的指導者が不可欠です

今日、人々にとって最も必要なことは、霊的指導者を見つけ、その人に懺悔し、信頼し、相談することです。もし霊的指導者がいて、人々が祈りや霊的な書物の読みに時間を割けるように生活を整え、教会に通い、聖体拝領を受けるのであれば、この人生において恐れることは何もないのです。

魂が道から外れないようにするためには、霊的指導者がその魂を見守らなければなりません。霊的生活において、例えば霊的な書物を読むことは大いに役立ちますが、霊的指導者がいなければ、人は読んだ内容を自分流に解釈してしまい、その結果、惑わされてしまう可能性があります。考えてみてください。車でどこかへ向かう際、道に詳しくない人は地図を覗き込むかもしれませんが、それだけでなく、道に迷わないように、人々に道を尋ねるために立ち止まるものです。例えば、ある人がアテネを出発してフロリナへ向かっているとしよう。もちろん地図は持っていて、それを見ているが、それでもどこかのキオスクのそばで車を止め、正しい道を進んでいるか、先へ進む道は大丈夫か、と尋ねるものだ。もし尋ねなければ、危険にさらされたり、目的地とは別の道に迷い込んだりして、フロリナではなくカヴァラにたどり着いてしまったり、あるいは車ごと崖から転落して命を落としたりすることになるだろう。

もちろん、こんなこともあるだろう。人は目的地への行き方を他人に尋ねるが、[別の方向へ曲がるべきだ]という答えを聞いたにもかかわらず、自分の進路を貫き、結局は目指していた場所とは別の場所へたどり着いてしまう。また、警告された道路上の危険に注意を払わず、事故やその他のトラブルに巻き込まれる可能性もある。しかし、正しい道を示し、「注意してください。あの場所には急カーブがあり、あの場所では道が高い崖の端に沿って走っています……」と警告してくれた人は、その報いを受けます。霊的な生活においても、同じことが起こるはずです。信者には、告解の秘跡を通じて助け、助言を与えてくれる霊的指導者が必要です。そうして初めて、人は霊的な生活を送り、自分が正しい道を進んでいると確信できるのです。

もちろん、霊的指導者は人が[自ら]選ぶものです。出会った人なら誰にでも自分の魂を委ねる必要はありません。身体を健康を気遣って良い医師を探すのと同様に、魂の健康を気遣うなら、良い霊的指導者を見つけ、その霊的指導者——魂の医師——のもとへ定期的に通うよう努める必要があります。

人々を霊的指導者のところへ送りなさい

— ゲロンダ、修道院を訪れる人々は、私たちが修道服を着ているのを見て、自分の痛みや問題について話したり、さらには懺悔したりする気になりやすいようです。そのような人々に対して、私たちはどのように接すべきでしょうか？

— 人々が、自分を苦しめていることについて質問しに来たときは、まず「霊的指導者はいらっしゃいますか？」と尋ねてください。私も、私のカリヴァを訪れる人々にこ

う言っています。「私は霊的指導者ではありません。自分の告解司祭のところへ行き、その人が言う通りにしてください」と伝えています。人々は悔い改めなければなりません。さらに、告解司祭を持ち、その人に告解をしなければなりません。そうすることで、自分たちが悪魔に与えてしまった権利を、悪魔から奪い返すことができるのです。もし修道女が、自分の悩みを打ち明けるために修道院を訪れた苦しむ女性の痛みを一度だけ分かち合い、話を聞いた上でその女性を告解司祭のもとへ送り出すのであれば、それは理解できます。しかし、その不幸な女性と定期的に面談を行うことは、正しくありません。もし、ある女性が自分の告解司祭に不満を抱いている場合、あるいはこれまで一度も告解をしたことがない場合、あるいは絶望的な状態にある場合、修道女は一度話を聞いた上で、やはりその女性を告解司祭のもとへ送り、自分でも彼女のために祈ると伝えるべきである。

修道女の務めには、人々の悩みを絶えず聞き続けることで人々を助けることは含まれていない。さらに、そのような傾聴は人々自身にとっても何の益にもならない。なぜなら、人間には三種類の変化が起こり得るからだ。すなわち、自分自身によって、他者によって、そして悪魔によって変化するのだ。そして人々はここ、修道院に来て、ここで人間的な慰めを見出すが、修道院を離れるやいなや、すぐに以前の生活に戻り、相変わらずの繰り返しが続く。[それゆえ]、女性も男性も、それぞれの霊的指導者のもとへ行くべきである。もし[その代わりに]修道女に自分の悩みを打ち明けるなら、それは間違っている。なぜなら、その後、人々は「自分のことを話したのだから、やるべきことはやった」と自分を正当化してしまうからだ。つまり、そのような人々は自分の心を誤ってなだめてしまい、告解司祭のもとへは行かない。これは、人々が告解をしないようにするための悪魔の策略である。

皆さんは、修道女としての各自の使命が何であるかを理解し、偽りの宣教活動に走ってはなりません。なぜなら、そのような「宣教活動」に走るのは、私たちが修道としての使命を理解していないからに他なりません。修道者として、私たちは人々の問題について祈る義務がありますが、それらの問題を解決する義務はありません。一方、霊的指導者の職務範囲には人々の問題が含まれており、[それどころか]彼はその責任を負っています。もし人々が自分の問題についてあなたと話し合うならば、彼らはその責任をあなたに転嫁していることになります。一方で、霊的指導者は人々を間近で見守り、彼らの問題の解決策を見出すことができるのです。つまり、人々と関わる必要はありますが、その仕事は修道女の役割ではありません。人々が私たちに求めることができるのは、祈りだけです。もし彼らが名前を記した手紙を送り、彼らのために祈ってほしいと頼んできたなら、私たちは——可能な限り——ロザリオを数えながら、その人々のために祈らなければなりません。

「治療を行う霊的指導者」

人がかかりつけ医をできるだけ近くに置くよう配慮すると同様に、自分の霊的指導者も身近に置くよう努めるべきです。普通の医師は、患者のそばにいて、たとえ経験がそれほど豊富でなくても、医学教授よりもはるかに大きな助けとなることができます。何しろ、患者のそばにいる医師は定期的に診察を行うことができ、必要に応じて専門医への紹介もできるからだ。私が結核療養所に収容されていた時、¹³⁴、あることに気づいた。多くの富裕層は、結核にかかっても療養所に入院せず、自宅に留まってい

¹³⁴ 1966年

たのだ。彼らの治療には医学の教授たちが訪れていました。しかし、経験が示したように、教授たちは在宅の患者を定期的に見守ることはできなかったため、そのような治療は全く効果がありませんでした。そのため、療養所では富裕層のための特別な病棟を開設せざるを得なくなりました。そうすることで、彼らが入院治療を受け、常に医学的な監視下におけるようにするためです。私が言いたいのは、医師は患者のそばにいて、その様子を観察しながら適切な治療を処方し、処方した薬が効果をもたらしているか、あるいは副作用や望ましくない作用を引き起こしていないかを確認するということです。医師はその観察結果に基づいて、処方した用量を増減し、必要であれば、患者に全く異なる治療法を処方することもあります。霊的指導者も同様です。人間には時折様々な変化が起こりますが、遠くからではそれらを把握することはできず、効果的に助けるためには、魂を間近で観察しなければならないのです。ある時、私は誘惑にさらされていたある女性にこう助言しました。「こうしなさい、ああしなさい。そうすれば、この誘惑を乗り越えられることがわかるでしょう。」そして実際、彼女は私の言うことを聞き、誘惑は去りました。しかし、しばらくして彼女は全く逆の誘惑に陥り、最初の時と同じ方法でそれを乗り越えようとした。その結果、彼女はかなりの苦難を味わうことになった！だが、この風変わりな女性は、誰かを私のところへ送るか、あるいは手紙を書いて、どうすべきか私に尋ねることもできたはずだ。なぜなら、彼女が直面した困難は、以前とは性質が異なっていたからだ。そうすれば、私は彼女に新たな「薬」——つまり、別の助言——を処方しただろう。しかし、私が彼女から遠く離れていたため、彼女は私に尋ねる機会を見出せなかった。それゆえ——もし私がその人を十分に知らず、親密な関係にない限り——遠くから助言をすることはしないのだ。

家庭における霊的指導者

—ゲロンダ、夫婦にとって役立つ本は何でしょうか？

—夫婦にとって役立つのは、次のことです。どちらの側も自分を正当化してはなりません。もし夫婦のどちらかが自分を正当化してしまうなら、いくら霊的な本を読んでも、何の益も得られません。しかし、夫と妻が互いに善意を持って接し、霊的指導者がいて、その指導者に従うのであれば、問題は避けられるでしょう。霊的な「仲裁者」なしでは、[家庭での正常な生活]は不可能です。

夫婦が同じ霊的指導者を持つのが最善である。夫が一人、妻が別の霊的指導者を持つような形ではいけない。もし二枚の板を、二人の異なる大工が——それぞれ独自のやり方で——削り上げるとしたら、その二枚の板を互いに合わせるなど決してできないだろう。しかし、夫婦が同じ霊的指導者を持っていれば、その指導者は二人の「凸部分」——つまり欠点——を「削り」取ってくれる。一方の欠点を削り、もう一方の欠点を削ることで、[二人の関係における]困難は均され、滑らかになっていくのだ。しかし、昨今では、霊的に生きている夫婦であっても、夫と妻が別々の霊的指導者を持つことが多々あります。夫婦二人が同じ霊的指導者を持つことは稀です。そのため、彼らは助けを得ることができないのです。私は、夫婦として互いに十分に相性が良かったにもかかわらず、二人を助けてくれる共通の霊的指導者がいなかったために離婚してしまった夫婦を知っています。一方で、夫と妻が同じ霊的指導者を持ち、たとえ（人間として）互いに完全に相性が良くなかったとしても、調和のとれた円満な夫婦生活を送っていた家族も知っています。

もちろん、家族全員が同じ霊的指導者を持っていれば、なお良いでしょう。そのような家庭で問題が生じたとき、霊的指導者は家族全員の話を聞き、問題の全容を把握した上で解決へと導いてくれるからです。ある場合には、霊的指導者が父親や母親に何かをするよう厳しく命じることになれば、別の場合には、両親の話だけでは問題を把握できないと判断したとき、子供たちを自分のところへ招くこともあります。例えば、妻に非があるような家庭の問題がある場合、霊的指導者は夫を自分のところへ招き、どのように振る舞うべきか助言を与えることがあります。最後に、神父は、その夫婦の親族や知人の誰かに、物事を冷静に判断するための協力を求めることもある。

霊的指導者の変更

— ゲロンダ、もし何らかの理由で人が霊的指導者を変更せざるを得なくなった場合、以前の指導者に告白した罪を、新しい指導者にも改めて告白する必要があるのでしょうか？

— はい、その人が新しい霊的指導者に「自分がどのような霊的な病を患っていたか」を知らせておけばよいでしょう。それは、病人が新しい医師に病歴を話すのと同じで、そうすることで医師がより効果的に助けることができるようになるからです。

— ゲロンダ、もし人が霊的指導者を替えたいと望み、それが正しいことかどうか私たちに尋ねてきた場合、どう答えるべきでしょうか？

— 「新しい霊的指導者を見つけるためには」、以前の霊的指導者から祝福を受ける必要があります。安易に霊的指導者を替えることには何の益もありません。建物の建設中に、設計士や職人が頻繁に変わってしまえば、その建物はきちんと建てられるはずがありません。

昔、人々は自分の悩みについて助言を求め、助けを得るために長老たちのところへ訪ねていました。今日、多くの人が長老のもとを訪れるのは、相談するためではなく、自分自身を正当化するため、あるいは後で他人に「あの長老に相談した」と自慢するためである。「私はあの長老やこの長老のところへ行った」と、そのような人々は言う。「パイシイ神父にもこの件について尋ねた」と。しかし実際には、彼が私に尋ねてきた時、私が彼を叱りつけた可能性もある。あるいは、こんなこともある：彼は私の部屋のドアまで来たものの、最後の瞬間にノックするのを怖がって立ち去ってしまったのだ！このようにして、こうした人々は、定まった霊的指導者を持たずに、ある霊的指導者から別の指導者へとさまようことになってしまう。その結果、彼らは混乱に陥ってしまう。

また、罪を犯しても自分の霊的指導者に懺悔しに行かず、自分の評判を落とさないために、別の霊的指導者にその罪を打ち明ける人々もいます。しばらくすると、彼らは同じ罪を再び犯し、それをまた別の第三の霊的指導者に打ち明け、さらに別の指導者に……という具合に、結局、それぞれの霊的指導者の前では、その罪をたった一度しか犯していないかのように装ってしまうのです。そのため、こうした人々は罪を犯し続け、改心することがないのです。

私は、たとえその霊的指導者が自分を助けてくれることを知っていて、またその指導者が自分の告解の秘密を他人に漏らすことなどあり得ないことも理解しているにもかかわらず、何かを話すことを避けてしまう人々がいることに気づきました。しかし、彼らは霊的指導者への告白の代わりに、自分たちを助けることのできない知人に自分のことを打ち明け、その知人は間違いなくそのすべてを他人に話してしまうのです。私があ

る共同生活を行う修道院で新入修道士だった頃、¹³⁵ 修道士になりたいと願う一人の男性が私たちのところに入ってきたことを覚えています。彼が修道院でしばらく過ごした後、修道院を去りたいという考えが彼の心に芽生え始めた。そして彼は、その思いをイグメンにも、修道院の他の霊的指導者にもではなく——なんと！——イエリッソス出身の、¹³⁶ 修道院で働いていたある作業員に「告白」してしまったのだ。その修道士が労働者に自分のことを話していた時、私は台所の近くで玉ねぎを皮をむいていたため、たまたまそばにいて、二人の会話を耳にした。修道士と労働者は私から2メートルほど離れたところにいて、修道士は労働者に向かって大声で「告白」を始めた。「私は——」と彼は切り出した。「修道士になったことを後悔している。」——「えっ、それじゃあ——」と作業員は驚いた。「修道院に来て、剃髪する前に、様子を見るためにしばらくはそこに住んでいなかったのか？」——「いや、丸2年も様子を見ていたんだ！」——と修道士は愚痴をこぼした。「まあ、まあ」と労働者は驚いた。「それなら、なぜもっと早く出て行かなかったんだ？」——「今さら何を聞いても仕方ないよ」と彼は泣き言を言った。「見ての通り、出て行かなかったんだから。」——「なんてこった！」と労働者は目を丸くした。「でも、僧侶になるのは無理やり剃髪させられたわけじゃないだろう？」「いや、」と僧侶は嘆いた。「、自分から望んだんだ。」「まあ、なんてことだ、」と作業員は首を横に振った。「それ、イグメンには話したのか？」「いや、」と僧侶は答えた。「じゃあ、俺に——」と労働者は不思議そうに言った。「なんでそんな話を全部するんだ？それで何の得があるんだ？」こうして修道士は、労働者に自分の内情をすべて打ち明けた。わかるか？彼は助けを得るために、すべてをイグメンに話すべきだったのだが、その代わりに労働者に「懺悔」しに行ったのだ。そして、その労働者は、次の週末に町のどこかの喫茶店で、酒の仲間たちを楽しませるためにこの「告白」を語り、仲間たちはそれをさらに広め、やがてその不運な修道士について、街中の至る所で噂話になるだろう。この修道士が愚かだったとは言えない。彼がどれだけの辞書を持っていたか、ご存知ですか？彼は古代ギリシャ語を完璧に習得していました。

— ゲロンダ、もし世俗の人で、霊的指導者が不在の場合、その人が直面した困難や誘惑について、霊的な兄弟の誰かに相談することはできるのでしょうか？

— えっ、自分の霊的指導者に電話して相談できないというのですか？霊的兄弟は、時には私たちを助けてくれることもあります。時には全く助けられないこともあります。あるいは、助けてあげたいという善意があっても、霊的兄弟がかえって害を及ぼしてしまうことさえあります。必要であれば、霊的指導者に電話して、そうして物事を正しい位置に収めることができます。もしその人が自分の霊的指導者に連絡が取れず、直面している問題が深刻で先延ばしにできないものであるなら、他の霊的指導者に尋ねてみればいい。そのような場合にどの霊的指導者に相談すればよいかを、あらかじめ自分の霊的指導者に確認しておくといいいでしょう。自分の霊的指導者と同じ精神を持つ人に相談することが必要です。というのも、ある技術者はある方法で計画を立て、別の技術者は別の方法で計画を立てるからです。どちらの技術者の計画も優れているかもしれませんが、それらは互いに異なっているのです。

¹³⁵ 1953年から1956年にかけて、エスフィグメン修道院にて。

¹³⁶ イエリッソス——ハルキディキ半島にある、聖山アトスからほど近い小さな町。——訳者注

第2章。 正しい懺悔の仕方について

自分の傷に新しい包帯を巻かなければならない

— ゲロンダ、私の霊的な闘いの中でつまずいてしまうと、パニックに陥ってしまいます。

— 恐れることはありません。闘いは闘いです。そして、この闘いには傷もつきものです。それらの傷は懺悔によって癒やされます。兵士たちは戦場で傷を負うと、すぐに病院へ駆け込みます。そこで傷の手当てを受け、彼らは再び戦場へ飛び出そうと躍起になります。何よりも、兵士たちは負傷を通じて経験を積み、以前よりも敵の銃弾や破片から身を守るようになる——二度と傷つかないようにするためだ。 私たちも同様です。もし霊的な闘いの最中に傷を負ったなら、臆することなく、霊的指導者である医師のもとへ駆け寄り、傷を見せ、霊的に癒やされ、再び「善き功業」を続けるべきなのです。¹³⁷ もし私たちが、魂の恐ろしい敵である情欲を探し出し、それらを滅ぼすために奮闘しなければ、事態は悪化するでしょう。

— ゲロンダ、中には（いわゆる）愛欲のせいで告解に行かない人もいます。「どうせまた同じ罪を犯してしまうのなら」と、そういう人たちは言います。「何のために告解に行くというのか？ 神父を嘲笑うためか？」

— それは間違っています！ まるで、戦いで負傷した兵士が、「戦争はまだ終わっていないし、また負傷するかもしれないのだから、なぜ傷の手当てをしなければならないのか？」と言うようなものです。しかし、傷の手当てをしなければ、彼は大量の出血で死んでしまうでしょう。もしかすると、これらの人々は本当に好色心から告解に行くのかもしれないが、結局のところ、彼らは自分自身を台無しにしてしまうのだ。ほら、[人を欺くために]悪魔は、人間に与えられた才能さえも利用しているのだ。もし、転んで泥まみれになったとき、また転んで汚れるだろうという考えで自分を正当化し、告白によって魂を清めなければ、乾いた古い汚れの層の上に、次々と新しい汚れた層が積み重なっていく。その後、この汚れをすべて取り除くのは容易ではない。

懺悔の必要性

— ゲロンダ、聖マルコ・アスコエティス是这样子言っています。「真理を知った真の行者は、自分が犯した過ちを思い起こすことではなく、自分に降りかかる試練に耐えることによって、神に懺悔する。」¹³⁸ これはどういう意味でしょうか？

— 両方の方法で懺悔すべきです。信者は霊的指導者に懺悔し、祈りを始める前には、神の前で謙虚に懺悔し、[神の前で]自分自身をさらけ出します。「わが神よ、私は罪を犯しました。私はこうであり、ああであるのです。」しかし同時に、キリスト教徒は、薬として自分に課される苦難に耐えている。聖マルコは、神や告解司祭に告白する必要はなく、ただ苦難に耐えるだけでよいと言っているわけではない。「告白する」という言葉は何を意味するのか？ それは「自分の内にあるものを率直に認め、告白すること」

¹³⁷ テモテへの手紙一 6:12。

¹³⁸ 参照：聖マルコ・ポドヴィシュニク『行いによって義と認められようとする者たちへ』第155章。「慈愛」（ロシア語訳）。第I巻。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1992年。553頁。

を意味するのではないだろうか？¹³⁹ もしあなたの内に善があるなら、「主に対して告白する」¹⁴⁰ つまり、神を賛美するのだ。内に悪があるなら、あなたは自分の罪を告白する。

— ゲロンダ、初めて懺悔に行く際、これまでの自分の人生すべてを霊父に話すべきでしょうか？

— 初めて指導司祭のもとを訪れる際は、自分の人生全体にわたる包括的な懺悔を行う必要があります。病人が病院に入院するとき、医師に病歴を伝えるのと同じです。例えば、「以前、このような肺の病気にかかっていましたが、今は治っています。全身麻酔または局所麻酔下で、このような手術を受けました」などと話すのです。それと同じように、初めての告解では、悔い改める者は自分の人生の詳細を告解司祭に伝えるよう努めなければなりません。そして告解司祭はその人の[霊的な]傷を見つけ出し、それを癒やすのです。何しろ、たかが一つの軽い打撲傷であっても、放置すれば健康に深刻な影響を及ぼすことがあるからです。もちろん、人が初めて告解司祭のもとを訪れるとき、例えば、告白すべき罪を百個ほど抱えてくるでしょう。二度目の告解に来る頃には、すでに百十個の罪を抱えてくることになります。というのも、悪魔は——その人が告解を行い、「悪魔の計画を台無しにしてしまった」ため——彼に対して激しい攻撃を仕掛けてくるからです。3回目の告解では、すでに150の罪を告白することになるだろう。しかしその後、罪の数は絶えず減少し、ついにはその人が告解に持ち込むべき罪の数が、ごくわずかなものになるまで続くのである。

正しい懺悔

— なぜ私たちは、良心が非難しているにもかかわらず、改心するために必要な努力を時として行わないのでしょうか？

— それは、何らかの精神的な崩壊によるものかもしれません。もし人が、自分に降りかかった誘惑にパニックに陥っているなら、その人は奮起したいと願っているものの、そのための気力や精神的な力が欠けているのです。この場合、その人は告解を通じて内面を整理する必要があります。告解によって人は慰められ、力を取り戻し、神の恵みによって再び戦う決意を見出すのです。もし人がこのように自分自身を整えなければ、さらに別の誘惑が襲いかかるかもしれない。その結果、そのような悲しみと落ち込んだ状態にあると、人はさらに打ちのめされ、思いに押しつぶされ、絶望に陥り、やがては全く奮起できなくなってしまう。

— もし、おっしゃっているようなことが頻繁に起こる場合はどうでしょうか？

— もしそれが頻繁に起こるなら、自分自身を霊的に整えることも頻繁に行う必要があります。人は、再び決意と闘う力を得るために、指導司祭に心を開かなければなりません。そして、内面を整えた後、人は自分の[霊的な]エンジンを全開にし、熱心に、そして懸命に霊的闘争に励み、[逃げ去ろうとする]悪魔の踵を追いかけなければならないのです。

— ゲロンダ、私が懺悔の必要性を感じないのは、なぜでしょうか？

— もしかして、自分自身を省みていないのではないか？ 懺悔とは聖事なのだ。懺悔に行き、単に霊父に自分の罪を打ち明ければよい。まさか[罪が少ない]と思っているのか？ 頑固さはないのか？ 利己心は？ 姉妹を傷つけてはいないか？ 誰かを非難してはい

¹³⁹ 参照：ギリシャ語「εξομολογούμαι」。

¹⁴⁰ 参照：詩篇106篇1節。

ないか？ 私が告解に行くとき、何か特別な罪を悔い改めていると思うか？ いいえ、私は「怒りや非難で罪を犯しました……」と告白し、司祭は私のために赦しの祈りを唱えてくれる。しかし、些細な過ちにもそれなりの重みがあるのだ。深刻な罪を犯していない時、私がティホーン神父のところに告解に行くと、¹⁴¹、彼はこう言いました。「砂粒だよ、坊や、砂粒さ！」小さな罪は、重さでは大きな石一つ分を超えることもある、砂の山のように積み重なっていくのです。大きな罪を犯した人は、常にそのことを考え、悔い改め、謙虚になります。しかし、あなたには数多くの小さな罪があります。とはいえ、あなたが育った環境と、その大きな罪を犯した人が育った環境を比較してみれば、あなたが彼よりも悪いことがわかるでしょう。

さらに、懺悔の際には具体的に話すよう心がけてください。懺悔では、単に「私は嫉妬する、怒る」といったように自分の罪を挙げるだけでは不十分です。助けを得るためには、具体的な過ちについても告白する必要があります。ましてや、欺瞞のような重大な罪を告白するのであれば、その罪を犯した際に何を考えていたか、また具体的にどのような行動をとったかについても、詳細に告白しなければなりません。そのような具体的な告白をしなければ、あなたはキリストを嘲笑していることになります。もし人が、霊的指導者に真実を告白せず、指導者が助けることができるよう自分の罪を明かさないならば、それはまるで、医師に病気を隠して健康に大きな害を及ぼす病人と同じように、自分自身に大きな害を及ぼすことになる。一方、もし人が霊的指導者にありのままの自分を正確に示すならば、指導者はその人をより深く理解し、より効果的に助けることができる。

さらに、誰かに不当な扱いをした者や、自分の行動によって誰かを傷つけた者は、まず傷つけた相手のもとへ行き、謙虚に許しを請い、和解を果たさなければなりません。その後、霊的指導者に自分の過ちを告白し、赦しを得なければなりません。そうして初めて、神の恵みがもたらされるのです。もし人が、傷つけた相手に事前に許しを請うことなく、そのような罪を霊的指導者に告白した場合、その人の魂は平安な状態に至ることはできません。なぜなら、その場合、[罪を犯した]人は謙虚になっていないからです。例外となるのは、傷つけた相手が亡くなった場合、あるいは転居して行方が分からず、少なくとも手紙で許しを請うことさえできない場合です。しかし、悔い改める者にそうしようという心構えがあるならば、神はその心構えを見て、彼を赦してくださいます。

— ゲロンダ、もし私たちが傷つけた相手に許しを請うたのに、相手が私たちを許してくれない場合はどうでしょうか？

— その場合は、神がその人の心を和らげてくださるよう祈りましょう。しかし、もしその人が私たちを許してしまったら、私たちが再び同じ罪に陥ってしまう可能性があるという理由で、神はその人の心を和らげないこともあるのです。

— ゲロンダ、もし重大な罪を犯した場合、すぐに懺悔しないことは許されるのでしょうか？

— なぜそれを後回しにする必要があるのか？ 腐らせるためか？ 腐ったものを捨てずに放置すればするほど、ますます腐っていくのは当然だ。なぜ2、3ヶ月も待ってから、重い罪を告白しに行く必要があるのか？ できるだけ早く行くべきだ。もし私たちに開い

¹⁴¹ ティホーン長老については、以下の書籍を参照のこと：長老パイシイ著『聖山（アトス）の父たちと聖山の物語』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、2001年。13-39頁。

た傷があるなら、一ヶ月が過ぎるのを待ってから治療するべきだろうか？ いいえ。そのような場合、告解司祭に時間や私たちに注意を向ける余裕ができるのを待つ必要すらない。すぐに告解司祭のもとへ駆けつけ、犯した罪を簡潔に告白し、その後、告解司祭に余裕ができたなら、話をしたり霊的な指導を受けたりするために再び訪ねればよいのです。

私たちが置かれている状況を告解司祭に説明するのに、それほど時間はかかりません。良心が正しく機能していれば、人は自分の状態を二言三言で説明できるものです。しかし、心の中が混乱している人は、多くの言葉を並べても、告解司祭に自分の状態を正しく伝えられないことがあります。中には、自分自身や自分の問題について綴ったノートを丸ごと送ってくる人もいます。20～30ページもの細い文字で綴られ、最後にはさらに数ページの追伸が添えられている……しかし、彼らが書いていることはすべて、たった1ページに収まるはずのものばかりなのです。

懺悔の際に自分を正当化しようとすれば、良心を重くしてしまうのです

— ゲロンダ、もし懺悔の際に、悔い改める者が罪を犯した時に感じたような痛みを感じないのであれば、それは彼に真の悔い改めがないということでしょうか？

— その罪を犯してからある程度の時間が経過していれば、傷は癒えつつあり、まさにそのためにそれほど強い痛みを感じないのです。しかし、注意すべき点はここです。懺悔の際には、自分を正当化してはなりません。例えば、誰かに腹を立てたことを告解で神父に懺悔する際——たとえ大局的に見れば、その相手に一発殴ってやってもよかったとしても——私は、神父に「その人は本当に悪かった」とは話しません。そうすれば、神父が私を正当化しようとするのを防げるからです。懺悔の際に自分を正当化する人は、たとえどれほど良心を踏みにじろうとも、内なる安らぎを得ることはできない。懺悔の際に盾とするそうした自己正当化は、その人の良心に重荷としてのしかかるのだ。一方、繊細な良心を持つ人が、自分が犯した罪の重さを過大評価し、告解司祭から厳しい悔悛の務めを課されると、言葉に尽くせない喜びを感じる。許可なくたった一粒のブドウを摘んだだけで、まるでたくさんの籠のブドウを盗んだかのように感じ、絶えず自分の罪について考え続ける人々がいます。彼らは、その罪を告白するまで一晩中眠ることができません。一方、籠いっぱいブドウを盗みながら、自分を正当化し、「たった一房のブドウを取っただけだ」と言う人々もいます。しかし、自分を正当化しないばかりか、取るに足らない過ちを大げさに捉え、自分が犯した些細な過ちを深く悔やみ、ひどく苦しむ人々が、どれほど神聖な慰めを味わっているか、ご存知だろうか。この場合、神の正義が明らかになり、慈愛に満ちた神が人々にどのように報いるかがわかるのだ。

私は、霊的指導者の前で謙虚に自分の罪をさらけ出し、自らを卑しめる人々が、神の恵みを受け入れるゆえに輝いていることに気づきました。ある退役将校が、8歳の少年だった頃に自分がしたことを、深い悔恨を込めて私に語ってくれました。彼は他の子供からボールを奪ったのです。そのボールはたった一晩だけ手元に置いておき、翌朝には返した。この出来事を私に語る際、その男性は隣人を悲しませてしまったことを悔やんで涙を流していた。退役後、彼は職務上、誰かを悲しませてしまった人全員——職務を遂行する中で傷つけてしまった人々でさえも——を探し出し、その人たちに許しを請いました！ 私はこの人の心構えに感銘を受けました。彼はすべての責任を自ら引き受けていたのです。現在、彼は田舎で暮らし、貯金をはたいて困っている人々に施しをしてい

る。95歳で半身不随の母親は寝たきりだが、彼自身がその介護をしている。介護の過程で母親の裸体を見ざるを得ないため、彼は次のような思いに苛まれている。「もしハムが父の裸を見て罰せられたのなら、母の裸を見ている私には、一体何が待ち受けているのだろうか……！」¹⁴² この人は絶えず泣いていた。その顔は清らかな光に包まれていた。彼の深い悔恨は、私にとってなんと大きな恵みとなったことか！

— ゲロンダ、人は、自分が繊細な修行に励んでいることを霊的指導者に示すために、自分の罪を誇張することはあり得るでしょうか？

— それは別の話です。その場合、その人は自分の「謙遜」を誇っているのです。

懺悔の後

— ゲロンダ、懺悔の後、心に何らかの重さを感じることは正当なことでしょうか？

— なぜ重苦しさを感じる必要があるのでしょうか？ 正しい懺悔によって、古いものはすべて消し去られます。新しい「帳簿」が開かれるのです。神の恵みが訪れ、人は完全に変えられます。戸惑いや憤り、心の不安は消え去り、静けさと平安が訪れる。この変化は外見上でもはっきりとわかるほどなので、私はある人々に、懺悔の前と後に写真を撮るよう勧めている。そうすれば、彼ら自身も自分に起きたこの良い変化を確信できるからだ。何しろ、人の内なる霊的な状態は顔に表れるものです。教会の秘跡は奇跡を起こします。神人イエス・キリストに近づくにつれ、人は（神の恵みによって）自らも神となり、その結果、光を放ち、神の恵みが他の人々にその人を明らかにするのです。

— ゲロンダ、つまり、心からの懺悔の直後、悔い改めた人は喜びを感じるのでしょうか？

— 必ずしもそうとは限りません。最初は喜びを感じないかもしれませんが、その後、喜びがあなたの内から静かに湧き上がってくるでしょう。懺悔の後、悔い改めた者は、[神が自分に憐れみを示してくださったという]心からの感謝を捧げる必要があります。まるで借金を赦された人のように感じ、その心から恩人に対して感謝と恩義を抱くべきです。神に感謝すると同時に、詩篇の言葉を心に刻んでください。「……『わが不義を私は知っており、わが罪は私の前に露わにある』¹⁴³。そうすることで、自分を放任せず、再び同じ罪に陥らないようにするためです。

— ゲロンダ、どこかで読んだのですが、来世では、告白しなかったたった一つの邪悪な思いさえも、悪魔たちに責められるそうです。

— ほら、悔い改め、何かを隠す意図もなく、人が霊父に覚えていることを話せば、その件は解決する——悪魔たちはその人に対して何の力も持たない。しかし、もし意識的に自分の罪のいくつかを告白しなければ、その罪のために来世で苦しむことになる。

— ゲロンダ、もし人が、若き日の罪を告白した後、再びそれらについて考え、苦しんでいるとしたら、そのような罪に対する態度は正しいのでしょうか？

— もし、若き日の罪を深く悔い改め、懺悔したのであれば、苦しむ理由はありません。なぜなら、懺悔の際にそれらの罪を告白したその瞬間から、神はすでにそれらを赦してくださったからです。その後、特に肉欲的な古い罪を掘り起こす必要はありません。そうすることで、自分自身を傷つけてしまう恐れがあるからです。例えば、戦闘中、のそばに手榴弾が転がってきたが、神がその兵士を守られたため、手榴弾は爆発しな

¹⁴² 創世記9章20～27節を参照。

¹⁴³ 詩篇50篇5節。

った。ところが、戦闘が終わった後、その兵士は不発の手榴弾を見つけ、それを手に取り、ねじって開けようとしたり、好奇心からじっくりと観察したりした結果、戦闘中ではなく、戦闘が終わった後に手榴弾が爆発し、彼は粉々に吹き飛ばされてしまった。

霊的指導者への信頼

— ゲロンダ、もし霊的指導者が何らかの罪を理由に人を叱責し、その人がそれに深く動揺して悲しみに陥った場合、そこには利己心があるのでしょうか？

— もちろんです、ここには利己心が関わっています。もしその人の悲しみが神に対するものなら、神からの慰めを受けるでしょう。そして、その人はその罪を二度と犯さないよう努めるため、成長もするでしょう。悔い改める者は、自分の困難や思い、過ちについて霊父に打ち明け、霊父からの優しい言葉も厳しい言葉も喜んで受け入れるべきです。なぜなら、どちらの場合も、霊父は愛と配慮に駆られて、その人の魂の成長を願っているからです。

— ゲロンダ、もし私が霊父からの叱責や、単なる指摘さえも受け入れなかったらどうなりますか？

— もしそれを受け入れなければ、あなたは改心できないままです。自分を愛してくれる人々からの指摘さえ受け入れない人は、結局のところ〔霊的に〕未熟なままであり、自らを霊的に無価値な状態に追い込んでしまうのです。大工の鉋を受け入れない板が脇へ放り出され、コンクリートの型枠や足場に使われ、最終的には踏みつけられ、セメントまみれになって他の建設廃棄物と共に焼却されるように、指摘を受け入れない人々も、結局は滅びてしまうのです。

— ゲロンダ、もし人が自分の霊的指導者と何かについて意見が合わない場合、どうすればよいのでしょうか？

— その人は、ただ謙虚に、自分の考えを霊的指導者に打ち明けるべきです。もちろん、霊的指導者を選ぶ際には、その人に信頼を寄せ、その導きに慰めを見出せるよう、細心の注意を払う必要があります。

— ゲロンダ、もしある人が、自分の霊的指導者とは異なる見方をしている場合、自分の意見を主張することは、その人の魂にとって有益なのでしょうか？

— いいえ、役に立ちません。なぜなら、その人は、自分が間違っていると思うある行動の背後にある真意を知らないからです。例えば、ある人が告解司祭の行動の背後にある真意を理解するためには、その司祭が告解の秘密を破り、他の誰かから告解で聞いたことをその人に話さなければならないことになります。しかし、告解の秘密を破ってよいものだろうか？ もちろん、そうではない。例えば、ある人が自分の霊的指導者と、ある時間に面談のために訪れると約束したとしよう。ところが、約束の時刻に、彼と同時に、自殺の念に駆られた別の人物が霊的指導者の元を訪れ、霊的指導者はまずその人物に時間を割くことになる。待たされた人は、「最初に彼を面談に招いたのだから、つまり、彼は私を軽蔑しているのだ」と考え始める。しかし、霊的指導者は、もう一人の人が自殺未遂にまで至ったことを、どうやって彼に説明できるだろうか？ もしそれを説明すれば、もう一人の人を破滅させてしまうことになる。一方、ドアの外で待っている人が誘惑に負けてしまったり、少しばかり落ち込んだりしたとしても、その悪はそれほど大きなものではない。ある時、私のカリヴァを訪れた何人かの人々が、まさにそのように誘惑に負けてしまった。ちょうどその頃、私のところには、親族が大変な苦勞をしてようやく説得し、私との対話のために連れてきた人物がいた。私はこの人を大いなる

喜びをもって迎え入れた。彼を抱きしめ、数珠や聖像を授けた。他の人たちは腹を立てた。「長老は、私たちには——」と彼らは言った。「全く注意を払ってくれない！」しかし、彼らが誘惑されたその不幸な男は放蕩者であり、私は彼の生活の詳細を知っていた。彼は私の元を去る頃には、別人のようになっていた。だからこそ、たとえあの人たちが千回でも誘惑されたとしても、私はやはり 同じことをしただろう。何しろ、誰かの〔利己的に〕誘惑された魂をなだめるために、人を破滅させる権利など誰にもないのだから。

霊的指導者との正しい関係

霊的な人は、誰かを助けたいと願うとき、その人を自分自身と結びつけるのではなく、キリストと結びつけようと努める。もしそれが成し遂げられたなら、彼は喜び、そしてキリストと結びつけられたその人は、キリストのために精進する。この場合、双方ともそれぞれの報いを受け、すべてが順調に進む。しかし、努力する者が、自分をキリストと結びつけようとする者を喜ばせようと試みる場合、つまり、自分の行動が指導者をどれほど悲しませるか、あるいは喜ばせるかに気を取られ、その行動をキリストが見ていることについては考えないならば、それによって彼は、自分を助けてくれる人をも、キリストをも喜ばせることはできず、ましてや、神の助けを受け入れていないため、自分自身も何の益も得られない。つまり、その行動はキリストにも霊的指導者にも喜びをもたらさないだけでなく、彼自身もそこから必要な助けを得られないのである。例えば、ある修道女が聖歌隊で歌いながら、「私の歌声はどうだろう？ 上手だろうか？ 修道院長様は満足してくださるだろうか？」と考えているとします。さて、そのような修道女には何の益もありません。しかし、もし彼女がキリストのために歌うのであれば、すべてがうまくいきます。歌も上手になり、修道院長様も満足されるでしょう。

— ゲロンダ、霊的指導者から言われたことを誤解してしまった人は、罪を犯しているのでしょうか？

— 考えてみてください。もし彼が最初から、自分の望むような答えを霊父から聞きたいと望んでおり、その思いに心を奪われていたのなら、たとえ霊父の言葉を誤解したとしても、やはり彼は過失があるのです。中には、自分の意志を「神の御心」だとすり替える者もいます。例えば、ある人が直面している問題について霊父に尋ねるが、その時点で、すでに自分の好みに合った問題解決策を心に描いている。霊父はその人に何をすべきかを伝えるが、その人は、霊父がまさに自分が望んでいた通りの行動をとれと命じたと解釈してしまう。その人は喜んで自分のやり方で行動し、その上、従順を示していると思い込む。そして後で告解司祭が「なぜそんなことをしたのか」と尋ねると、その人は「だって、あなたがそうするように命じたではありませんか」と答えるだろう。

とはいえ、霊父の言葉を文字通りに受け取ってはいけない場合もある。時として、霊父の言葉は単に彼の考えを表現するための比喻に過ぎないこともある。例を挙げよう。ある45歳の高校教師（子供を持つ）が、16歳の生徒を罪へと誘惑した。その少年は家を出て、担任の女性教師と同棲していた。彼の父親が私のカリヴァを訪れ、その苦悩を打ち明けたとき、私は彼に、告解司祭の指示通りに振る舞うよう助言した。その不幸な青年は告解司祭のもとへ向かったが、その後また私のところに戻ってきた。彼が私のところに来たその日、私はコンスタンティノーブル総主教庁の代表者たちをもてなしていたため、彼に時間を割くことができないと見て、「あなたの霊的指導者が命じた通りにしなさい」と告げた。しかし、その青年は立ち去ろうとしなかった——そして、神に感

謝すべきことに、彼は去らず、結局、私との面会を待ち通したのだ。ようやく彼のために少し時間を割くことができたとき、彼は私にこう言いました。「ゲロンダ、私はこの女性を殺すことに決めました。私の霊的指導者がそう命じたからです。」「ちょっと待ってくれ、友よ」と私は戸惑いながら言いました。「具体的に、霊的指導者はあなたに何と言ったのですか？」すると彼は、「彼は私に『このクズを殺すだけでは足りない！』と言いました」と答えました。お分かりになりますか？ 霊的指導者が『このクズを殺すだけでは足りない』と言ったのは、彼が実際にその女性を殺すようにと命じたからではありません！ 彼は単に、その言葉で自分の憤りを表現しただけなのです！ この出来事以来、私はもう誰に対しても『あなたの霊的指導者が命じたことをしなさい』とは言わず、まずその人に、霊的指導者が具体的に何を命じたのか尋ねるようにしています……

— ゲロンダ、人は自分の霊父に助けを求めながら、同時に問題に対する自分なりの解決策を提案することはできるのでしょうか？

— それでは、一体どのような助けを求めているというのでしょうか？ 人が謙虚に、単なる考えとして、自分に役立つかもしれないと思うことを霊父に伝えるのは別問題です。それは彼がすべきことです。しかし、自分の考えが正しいと主張するのは全く別の話です。これこそが、その人が成功しないケースなのです。それはまるで、医者のところへ行って「この薬を処方してください」と言うようなものです。しかし、患者は医師に従う義務があり、医師にどの薬を処方すべきか指示してはならない。なぜなら、薬は「好みの問題」ではないからだ。それは、人が「ケーキかパステラが食べたい」と言えるような料理や菓子とは異なる。医師は、患者の病気に応じて薬を処方するのだ。

第3章。 告解司祭は魂の医者であること

優れた霊的指導者の必要性

現代の人々は疲れ切っている。罪と利己主義によって、彼らは正気を失い、心が曇らされている。だからこそ今——他のどの時代よりも——私たちは、人々に率直かつ偽りのない愛をもって接し、理にかなった助言をもって彼らを導き、心の平安を取り戻させてくれる、優れた経験豊富な霊的指導者を必要としている。優れた霊的指導者がいなければ、教会は空っぽになり、精神科病院や刑務所、病院が患者で溢れかえることになる。人々は、自分たちが神から遠ざかっているからこそ苦しんでいるのだと自覚しなければならない。彼らは悔い改め、謙虚に自分の罪を告白しなければならない。

霊父の仕事とは、人の内面を癒すことである。経験豊富な霊父ほど優れた医師はいない。霊父は自らの聖性によって信頼を勝ち取り、神の繊細な被造物から「タンガラシュカ」がもたらす邪念を取り除き、薬を用いず——神の恵みによって——魂と体を癒すのである。

神からの啓示、すなわち神の御霊を持つ霊的指導者は、人々が置かれている状態を理解し、見極め、彼らに正しい指針を示すことができる。

霊的指導者が多くの信徒の世話を追われすぎず、一人ひとりの魂に必要な時間を割き、その務めを正しく果たせるようであれば、望ましい。そうでなければ、霊的指導者は、毎日数件の手術を行う優秀な外科医と同じ状況に陥ってしまう。その外科医は疲れ

果ててしまい、当然ながら、各患者に必要なだけの時間を割くことができなくなってしまう。したがって、霊的指導者は些細な家庭の問題に干渉する必要はなく、それぞれの具体的なケースにおいて、その指導者を訪ねてくる一人ひとりの魂に関わる事柄に限定した方がよい。そうすれば、その魂を効果的に助けるための時間が確保できる。しかし、告解に訪れた本人自身も、より有能な人に尋ねることができるような〔霊的なものではない〕問題——例えば、どの家に住むべきか、子供をどの予備コースに通わせるべきかといった類のもの——で、告解司祭の頭を悩ませてはならない。

懺悔の際、責任を負うのは懺悔者だけでなく、霊的指導者も同様です。魂の導きにおいて、霊的な自由は大きな助けとなります。つまり、霊的指導者は人々の魂を導くにあたり、他の誰かが定めたことではなく、聖なる父たちが説くことに基づいて行動すべきです。彼は、その人の堕落の程度と悔い改めの姿勢に応じて、分別を持って行動しなければなりません。しかし、時には〔一部の聖職者の間ですら〕誠実さが欠けていることがある。例えば、ある人が魔術師や惑わされた者たちなどに関わってしまった場合、人々の魂に責任を負う聖職者の中には、その不幸な人と話し、彼に助言を与え、少しばかり考えさせることさえできない者もいる。彼らは自らの立場を表明することを〔恐れている〕。彼らは、これらすべての呪術師や惑わされた者たち、および彼らに類する者たちからトラブルを招かないよう、これを避けている。つまり、結局のところ、どちらとの関係も損なわないようにし、私たちについて良い評判が立つようにするために、悪魔を喜ばせるかのように、その人を破滅へと追いやることになるのだろうか？

霊的指導者の考察と経験

— ゲロンダ、世の中にこれほど多くの罪が蔓延している現代において、霊的指導者の務めは時に困難なものになっていないでしょうか？

— はい、その通りです。ですから、霊的指導者はまず、悔い改める者の最も重い罪を正すよう努めるのが良いでしょう。そうすることで、神の被造物が多くの罪から解放され、〔霊的指導〕によりよく従えるようになるからです。霊的指導者は、懺悔者に寛容に接すべきですが、同時に、指導を受ける人が自らの罪を自覚し、神に赦しを請うような接し方を見出す必要があります。霊的指導者は、懺悔に訪れた人に、神の慈悲を受けるためには、悔い改めと生活の変化が必要であることを繰り返し伝える必要があります。さらに、告解司祭が、訪ねてくる人々に神の偉大な愛について愛を込めて語りかけることは、大いに有益である。そうすることで、彼ら自身の内に愛の心が芽生え、自らの過ちを自覚し、悪い習慣を捨て去ることができるようになるからだ。

告解司祭が十分な経験を積むまでは、より軽微なケースの人々を助けるほうがよいでしょう。というのも、いわゆる「扱いにくい」懺悔者が、絶えず告解司祭に「妨害工作」を仕掛けてくることで、その司祭の霊的成長を妨げ、時間をすべて奪ってしまう可能性があるからです。もし若い霊的指導者が不注意であれば、たとえ（人を助けたいという）善意を持っていても、その人が仕掛ける騒動を常に過大評価してしまい、そのような人に無駄に労力を費やし、苦しむことになるだろう。経験を積み、霊的指導者は、何に注意を払うべきか、そして何を聞き流してもよいかを判断できるようになる。例えば、私も、送られてきた手紙を開封する際、ひと目通して、もしその手紙に重要なことが書かれていれば、それにもっと注意を払う。というのも、悪意ある者は、取るに足らないことに気を散らせて、私たちの時間を奪うことがよくあるからだ。「ちょっと待って、ドアを閉めないで。手短かに話したいことがあるんだ。中に入るつもりはないから

」と言って、結局一時間も玄関先で引き留めてしまうような人がいます。そうしてあなたは、汗だくになって開いたドアのそばの敷居に立ち、通風で体が冷えて震え始めるのに、その人は何事もなかったかのように、様々な[つまらない]話をあなたに語り続けるのです。これって、果たして神からのものだろうか？その後、体調を崩して、世界のためにも自分自身のためにも祈ることができなくなり、数日間は身動きが取れなくなってしまう。そして、本当に困っている人が訪ねてきても、もうその人を助けることができないのだ。

さらに、[霊的指導者は次の点も心に留めておく必要がある。] 深刻な問題を抱えている人々に対しては、単に話を聞いて、彼らが本当に苦しんでいるのを見て、「アスピリンを一錠飲んでください」と言うだけでは不十分だ。

「車が来ているから、ほんの1分だけ時間をください」と言って、突然、非常に深刻な問題について話し始める人もいます。これは、まるでがんを患っている人が医師に「飛行機に遅れるから、早く手術をしてくれ!」と頼むようなものです。どんな病気でも、その発症のきっかけや患者の症状などに注意を向けるには、一定の時間が必要です。深刻な問題は、手っ取り早く解決できるものではない。ある時、復活節の週に、私たちは聖山を十字架行進で歩いていた。坂道を登り始めた途端、ある修練生が私のところにやって来て、知恵ある祈りについて教えてほしいと頼んできた。彼は以前にも何度も私のカリヴァを訪ねてきていたが、そのことについて尋ねたことは一度もなかった。ところが、ここ、坂道を登っている最中に、なんと彼にインスピレーションが降りてきたのだ。しかし、繊細で深刻な問題は、歩きながらも、坂道を登りながらも議論すべきものではない。

信者がどれくらいの頻度で聖体拝領を行うかは、その信者の指導司祭が決めるものです

— ゲロンダ、使徒パウロはこう書いています。「不ふさわしいままに食べたり飲んだりする者は、主の御体を区別せずに、自分自身に裁きを下しているのです。」¹⁴⁴ 人はどのような時に、不ふさわしい状態で聖体拝領をするのでしょうか？

— 最も重要なのは、私たちが自分の不適格さを自覚した上で、神の聖体拝領に臨むことです。キリストは私たちに悔い改めと謙遜を求めておられます。もし良心に何か引っかかることがあるなら、まず自分自身を正さなければなりません。例えば、誰かと喧嘩をした場合、聖体拝領に行く前にその人と和解し、それから聖体拝領を受けるべきです。

— ゲロンダ、一部の人々は、霊的指導者から祝福を受けているにもかかわらず、やはり聖体拝領に踏み切れません。

— 聖体拝領をするかしないかを、独断で決めてはなりません。もし人が自分でそのような決定を下せば、悪魔はそれに付け込み、その人を[誘惑]で翻弄し始めるでしょう。というのも、私たちはしばしば、自分が聖体拝領にふさわしいと思い込んでいますが、実際にはそうではないからです。また、別のケースでは、律法の文字通りに私たちを判断すれば、確かに聖体拝領に値しないことになりますが、聖なる教父たちの精神に従えば、癒やしを得るためには神の「血の注ぎ」が必要なのです。あるいは、私たちは神の慰めを必要としているのです——なぜなら、過度な悔恨の念から、敵が私たちを絶望へと突き落とし、「右側から」忍び寄ってくる可能性があるからです。

¹⁴⁴ コリントの信徒への手紙一 11章29節。

— ゲロンダ、聖体拝領はどのくらいの頻度で受けられますか？

— 聖体拝領の頻度や、聖体拝領の前に何日間断食すべきかという点について、すべての人を一律に扱うことはできません。信者がどれくらいの頻度で聖体拝領を行うべきか、また聖体拝領の前にどれくらいの期間断食すべきかは、霊的指導者が慎重に判断して決定しなければなりません。それはすべて、その人がどれほどの精神的な強さを持っているかによって決まります。同時に、霊的指導者はその人を「霊的な断食」——すなわち情欲からの自制——へと導かなければなりません。この霊的な断食の強度もまた、その人の霊的な感受性、つまり自分の罪をどれほど深く自覚しているかに応じて調整する必要があります。さらに、霊的指導者は、感受性の強い人の魂に対して、敵がどのような害を及ぼしうるか、つまり、その人を絶望へと追い込む目的で戦いを仕掛けてくる可能性があることも念頭に置かなければならない。例えば、ある人が肉欲的な過ちを犯し、その結果、40日間の聖体拝領停止処分を受けたとする。しかし、この悔悛の期間の35日目、悪魔は再びその人を同じ罪へと陥れる可能性があります。もしその罪人に新たな40日間の悔悛が課されれば、悪魔はその魂を支配し、その魂は混乱と絶望に陥ってしまうでしょう。そのような場合、懺悔期間の最初の数日を経た後、告解司祭は懺悔者に「もう一週間、聖体拝領を控えてください」と告げ、一週間後には、毎回の神聖な典礼において聖体拝領を許すことができる。その人の魂は強くなり、悪魔に打ち勝つことができるようになる。もし人が注意深い霊的生活を送っているならば、単なる習慣ではなく、聖体拝領の必要性を感じた時に、聖体拝領の秘跡に与ることができる。しかし、そのような人であっても、これについては告解司祭の祝福を得なければならない。

断食について

— ゲロンダ、戒律を完璧に守ることは、神に対する生きた感覚を持つのに役立ちますか？

— どのような戒めですか？ モーセの律法ですか？

— いいえ、福音書の戒めです。

— 戒律を守ることは助けになりますが、正しく行わなければなりません。なぜなら、戒律を歪んだ形で守ることもできるからです。霊的生活には、律法の機械的な適用ではなく、神の正義が求められます。聖なる教父たちでさえ、聖なるカノンを深い思慮をもって適用するよう教えていたことがわかります！ 私たちの教会の教父たちの中で最も厳格であり、最も厳しい教会法規則を定めたバシレイオス大教父は、ある罪に対する教会法上の罰について述べた規則の後に、次のように付け加えています。「時期ではなく、悔い改めのあり方を吟味せよ。」¹⁴⁵ つまり、同じ罪を犯した二人の人に対して、霊的指導者はそれぞれの悔い改めの姿勢を考慮して、異なるエピティミアを課することができるのです。ある人には二年間、聖体拝領を禁じ、もう一人には二ヶ月間禁じるといった具合です。なんと大きな違いでしょう！

— ゲロンダ、悔悛の罰は情欲を断ち切るのに役立ちますか？

— 悔い改めた者は、自分に課された懺悔が助けになることを理解しなければなりません。そうでなければ、それには何の意味があるのでしょうか？ 無理やり人を正そうと

¹⁴⁵ 「もっとも、ふさわしいのは……癒やしを時間ではなく、悔い改めのあり方によって測ることである。」参照：聖バシレイオス大主教『イコニオスの司教アンフィロキオスへの第一カノニカル書簡』。『規則書』第2規則。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1992年。310頁。また、聖バシレイオス大主教『イコニオスの主教アンフィロキオスへの第三カノニカル書簡』第74規則も参照のこと。

しても、何も得られません。最後の審判の日、キリストは、力づくで兄弟を改めようとした者に「お前は、新たなディオクレティアヌスだったのか？」と問うでしょう。そして、改められようとした者には、「お前はすべてを自分の意志ではなく、無理やり行わされたのだ」とおっしゃるでしょう。人を樂園へ送り届けたいと願うなら、その人を窒息させるのではなく、彼自身がその偉業を成し遂げたいと望むように手助けしなければならない。彼は、生きていることを喜び、やがて死ぬことを喜びとする境地に達しなければならない。

[悔悛の程度]は、靈的指導者の判断に委ねられる。意識的に罪を犯す者に対しては、靈的指導者は妥協なく厳格でなければならない。情欲に打ち負かされながらも、その後悔い改め、頭を垂れて謙虚に許しを請う者に対しては、靈的指導者は分別をもって、その人が再び神に近づくことができるよう助けるべきである。何しろ、多くの聖人たちはまさにそのように振る舞ったのである。例えば、カッパドキアの聖アルセニオスは、靈的指導者として、通常、人々に悔悛の行いを課すことはなかった。彼は、悔い改める者たちの心を正し、彼らが自ら、慈善やその他の善行といった「行い」への祝福を、熱意を持って求めるように導こうとしたのである。また、尊者アルセニオスは、悪霊に取り憑かれた者や麻痺した子供を見て、その不幸な者の苦しみの原因が両親にあると悟ると、まず子供を癒やし、その後、両親に悔悛の務めを課して、今後彼らが注意深くあるようにした。

また、中にはこう言う者もいる。「あの靈父は、聖父たちの教えを非常に忠実に守っているんだ！　すごく厳格で聡明で、すべてを覚えていて、『ピダリオン』¹⁴⁶を暗記しているんだ！」しかし、『ピダリオン』に記された規範を文字通り過ぎに適用する靈父は、教会に害を及ぼす可能性がある。想像してみてください。靈父が『ピダリオン』を手に取り、訪ねてきた罪人たちにこう言い始めるのです。「さて、どんな罪を犯したんだ？　ああ、そういうことか。さて、こういうケースについてここに何と書いてあるかな？　聖体拝領の停止、何年だ！　次の人……君は何をやってしまったんだ？　おやおや！　さあ、これに対してどんな罰が定められているか読んでみよう……ああ、こういう懺悔の務めだ！」これでは何の役にも立たない。

— ゲロンダ、教えてください。告解司祭は、数多くの事情を考慮に入れなければならないのでしょうか……

— ええ、特に今の時代では、無分別な厳格さで教会の律法をすべて適用することはできません。その代わりに、靈的指導者は人々の愛を育むべきです。まず、彼は人々を助けることができるよう、自分自身を磨かなければなりません。そうでなければ、[自身の無分別さによって]靈的指導者は人々の頭を「打ち砕いて」しまうことになるでしょう。

『ピダリオン』という名称は、この書物が、船を岸へと導く舵取りが右へ左へと舵を切るように、様々な方法で人を救いへと導くことから付けられたものである。常に直進し続け、必要な場所で舵を切らなければ、船乗りは船を岩礁に乗り上げさせ、沈没させ、人々を滅ぼしてしまいうだろう。もし靈的指導者が、教規を大砲のように——¹⁴⁷——

¹⁴⁶ 『ピダリオン』（語源：舵、船の舵）は、1793年頃に聖ニコディム・スヴィャトゴルツと修道士アガピオスによって編纂された、解説付きの正教会聖カノンの最も完全かつ権威ある集成である。『ピダリオン』のロシア語訳は、出版社「聖山」により刊行準備が進められている。

¹⁴⁷ 言葉遊び：「ἄν ὁ πνευματικός χρησιμοποιοῖ τοὺς κανόνες σάν κανόνια。」

つまり、思慮を働かせず、具体的な人間や、その人の悔い改めの程度や様相などを考慮せずに——用いるならば、魂を癒やすどころか、罪を犯すことになるだろう。

許しの祈り

一部の告解司祭は、次のような「定式」をとっています。すなわち、告解した者が聖体拝領を許されない場合、その者に対して許しの祈りを唱えないのです。中には、「すべてのケースで許しの祈りを唱えるわけではない——それが私たちの原則だ」とさえ言う告解司祭もいます。これはもはやプロテスタント主義のようにも思えます……。ある時、私のカリヴァに一人の青年が訪ねてきました。彼は人生において様々な罪を犯していました。彼は告解司祭のもとを訪れ、それらの罪を告白しましたが、告解司祭は彼に対して赦しの祈りを唱えませんでした。その青年は絶望に陥りました。「霊父が私のために赦しの祈りを唱えてくれなかったのなら——」と彼は考え始めた。「つまり、おそらく神も私を赦してはいないのだろう」。そして、そうした考えから、彼は自殺を思いついた。「告解司祭のところへ行け」と私はその若者に言った。「そして、彼に赦しの祈りを唱えてもらうのだ。もしその告解司祭がどうしても祈りを唱えることを拒むなら、別の告解司祭のところへ行け。」

悔い改める者の上に赦しの祈りを唱えなければ、その人は絶えず堕ちていくことになる。なぜなら、悪魔がその人に対する支配権を保持し続けるからだ。悪魔が依然としてその人を支配しているなら、その人はどうやって戦うことができるだろうか？ そのような人は解放されておらず、悪魔の影響を受けているのだ。一方、その人のために解放の祈りが捧げられれば、悪魔の影響は遮断され、[神の恵み]が再び[その人]の「足場」を占めることになる。こうして、その不幸な人は助けを得て、情欲から解放されるために、ある種の[霊的な]戦い、奮闘を繰り広げることができるようになる。

第4章。

人々の魂に対する霊的指導者の働きについて

魂を扱う技術——それは繊細な仕事である

— ゲロンダ、気難しく、頑固で、「歪んだ」性格を持つ人々を、どのように助けることができるのでしょうか？

— 大工をしていた頃、私は歪んでいたり、「曲がりくねった」板や丸太を扱ったことがあります。しかし、そのような木材を扱うには忍耐が必要でした。なぜなら、歪んだ板をどちらの面から削っても、やはり「反発」し、ささくれを立てるからです。そこで、そのような板を扱う際には、ダブルカンナを使い、片面、もう片面と丁寧に、ゆっくりと削っていきました。そうすることで、思い通りの仕上がりを実現できたのです。そして、加工後のこうした板は実に美しく、木目の美しい模様が浮かび上がりました。さらに、こうした板で作られたものは非常に頑丈で、簡単には壊れません。一方、このことを知らなければ、職人は板がほんの少し歪んでいるのを見て、それを捨ててしまうかもしれません。私が言いたいのは、気難しい性格の人々は内なる力を秘めており、彼らに自己研鑽の機会を与えることで、霊的な生活において飛躍的な進歩を遂げることができる、ということだ。ただし、そのような人々との取り組みには多くの時間を割く必要がある。

さらに、二枚の歪んだ板を接合する際、私は決して大きな釘を使ったことはありません。まず、そのような板を鉋で削り、可能な限り平らにした上で、細い釘で互いに固定したのです。もし二枚の歪んだ板が互いに弾き合っていたとしても、私は決して無理に押し付けて大きな釘で打ち付けるようなことはしませんでした。なぜなら、そのような板を無理やり接合しても、やがてはやはり割れて離れ、私たちの努力がすべて無駄になってしまうからです。

人の魂を扱う者には、熟考、そしてさらなる熟考が必要だ。霊的生活において、万人に通用する唯一の処方箋や規範など存在しない。それぞれの魂は、その質と容量において他とは異なっている。何しろ、容量の大きい器もあれば、小さい器もあるのだから。あるものはプラスチック製で耐久性に乏しく、別のものは金属製でより頑丈です。魂の質と容量を見極めた上で、霊的指導者はその魂の可能性や素質、そしてその魂がどれほど成長しているかに応じて行動するのです。告解司祭は、告解者が犯した罪やその他の多くの事情を考慮し、その人が置かれている状況に応じて振る舞わなければならない。恥知らずな人に対しては、告解司祭は、その人に恥知らずである口実を与えないよう注意を払わなければならない。もし告解者の魂が（過度に）敏感であるならば、告解司祭は、その人が勇気を持ってその問題を克服できるよう手助けするよう努めなければならない。

さらに、告解司祭は注意深くあり、その人の外見だけに基づいて判断してはならない。聞いたことを安易に信じたり、聞いたことだけに基づいて何らかの結論を下したりしてはならない——特に、告解司祭が人の内面をより深く見抜く賜物に恵まれていない場合はなおさらである。外見上は非常に頑丈に見える板でも、内部は腐っていることがあります。そのような板を鉋でほんの少し削れば、内部の状態がすぐに明らかになります。一方、外見上は何の役にも立たないように見える板でも、内部の木材は非常に丈夫な場合があります。

魂を扱う技術は繊細なものです。処方には間違いがあってはなりません。考えてみてください。一人ひとりの体は、自分に不足しているビタミンを必要としており、あらゆる病気はそれに見合った薬で治るのです。

人が自分の情欲に安住することを許してはなりません

— ゲロンダ、もしある女性が「私の霊的指導者は私のことを理解してくれなかった」と言ってきたら、彼女にはどう答えるべきでしょうか？

— 「もしかすると、あなた自身が霊的指導者に自分を理解させようとしなかったのではないか？ もしかすると、責任はあなたにあるのではないか？」と答えてください。このようなケースに直面したときは、その人に深く考えさせ、安易な言い訳を許してはいけません。これらの問題は非常に微妙です。ここでは、人々がいかにして霊的指導者さえも惑わせようとするか、時折目にするものです。

— もし彼女が、「その告解司祭が気に入らない」と言ってきたら？

— もし彼女がその神父を気に入らないと言うなら、おそらくそれについても彼女自身に責任があるのだろう。もしかすると、彼女は自分のわがままを神父に気に入ってもらいたい、その点で自分を正当化してほしいと望んでいるのかもしれない。例えば、ある男性が家族のことを全く顧みず、そのせいで妻と絶えず喧嘩を繰り返しているとしよう。そして、そんな男が離婚を望んで私のところに来て、私が自分の味方になってくれることを期待して、妻の悪口を言い始める。もし私が「この一連の出来事の原因はあな

た自身にある」と答えたとしても、彼は自分の過ちを自覚していないため、私の答えが気に入らないと言うでしょう。つまり、ある人々は、霊的指導者が自分の気まぐれな行動を許してくれないからといって、その指導者が気に入らないと言うのです。

もし霊的指導者が一人ひとりの情欲を正当化するなら、誰からも好かれるかもしれないが、人々はそこから何の益も得られない。もし私たちが、それぞれの情欲において誰からも好かれたいと望むなら、それなら悪魔にも「好かれる」ことになるだろう。例えば、あなたが私のところに来て、「あの姉妹が私に無礼な態度をとった」と愚痴を言い始める。「ああ、」と私はあなたに言う。「彼女のことは気にしないで。」こうして私はあなたを擁護し、あなたはそれを気に入る。しばらくして、あなたに無礼な態度をとったその姉妹が私のところに来て、あなたについてこう愚痴り始める。「あの姉妹がこんなことをした、あんなことをした。」「まあ、そんなことあるわけないでしょう!」と私は彼女に言う。「あの子がどんな人間か知らないの? 真剣に受け止めないで。」こうして私はその姉も擁護し、彼女もまたそれを気に入る。このように、私は皆に好かれるが、その一方で皆に足かせを掛けているのだ! それなのに、私はあなたにこう答えるべきだったのだ。「さあ、こっちへおいで! 『姉があなたに無礼な口調で話した』ということは、あなたが彼女にそうさせるようなことをしたからでしょう!」この言葉を聞けば、あなたは自分の過ちに気づき、改めるだろう。だって、人が自分の過ちに気づいた瞬間から、すべてはうまくいくのだから。

真の心の平安は、人が正しい〔霊的な〕立場に立ったときに訪れる。私たちの使命は、この地上ではなく、天国で平安を見出すことにある。一部の霊的指導者は、人の考えをなだめ、正当化してしまう。そうしてその人は「この霊的指導者は本当に私の好みに合う!」と言うようになるが、その一方で、その人は改心しないままである。しかし、霊的指導者は、人が自らの欠点を見つけ、改心できるよう助け、その後、適切な方向性を示して導かなければなりません。真の安らぎは、この場合にのみ訪れるのです。人の情欲を正当化することは、その人への助けにはなりません。私にとって、それは犯罪です。

霊的指導者が、互いに関係する二人の人を助けるためには、その一人ひとりとの交わりを持たなければならない。例えば、二人の人が考えを巡らせて意見が合わないとき、霊的指導者はそれぞれの魂を知っていなければならない。なぜなら、各人は自分なりの理解に基づいて事態を説明する可能性があるからだ。霊的指導者は、その人たちが「福音に従って解決する」ことに同意した場合にのみ、彼らの不和の解決を引き受けるべきである。なぜなら、それ以外のあらゆる解決策は絶え間ない頭痛の種となり、常にアスピリンを飲み続けなければならないことになるからだ。さらに、霊的指導者は、意見の相違がある者一人ひとりをその立場に据え直し、誰をも正当化してはならない。一人ひとりの欠点を指摘しなければならない。そうすることで、双方の歪みが削ぎ落とされ、人々は合意と相互理解に至るだろう。

私には、次のこと以外、良い資質は一つもありません。それは、たとえその人が悪くないとしても、決して誰をも擁護しないということです。例えば、女性が私のところに来て夫の愚痴を言い始めたら、私は彼女たちを厳しく叱りつけます。男性が私のところに来て妻の愚痴を言い始めたら、私はその男性たちを叱りつけます。私は彼らの考えをなだめるのではなく、一人ひとりの欠点を指摘し、その人に役立つように必要なことを伝える。そうでなければ、夫も妻も、相談しに来た相手のもとを安心した気分で行くものの、家に帰ると互いに言い争い始めるのだ。「いや、やっぱり神父さんが、あなた

が本当はどんな人なのか教えてくれたのは正しかったわ！」——と一方がもう一方を責めると、返ってくるのは「あのね、あのね、あなたのことをどんな風に吹聴していたか知ってる？」という言葉だ。私が言いたいのは、誰の激情も正当化しないということです。正当化しないだけでなく、ある人々には厳しく叱責することもあります——もちろん、彼ら自身の利益のためですが——そして彼らは確かに、心の中で落ち着きを取り戻して帰っていきます。つまり、彼らは私のもとを悲しんで去っていくかもしれませんが、私の苦しみは彼ら自身のそれよりも大きいのだと理解しているのです。

— ゲロンダ、あなたに叱られても、まるで石の壁の向こう側にいるかのように、何とも感じない人もいます。

— ええ、それは私がその人を冷たく、形式的に叱るわけではないからです。私はその人に、活かすべき美德と、直すべき欠点があることを伝えます。もしその人に真実を伝えなければ、ある時点で、[その人が好む]お世辞を聞けなくなったとき、その人は心のバランスを崩してしまうでしょう。

絶望に陥った人々への接し方

ある時、動揺した若者が私のところに来て、こう言いました。「ゲロンダ、私は改心することができません。私の霊的指導者は『それはすべて君の遺伝的なものだ...』と言いました」と。その言葉に、青年は絶望に陥ってしまったのです。もし誰かが私に自分の悩みを打ち明けてくれたら、私はその人にこう言います。「それはこういう理由とああいう理由によるものです。変わっていくためには、あなたはこれこれのことをしなければなりません。」例えば、ある考えに苛まれて眠れない人が私のところに来ることがあります。その人は頭痛や胃痛の薬を飲んでいて、私にこう尋ねます。「もしかして、この薬は飲まないほうがいいのでしょうか？」——「いいえ」と私は答えます。「当面は薬を飲み続けてください。あなたを苦しめているその考えを捨ててから、その後に薬を止めるのもいいでしょう。もしその考えを捨てなければ、あなたの状態は変わらず、苦しみ続けることになります。」だって、薬を飲むのをやめても、自分を苦しめている考えを抱き続けていたら、その人に何の益があるのでしょうか？

もちろん、告解司祭が（告解者に）「赤信号」を点灯させるような状況まで追い込まず、ある事柄に対して忍耐強く接してくれるなら、それは良いことだ。しかし、当然ながら、告解者自身も助けを得るためには、正しく努力しなければならない。ある時、ある青年が、婚約していた女性に、ある問題について執拗に迫ったことがあった。彼が彼女に何を言い放ったのかは誰にもわからないが.....彼女は激怒し、車に乗って走り去り、途中で事故に遭って亡くなってしまった。その後、その青年は、自分が彼女の死の原因になったと感じ、自殺を図ろうとした。彼は私のところに来て、そのことを打ち明けた。実質的には彼が犯罪を犯したことになるが、私は彼を慰め、平常心を取り戻させた。しかし、その後、彼はこの出来事を全く思い出さなくなり、完全に無関心な人間となり、さらに別の女性と付き合い始めた。そして、そんな状態で3年後に彼が再び私のところへ来たとき、私は彼を厳しく叱りつけた。なぜなら、彼が自殺する危険性はもはやなかったからだ。彼は自分の過ちを認識しておらず、認めてもいなかったため、叱責は必要だったのだ。「君は本当に理解していないのか」と私は彼に言った。「前回、君は殺人を犯し、その少女の死の原因となったのだということを」もしこの若者が正しく自己改善に取り組んでいれば、あの事件を忘れずに苦しみ続けていたはずだが、その苦し

みに対して神からの慰めが与えられ、そうすれば彼はあのような冷笑的な無関心には陥らなかっただろう。

したがって、非常に注意を払う必要があります。というのも、罪を犯した人は絶望に陥ってしまうからです。その瞬間、あなたは彼を慰めることはできますが、彼が傷つかないようにするためには、彼自身の自制心も必要です。ある時、私のカリヴァに、肉欲の罪に陥り、その情欲から抜け出せなくなっていた若者がやって来ました。その不幸な青年は絶望の淵に立っていた。私のところに来る前に、彼は二人の告解司祭のもとを訪れていたが、彼らは彼が重大な罪を犯していると厳しく説き伏せようとしていた。その青年はあらゆる希望を失っていた。「自分が罪を犯していることは分かっているのに——と彼は決心した——改心できないのなら、いっそ神との関係をすべて断ち切ったほうがましだ。」彼の状況を知ったとき、私はその不幸な若者のことを思うと胸が痛くなり、こう言った。「よく聞いてくれ、祝福された魂よ。決して『できないこと』から戦いを始めるのではなく、『できること』から始めなさい。君に何ができるか見てみよう。そこから始めよう。毎週日曜日に教会に行くことはできるか？」——「できます」と彼は答えた。「では、毎週水曜日と金曜日に断食することはできるか？」と私は再び尋ねた。「できます」と彼は答えた。「そして、給料の十分の一を施しとして配ったり、病人を訪ねて世話をしたりすることはできるか？」「できます」。「では、たとえ罪を犯してしまったとしても、毎晩祈りを捧げ、『神よ、私の魂を救ってください』と願うことはできますか？」「ゲロンダ、——彼は私にそう言った——私はこれらすべてを行います。」「それなら、——と私は言った——今日からすぐに、自分の力の及ぶ範囲でできることをすべて始めなさい。そして、全能の神が、君にはできないたった一つのことを成し遂げてくださるだろう。」その不幸な若者は落ち着きを取り戻し、「ありがとうございます、神父様」と繰り返し言い続けた。ご覧の通り、彼には愛の心があり、慈愛に満ちた神が彼を助けてくださったのだ。

恥知らずな者には厳しく、敬虔な者には寛大に接すべきである

もし、善意を持つ人が幼少期に助けを受けられなかったなら、あなたがその人の中に見出す善（何か良いもの）について彼に伝えることは、お世辞や媚びへつらいにはならない。なぜなら、それによってその人は助けを受け、変わっていくからだ。彼にも神の助けを受ける権利があるのだから。私はある人にこう言った。「あなたは良い人なのだから。あなたがしていることは、あなたらしくない。」私がそう言ったのは、[彼の心の中に]善の畑と、そこにまかれた悪の種を見たからである。私は、その人の内面は善良であり、彼が行っていた悪は表面的なものに過ぎないことを見抜いたのだ。私が彼に「あなたは良い人だ」と言ったのは、彼を褒め称えるためではなく、彼を助け、彼の中に愛の心が働き始めるようにするためだった。

ある人々は次のような「定石」に従って生きている。その人に才能があるかどうかにかかわらず、いずれにせよ「君は才能がない」と言うのだ——それは、その人が驕りに陥って傷つかないようにするため、という名目である。つまり、すべての人を同じ基準で扱っているのだ。しかし、もし人が、自分が犯す悪行と、自分の中に持つ善行の両方のせいで絶望してしまうなら、どうして熱意を持って霊的な偉業に取り組むために必要な自信を得ることができのでしょうか？ 一方、その人が内に秘めている善について語りかけ、その中に自尊心と高潔さを育むならば、その人は助けを得て、成長し、成功を収めることになる。

私の常套手段はこうだ。もしその人が何らかの才能に恵まれている、あるいは霊的な闘いにおいて成功しているのを見れば、私はそのことを彼に伝える。しかし、もし彼の中に歪みを見いだしたなら——私は重い棍棒を手取る……。私は、前者の方法も後者の方法も、その人の魂を傷つけるとは考えていない。なぜなら、どちらの場合にも愛が存在しているからだ。もし私の接し方によってその人が傷つくとしたら、それはその人の中にすでに傷があったことを意味するのだ。例えば、ある修道女が美しいイコンを描いたなら、私はそのイコンがうまく描かれていると彼女に伝える。しかし、もし彼女が驕り高ぶって横柄になったのを見たら、それ以降は彼女との付き合いにおいて一定の距離を置くようにする。もちろん、イコン画工房で奉仕している修道女が驕り高ぶれば、彼女の筆から生まれるのはイコンではなく風刺画のようなものになり、他の人たちからも叱責を受けることになるだろう。しかし、もし彼女が再び謙虚になれば、また良い仕事をするようになる。病的な現象は私の好みではない。私は、あらゆる醜悪なごまかしを我慢できません。私は何らかの方法で、すべてを正常な状態に戻すよう努めます。そうでなければ、どうすればよいのでしょうか？ 様々な病的な逸脱を覆い隠すべきなのでしょう？

— ゲロンダ、もし恥知らずな人が、誰かから思いやりを示されたときに、さらに恥知らずになってしまうとしたら、その人をどう助ければよいのでしょうか？

— こう言うておこう。もし私の思いやりや優しさ、愛がその人のためにならないとわかったら、私はその人とは親密な関係を持たないと決め、もはやその人に対して優しく振る舞うことをやめざるを得なくなるのだ。〔霊的な〕法則によれば、あなたに対してより親切に振る舞われるほど、あなたはより一層変わっていかねばならず、灰となり、ろうそくのように溶けていくべきなのです。

ある時、私はある人と知り合った。付き合い始めた当初、彼を助けたいと思い、私が経験したいくつかの神聖な出来事について話した。しかし、その人は神に感謝するどころか、「神よ、この慰めに対して、どう感謝すればよいのか……」——と感謝して塵にひれ伏すどころか、その人は我を忘れ、横柄な振る舞いを見せるようになった。そこで私は彼に対して厳しい態度をとった。「遠くから、祈りによって彼を助けてやろう」と決めたのだ。そうしたのは、その人を愛していなかったからではなく、そのような振る舞いが彼のためになると思ったからだ。

— ゲロンダ、もしその人が自分の過ちに気づき、許しを請うとしたらどうでしょうか？

— もし彼がそれを理解してくれるなら、話は別だ。そうすれば、私たちはお互いに理解し合えるだろう。しかし、そうでない場合——つまり、私の親切心が彼にとってプラスにならず、その人から見返りを感じられず、彼と親近感を抱けないのであれば。もしその人に愛の心と謙虚さがあり、傲慢さがなければ、あなたもその人に対して気取らない態度で接することができる。私は誰に対しても、最初は温かく、気取らない態度で接する。相手が助けを得られるように、そして〔私たちの間に生まれた〕愛の雰囲気を与つ機会を与えるために、私は全身全霊を捧げる。そして、徐々にその人の欠点を指摘し始めます。相手の年齢に応じて、私はその人を兄弟、父、あるいは祖父のように見なします。私は太陽のようにその人を温め、すべての蛇、サソリ、カブトムシ——つまりその人の情欲——が表に出てくるようにし、その後、その人がそれらを滅ぼせるよう手助けします。しかし、もしその人が〔私からの愛〕を大切にせず、私の振る舞いから何の益も得ていないのに、私の純真さや真の愛につけ込んで横柄な態度を取り始めたら、

その人がさらに横柄にならないよう、私は静かに距離を置く。だが、最初は私はその人に全身全霊を捧げるので、私の良心は安らかである。ストミオン修道院に住んでいた頃、私はある少年を引き取り、彼を助けると同時に大工の技術を教えることにした。私は彼に親切に接し、兄弟のように思っていた。しかし、その若者には私の気に入らない性質がいくつか見受けられた。ある日、私は彼に「今何時だ？」と尋ねた。「時間は、お前の頭の中に詰まってるんだ！」と彼は答えた。さて、その時私はこう考えた。「いや、この調子ではこれ以上続けるのはやめよう。俺も自分の『頭』で少しは考えなきゃいけない。そうしないと、あの子が傷ついてしまうから。」というのも、私は彼に対して、もし彼に謙虚ささえあれば、[精神的な]法則に従って、感謝のあまり土にひれ伏さなければならないほど、寛大に接していたからだ。しかし、彼は私のことを理解できず、受け入れることもできなかった。そして、彼は自ら私の元を去っていった。私が追い出したわけではない。ほら、忍耐と愛は、恥知らずな者をさらに恥知らずにし、謙虚な者をさらに謙虚にするのだ。

善意は悔い改めない者に害を及ぼす

— ゲロンダ、以前、あなたが私をひどく叱ったことを覚えています……

— 必要なら、また君を叱ってやるよ。そうすれば、私たち全員が一緒に樂園へ行けるから。でも、今度こそは徹底的な措置をとるぞ！…だって、私のやり方はこうなんだ。まず、その人に「叱られる必要がある」と気づかせてから、それから厳しく叱るんだ。いい方法だろう？ 人が何か重大な過ちを犯すのを見て、それを叱りつけると——当然のことながら——私は「意地悪な人」になってしまう。でも、どうすればいいの？ みんなの情熱をなだめて、優しい人に見せかけて、結局は仲間全員で地獄に落ちるなんてこと、できるわけがないでしょう？ 私が叱ったり注意したりした人が落ち込んでも、そのことで良心の呵責に苛まれることは決してありません。なぜなら、私はその人を愛しているからこそ、その人のために思って叱っているからです。その人が自分の行いによってキリストをどれほど傷つけたかを理解していないのがわかるからこそ、私は叱るのです。人を叱る時、私は痛みを感じ、疲れ果てますが、それでも良心の呵責に苛まれることはありません。その後、私は平然と——懺悔することなく——聖体拝領に向かうことができます。私は心の中に慰めと喜びを感じます。そして、私にとってその慰めと喜びこそが、魂の救いなのです。

— ゲロンダ、時々、ある考えが頭をよぎります。あなたが私に慰めの言葉を掛けてくださる理由は、厳しさが私には耐えられないからか、あるいは、すでに何度も同じことをおっしゃったのに、私がそれを実行しなかったため、私を見限ったからではないかと。

— なんと祝福された魂でしょう！ 私があなたの魂の救いを弄ぶなどと思うのですか？ そのような実験をするのは、経験の浅い者だけです。しかし、成熟した人間には判断力があり、右にも左にも逸れることなく歩んでいく。で安心しなさい。もしあなたの中に不備を見いだしたら、私があなたに近くあろうと遠くにしようと、そのことをあなたに告げるだろう。あなたは自分自身に信頼と平安を持ちなさい。ああ、あなたはまだ私を全く理解していない！ まさか、私がそう簡単にあなた方の心をなだめると思うのか？ あなた方の考えでは、人の魂が[過度に]敏感であるとか、自分の罪を自覚して動揺しているのを見て、私が何と言うと思うのか？ その場合は、その人が絶望に陥らないよう、慰めるのだ。しかし、その人の心が石のように硬いとわかれれば、私は厳しく語り

かけ、その石を揺さぶり、動かし出すのです。だって、崖に向かって歩いている人を見て、「行け行け、君は正しい道を歩んでいる」と言ったら、それは私にとって罪ではないのでしょうか？ しかし、ある人々には次のような悪い癖がある。彼らに「心配するな」と言っても、彼らはそれを信じず、苦悩に苛まれるのだ。もし人の内に何か悪いものを見たら、果たしてそれを告げずにいられるだろうか？ 果たして、地獄の苦しみへと向かう者を、私が止めずにいられるだろうか？ その人に対する責任を負っている以上、必要とあれば、彼を救おうと叫ぶことさえあるだろう。個人的には黙っているほうが良いのは分かっているが、他者に対する責任を負っている以上、黙っているわけにはいかないのだ。

例えば、君が私に何か悪事を働いても、私は君を許す。君がまた私に別の悪事を働いても、私は再び君を許す。私の方には何の問題もないが、私が許したからといってあなたが改心しないのであれば、あなたの状況は非常に厳しい。あなたが「改心したい」と思っているのに、最後までやり遂げられない場合は別だ。とはいえ、可能な限り改心するよう努力しなければならない。「彼が私を許してくれるのだから、私は何の問題もなく、心配する理由もない。落ち込む必要はない」と、自分の心をなだめてはならない。人は罪を犯すことがあるが、悔い改め、泣き、心を痛めて許しを請い、改めようとするなら、その人には罪の自覚があり、告解司祭は彼を許さなければならない。しかし、もしその人が悔い改めず、同じ手口を繰り返すのであれば、その人の魂に責任を負う者は、これを軽々しく、笑い飛ばすような態度で扱うことはできません。優しさは、悔い改めていない人にとっては害となるのです。

他者の自由への敬意

— ゲロンダ、人が意識的に自分の過ちを霊父から隠すことはあり得ますか？

— はい、そのようなことはあり得ます。しかし、たとえ霊父がその過ちを知っていたり、察していたりしたとしても、その過ちを犯した本人にそのことについて話す意味も益ありません。しばしば、その人の霊的生活に何かが起こったのを見たり、彼が何かをしたと推測したり知ったりしても、私は——彼を尊重して——本人が自ら話さない限り、そのことについて何も言いません。その人が、私にそのことを知られたくないと思っている瞬間に、何かを告げることは、暴力であり、不名誉なことだと私は考えています。これは微妙な問題です。なぜなら、本人の意思に反して、その人に起きたことを告げれば、その人を笑いものにしてしまうことになるからです。他人を無理やり迫るなど、許されることでしょうか？ 人間には自由があるのです。私がその人について何かを知っていることを伝えるのは、その人が危険にさらされており、他に彼を助ける方法がないと確信した場合に限る。あるいは、その人が無知のままであり、完全な失敗を招き、命を落とす恐れがあると判断した場合にもそうする。

むしろ、その人自身があなたにそう頼んできた場合、彼がどこに過ちがあるかを理解させ、彼自身が自分の「古い人間」を打ち砕き始めるようにしたほうがよい。そうすれば、彼はより少ない痛みで済むからだ。考えてみてほしい。小さな子供が自分で転んでぶつかった場合、他の子供に押されて転んだ時ほど激しく泣くことはないではないか。ある人が別の人に「こうすべきだ」と言うためには、聞く側は謙虚でなければならず、話す側はそれよりも十倍謙虚でなければならない。さらに、話す側自身も、相手に教えていることを自分の生活で実践するよう努めなければならない。もし私が何かを100パーセント行うよう助言するならば、それは私自身もそれを150パーセント行っていること

を意味します。しかし、そのような場合でも、それでもなお、その人にそれを伝えるべきかどうかを慎重に考えます。

もちろん、いずれにせよ、非難できるのは身近な人や知人だけである。告解司祭は、その人が自分にどのような権限を与え、自分にはその人に対してどのような責任があるかを考慮しなければならない。もし霊的指導者が誰かの魂に対する責任を引き受けたのであれば、当然、理路整然とした説明を添えて、その人を戒める義務がある。しかし、自分に対してその権利を与えていない人の悪い習慣を、まるで教師のように説教して戒めることに何の意味もない。それはまるで、誰かが私の独房にやって来て、私に何も尋ねることなく、自分の好きなように部屋の中を片づけ始めるようなものだ。ランプの位置を変えたり、ベッドをあのか隅に移動させたり、数珠をあのか釘に掛け直したりするようなものだ。

告解を受ける者に対する霊的指導者の愛

恵み深い霊的指導者は、その魂を愛し、その魂のために心を痛めます。なぜなら、彼はその魂の偉大な尊厳を知っているからです。彼は魂が悔い改めるのを助け、告白を通じてその重荷を軽くし、心の不安から解放し、天国へと導きます。霊的指導者は「霊的な父」と呼ばれる——だからこそ、彼は真の父となるよう努めなければならない。すなわち、神の愛と優しさをもって、自分の子供たちを導くのだ。彼は、告解に訪れる一人ひとりの立場に身を置き、その人の痛みを自らのものとして感じ取り、告解者が自分の痛みが霊的指導者の顔に映し出されているのを見られるようにしなければならない。これは、人々が強い酢ではなく、清らかな水を必要としている現代において、とりわけ重要なことです。悪魔の影響を受けている多くの人々は、霊的な助言や指摘を受け入れるのに苦労しています。ですから、人を叱る際でさえも愛をもって行わなければなりません。過ちを指摘する際は、繊細かつ配慮深く、笑いや冗談で和らげながら行うべきです。

もし誰かに愛があるなら、それは人々に見て取れる。もし誰かに心の情熱があるなら、それがその人を露呈してしまう。もし私たちに愛がなければ、ある人に「親切な」忠告をしても、その人は反発し、逆上してしまう。一方、もし私たちが痛みと愛を込めてその人を叱ったとしても、その人は落ち込むかもしれないが、心の奥底では傷つかない。なぜなら、愛を感じているからだ。私はある霊父を知っている——非常に太った体格の。もちろん、その肥満の原因の一つは体質にあるが、それ以外にも、その神父は食事に関してもう少し気を配るべきだったのかもしれない……。しかし、この神父がどれほど隣人のために心を痛め、苦しむ人々を気遣っているか、ご存知だろうか？ この神父には謙虚さがあります。なぜなら、あまり修行をせず、そのことで自分を責めつつも、同時に並外れた優しさを持っているからです。だからこそ、多くの人々は、ある種の禁欲的な神父のもとよりも、彼のもとで自分の魂により大きな安らぎを見出しているのです。

もし霊的指導者が、自分の霊的な子らへの愛のために、たとえ地獄の苦しみの中へさえも進んで行くという決意を持っていないなら、それは霊的指導者とは言えません。